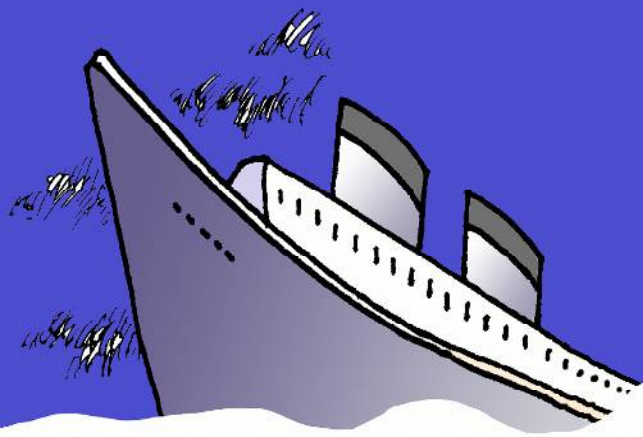
連載専門誌

対人援助学マガジン



Vol. 8 No. 3

第31号

December 2017

対人援助学会

NO. ３１　M O K U J I

目次		002-003
ハチドリの器	見野　大介	004
執筆者@短信	執筆者全員	005-017
知的障害者の労働現場	千葉　晃央	018-024
臨床社会学の方法（19）	中村　正	025-034
ケアマネ　あの目　この目	木村　晃子	035-036
カウンセリングのお作法（13）	中島　弘美	037-042
難病の訪問カウンセリング（1）	藤　信子	043-045
蟷螂の斧　「次の一歩」（7）	団　士郎	046-053
学校臨床の新展開(30)	浦田　雅夫	054-056
不登校経験を持つ若者たちのもう一つのキャリアパス	北村　真也	057-066
幼稚園の現場から（31）	鶴谷　主一	067-071
福祉系対人援助職養成の現場から	西川　友理	072-077
境界あれこれ	河岸　由里子	078-083
生殖医療と家族援助	荒木　晃子	084-086
対人援助学＆心理学の縦横無尽（23）	サトウタツヤ	087-093
きもちは言葉をさがしている（30）	水野　スウ	094-100
それでも遍照金剛いうことにします	三野　宏治	101-112
男は痛い！（25）	國友　万裕	113-119
ひとこまマンガ	三嶋　あゆみ	120
援助職のリカバリー（24）	袴田　洋子	121-123
トランスジェンダーをいきる（23）	牛若　孝治	124-127
役場の対人援助論（22）	岡崎　正明	128-132
新版K式発達検査をめぐって	大谷　多加志	133-135
講演会＆ライブな日々	古川　秀明	136-147
養育里親～もうひとつの家族～19	坂口　伊都	148-154
周辺からの記憶　―東日本大震災家族応援プロジェクトー（17）	村本　邦子	155-171
病児保育奮闘記（16）	大石　仁美	172-174
対人支援点描（12）	小林　茂	175-178
「あ！萌え」の構造（番外編　その2）	齋藤　清二	179-183
海の向こうに出てみれば	石田　佳子	184-188
清武システムズ	しすてむ きよたけ	189-194
SV-羅針盤のない航海（7）	川崎　二三彦	195-202
精神科医の思うこと（7）	松村　奈奈子	203-205

おくのほそみち（7）	奥野　景子	206-210
年金記録は、人が生きてきた「証」	馬渡　徳子	211-212
東成区の昭和　思い出ほろほろメモ	柳　たかを	213-220
お坊さんとケアマネさん（書簡型連載）	木村　vs　竹中	221-226
介護福祉を巡る断章　５	臼井　正樹	227-230
町家合宿　in　京都	山下　桂永子	231-236
そうだ、猫に聞いてみよう	小池　英梨子	237-245
先人の知恵	河岸　由里子	246-250
私の出会った人々　４	関谷　啓子	251-252
うたとかたりの対人援助学　５	鵜野　祐介	253-255
あぁ結婚　４	黒田　長宏	256-261
PBLの風と土　３	山口　洋典	262-267
接骨院に心理学を入れてみた　３	寺田　弘志	268-270
第二回目　現代社会を『関係性』という観点から考える	三浦　恵子	271-280
第二回目　学校における自殺予防	川本　静香	281-285
第二回目　対人援助通訳の実践から	飯田　奈美子	286-289
新連載　マイクロアグレッションと私たち	朴　希沙	290-293
編集後記	編集長＆編集員	294-295

ハチドリの器 14

見野 大介

Mino Daisuke

上　：飴釉、蒼穹釉六角皿。
右下：蒼天釉片口、猪口。
左下：黄雲釉宝瓶。

第31号 執筆者@短信

朴　希沙(Kisa Paku) 新連載

今号より連載させていただくことになりました。以前、編集長にお声かけいただいた時には、「今書けること、なんにもない・・・」と思い、静かに過ごしていました。

ところが最近、「マイクロ・アグレッションについて書いてみたい！」という思いがむくむくと湧き、密かに情熱を燃やしています。マイクロ・アグレッションとは聞きなれない言葉だし、意味も分かりづらいですが、少しずつ紹介していけたらと思っています。よろしくお願いします。

三浦　恵子　連載第二回

数年来苦しんでいた頸椎の疾病が，実はかなり難しいものだという確定診断の告知を，12回目の異動の後，ある大学病院で受けるという経験をしたことがある。異動のたびに主治医を転々とし，東日本大震災の復興対応などの忙しさを理由に対処療法で凌いでいたことが災いした。痛みを伴う疾患だったが，認知行動療法を応用しながら痛みをコントロールし，頸椎カラーや杖などの装具を活用しながら，日常生活も業務も遠距離介護さえもできている（と思い込んでいた）だけに，ショックは隠せなかった。

ただちに疾病に特化した治療を受けることになったが進捗ははかばかしくなかった。治療か仕事かの二者択一を迫られる場面もあった。ただ，セカンドオピニオンを受けてでも仕事を続けるよう励ましてくれた職場や同僚，家族のおかげで，新しい療法にトライする機会に恵まれた。その際従事していたのが，今回連載で書かせて頂いた更生保護ボランティアの方々との協働に関する業務だった。地域社会のなかに溶け込んで活躍されるボランティアの方々と共に動く時には，その心意気や熱意が体に染み渡るように感じることが少なからずあった。そして「なんとか病気をねじ伏せてもとのようにばりばり仕事をしたい。」という焦りが，「更生保護ボランティアの方々がこんなに熱心にしてくださっているのだから，私も良質の仕事をしたい。」という思いに変わっていった。奉職当時の原点に立ち戻ったような気がした。新しい治療を開始して半年，気が付くと痛みから開放され，装具や杖を少しずつ外せるようになった。アドラーの「勇気は伝染する」という言葉を実感した経験だった。

川本　静香　連載第二回

つい 1 週間前、出張で札幌に行ってきたのですが、ちょうど寒波が到来しており、路面が凍ってツルツルでした。そんなことになっているとはつゆ知らず、関西からいつものパンプスを履いていってしまったがために、何度も転び、アザをつくる体たらく。最終的に、訪問先の先生からタクシー移動を進められる始末でした。北国の 11 月を舐めてはいけなかったと、心の底から反省しています。

飯田奈美子　連載第二回

我が家には 3 歳の娘がいます。親に似ず？人見知りをしない性格で誰にでも話しかけます。駅に向かう道中でもすれ違う人、全員に挨拶をして、落ちている枯葉をプレゼント。そして自慢げに指を 3 本立てて、3 歳アピールをします。それを見た通りすがりの人（主に女性）は、「まぁ、3 歳なのにしっかりして、お利口さんね」とほめてくださいます。世渡り上手の娘に関心させられる日々です。

山口洋典

デンマークの北、オールボーで暮らして8ヶ月が過ぎました。いよいよ8時になっても薄暗く、15時台には日が落ちる季節となりました。日本で柚子湯のニュースが流れるであろう12月20日の冬至には日の出が8時57分、日の入りは15時39分と予測されています。夏の日を懐かしむ今日この頃です。

もっぱら、オールボー大学のPBLに関心を向けていますが、11月の初旬、これまたデンマーク発祥という「Art of Hosting」の合宿研修に参加してきました。直訳すれば、おもてなしの術、となるのですが、参加型リーダーシップの観点として位置づけられています。いかに他者や社会と丁寧に関わり合っていくか、対話の知恵を学んできました。次年度の授業科目の準備も徐々に進めなければならず、平等や民主主義が重視される中で培われた多彩な実践を活かしていこうと息巻いています。

（写真、「8つの呼吸」と題した場のマネジメントの概念を体感的に学ぶワークの一場面）

寺田　宏志

最近、アマゾンプライムで「メンタリスト」というテレビドラマシリーズをよく観ます。メンタリスト＝人の心を読み取ったり、あやつったりする人らしいです。

そんな簡単に犯人がわかるわけなかろうと思いながら、ついつい観てしまいます。このドラマの脚本家こそが、メンタリストであるようです。

私の視聴行動がどんなふうにあやつられているのかを考えながら観るのも、また一興です。

関谷　啓子

最近、寝る前の読書が辛くなってきた。加えて読むスピードも落ちてきている。悪い病気か、、、？と眼科で精密検査を受けても異常なし。

医師はお年ですからねえ～と常套句。７０年近く生きてくるとメンテの足りない身体はこんなものかなあと諦め気味の日が続いていたある日。

ホスピスボランティアの若い仲間が「一緒にアロママッサージを習いに行こう」と誘ってくれた。エエッ、今更、、、、と思いつつ台風の中、完全武装で習いに行った。生徒４人に講師ひとり、講義とかなりハードな実習を終日受けた。

講座終了時、講師は「頭で理解したことを実際に行う事で身体に覚え込ませるように。今夜から始めてください。相手のいない人は犬でも猫でも結構。とにかく回数をこなせ」と檄を飛ばす。

帰宅後、早速、豆柴をひっくり返し、マッサージを試みるも、直ぐに逃げられ、引っかかれ敢えなく断念。

それからは人と見れば事情を話し実験台になってもらっている。皆、表情が和らぎ、力が抜けていくのが感じられる。時々眠ってしまう人もあり、そんな時は嬉しくて仕方ない。人の体温を感じる安心感、触れられる心地良さ、手当てという言葉ってこんなふうにして生まれたのかなあ～と思う。

マッサージしている私も、心が落ちつき柔らかな心持ちになるのも嬉しい。病気で言葉を出せなくなった友人、高齢でほとんど眠ってばかりのように見えた人、彼女達を前に途方にくれていたが、今は自分に2本の手があったことに感謝している。そしてその事に気づかせてくれた若い仲間にも。

身体は昔と同じには動かないけれど、アンテナだけは磨いていたい。そして誰かが声をかけてくれたら、いつでもフットワーク軽く動けるように心がけておこう、、、、と思っている。

と言うわけで、私のバッグにはいつものアロマオイルとタオルが入っている。出会う皆さん ご協力よろしくm(._.)m。

＊

最近読んで面白かった本。目からウロコが3枚も落ちた。お勧めです。

「ほの暗い永久から出でて」（上橋菜穂子、津田篤太郎） 文藝春秋

単純な脳、複雑な「私」（池谷裕二） 講談社 y200 bluebacks

黒田　長宏

毎回同様なのですが、何しろ本文の婚活に精一杯なのと、今週はちょっとトラブル気味の事が幾つかあったものの、職場も特に変わったこともないし、（あったら大変なのだが）こちらが短い分、本文に回して下さい（笑）。（11/22）

鵜野祐介

「おでんの季節になりました。行きつけの食堂ではランチの定食におでんが一品付くのですが、どれにするかいつも迷います。大根、ロールキャベツ、巾着、卵、こんにゃく、豆腐・・・、どれも美味そう。ついでに熱燗も注文したいところ、ぐっとこらえる平日の昼下がりです。

臼井　正樹

今回から、この拙い文章を書くことにした個人的な理由を明らかにしたうえで、介護福祉の意義に迫っていくことにしたい。前回の短信にも記したが、介護福祉が単なる食事、入浴、排泄の介護ではなく、社会的支援を目指すものであるということ、さらには社会的支援の意味について考えていくための前段階として、今回はプライベートなことを中心に書かせていただいた。

山下桂永子

この原稿を書いているときに、臨床心理士の 5 年に 1 回の更新書類を準備していました。5 年に 1 回が 2 回目ということは、気がつけば 10 年以上（社会人入試で入っているもので）もやっているこの仕事。そして町家合宿も 11 年。どちらもこんなに長くやれるとは正直思ってもいなかったことです。

そしてこの対人援助マガジンも書かせていただくことになり、ようやく 1 年経ちました。毎回言いたいことを後先考えずに書いているので、いつまで続くかわかりません。それでも毎回、書いてみて気づくことも多いので、これからも無理せず思いつくままに書いていければと思っておりますので、読んでいただければ幸いです。

尾上明代

今回は、原稿提出をお休みさせて頂きます。執筆時間は、ちゃんと今月の予定に入れていたのですが、先週はずっと親の看病で、今週は今度は自分が重い風邪にかかり、回復のために時間を費やすことになってしまいました。病気になっても食欲はあるはずの私が、何も食べたくなく・・めずらしく熱も 9 度近くまで上がり、七転八倒（？）しておりました。そんな中、誕生日を迎え、友人たちのメールやプレゼントに元気づけられたのですが、驚いたのは、その日の担当の（母の）ヘルパーさんが、美しい花束を私にもってきて下さったことです。真っ赤なバラ、ピンクのカーネーション、かすみ草、そしてピンクのラッピングペーパーにピンクのリボン。私が大好きな色でまとめてあって、嬉しかった！　さらには、すてきなバースデーカードが2枚も。1枚はご本人から、もう1枚は、私の母に、「明代さんにメッセージを書いてあげて」と渡して下さったカードでした。心のこもった「企画」に本当に感謝しました。・・援助が援助を超える・・いろんな意味で、親のヘルパーさんに助けられて、日々をこなしている私です。

今回は、編集長はじめ皆さまにご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、
よろしくお願いいたします。

小池英梨子

カトリックの修道院から相談があった。シスターたちが畑にくるノラ猫を2匹可愛いがっていたものの、子どもをどんどん産んで、あっという間に8匹になり、室内に侵入してくるようになり困ってしまったそう。相談をくれた院長シスターは、修道院の中でも猫嫌いなどだが、状況を聞くために訪問すると「本当にありがとう引き取ってもらえて助かるわ。猫好きのシスターにも言ったの、小池さんに引き取ってもらうか

らって。泣いちゃうシスターまでいたのよ。」と。「はい？！」という気持ちを抑えつつ、引き取ることはできないこと、猫をどっかにやってしまうより、避妊去勢手術をしてここの畑を縄張りにしてもらった方がメリットが多いことなどを説明して、引き取らずに TNR（避妊去勢手術をして元の場所に戻すこと)をして、「修道院ねこ」として居着いてもらうことで納得してもらえた。涙ぐんでいる他のシスターには、引き取らないことと、避妊去勢手術をしたら院長シスター公認で餌をあげてもらっていいことを伝えて一段落。院長シスターも理解が早く、避妊去勢手術費は修道院が出してくれることに。「カトリックは動物の扱いがあまり良くない歴史を持つ宗教だと思っていたので、修道院が共生共存的な取り組みに合意してくれたのが嬉しい」と話したら、今のローマ教皇フランシスコが「回勅 ラウダート・シ」で地球は人権だけを考えてはいけない、動物や自然を尊重し共存していかなければいけないということが入った声明を出したらしい(全然読んでなかった)。それで、猫を雑に扱うと他のシスターが「ラウダート・シですよ！」と反論できるようになったそうな。とっても嬉しい。

三野宏治

最近物忘れがひどい。20 代や 30 代のころ、大人の人たちがご自分の年齢を「ええっと。今年は何年？2017 年？1971 年生まれだから、引き算してっと。今年 46 歳か」などと言うのをみて、嘘でしょとおもった。「そんな馬鹿な話しあるか。格好つけてるつもりかいな」などと訝しがってもみた。ただ、この年になって「いやいや、本当にわからんのです。覚えてなどいられないのです」とおもう。まず、自分の誕生日も知らぬ間に終わっている。もちろんケーキに年の数だけローソクを立てて火をつけ、吹き消す儀式もやらない。このセレモニーは何か願い事をしたあとに火を吹き消すらしい。願掛けみたいなものだろうか。

さらに、1 日の多くの時間をモノを探すことにつかう。探しても見つけられないので、安いものなら買ってしまう。そして新しいものを手に入れ、探し物をやめたとき見つかることもよくある話で。だから、職場にはホッチキスとか修正テープとかハサミなどが複数ある。

そしてこのたび、こともあろうに『対人援助学マガジン』第 31 号の締め切りを完全に忘れていた。これまで締め切りを過ぎ原稿を送付したことは、正直、少なくない。そのときは「ああ、締め切りが近づいている。今日が締め切りだ。過ぎてしまった。遅れましてすみません。原稿を送りますご査収ください」という按配だった。ただ、今回は違う。全く忘れていた。それをなぜか、シンポジウムの進行をしている時に思い出した。思い出したときは締め切りを過ぎていた。そして、あせりまくって書いた。書き終わって、自分の記憶力の衰えに呆然としている。

これからは今まで以上に手帳に書こう。そして確認しよう。もう来年の手帳は買った。手帳に書くことや確認すること自体は忘れないと思う。多分大丈夫だと思う。なんなら、誕生日ケーキにローソクをたくさん立てて「手帳に書くこととみる事を忘れませんように」と願掛けもする。ただし、誕生日を忘れていなければの話だが。そうだ、買ったばかりの手帳に自分の誕生日を書いておこう。

松村奈奈子

遅い夏休みをとって、夫婦で初秋に北海道の真ん中あたりの小さな町に行きました。

小さな町で何もしないで過ごす予定でしたが、近くに乗馬クラブがあったので、ふと乗馬してみよっかという事に。夫婦して初めての乗馬にチャレンジしてきました。いやー、馬はかわいいし、乗り心地も案外よくって、とっても気持ちよかったです。乗った馬は初心者の私のいう事もちゃんとよくきいてくれて、ほんと楽しい1時間を過ごしました。夫婦でまた乗りたいねーと意見が一致。

帰りに、乗馬クラブの方が「ここの馬は、中央競馬で走れなくなった馬を引き取って、観光客の方でも乗れるように再調教している珍しい乗馬クラブなんですよ」「お客さんの乗った馬は、馬主さんや調教師さんに大事に大事にされてきたから、ほんと性格のいい子で、優しい子なんです」「きっとレースに負けても、また次があるよね、と優しく声かけしてもらったんでしょうね」と目を細めて話します。

さらに続けて「でもね、レースに負けたら馬主や調教師から、怒鳴られたり叩かれたりと、虐待のような対応を受けた馬もいるんです」「その子らはほんとに、性格が悪くてひねくれてて、再調教が難しくて、お客さんを乗せることが出来ない馬もいるんです」「何年もこの仕事をしていると、わかるんです。馬たちがどんな風に育ててもらってきたかが」と悲しそうに話しました。夫婦して“う一む”。

そして、私は心の中で、生まれ持って性格悪い子なんていないですよね。私も患者さんと話しているうちに、患者さんがどうやって育ってきたかが、なんとなくわかるような気がするんです・・・とつぶやきました。

後日、一口馬主をするくらい長年競馬にハマっている同僚に聞いてみたところ「虐待に近い対応をしている調教師がいるのは知っている」「だから、僕はそういうとこの馬は買わない」と言います。そして「みな知っていて、そういう調教師はだんだん減ってきているよ」と聞いて、すこしほっとしたのでした。

奥野景子

来年度から新しいことに挑戦することにした。あんまマッサージ指圧師の資格を取るべく、専門学校に通うことにした。「自分で何かコトを起こしてみたい」という考えがあったからだ。どうなるかはわからないけど、やってみないとわからないこともあるだろうと、やってみることにした。

だから、今年度で今の職場を辞めることにもした。色々と思うこともあったし、自分はそれで良いのか？と思う部分もなくはない。でも、今までを振り返るより、これからに向けて今の自分にできることをしてみようと思った。今の職場での残りの時間を、今の職場のこれからに向けられたらと思っている。

10 月から私の職場、渡辺西賀茂診療所にマガジン執筆者でもある清武システムズが入っている。10 月から来年 1 月までの 4 か月、毎月 1 週間程度、滞在することになっている。彼がいると職場の雰囲気が変わる。雰囲気だけでなく、人の動きや会話、表情も変わる。私自身、今まではあまり接点がなかった人とちょっとした会話をする機会ができたり、仕事以外のことを話し掛けられたりする機会が増えた。清武愛流という人物や私と彼の関係について聞かれることがほとんどだ。「今日は仕事こないの？」「今日も短パン履いてたね。寒くないのかな？」「ひげスゴイね」「大学院が一緒だったんでしょ？」など、本人に直接言えば良いのにと思うことばかり。でも、会話の相手はだいたいニマニマしているから、それはそれで良いかと思っている。

私が、今の職場での残りの時間を今の職場のこれからに向けられたらと思えるようになったのは、清武システムズのおかげだ。今までは、今までを振り返ることばかりしていたが、それらを踏まえて職場のこれからに向けて出来ることに、大切だと思えることに気が付かせてもらえた。ここからどうするかは、私次第なのだろう。でも、せっかく気が付けたことだから、気が付かせてもらえたことだから、今の自分に出来ることをしっかりやってみたいと思っている。

柳　たかを

マンガ「東成区の昭和」を連載させて頂いています。この作品は以前、自分が設けていましたホームページに数年にわたって掲載したものです。

紙芝居好きだった私自身の子供の頃の思い出をベースに想像の糊でつないだストーリー四コママンガ。

今掲載の「ホイラン」は「東成区の昭和」を中断し、短期連載で掲載させていただきました。

トンボの中でもひときわ大きく威風堂々としたオニヤンマをメスを囮にして採る遊びを、体験者である次兄から取材して描きおろしました。

「何を伝えたいと思って描いたのかな…」と、読み返しながら思い出そうとしました。それは子供の頃は普通に持っていた(ワクワク感)ではなかったか…と。

私の場合、それはほぼ毎日夕方にやって来る紙芝居でした。

笑劇、怪談や妖怪物、冒険物。拍子木の音が遠くから聴こえてくると、やってることを放り出し、二階で筆を動かしている日本画家の父親に 10 円をもらい公園へ駆け出します。

走りながら、これから最高のエンターテイメントの時が始まる、ワクワクの期待感で全身に力がみなぎっていたことを覚えています。

気がつくと(光陰矢のごとし)で、人生の残り時間を気にする年齢となってしまいましたが、でも、ワクワク感を失ってしまうと生きる力も衰えるように感じています。

過ぎたこと、先のこと、周りのことは気にせず、今自分の興味があることに集中して日々を送る姿勢って、大事だなぁと改めて噛みしめる今の私です。

齋藤　清二

あっと言う間に秋も終わろうとしている。夏休みが終わったあたりで一時体調を崩して、ちょっと失いかけた自信がまた少し回復してきた。京都に来て3回目の秋であるが、温度差が比較的大きかったせいか、ここ数年では一番紅葉が綺麗なようである。色々な話題がある中で、公認心理師制度がようやく正式にスタートしたことが比較的大きな出来事だろうか。臨床心理士と公認心理師の一番の違いは何かと言えば、前者は大学院から教育が始まるが、後者は学部から教育が始まるということである。学部における臨床心理学(対人援助的実践科学)教育とはどうあるべきか？というのが、私の最も大きな関心事である。米国の医学教育においてさえ、「最初の2年間で『人間はみな同じものである』ということを徹底的にたたきこまれた後で、今度は突然『人間は一人ひとりが全く異なっている』という事実に直面させられるのだから学生もたいへん」というようなことが30年も前から言われてきたのであるから、ましてや日本の心理学領域ではどうなのかというと、たぶん誰にも正解は見えていないのではないだろうかとさえ思う。心理学と臨床心理学との関係は、「焼きそば」と「カップ焼きそば」の関係と相似形である、などとうっかり発言して顰蹙をかったりしているが、まああまり深刻に考えなくても、時間がたてばそれなりになっていくのではないだろうか。現在学び始めている学生に10年後、20年後に学んでよかったと言ってもらえるような教育を今することが、最後のお勤めだろうと考えている今日この頃である。

石田佳子

今日ローカルバスに乗っていたら、停留所のないところで突然バスが止まりました。運転手はおもむろにバスから降りて道端の露店まで歩いて行き、食べ物を買ってゆっくりとバスに戻り、何事もなかったようにまたバスを走らせました。その間(座席の 7,8 割が埋まる位)乗っていた人々に、動じる気配はまったくありませんでした。運転手がバスから降りて一服したり、窓から身を乗り出して知人と話し込んだり。。。

ここマレーシアでは、そんな光景が日常茶飯事だからです。

そもそも、バスも電車も時刻表通りには動きませんし、運転手が道を間違えて「いつものバスがいつもと違うルートを通る」こともあります。しかしその一方で、身体の不自由な人が乗り込むのを（乗客たちも文句を言わず）辛抱強く待っていたり、お願いすれば（運転手の機嫌が悪くなければ）停留所のないところで乗り降りさせてくれたりも。。。悪く言えば「いい加減」ですが、良く言えば「自己裁量の余地が大きい」のです。

バスに限らず、働く人を見ていると、日本との違いを痛感します。例えば、デパートの店員同士が顧客そっちのけでお喋りに興じていたり、小売店で店員がカウンターに食事を広げて食べていたり。。。日本では当然視されている「すばやく」「きちんと」「丁寧に」といった期待や要求、「それに応えねば」という使命感や緊張感が、すっぽりと抜け落ちているようです。

マレーシアの社会全体に漂う、この「ユルさ」や「テキトーさ」を、どう感じるか？こちらに移り住んだ当初は「あり得ない！」と驚き呆れて見ていた光景を、いつの間にやら「ま、こんなもんでしょ」と受け入れて、「人間味はある」「楽しそうで羨ましい」と感じるようにさえなって行く……それが「慣れる」ということかもしれないと思う、昨今であります。

しすてむ♪きよたけ

最近、SM クラブの女王様の雑誌、プレイ撮影について行きました。具体的な仕事は言われていなかったけど、彼女が役に徹して華麗な演者になれるよう、彼女の理想とギャップを片手に、てれてれと付いて行きました。出版社からは、「フェチ感が出るようにしたい」と。「何だソレ！」と良くわからなかったが、実現できるよう。

僕は、分からないけど、知りたくなる。知らなくてもいいけど、知ってより良い循環が起きて欲しいと思っていると気がつきました。なんとも、まぁ～知らない世界だけど、それなりに面白く、しれ～っと過ごすことができました。

さてさて、そうはいえども、上手くいくことばかりではありません。フリーで仕事をしている中、どうもうまくいかないことがあったり、うまくいったり…波瀾万丈です。まだまだ、経験浅きモノではありますが、目先の不運にあたふた、または、捕らわれてしまっていることも。でも、それでは、何も変わらない…。だから、一踏ん張りして行こう！言語化できるようになりたいと思った僕です。

ここから、清武システムズのサービスのメニューが生まれつつあります。

メニュー1.失敗はあるが、それを通した判断基準になる装置。何をもって成功とするかは不確定ですが、去ったあとに現場の人が自ら進んで動いていく傾向にあるので、2.今ある力を推す装置になっている。

てへへ。

小林茂

日本の名だたる企業が経営判断を誤ったりしたあと、その後の対応のまずさが会社自体をなくしてしまうか、アジアの勢いのある国の企業に買いとられてしまうといったニュースをみます。それがこの頃、特に目立っているように感じます。

どこか、個々の問題というよりも同時代・同世代が育んできた体質のように感じられて、日本は同じ傾向の問題で軒並みダメになってしまうのではないかと悲観的になりそうです。

企業といえども、人の取り組みなので誤ることはあるものです。そのことが「ブランドイメージが傷つく」「株価が下がる」などの理由で隠蔽したり、初動を誤らせることになるのだなぁと感じます。

問題が顕在化するまでは、私たちも「まさか、そんなことはないだろう」と事実を過小評価したり、直視しない傾向もあります。相手が有名であったり、老舗であったりすればするほど、この傾向があるのではないかと感じています。相手が強力であったり、巨大であれば、自浄する力が及ばない現実も垣間見ます。倫理はどうしたら養われるのか、養うことができるのか。そんなことを感じる昨今です。

＜温泉紹介＞

☆函館市・谷地頭温泉

場所：函館市谷地頭町20－7

TEL：0138—22—8371

営業時間：午前6:00～午後9:30。

第2・第4火曜日/元旦定休

谷地頭温泉は、函館山の麓にあります。

函館を代表する温泉のひとつです。1953年に開業した函館市営谷地頭温泉が前身で、2013年に民営化されるとともに改装されたそうです。広々とした館内で、食事もでき、地元の方々がたくさん利用されていました。

市電の「谷地頭」電停から徒歩5分近く、無料駐車場もあり、アクセスしやすいです。

泉質：ナトリウム塩化物泉（中性高張性高温泉）

〇露天風呂、〇大浴場（高温湯 45度）、〇超音波気泡風呂、〇ジェット風呂、〇寝湯、〇水風呂、〇サウナ

水野スウ

マガジン 31 号の原稿を書き終えたので、前から行こうと思っていた場所に、あられとみぞれと北陸特有の冬かみなりの轟く、暗い空の下を出かけました。

その途中ではっと、今日が何の日だったか思い出した。週に一度わが家で「紅茶の時間」という場をはじめた日が、34 年前のちょうど今日でした。はじめたころのようには、今はちっともはやっていない場だけども、それでも毎週誰かしらやってくる。

そういう生活リズムがもう当たり前になっていて、「紅茶」の誕生日をわざわざ思い出すまでもないってことに、ちょっと妙に感動しました。そうなんだねえ、すっかり暮らしの一部なんだねえ、と逆に確認できた気がして。

去年の夏からはじめた紅茶の時間内「草かふぇ」タイムは、社会のこと、自由になんでもテーマにして語りあう時間。これから先の社会の、空がどんなに暗くなろうと、ヒョウやあられが降ろうと、この類の自由だけは決して手放したくないなあ、ってしみじみ思う、そんな紅茶誕生日でした。ちなみに来週の草かふぇには、もと琉球朝日放送の報道局長さんがみえて、沖縄の話をしてくれることになっています。

中島弘美

大阪梅田で家族カウンセリングをしています。当オフィスに来所される方の最も多いご相談内容は、うつ状態です。年末を迎えるにあたり今年をふりかえってみると、相談に来られる方に特徴がみられました。

会社勤めの方の相談は、三十歳前後の人が多いことです。彼らは最後の昭和生まれや平成元年生まれの人たちです。仕事もひととおりできるようになり、次の段階の仕事と結婚、家族などを視野に入れて暮らしていく時期にあたります。

もうひとつの特徴は、定年退職前の時期においての相談です。退職後、再就職をどうするか、これまでの経験をどう活かすのが良いのかを模索します。このライフステージの変化とともに、同居する家族にも柔軟な対応が求められる時期です。

それぞれの節目に柔軟に対応ができるよう、不安定要素を把握し、今後何が必要であるかについて、家族とともに話し合いをしています。

藤信子

保健所の「難病患者の訪問カウンセリング」を引きうけて、気が付くと 20 年経っていた。そろそろ次の人にバトンタッチをしようと思っている。ただ、1 回につき患者宅への移動等も含め、2 時間は要する。現在行っている保健所は、高槻市保健所なので、京都の自宅から高槻に行くことも含めると、半日仕事になることが、年 5 回（これは保健所の予算の関係）しかないので、一つの仕事としては成り立たない。30 年以上前に、文学部で臨床心理学を講義することになった時、コーチンの「現代臨床心理学」を手にして、「第 5 部　コミュニティ心理学」の章は、私の実践には無いが大事なところだと思った。それからいつの間にか、この 20 年間、高齢者の地域ケア、災害支援者支援、難病の訪問カウンセリング、学生相談等、コミュニティ心理学の領域の仕事が増えてきた。これは本当は行政の心理士がする仕事なのだろうと、今頃気が付いた。公認心理師が誕生することになったが、このような分野で働く人が増えるといいなと思っている。

千葉晃央

仙台に住んでいた頃、家にはネコがいた。白い体だったので「ユキ」と名付けた。一緒に布団に入り寝たり、追いかけっこをしたりしたことを幼いながら覚えている。大阪に来て、捨て猫を拾い、クラスでどうするかを考える機会があった。かわいくて、かわいくてたまらず、数匹のうちの 1 匹を数日預かった。一緒にお風呂に入った。ミルクもあげた。体からノミが出てきて、ぴょーんと飛んだ。ノミを見たのは人生初めてだった。「家で飼うのは絶対無理だからね！」今でも母のヒステリックな反応を思い出す。それは当然だ、賃貸マンションでペット禁止だったからである。

ある日、秋田の祖父母宅に行くと、猫がいた。同じく一時的に祖父母が預かっていた。その頃になると、夏に秋田に帰ると私は必ず喘息発作に襲われた。詳しいアレルギーテストで明らかになったのは「ネコの毛」、「煙」が振り切れるほど反応する体になっていた（夏は煙が出る蚊取り線香、仏壇の線香、花火がつきもので苦しむことに…）。母方祖父母宅にはネコがある時期からいた。その時期はいけなくなった。現在も妹宅にはネコがいるからいけない。

ぶちゃネコ。それが小さい時、一番一緒にいた「ぬいぐるみ」の名前。マガジン連載中の小池さんが中心となって活動している「人とねことまるごと支援プロジェクト」では上記の理由から後方支援。ただこの肉体でなければ、ネコが飼いたい。

仙台から大阪に引っ越すとき、その引っ越しの日の少し前に「ユキ」は家から姿を消した。ネコのライフサイクル的には別の意味があるのかもしれないが、千葉家の物語としては引っ越すことをわかっていたんだ！…となった。大阪に来て、しばらくすると家と家の間に潜むネコの姿を見つける。「あ、ユキちゃん！」特徴だった右目が茶色と左目が緑の瞳、真っ白な体！…でもそんなわけはない。けれども、もしかして…という子どもなりの思いで心を動かされたことを思い出す。その時見た家と家の間に潜む姿は今も忘れない。

高校生になり、地元を歩いていると捨て猫に出会う。ダンボールに一匹。ミャーミャー泣いている。たまらず、持ち帰る。案の定、私の体は喘息、目、鼻のかゆみ、腫れなどボロボロ…。でも、ミルクをあげる。家族に「どうするの！」と言われる。そして、やはり一緒に暮らすことはできない…。小学校のころ、ネコをクラスで自分たちが何とかしようとしたことを思い出す。その晩、小学校のところに夜中に置きに行った。翌日、子どもたちが見つけて、何とかしてくれないかと。ダンボールに入れて、置いた。「みゃー、みゃー」いって、出てくる。よちよち、ぴょんぴょん、離れる私の後ろを必死に追いかけてくる。たまらず戻り、抱っこする。けれども何とか意を決し、もう一度ダンボールに入れて、すぐ原付でダッシュで離れる。今でもその時の自分の手に残る爪の感触は忘れない。

ネコは「別れ」を私に提示してきた。ネコが立ち去っていった…。大好きなネコの近くから、私は「別れ」なければならなかった。アレルギーのため触ることができないという「別れ」を継続しなければならなくなった。様々なパターンの「別れ」。ネコが好き。来世ではアレルギーにならず共に暮らしたい。ネコの周辺にいる人々を私はこんな経験を根底に持ち、眺めている。

中村正

数多くの事例に出会う。わたしの場合、多くは逸脱行動が対象なので司法制度や

行政措置にかかわる問題をもつ人たちや家族である。〇〇問題という断定がしにくい現実ばかりである。違法薬物使用、子ども虐待、老人虐待、ハラスメント、DV、ゴミ屋敷などのわかりやすい単語ではとうてい整理できない現実を生きている。紋切り型の思考では理解ができない。たとえば「電話番号を教えてください。」と聞くと、「夫婦ですが携帯を共有しています。」と返答があった。二人とも働いている。貧しいわけではない。もちろん一人ひとりがもてばよいということでもない。携帯電話でなくともよい。しかし何か奇妙である。つまりDVの夫婦としてみると、それはあまりにも一体性が強いことになり、相互の拘束なのか、妻の社会的コミュニケーションを阻害しようとしているのか、嫉妬の故なのかということを考える。暮らし方に即した関係性理解がいる。微細な動き方に何かが宿っている。知り合いの保護観察官が教えてくれた。満員電車のなかで目の動き方が異なる二種類の人がいると。スリと痴漢だと。わたしはそれに加えて警察官も異なる動きをしているはずではないかと話した。三種類の人がいることになる。では多くの人はどんな目の動きなのだろうか。逸脱や問題は日常行動にそくして表現される。街の人びとの日常行動こそがいろんなことを教えてくれる。

牛若孝治

「『障碍』を見るな！『人間』を見よ！」

先日、通勤途中に地下鉄の駅で出会った 1 人の男性。彼と話をしていたときのことである。「私、高校の教員してるんですけど、以前全盲の女の子を教えたことがあるんです。彼女は物覚えがよくて優秀でした。目が見えない人は、目で確かめることができない代わりに、記憶力がいいんですね。本当に凄い子でした」。彼は、唐突にそんなことを話し始めた。私は、彼の話に不快感を覚えたので、次のように反論した。「あなたのようなものの見方をしているとたいへん危険です。なぜなら、あなたは我々視覚障碍のある人たちを一面的に捕らえているからです。たまたま彼女が物覚えがよくて優秀だっただけで、彼女を代表して視覚障碍のある人を見た場合、たとえば次に出会った視覚障碍のある人が、もし彼女より記憶力が悪くて優秀ではないとあなたが感じたとき、あなたは知らず知らずのうちに、前に出会った視覚障碍のある彼女と、次に出会った視覚障碍のある人をついつい比べてしまうでしょう。それは、教員としてあってはならないことではないですか？それに、あなたは「凄い子だ」と言うけれど、何が、どこが凄いのですか？もしかして、あなたが凄いと評しているのは、たとえば普段から英語を話している人たちに対して凄いと言っているようなレベルのものではないのですか？要するに、私が言いたいのは、あなたが彼女に「凄い」と言っていることが、そのままあなた自身にある無自覚な差別意識につながるということです」。彼は、私の話をたじたじしながら聞いていた。私は、彼の背に向かって大声で言った。「『障碍』を見るな！『人間』を見よ！」。

袴田洋子

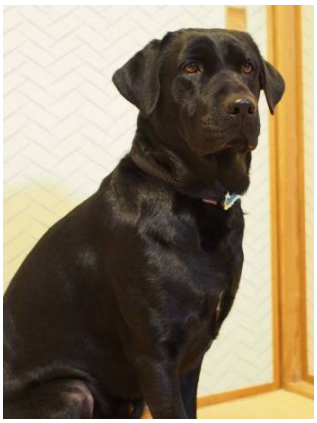
父が認知症の診断を受けたのが、今年 2 月。実家の引越しが、7 月。デイサービスに行き始めたのが、9 月。着実に進行しているようで、母は苦労しています。妄想があり、それを否定すると父は怒るので、大変です。ショートステイを利用した直後から、機嫌が悪いようです。でもショートステイは、定期的に利用しないと、介護者家族の身が持たない。父がおかしなことを言い始めた時、専門職の自分であっても泣きました。けれど、4 人に一人が認知症になる時代。ま、86 歳にもなれば、認知症にもなるでしょう。ただ、同居の介護者家族は、辛いですね。病気とわかっていても、辛いでしょう。暴言暴力がなければ、まだいいのですがねぇ…

団遊

長く懇意にしている会社が M&A を繰り返し、100 社近い企業を束ねる会社になりました。これから効率化や合併でなくなる会社や部署も多いと思うので、「図鑑という形で足跡を残しておくとよいのではないですか？」と話をしました。100 社のうち、半分が国内の会社、半分が国外の会社です。下世話な話、お金もかなりかかるので、話のネタで終わると思っていたら、「それ、やりましょう！」と話が進展し、とりあえず今年は国内をまとめることになり、今、言い出しっぺは日本中を旅しています。一日一社お話を聞きに行っても、50 日かかります。もちろん聞くだけではなく、それを文字におこさないといけません。終わりの見えない戦いに心身ともに追い込まれ、今回連載はお休みさせてもらいました。しかし、改めて名前しか知らない会社や、名前も知らなかった会社をめぐって思うことは、従業員 4 万人、グループ 100 社の気持ちを束ねられる可能性があるものは、理念やビジョンだなということです。性格も、これまでの歴史も、まったく違う会社が、ひとつのグループになる。そのダイナミックさと、率いることになった人たちの議論を見るにつけ、自分の仕事の向き合い方を考えさせられています。

大石仁美

今回もワンのお話を。なんと呑気な、と思われるでしょうけれど、動物と人とのふれあいは癒しの最良の薬だと思うのです。



このところ人間が生み出した物質による自然破壊が凄まじい。身の毛がよだつほどです。原発を筆頭に、排気ガスや農薬、自然分解されない洗剤、衣類、プラスチックから出来た食器やラップ、ペットボトル等々、人は便利さを求め、利益に心を奪われ、ともにこの地球で生きてきた他の動植物を踏みつけて、地球を破壊しながら生きているのです。いずれわが身に返ってくるというのに。海に漂うポリ袋をクラゲとまちがえて食べ、窒息してしまったウミガメの写真、釣り糸が絡まって、動けなくなった海鳥の写真、崩れ落ちる氷山に逃げ惑う白熊の映像・・・目を塞ぎたくなる情

報が多々発信されているのに、なぜか対策は遅々として進まない。一国の首相が、「なによりも経済優先！」と叫んでいるのが現状なのですから。人は自らの傲慢さに気づき、同じ地球で暮らす他の生物たちに敬意を払う姿勢を忘れては平和はやってこないと思うのです。

さてうちのワンですが、2歳8か月。立派な大人になりました。親の欲目か、陽気で聡明、凛々しい立ち姿の男前。

私が朝起きて、洗面台に立つと「きゅ～ん、くう～ん」と小さな声で「ぼく、もう起てるよ」と朝の挨拶。洗面所の横の部屋が彼の居室。戸を開けると、じっと座ってこちらを見ています。

散歩の身支度をして、玄関に行き「ブライ、来い！」と声を掛けると、ダーッとダッシュでやって来て、玄関のたたきで前足、後ろ足と伸び伸び体操。大きなあくびを一つして、それから散歩の出発です。最近の散歩は御所まで自転車でいき、松林の中を 20 分ほどウオーキング。トイレをすませて、自転車で少し遠回りして帰ってくるというのが日課です。朝早いので車が少なくとても快適。自転車との間隔も60センチほど開けて、横に並んで、まっすぐ走ってくれ、スピードを上げても付いて来てくれます。信号の手前に来ると、座って待ち、声を掛けるまでじっと待ってくれるおりこうさん。お散歩時間も、早く切り上げたいときは「今日は終わり、おしまい！」というと、帰宅路の方に、方向転換。言葉をよく理解しています。

夕方は、可能な限り暗くなる前にお散歩。御所でほぼ同じ時間帯にやってくるワンちゃんたちと遊べるのが嬉しくてたまらないようで、大はしゃぎ。ボールを投げると、猛ダッシュで取りに行きます。他の子が取りにいけないくらい俊敏な動き。バネを効かせたその走りに、ついていけない子たちは半ばあきらめ顔。運よく自分の近くに転がってきたボールをくわえて「これ、ぼくのだ」と放してくれません。「ねえ、貸して！」「いやだ！」など、犬同士のやり取りもほほえましい限りです。

なんらかの都合でお友達が来ない日は、匂いを嗅いで、キョロキョロ探し回り、名残惜しそうに、何度も後ろを振り返りながら帰路につきます。

人間より犬は犬同士がやはりいいんですね。

彼は言葉はしゃべれませんが、言いたいことがあると、鼻先で私の太ももあたりをツンツンとつつき、「ん？なあに？」と尋ねた時に、タオルをくわえたら、“かけっこして遊ぼう”軍手をくわえて来たら“外に行きたい”舌なめずりしたら“おやつちょうだい”と、まあこんな感じで、簡単な意思の疎通が可能です。彼の得意技は、私の履いている靴下をそっと脱がすことと、仰向けに寝転んでボールで自分の背中をマッサージ。そのしぐさのなんと可愛いこと！

周囲を見渡せば、猫好き、虫好き（毛虫も含めて）、サボテン好き、・・・・・いろんな人がいるけれど、特別な知識がなくても、この世の生き物、命あるすべての生き物をいとおしく思える環境とゆとりこそが平和への道。過酷な状況下で生きている人を思いつつ、ワンとの癒しの中で日々感じていることです。

ボールをくわえるブライアン

村本邦子

週1ペースの映画は崩れかけているが、平均するとまだ余裕がある。加えて、TV でも、この夏、NHK が良い番組をたくさん流していた。感心して見ていたら、その中でも戦後の傷痕を追う番組を制作してきた同世代の女性が会いに来てくれ、とても刺激を受けた。私も頑張らなくてはいう気持ちになり、緩みかけのネジを巻きつつある。

國友万裕

今度、従姉妹の息子が修学旅行で京都に来ます。面会の時間があるとのことで、京都に親戚等のいる人は会っても構わないらしく、会う予定となっています。お父さんのいない子なので、これまでもゲームを買ってあげたり、おもちゃを買ってあげたりしてきたのですが、今回は学校の用事でくるので、何か買ってあげることはできません。おそらく、どこかで食事でもご馳走するということになります。

僕はもし家族を持つとしたら、男の子が欲しいと思っていました。僕自身が後悔多い少年時代を過ごしたので、自分の息子には幸せな少年期を過ごさせることでその埋め合わせをしたいという思いだったのです。その一方で、僕の血を引いたような子は学校でひどいいじめを受けて悩み苦しむことにもなるだろうという心配があって、やはり自分の血を残す気にはなれなかったんですね。

なぜ、僕だけがこういう惨めな思いを味あわざるをえなかったのか。50 を過ぎた今でも、そのトラウマは消えることはありません。今でも修学旅行の生徒たちを見ると自分の悲しい少年期が思い出されて、切ない気持ちが湧き上がってきます。

でも、従姉妹の息子の前ではそんな態度はとっちゃいけない。父のない男子と子のない男。擬似親子関係を一時でも楽しく過ごそうと思っています。足長おじさんのような気分です。何をご馳走しようかなあー。中学生だから、洋食みたいなのが一番喜ぶでしょうねー楽しみです。

北村真也

（学びの森　http://manabinomori.co.jp　）

京都府亀岡市で、新しい学び場として「探究スクール」「フリースクール」「ハイスクール」「ユーススクール」「放課後等デイサービス」を展開中。

古川秀明

台風というものは実に恐ろしいものでした。台風に限らず、自然の力は人間の想像をはるかに超えていることを頭では理解していますが、今回のように体験することも大切だなと思いました。大昔、星を頼りに航海にでた人々の勇気は凄いなと思います。もちろん、台風の海で犠牲になった人達もたくさんおられたのでしょう。今回の講演会＆ライブも貴重な体験でした。長くなったので次回も続けたいと思います。

シンガーソングカウンセラー

西川友理

京都西山短期大学で保育士養成に、その他さまざまな形で福祉系専門職養成に関わっている者です。

昨年初めて、「ミニシアター　まる」さんのひとり人形劇を拝見し、大変感動しました。「これをうちの学生に見せたいなぁ！」

先日、その夢が叶いました。授業のゲストにお招きし、人形劇と紙芝居、それからミニレクチャーをしていただきました。

当初、プロの人形劇を見たからといって、うちの学校には人形劇の道具やセットはないんだし、直接学生の教育には関係ないんじゃないの、学校の予算を使うんだったら、もっと直接的に教育につながるようなゲストを呼んだ方がいいんじゃないの…という話もありました。私もほんの少しそう思っており、ゲストに誰を呼ぶかという話し合いの際にも「人形劇のヒトをゲストに呼んでもいいですかね…？」と少し躊躇していました。

しかし、子どもの前で紙芝居や手遊びをする保育者を養成する教育なんだから、共通する部分もあるだろう、子どもに何かを伝えるという意味では一緒だよね…ということでお呼びすることができることとなったのです。そしてこれが、本当に素晴らしかったのです！

まるさんは 35 年間、人形劇や紙芝居、腹話術などの講演を手掛けてこられた大ベテランの方ですが、大学での講演はこれが初めてとのこと。人形劇の講演の後には、ミニレクチャーの時間も設けていただけました。

「演じている最中にね、子どもは言葉にしないけど、子どもが楽しんでいるっていうのは、何か伝わって来るんやよね。それに対してこちらからも返す、そしてそれにまた反応が返ってくる。それがね、たまらなく気持ちいいんです。これって、コミュニケーションなんです。」

授業後、学生の何人かが、私に、「先生が授業で言うことと同じことを言ってはったねぇ！」と言いに来ました。そうなんだよ、いい児童文化財には、コミュニケーションがあるんだよ！それが伝わったようで本当に嬉しい。

子どもにはもちろん、保育士をめざす学生達にも、そして現役保育士さんにこそ、いい児童文化財に、ほんものに触れる経験をしていただきたい、と強く思いました。

ミニシアターまる　ホームページ
http://www.marusanni.com/

中村周平

実は、8月中頃から首を痛めてしまい、パソコンが上手く打てなくなってしまいました。これまで口で咥えて打っていた方法が負担になっていたみたいです。現在、視線入力や音声認識を試している所です。本当に申し訳ないのですが、新しい方法に慣れるため、11 月に送らせて頂くのを次回に延期させて頂くことになりました。今回は、短信のみで誠に申し訳ありません。次回に向けて、しっかり、治したいと思います。

坂口伊都

人生の所々に「あっ、そっか」と気づくことがある。父親と私は一緒に暮らしたことがなく、中学の時初めて父と食事をした。何の感動もなく、ピンとくることもなく、「勉強は何が好きか？」とかしか聞かれず、どっかの学校の先生と話しているようで居心地が悪かった。それから時たま食事を共にしたが、苦痛でしかなかった。

社会人になって、苦手な上司がいた。厳しい人だった。その天敵上司との出張が決まり、気分が滅入った。怒られるのが嫌で、しっかりと商品の特徴を覚え、あれこれシュミレーションして仕事に臨んだ。すると、鬼瓦のような顔の上司が「良かったよ」と言ってくれた。それも、笑顔で。嬉しかった。

その後、父との食事で笑って話をしてみたら、父も嬉しそうに笑っていた。あっ、これで良いんだ。こんな簡単な事なんだ。なーんだと思った。今、里子との間でも同じような事が起きている。里子との出来事を話していると「傷つくな」と言われ、そっか傷ついているんだな私と思い、いろいろな人が手を貸してくれる中で、自分が頑張らなくてもいいのか、一緒に育ててもらえばいいのかと気づいたら、身体が急に軽くなった。もっと早くに気づければいいのにと思うが、そこは人生の機微ってやつなのかな。

河岸由里子（臨床心理士）

北海道　かうんせりんぐるうむ　かかし　主宰

あっという間に年末。この時期はやることが一杯あって慌ただしく、あまり好きではない。クリスマスカードを書いて、海外の友人にカレンダーを送り、年賀状を注文し、印刷が出来たらさっさと住所を書く。大掃除の予定を立て、お節づくりの予定を立てる。仕事をしながらだから、日々時間が足りない状態になる。加えて雪があるために移動時間が夏場より多くかかる。あれこれ面倒だ。

そういえば、前回から今回までの間に、小学校のクラス会と、高校のクラス会があった。小学校はあるときから毎年やっているが、高校のクラス会の方は、ずっと参加できず、恐らく卒業以来初めてだったと思う。このクラスは高校1年と2年の1学期しか在籍していないが、みんな全く変わらず、気持ちよく話ができた。ただびっくりしたのは、細かいことまでよく覚えている人が多いこと。私は余り細かいことは覚えていないので、「そんなことあったっけ？」とか「そんなこと言った？」とかばかり。その記憶力、凄いなあと思う。言われて思い出したことも幾つかあった。少しは脳トレになったかも。

前回から今回までの目標とした4kg減量は、まだ達成できないが、少しは減ってきたのでこのまま減らしていこうと思う。そのために、年末掃除を頑張ろう！

岡崎正明

以前自動車の宣伝にもあったが、「馴染んでいく」という感覚はとても心地が良い。「馴染む」とは、相手が物であれ人であれ、「無意識的に対象との距離感が適度になる」ということだと思う。だからその瞬間に気づけることの方が少ないのだ。気がつけばいつの間にか「馴染んでいる」。そういうことのほうが多い。それがまれに

その瞬間に気づけると、なんだかとても気持ち良かったりする。

昔職場の近くにあったお好み焼き屋さん。店構えはちょっとオシャレ系で、店員もEXILE 風の若者が中心。おばちゃんがやってる店じゃないので、世間話が深まる感じも、「いつものアレ」なんて符丁も生まれない。たまたま近いので行っていたお店だった。

ある時ふと、自分が馴染みになっている瞬間に気がつけた。別に店員と笑顔で挨拶できたわけではない。「ごちそうさま」と言って帰る際、それまで私の時にだけ、バイトがわざわざ小走りで来て、ドアを開けていたのに、それをしなくなったのだ。たったそれだけのことだったが、どことなく肩の力が抜ける空気が漂って、店を出て妙に嬉しくなった。互いの理解が、少しだけ深化した気がした。

最近幼馴染の友人と旅行したときも似たような発見があった。私はときどき派手にコケるのだが、そんなとき彼は横にいても全然助けないし、あまり驚かない。「おお」とだけ言って、横でボーっと待っている。私が立ち上がるのに自ら彼の手を掴むと、ようやくその時に引き上げるための力を入れる。私が再び歩き出すと、何事もなかったかのようにそれまでの会話を続ける。衆人の前でコケるのは恥ずかしいが、彼と一緒だとその被害が最小限で済む。あまりにナチュラルで気がつかなかったのだが、私にとって一番楽な対応を彼は体得していた。

別に話し合ったわけでもないのに、なんだか示し合わせたように相手の望んだ態度がとれるようになる。互いの扱い方をなんとなく理解する。「馴染む」とは「＝相互理解」ってことなのかもしれない。

見野 大介

気づけば世間はクリスマスモード。1年が過ぎるのが早すぎる感覚です。今年はあまりにも出展し過ぎたので、来年はもう少し出展回数を減らして制作時間を増やすようにと考えております。あんなデザインやこんなデザインと、作り込みたいデザインも溜まっているのもありますので。ここ最近、急激に白髪が増えたなぁと思う今日この頃。

浦田雅夫

９月に不死身だと思っていた母が亡くなりました。やはり人は死ぬのですね。でも、ゆっくりと最期の時間をあなたといっしょにすごせてよかったです。ありがとう。

団士郎

幸せなことに、世の中の人が誰も自分の価値を分かってくれないと思った記憶がない。公務員組織にいた頃にはうっすらと、自分のことを受け止める仕組みが役所組織にはないのかと思ったことはあった。しかし思いつく仕事やプランはどんどんやってしまえば通用したし、公務員だからと自主規制する事もなかった。

むしろどこかで、自分のようなものがいると、バランスのいい公務員として頑張っている人達の目障りかもしれないとは思っていた。

早期退職要項だったかに応募して、十年前倒しの定年退職をし、満期退職の人達と一緒のパーティに同席した時のことだ。大きなテーブルに十数名の退職者と、顔も見たことがなかった本庁部長クラスが一名ずつ着席した。型通りの会話が進む中、十才も若い私は異分子だった。

そして話が回ってきた時、「退職後は何をなさるのか？」と部長から質問があった。転職が決まっていたわけでも、自営で何か始める準備をしていたわけでもなかった私は、「漫画を描いていたり、文章をかいたりしていますので、本を作ろうかと・・」と話した。

「ホーッ」とテーブル全体が戸惑った。そして部長が、「著述業ですか・・・」とあきれたようにつぶやいた。たしかにあの時点で単著一冊も出版されてはいなかった。

あれから二十年経った。今、単著、共著、専門分野、マンガ、どちらでもないものなど、著書が20冊を超えた。

だからって印税で食べられるなんて事は全くない。ただ、自分の本が出たら嬉しいと願ったことが実現した。このことは私が世の中を信頼するために，大いに貢献してくれた。

＊

悠々自適を信じられる人の精神が分からない。そんな風に生きた日本人の歴史を知っているのだろうか？

預貯金や財産が、戦争でみんなパーになった祖父母世代。私の祖父は若い頃からこつこつ貯めていた貯金が、戦後、たばこ数箱しか買えなかったと語っていた。（真偽の程は知らない）

突然の被災で何もかも失った人が沢山ある東日本大震災。そんな声をたくさん知っている。

年金がずっと支払われるとか、会社がずっと存続するとか、自分だけには不運は起きないとか、どうしてそんな危なっかしいことを信じたがるのだろう。

はっきりしているのは、自分が働こうとしている限り、働ける仕事はあるということだ。雇用や賃金だけで仕事を考えるから、駆け引きや損得勘定に絡め取られるのだ。

自分で生きて、食べていくのだ。出し抜いたり、他人を食い物にしなくても、自分の役割を果たしていたら、「食うな！」といわれることなどない。

似合わない悠々自適にあこがれ、新しく登場する詐欺に引っかかるのは、自分の今を肯定しきれないからだ。

この世界を信頼しないで、自分だけ健康で長生きしようなどと、どうして思えるのか。預金額や資産運用話に引きずられていく自分を愚かしく思わないのか？

超高齢社会が駆け足で近づいている。その世界をどんなものにするかは、高齢者が考えなければならない。そこの住人が自分で考えないで、他人の子や外国人の世話になろうなんて、虫が良すぎるだろう。

そんな歴史がかつてどこに展開したというのか？ありもしない幻の老人ユートピ

アに裏切られたと不安がるより、出来ることを自分がすれば良い。

やれば出来ることがあるのに、何もしようとしない人など、誰も助けないだろう。そんなものは福祉でも権利でもない。自己中心、思い上がりというものだ。

もう十分働かせていただきました、などと口幅ったいことを言うものではない。まだまだ現役。高齢化社会とはそういうことだ。

大谷多加志

つい先日、職場で企画と進行を担当している「治療教育講座」という講座の、今年度の予定が全て完了しました。「治療教育」という、最近では耳慣れない言葉が使われていますが、発達支援の現場で仕事をする上で、必要になる「発達の基礎知識」や「発達支援の視点やアプローチ」を学ぶことをテーマにしています。現場の人が仕事を終えてからでも来られるように、火曜日の夜に連続 22 回という形で開催されています。講座名のやや古めかしい感じからうかがい知れるように、私が担当するようになってから 15 年、開講からは 40 年以上を数えています。

私が働いている 15 年の間で、研修を取り巻く状況は大きく変わりました。平日の夜に開講している講座は、なかなか参加が難しいという声も多くなりました。同じ曜日の同じ時間に連続して参加するもの困難になり、土日に短期集中で学んで頂くスタイルに移行した講座も多くあります。

そんな中、「治療教育講座」は講座名も講座のスタイルも変更しないまま、しぶとく続いてきました。このマガジンと同じで、続いているものにこそ生じる意味があるとするのであれば、治療教育講座も続いている意味を考える価値があるかもしれません。最近では、児童発達支援事業所や放課後デイサービスなど、新設の事業所からの参加者も見受けられるようになりました。一方で、老舗の機関、ベテランの参加者もあり、参加者はいつも幅広い年齢、幅広い職域に渡ります。「発達障害」に対する関心の高まりをはじめ、発達支援の現場にも、社会や制度の変化は大きな影響を与えてきました。その変化はとらえながら、それでも時流に左右されるだけでなく、いつの時代も変わることなく大切だと思えることを、じんわりと続けていきたいと思っています。

馬渡徳子

飽きっぽい私が、はまっていることがある。

一日二回の五分間瞑想。

始めは、邪念で歯がいしかった。

けれど、慣れてくると、頭が切り替えられ、目がすっきりすることがわかった。心地良いと感じる匂いにも気付けるようになった。

あれは、三年前の秋、早樫一男さんのワークショップの演習で、「頭のてっぺんから足先まで、神経を集中しながら、目をつぶって、黙って CT スキャンをする」という体験をした。

気になる箇所で、スキャンがひっかかるということに気付けた。

二年前の秋、過労で救急搬送された時、見舞いに駆けつけた視覚障がいのある鍼灸師の友人が、「週に一回でもいいから、自分の体の声に耳を傾けなさい」と助言してくれた。

昨年の秋、不思議なレストラン・クッキングハウスの松浦幸子さんのワークショップで、瞑想法を体験した。

開催地の石川県珠洲市で購入された珠洲焼きの「おりん」を、始めと終わりの合図で鳴らされ、皆でその音色に聴き入った。

今年の秋、触法ケースの支援をされているご住職を、認知症カフェにお招きして、皆で瞑想を体験したところ、大好評で、前半と後半の切り替え場面で以後も継続している。静の時間をつくると、後半かえって話が弾み、飲み物も美味しく感じるので不思議だ。

病気療養中の遠方の友人に、「朝晩同じ時間に瞑想をしようぜ」と誘うと、こんな素敵な返事が来た。

「うん。心一つに、世界の平和を祈ろうよ。」

すると、私の父の言葉も思い出した。

「苦しい時こそ、『逆に』、誰かのために祈りなさい。」

「迷走」ばかりしている政治家よ、

喝!!!だ

竹中尚文

前回に続いて、パスタを紹介する。今回はカルボナーラである。ベーコンと卵のスパゲッティだ。かつて私は、ベーコンではなく、パンチェッタを使っていた。神戸のイタリア料理店のシェフが「スモークガデキルノダッタラ、ベーコンヲツカッタホウガイイ」とアドバイスをくれた。まったくその通りだと思ったので、今は自分でスモークして、ベーコンを作っている。チーズは梅田でチーズを売っていた人に、パルメジャーノよりペコリーノを使った方がいいというアドバイスももらった。

【作り方】準備するものは、スパゲッティ麺、ベーコン、卵、ペコリーノ。①好みの量のスパゲッティを準備する。ベーコンも好みの量で準備するが、多いと塩味がつよくなる。②ベーコンを適当に切る。③ペコリーノチーズをすりおろす。事前にフードプロセッサーでまとめてすりおろして、冷凍保存しておいてもいい。④私は、スパゲッティ 100g に対して、ペコリーノ 15g と卵黄 1 個の割合で使う。卵 4 個程使うときは、その日の気分で全卵 1 個と卵黄 3 個にしたりする。⑤ボールで卵とチーズをよくかき混ぜる。⑥スパゲッティ麺を茹で始める。⑦続いて、フライパンでベーコンを炒める。⑧スパゲッティ麺がアルデンテほんの少し手前で火を止める。⑨ここからがこの料理の醍醐味である。スパゲッティをベーコンのフライパンに入れる。火は止めるか、最弱火にする。⑩卵とチーズを混ぜ合わせたものもフライパンに入れる。同時に粗挽きコショウを入れて、フライパンの中ですべてを混ぜ合わせる。表面全体にてりが出てきたら火を止める。 この⑨を⑩はすべてタイミングである。いい材料と手間を惜しまず準備しても、このタイミングを間違えれば、失敗である。これが素人料理の面白さである。プロは必ず成功する。私

は成功もすれば失敗もする。これが料理の面白さである。

料理中のバックに流す曲は the Chieftains の Voice of Ages。アップテンポのアイルランド音楽のバンドである。アイルランド音楽を代表するバンドだから、アルバム数の多い。わたしは、この Voice of Ages を気に入っている。楽しくなってきて、元気がでる。今、来日公演中であることを知らなかった(残念)。

【告知】 前回にお知らせをした私の本の出版が遅れている。9 月中に再校を言われていたが、まだ送ってこない。忘れているわけではないのだそうだが、他に急ぐ仕事があるそうだ。のんびりと待つしかない。お付き合い願いたい。

サトウタツヤ

あろうことか、締め切りが10月25日だと思って、1ヶ月以上も前に原稿を提出してしまった。 なんたる不覚。。。再発防止に努めたい。

秋は、学会シーズン。9月には日本心理学会、日本質的心理学会、日本パーソナリティ心理学会で主として指定討論を行った。ある方に「サトウタツヤは今の日本の心理学界で、最も守備範囲が広いヒトのひとり」と紹介してもらった。確かに質的研究、心理学史、プラセボ、重回帰分析、頼まれたら断らないので範囲は広くなって当然か。もっとも、守備範囲が広いけれど、エラーも多い、という現実もある。

そして、12／8から総合心理学部の校務(交換留学制度作り)のため、デンマーク・オールボー大学／コペンハーゲン大学に出張。もちろん、研究交流もするけれど、職員の方と一緒の校務海外出張は初めて。

ちなみに、デンマーク・オールボー大学はPBLのメッカの一つで、本誌に好評連載中の山口洋典立命館大学准教授がサバティカルで滞在中。

果たして学生の留学制度作りなど校務はうまくいくのか？？？刮目して待て！

川﨑二三彦

時は移り･･･

横浜で仕事をするようになって10年余、この数年は、毎週毎週新幹線で京都の自宅から通勤しているのだが、京都駅の混雑が年々深刻になってきた。かつて新幹線の駅構内は広々としていて、修学旅行生が集団で待機するために拵えたようなものだと考えていたのだが、昨今は、時を問わず、季節も問わず混み合っている。

混雑は新幹線に限らない。

「この＜快足＞は伏見稲荷には停車しません。隣の＜普通＞にご乗車ください！」

よく利用する JR 奈良線ホームでは、この前もホームいっぱいに広がる乗客相手に、駅係員が根限りの声を出して呼びかけていた。奈良線沿線の宇治には、観光名所の平等院や世界遺産で国宝にも指定されている宇治上神社などがあるが、こちらも例に漏れず客があふれるようになり、外国人観光客もいない日はないと言っていい。おかげで一時閑古鳥が鳴いていた宇治橋商店街も、通る度に新しい店ができ、賑わいを見せている。

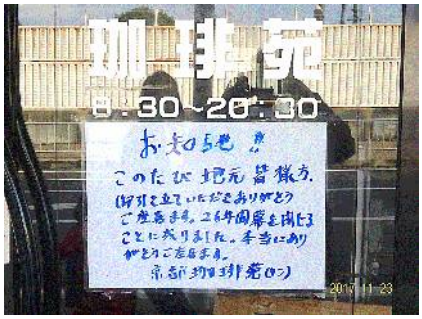
ところがある日のお昼どき、12 時前になるというのに、商店街の端にある和食の店が閉まっている。不思議に思ってドアを見たら、なんと「本日は完売しました」の張り紙。

平等院前には、いつのまにか宇治市唯一のスタバも開店し、つい最近も JR 宇治駅前に伊藤久右衛門の店舗が誕生、開店早々列をなして買い物を楽しむ客でいっぱいになった。

話変わって、同じ宇治市の近鉄大久保駅。急行停車駅で、私が長年勤務した宇治児童相談所の最寄り駅だ。高架下に改札があって、その並びには書店やレンタルショップ、スーパーやパチンコ店、何店舗かのレストランやラーメン店が並んでいた。その中で、私が最もよく利用していたのが、喫茶「珈琲苑」である。

この喫茶店は、地の利用もあって都合よく、ここで原稿の校正をしたり、当座の予定を立てたり、関連書籍に目を通したり、さながら私の移動書斎とでもいうべき役割を果たしてくれていたのである。マスターは、ちょくちょく替わるアルバイト店員に、接客の仕方だとか食器の片付け方その他、何かと注文をつけていたけれど、一国一城の主になった満足感が、そのロぶりに表れていた。店員はありがた迷惑だろうなと余計な心配もしたものだが、“我が城”を存分に楽しみ、頑張っているのが傍目にもわかった。

ところがある日のお昼どき、宇治児童相談所に用務があって、久しぶりにこの喫茶店で軽食を取ることにしたのだが、12 時前になるというのに、店が閉まっている。不思議に思ってドアを見たら、なんと「26 年間の幕を閉じることになりました」の張り紙。



よく読むと、文章もいささか乱れがちで、文字も少し滲んでいたが、いつの間にか廃業していたのである。

びっくりして、今度は建物の入口にまわって中に入ろうとしたら、ドアがうんともすんとも動かない。入口自体に鍵がかかって開けられないのである。つまりは、本屋もレンタルショップも喫茶店も、何もかもが順次閉店していって、ついには高架下の北側半分が営業を停止し、残るは南半分のスーパーぐらいになっていたのであった。

私が勤めていた頃は、宇治市の中では JR 宇治駅付近よりも近鉄大久保駅の方が盛んな印象だったが、時代が移り、私たちが時間外勤務のために夜食を買っていた児童相談所すぐ近くのスーパーも閉鎖された。

「スーパーに連れて行ってやる」

こんな約束をして車に子どもを乗せ、途中で「その前に児童相談所にも寄るからね」などと子どもを騙して来所した親もい

たが、そんな策略も今では使いようがない。

十年一昔というけれど、宇治児童相談所を離れて 10 年余。現在の所長は、私が係長をしていた時に新人児童福祉司として赴任してきた人だ。人も街も動く、これまでも、これからも。　（2017/11/30 記）

荒木晃子

大好きな叔母が天に召された。

亡くなった母の 12 人兄弟姉妹の末妹で、最も母似の、美しく笑顔の素敵な憧れの女性だった。叔母は、国内初の開業カウンセリングルームを開設した臨床心理士だ。晩年は、山口県の大学の教壇に車椅子で立っていたと聞く。その昔、高校を卒業した叔母が、（私の）両親の新婚所帯に身を寄せ、働きながら大学進学を目指していたのは、今から60年程前のことだ。働きながら猛勉強し学費を貯め、受験に臨んだ結果、見事、独学で上智大学に入学を果たしたという。九州で両親と暮らした時期に丁度私が生まれ、叔母は生まれたばかりの姪のおしめを変えたり、添い寝をしたりと、我が子のように可愛がってくれたと母から聞いた。

先日、生殖医学会で下関に出向く機会があり、ついに叔母が眠る市内の教会へ足を運ぶことができた。お礼と共にお別れの言葉を告げるつもりが、「次に会ったらこんなことを話そう」と思っていたことを、クリスチャンネームのついた叔母の写真にいつしか語り続けていた。昇天した現在も、私を支え続けていてくれる。叔母の名は、武安よしえ。私の自慢の叔母だった。合掌

鶴谷圭一

もうすぐ幼稚園の音楽会だ。このマガジンがアップされる頃には終わってホッとしていると思うけど、各クラスの進捗状況やオープニング、エンディング、そして音楽会の主旨を保護者に伝えるアイテム作りや、みどころパンフ作りなど、やることが満載だ。

前回のマガジンで、音楽を楽しむと書いたが、実際にやってみるとスキルを身につけさせることと楽しむことの両立の難しさを感じ、毎度のことながら悩んだり迷ったり、そして工夫して乗り切っていくというプロセスを経て本番を迎える。

悩みたくないなあーと思ったときが停滞するときなのかもしれない。

原　町　幼　稚　園
http://www.haramachi-ki.jp
メール　office@haramachi-ki.jp
ツイッター　haramachikinder

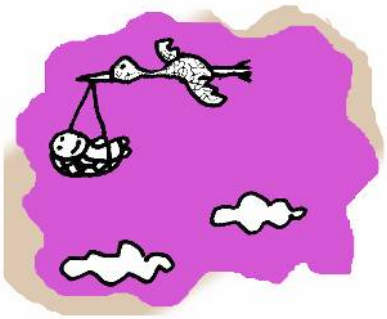
木村晃子

締め切りぎりぎりに原稿を書いている。毎日があっという間に終わり、積み残しだけが増えていく。疲労感いっぱい。

北海道はすっかり冬だ。春が来るまで、ひたすら耐える雪との戦いだ。

北海道で生まれ育った長男。あの財政破綻した夕張で働くようになって 3 年が過ぎた。たくさんのことを経験し、また新たな道へ挑戦したようだ。この冬空を飛び終えて、しばらく雪のない地域で新たな仕事に挑戦するらしい。どんどん離れるわが子には、ただただ、元気であれ、と思い願う夜。人生は1回きり。自分の思うように生きたらいい。

北海道　ケアマネジャー



三嶋　あゆみ

＃くいもんみんな小さくなってませんか日本のハッシュタグが少し前に流行ってました。

企業が「値上げできないから内容量を減らす」ほど、庶民のくらしは切羽詰まっているのに、政府はまだ、消費税10%を諦めていないことに驚きます。

先の見えない不景気で、招き猫もお疲れさま！

乾明紀

今号の周旋家日記は、休載いたしました。これまで、幾度となく締切日を融通してもらいながら続けてきましたが、今回は踏ん張りが利きませんでした。次号では復活したいと思います。

高垣愉佳

今回は、諸事情でお休みさせていただいて、次号で「おじゃまします」は最終号にしたいと思います。連載をするというのは、自身のやってきた事を振り返る作業でもあります。振り返り、文章にして発信したいと思えるほど仕事を楽しめるというのはありがたいことだなと思います。月日が流れてから文章化する上で、当時の自分とは異なる自分の視点が生まれていることを実感する今日この頃です。昔の自分を恥ずかしく思う事もあるのですが、現場の中で日々変化している自分を実感するのも悪くはないなと思います。様々な人に出会い、ケースに出会い、多くの書物を読み、常にリニューアルした自分で今日も同じ現場に立つ、それこそが臨床なんじゃないかと思う今日この頃です。

1 工程@1 円～知的障害者の労働現場

31：　施設というコミュニティ

千葉　晃央

「施設は一種のコミュニティやね」。大先輩が言った言葉である。コミュニティとは「同士・同志の集団」「共同体」「目的を共有している仲間」の事である。さらにコミュニティとは「同じ共通点を持った人間の集まり」「生活を共有している動物達」の事を指すといわれている。

労働現場は人が集い、作業をしながら、毎日過ごすというのが日々行われている。職員として過ごす者は、施設全体の運営を担う。それは利用者の方への支援を中心とする。利用者支援の記録を残す、ケースに関連した他機関とのやり取り、ケースのご家族とのやり取り、施設と他施設、施設と地域社会とのやり取り、これらも職員として過ごすものは担う。一方、利用者さんは作業をし、日々の日中活動の中心となる時間を過ごす。そこでは仲間もいるし、作業や生活のサポートをするスタッフもいる。制度という背景を取り除き、日々実態として施設では何が行われているかだけを切り取るならば、このようなことになるだろう。

では、その人が集まってできた集団であるコミュニティとは、どのようなものだろうか。コミュニティを一つのシステムとしてとらえるならば、下位のシステムがおのずと存在する。つまりサブシステムやミクロシステムといわれるものを今回は取り上げてみたい。

その下位のシステムは、ある場面や時期や時間で浮き上がることも際立つこともある。またその逆もある。何を共通にしたサブシステムが浮き上がってくるか、表層に現れるか。中には表層ではなく、低層で存在し続ける下位システムもあるだろう。そんな視点から、知的障害者の労働現場というコミュニティを考えてみたい。

利用開始時期が同じ！サブシステム

その施設の開所時には一度に利用を数十人が開始することになる。真新しい施設、新しい職員と利用者が一堂に会し、スタートする経験は、他の何物にも代えることができない印象深い経験となる。試行錯誤も失敗も、苦労も、初めてのお給料も、初めての仕事の喜びも共有する。そして、たくさんの写真も残る。その時期を一緒に乗り切った仲間の絆は強い。そして、施設のそ

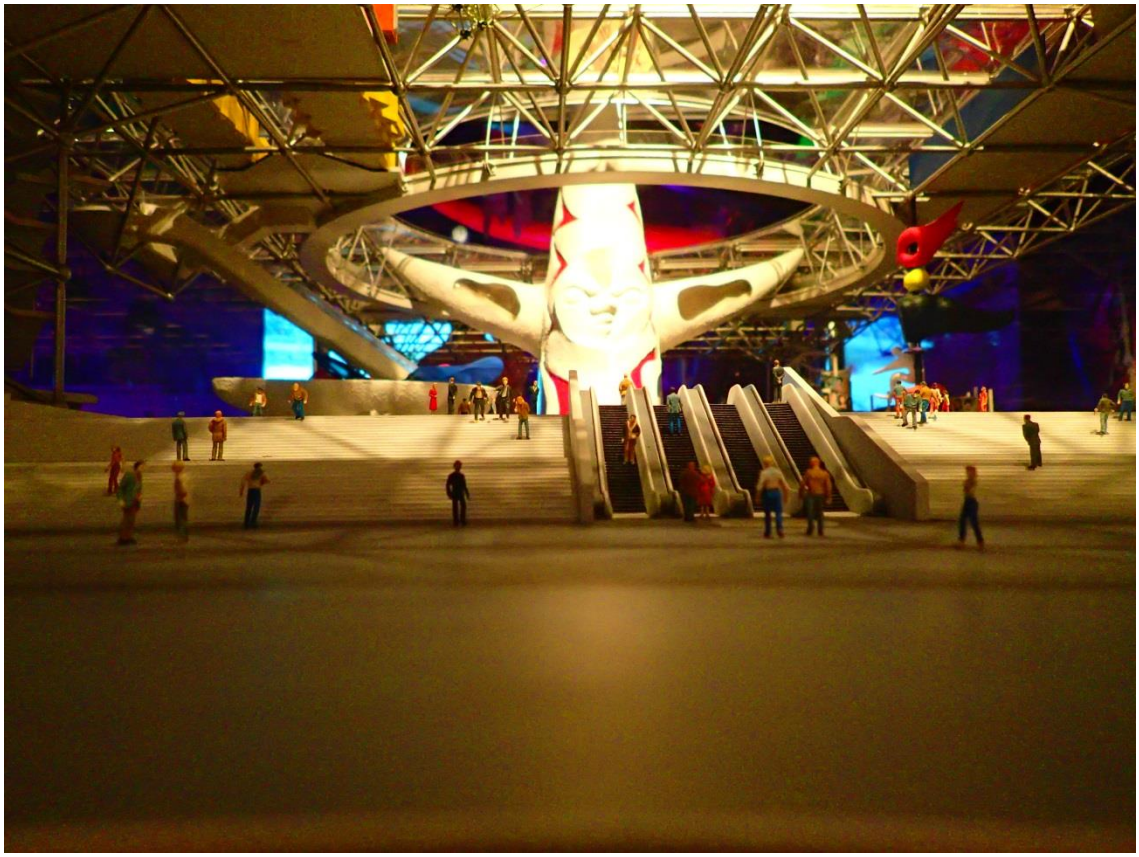
ういう時期に立ち会う経験は人生において多くはない。そういう機会に巡り合えたならば、自分の人生の貴重な経験にもなるだろう。これは援助者も利用者もある程度共通ではなかろうか。「あのころから一緒に頑張っているね」「あの頃、はじめは何もなくて大変やったよね」こんな話ができる人がいるならば、そのことがすでに支えになる。

また、似たものとして施設の定員が増えたときも一定数の人数が一度に誕生する。このつながりも、施設にとっての定員増や増築という記憶とも相まって、後年も話題になることが多い。定員によって、制度からの予算のつき方は大きく変わることもある。それによって運営側の事情は大きく影響を受ける。職員配置の変更などである。その時期を共にした援助者、利用者の記憶も鮮明に残りやすい。

こうした一度に多くの利用者さんが新たに通うことになると、人間関係の構築も一度に並行でスタートとなる。そのため、一人ひとりとのラポールを形成するプロセスが同時進行となる。時には、うん十人同時にである。その苦労やリスクはなかなかである。お互いに知らないところからのスタートである。職員同士も、職員と利用者さんの間も、利用者さん同士もである。そこに道を見つけていく仕事になる。その経験はやはり鮮烈なものとして残ることになる。

時代を共有！世代によるサブシステム

美空ひばりの話で盛り上がる世代。万博、フォークソングの話で盛り上がる世代。おニャン子クラブ、80 年代アイドルブームで



盛り上がる世代。西野カナ、KARA の話で盛り上がり、一緒にコンサート行く世代。私の周辺では、上記のように本当に大きく 4 世代に見えている。この見え方はかなり個人的な見解であろう(笑)。有名人の訃報のニュース、昨晩のミュージックステーションのパフォーマンスの話題でこのサブシステムは集まりコミュニケーションをとる。

福祉制度は、時代の経過の中で整ってきた。その経験の差も存在する。福祉制度がない時代、障害児を対象にした義務教育がスタートした世代、福祉利用が権利になった時代、洗練された福祉サービスを選ぶ時代…。その世代ごとに施設の利用姿勢が異なる。これらは表層に現れるよりも低層に流れている。何かの非日常的な場面で浮き彫りになる。

世代によっては、土曜日も働いていた頃を振り返った話題もある。土曜日のお昼の食事は軽食も多く、ラーメン、焼きそば、うどん…などだったね！などから始まり、半日働いて、出かけた話、職員も残って少し片づけものをしたり、レクリエーション的に職員同士の親睦を深めた話をすることも多い。土曜日がそんな機能を持っていることも多かった。

援助者にとっても、自分が子ども時代に過ごした障害を持った友人と重ねることもある。また、ご家族も自身の子どもと同じ年の援助者は何かを重ねることもあるように感じたこともあった。また、援助者が自分の子どもより、若くなっていくこともご家族としては感じ入ることが多い場面のように思う。同じ世代の利用者さんのご家族と話していると、そんな話題にもなることがある。

朝がはやい人たちのサブシステム

はやい時間帯の施設現場は閑散としている。昼間は多くの人がいる建物も、早い時間帯は静寂に包まれている。スズメの声が聞こえ、夏はまだ涼しく、冬はまだまだ寒い。そんななかでも早く施設に足を運ぶ方々がいる。

職員は管理職クラスの方もいる。責任者としてカギを開ける。鍵を開ける前は不審者侵入の有無を確認するため、施設を 1 周し、ガラスが割れていないか、中に人がいないか、普段と違う様子がないかを確認することも多いと聞く。そうこうしていると職員も、利用者さんも早く来る方がぽつりぽつりと到着する。何かしらの作業をはやく来て、やりたい、済ませたい人も多い。その役割、当番を担っている人も、そうではなく自主的な人もおられる。洗濯物、掃除、作業準備、水やりなど、人によってさまざまである。

この時間帯は双方に余裕がある。立ち話などコミュニケーションはゆったりとできる。リラックスもしている。早起き仲間である。昨日のプロ野球の話題、相撲の勝敗の話題、家族の話題、仕事の話題、友達との関係の話題…そういったやり取りがゆったりとした時間の中で行われる。

最近は「朝活」という言葉もあるが、朝の比較的余裕がある時間に職員は管理職との事前打ち合わせ、形式的ではない相談をすることも多い。またそれが有効に機能することがよく見られる。

その後の定時に来る多くの人が、その日

を始める前に、もうすでに一やり取りも二やり取りも行われているのである。こうした時間がある利用者さんは、職員と時間を個別にとることになる。そのことによって落ち着いていたり、職員との信頼関係が強固であったり、自分たちが一日の早い時間から、始まりからいることでの優位性を知らず知らずに手に入れている。職員間、職員と利用者間、利用者間でも相互にはやく出勤しているもの同士として、安定した関係を築き、その関係性を幹にしながら、施設コミュニティの一日の相互作用が始まっている。

帰る方向が同じ！ご近所サブシステム

通所・通勤のバスの系統が一緒であると、その関係は施設到着の何時間も前から始まっている。その関係が終わるのは、施設からの帰宅途上も含むことになる。そのバス内での出来事や困りごとも共有することになる。知らない人に声をかけられている、バスの座席の事でのトラブルになっているなども起こり、その話が他の利用者さんから聞くことも発生する。異性間のことなど性的被害の話題も、金銭のトラブルも、被害、加害のトラブルもあったりする。状況把握や対策を目的に職員がその途上を一定期間共にすることもある。

近所のお祭り、交通渋滞による遅延、バス運転手の荒い運転、交通事故なども共通の話題にしながらこのサブシステムは相互にやり取りが行われる。「帰り何番に乗る？」という会話から始まり、療育手帳で乗車賃が発生しないという環境がこのサブシステ

ムを維持している。

自転車通勤！自転車組サブシステム

自転車で来る人たちは自転車置き場でのコミュニケーションが存在する。朝の到着時間はそれぞれであるが、作業後は一斉に帰るので、駐輪場でのやり取りが存在する。どのルートで帰るのか？や、一緒に途中までかえるかどうか？のコミュニケーションも行われる。自転車もそれぞれの車体ごとに状況が異なる。整備が行き届いていないため、職員にそのことを伝えてこられることもある。チェーンが外れたり、ブレーキが壊れたり、電灯がつかなくなったり。ここには交通事故のリスクも存在する。そのため、自転車で通うルートは重要である。それでも、一日の仕事から解放されて、自由に移動できる喜びは大きいようで、意気揚々を家に帰る姿も印象的である。

一緒に作業！作業場ごとのサブシステム

作業には持ち場がある。工程ごとや作業種ごとに作業場がわかれている。同じ作業場で一緒に作業をすることで、当然仲間意識が芽生える。たくさんの注文を前に、汗をかきながら一緒に踏ん張ったこと、納期がタイトな中で仕上げたことをお互いに知っている証人（witnness）となっている。そのなかで育まれる信頼関係は強固である。相互の信頼と言える。相手が存在しないとこの仕事、作業が成り立たないのである。これは職員間、職員・利用者間、利用者間どれにおいてもである。作業における達成感は「われわれ感情」を生み、「私」の存在を認めてくれる場所となる。つまり、その人の居場所となるのである。必要とされる、自分に価値があると思わせてくれる。その意義は言うまでもない。

ちょっと一服！灰皿サブシステム

タバコを吸わない者にとっては、話すきっかけがあるのはうらやましい限りである。吸いながら、リラックスしながら、もしくは煙を肺に入れて高揚をしながらのコミュニケーションは他の場面とは質が異なるのだろう。ここではタバコの貸し借りなどでの行き違いも起こることが多い。また、シケモクを吸わないなどのマナーも必要となる。灰皿のある喫煙所、そこに職員もいることで助かることが多い。共通の話題はタバコ代をどうしているか、たばこの値上げに関する不満を共通の話題にしていることも見受けられる。

担当サブシステム

職員と利用者さんとの間では、まずは二者関係から安定した関係を構築することを大切にしている。困ったらこの人に聞けばということが明確であるためである。その担当ごとに、昼食時に食事をしたり、行事で行動をすることも多く、同じ職員担当のサブグループ（サブシステム）は作られていることも多い。担当意識が強い方もおられる。私はあの職員だと　あなたはあの人

でしょ、なのに私の担当の職員とばかり話しているの？というようなやりとりも日常的にみられる。

母校が同じ！出身校サブシステム

特別支援学校ではアフターケアで、卒業生も定期的に母校を訪れ、同じ出身校同士の仲間と出かけていたりする。そのつながりは世代も超えることもあり強いように見えることもある。特に子ども時代からの繋がりは強固である。当然、同窓会の話題なども盛り上がる。共通の先生とのつながりもあり、その話題でも盛り上がる。教員は異動で別の支援学校に転勤していることもあり、別の学校で別の世代でも、同じ先生に習っていたりして、思わぬ共通の話題で盛り上がることがある。そんな先生が現役の特別支援学校の生徒の施設実習に来られた時は、利用者さんそれぞれのリアクションが観られる。先生も成人となり働いている姿を感慨深くみて、コミュニケーションをとられる。だれだれ君もいるよ！と先生と話している姿も見る。その方の子ども時代から成人まで、接しさせていただくこの領域の仕事。その仕事のやりがいを感じる瞬間の一つである。

スポーツ新聞サブシステム

プロ野球ニュース、芸能ニュース、そして少しエッチな記事などが含まれるスポーツ新聞。それをある方が購入する。見せて欲しいとなる。順番に見る、一緒にみる、もう読んだからあげるともらう。一つの新聞をきっかけに人をつなげることになる。特にペナントレース終盤、高校野球開催時期、大相撲場所中、紅白歌合戦前後、アイドル引退前後など、このスポーツ新聞は大人気となる。世間では多くの人がスマホで済ます中、この現場にいる方々が新聞購読者の一端を担っている。

同じ福祉機関を利用しているサブシステム

ショートステイで同じお迎えの車で帰る。そして一緒に泊まる。こんな経験をすると当然関係は深まりやすい。同じショートステイのスタッフさんの話題、おいしかった、そうでなかったというような食事の話題なども付いてくる。地域での生活、地域福祉、多職種連携がベースになった現代の福祉デザインではこの「同じ福祉機関を利用しているサブシステム」が顕著である。同じグループホームにいる方もいて、作業も生活も一緒になる。それが力になることもある。逆に関係が不調となると、生活場面、仕事場面両方での大きな配慮が求められることになる。

こんなサブシステムを含みながら、施設というコミュニティは存在している。取り上げた多くのサブシステムにおいて、利用者と援助者という立場の分け方を超えている。「社会福祉士は利用者と私的な関係になってはならない」。援助職の代表的な資格、国家資格社会福祉士の行動規範に掲げられている一文である。人が複数いるときに役割機能だけでしか相互の関係性が生じてい

ないというのはあまりにも矮小化された視点であろう。人はコミュニティにおいて、いくつかのサブシステムに身を置くことでそこに居続けることを可能にする。そんなサブシステムの可能性を見つけることは支援のきっかけににもなる。そういえばこないだは男同士というサブシステムで「人を好きになること」をテーマに利用者さんと話をしたところ。やはり面白い職場だ。

BACK ISSUES

職場づくり 30　2017 年 9 月

健康管理 29　2017 年 6 月

音 28　2017 年 3 月

救世主になりたい援助職 27　2016 年 12 月

事件について 26　2016 年 9 月

クルマ社会と福祉政策 25　2016 年 6 月

施設が求める「障害者像」はあるのか？　24

2016 年 3 月

連絡帳 23　2015 年 12 月

におい 22　2015 年 9 月

作業着 21　2015 年 6 月

食べる 20　2015 年 3 月

通勤 19　2014 年 12 月

クスリの作用、人の作用 18　2014 年 9 月

倫理観でかたづけられる暴力 17　2014 年 6 月

触れる 16　2014 年 3 月

対談企画　「教育と福祉の連携を模索する」2014 年 3 月

情報の格差 15　2013 年 12 月

20 年前のノートから 14　2013 年 9 月

そうじのねらい 13　2013 年 6 月

個別化の暗部 12　2013 年 3 月

グループワークの視点 11　2012 年 12 月

実習生がやってきた！10　2012 年 9 月

月曜日のせいやな 9　2012 年 6 月

所得を決める福祉職？82012 年 3 月

世界とつながる社会福祉現場 7　2011 年 12 月

この現場へのたどり着き方 6　2011 年 9 月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011 年 9 月

旅行がない！5　2011 年 6 月

職員の脳内回路 4　2011 年 3 月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010 年 12 月

利用者が仕事上の戦友 2　2010 年 9 月

障害者自立支援法で不景気に！？1　2010 年 6 月

臨床社会学の方法

（19）社会病理学のゆくえ

−苦悩（パトス）が社会的であることを意味づける学知のために−

中村 正

1. そうなっていく過程や関係性を重視する社会病理学

この連載、臨床社会学としているが、私の固有の専門領域の名称は社会病理学 social pathology である。大学院では「社会病理学」、学部では「臨床社会学」という名称で講じてきた。社会病理現象への関心は高い。社会病理学会のメンバーで『関係性の社会病理』を上梓した（日本社会病理学会監修／高原・矢島編、学文社、2016 年）。内容は、不登校、いじめ、少年非行、高齢者犯罪、ストーカー、DV、児童虐待、非正規雇用、ホームレス、自殺である。監視・予防・防止、失踪・家出、野宿、「ブラック」系、多重債務、セルフネグレクト、自虐、私刑(ネット炎上、いじりやいじめも含む)、嫌悪・憎悪、家庭内殺人、障がい者殺し、いじめや過労による自死という括り方で社会病理をとらえることもある。

広い意味での暴力にも関心が向かう。ヘイトスピーチやヘイトクライム、テロとそれへの応酬も暴力ゲームのようでもある。暴力のすそ野は広く、けなし、侮蔑、 軽蔑、蔑称・よびすて、無視・透明化、いじめ、ハラスメントをささえる日常的排除(冗談、流言、噂、ステレオタイプ、配慮の欠如、排除的な態度)から、偏見と社会的差別の言葉と行為、具体的な対人暴力行為、意図的で制度的な民族の抹殺であるジェノサイドやテロリズムへと連続していく。「憎悪の連続体」ともいえる。こうした行動を支えるフォビア(不安・恐れ)の意識や態度があることも無視できない。

また、特定の現象が社会病理であるかどうかよりも問題化がすすむ過程に関心をもつ。テロと反テロ、被害と加害の二項的図式での把握よりも、たとえば自爆テロリストになっていく過程の、SNS を使った洗脳的な相互作用を重視する（『家族をテロリストにしないために』白水社、2017 年）。もちろん他にも関係性の病理という視点から検討すべき現象群は多様にある。

2. しかし社会病理学批判がある

ここに例示した社会病理現象は個人の責任にのみ帰すことのできない「社会問題」として把握されるべきである。それらは個人の生活の諸困難をとおして社会や環境がもつ障害性を浮かび上がらせる。社会のもつ障害性の検討が社会病理学の問いとなる。

しかし、社会の障害性（関係性の病み）を糺しうる位置にある社会病理学は別の困難を抱えている。それは何をもって社会病理とするのかという定義の問題である。さらに病理という医学的な言葉を社会現象に応用すること（社会有機体という把握の仕方）の問題もある。具体的な定義の問題とは、たとえば、「離婚は家族解体という点では社会病理である」、「同性愛は社会病理である」等の偏りのある内容が含まれることである。それらは差別や偏見でしかないがかつての社会病理学には存在していた。社会病理の原因に社会解体や家族解体を強調し、社会統制側の視点が前面化しやすいという意味である（山元公平、佐々木嬉代三、高原正興編『社会病理のリアリティ』、2006 年、学文社）。

こうした批判からすれば、何を以て問題や病理と定義するのか、そもそも問題解決とは何なのか、そうした諸前提を問わずに特定の現象を社会病理視はできないということになる。要するに社会病理の定義の恣意性が批判されている。くわえて、何かを定義する際の暗黙知となっている社会的な通念や常識の次元も批判の対象となる。定義が異なれば解決策も異なる。

こうした諸点に無自覚な研究への批判も強い。また、問題解決型の知が前面にでてくると、本来は社会の病理であるのに、現代社会の仕組みのなかでは当該個人の責任を強調することになり、心理化・医療化という治療対象となるだけではないかという批判もある。問題解決型の知は、そこで何かを問題や病理として定義するだけではなく、解決に向かう社会の制度や政策を導き、構築するので、意に沿わない、本来的な問題の解決ではない方法が用いられることもある。確かに問題は解決されるべきだがその解決方法をも強いることになると問題解決の仕方が別の問題をうみだしてしまう。本誌第 29 号で扱った「治療的司法論」はその一つの典型的分野である。

3. 烙印理論（ラベリング論）の登場で変貌する

社会病理学批判の典型は「烙印理論（ラベリング論）」である。これは関係を反転させた立論となっている。特定の行為を病理だと定義するのではなく、それを逸脱行為であると定義することが優先しており、それは社会のもつ烙印付与作用となっているという。その烙印こそが病理を構築すると考えるのである。ある特定の行為を逸脱、その行為者を逸脱者と判定する過程には、烙印付与（ラベリング行為）が先行している。あらかじめ規定された社会規範に背く行為に逸脱の烙印が付与される。病気のように明確な対象の確定が困難な関係性に関する事例が多い主題にかかわっては重要な概念である（ハワード・ベッカー著『アウトサイダーズーラベリング理論とはなにか（新装版）』、1993 年、新泉社）。

一例として不登校現象を考えてみる。学校に行かない／行けない子どもが増えたかどうかという

前に、その定義が変更されている。年間 50 日以上の欠席を不登校としていたのが、30 日以上になったこと、祝日が増えたこと、学校週 5 日制となり、年間欠席率算出の母数が減少したことも勘案しなければならない。同じ学校に行かない／行けない現象でも、長欠不就学、学校恐怖症、登校拒否、そして不登校へと言葉が変化したことも定義の変化である。最近では、同じ不登校でも、怠学型、非行型、ひきこもり型等と類型化されている。社会が何をもって逸脱行動を定義し、問題行動とするのかは歴史的に変化する。

さらに不登校の解は「再登校」だけではないともいえる幅が思考の幅が欲しいところだ。

この烙印理論はインパクトを与えた。それは逸脱行動をとおして意味構成している人びとの様態、それをささえている認知や思考、それを導く暗黙の理論、烙印の効果としての逸脱行為、逸脱行動は社会の反応への行動化であること、他者たちの反応それ自体が社会病理の構築となること等を指摘したからである。何かが問題とされてく過程やそこで作用している関係性の力動を対象にした。社会病理学は、烙印それ自体を把握し、問題の定義や構築の過程も視野に入れ、そうした現実を生きる人びとの生を記述することに徹して社会の様態を描くようになっていった。

4. 烙印理論は問題解決にも影響を与えた –政策・制度へのインパクト

烙印理論を中心とした社会病理学批判は、社会構築主義への道を開いた。それは社会病理を扱う制度、政策、臨床にも影響を与えていく。逸脱行動は個人差があり、社会問題の様相を呈しつつも個人の側の要因も視野に入れることになる。さらに育ちの経過の家族の要因もある。問題行動や逸脱行動を扱う司法に関わる臨床はこの「社会–中間集団（家族や学校や仲間）–個人・パーソナリティ」の諸相を視野に入れる。多相性において逸脱や問題を把握する。個人に帰責させるとそれは応報的な司法の処罰しか導けない。そこで罰以外の異なる再統合の方策が編み出されてきた。罰以外に司法の領域を拡大するのでコントロールの網の拡張へと堕していくことには留意をしつつも、新しい司法と人間科学の連携が要請されることへの応答をすることになる。心理化された問題解決とは異なる社会性水準を意識するためにそれを臨床社会学として対象化する必要性を主張してきた。

たとえば政策・制度の次元への影響では、ダイヴァージョン政策がある。これは第 29 号で述べた治療的司法の別の言い方である。ダイヴァージョンとは刑罰法令違反者を画一的に処罰するのではなく、懲罰的ではない方法あるいは烙印付与の少ない形態において再社会統合と再犯防止をめざして取り組む刑事政策上の方法である。参加を指示されたプログラムを最後まで完遂すれば、その加害者は刑事司法制度から免れることが可能になる。言葉の意味としては迂回路・回り道を意味することから転じて用いられるようになった。指示されたプログラムの参加が成功しなければ刑事司法制度に再び戻される。70 年代の米国において具体化されたいわゆる「4D 政策」の一つである。それは「非犯罪化　decriminalization」、「脱施設化 deinstitutionalization 」、「ダイヴァージョン diversion」、「適正手続き due process」である。

具体的には、DV 加害者向けプログラム（アメリカではバタラーズプログラムと呼ばれることが多

い)、非行少年の社会内処遇（コミュニティ・トリートメント、community treatment)、薬物、アルコール、ギャンブル依存者への回復プログラム、各種の社会内更生プログラム、社会奉仕命令、虐待親への指導強等がある。アメリカはこれらの逸脱行動を裁く特別な裁判所もつくられている。ドラッグコート、DV コート、メンタルヘルスコート、ベテランズ（復員軍人）コート等である。治療的司法・正義の考えも成立し、プログラム受講は回復のための場への参加をとおして再逸脱行動が防止される。これらプログラムは治療的司法にとって不可欠な治療的共同体やグループワークが不可欠である。残念ながらこうした治療的司法の仕組みは日本では制度化されていない（徳岡秀雄『少年非行政策の社会学－アメリカ少年保護変遷史』、1993 年、東大出版会)。

5. 脱学習の内容と社会性の変容へ

治療的司法で紹介した参加することを推奨されるプログラムやリハビリテーションの多くはここに位置づけられる。別の言い方をすれば、ハームリダクション政策（有害性を縮減していく政策）とも言われていることでもある。対人暴力、性犯罪、薬物やアルコール等の物質依存、病的ギャンブル、盗癖等は逸脱行動として処罰するだけでは問題解決しないので、回復（リカバリー）をめざす脱学習の過程を組織する取り組みである。被害者がいる場合は加害者臨床ともいう。その理念は、暴力についていえば、“Violence is learned. It can be unlearned.”という脱学習論である。このアンラーンという言葉は、学び直し、そぎ落とし、脱習慣等、多義的な意味をもつ。長期に渡り、反復して実践され、快楽を得ることで持続している習慣的行動（ハビット）を変化させることを意味する。病的ギャンブル、薬物、アルコール等のアディクション臨床にも広く関係する。暴力も同じような類の行動として把握することができる。ハラスメント、DV、虐待、性犯罪等の逸脱行動も反復性を持ち、家族的背景のもとで、模倣、学習されてきた経緯や親密な関係性の偏りも加味されて、固着した行動習慣として発現する。再犯や再燃しないためには脱暴力行動の学習が必要になる。

主に認知行動療法、問題解決手法、感情統制法等、学習理論をもとにした援助技法が組み込まれる（中村正「暴力と男性（性)」をめぐる心理教育プログラム－社会臨床的アプローチと心理社会学的な視点－)『現代のエスプリ』第 485 号、至文堂、2007 年)。

諸々の批判をうけた結果、社会病理学という呼称に代え、社会問題研究あるいは臨床社会学としてはどうかとも考えてきた。しかし、社会問題研究では社会構造が前面にでるし、臨床社会学では個別的な事例対応が重点となる。どちらにしても十分ではない。諸個人や人びとの現実から思考し、社会の問題へと架橋したい。社会的行為、意味構成、間主観性、関係性、相互作用等の言葉を用いて、社会と個人の「あいだ」の橋渡しをしてくれるような展開にしたいと考えてきた。逸脱行動に見え隠れする心の習慣を対象としつつもそのように追いやる社会それ事態の問題を視野にいれるということになる。

6. 誰のための研究なのかが問われていること

烙印理論はそれを記述する者の立ち位置を問う。烙印をつくりだすのが研究や調査だからである。研究と記述と調査は定義を確定的なものにする。問題の定義と解決の構成を想定してしまうこと（たとえば不登校は再登校として問題解決がめざされること、薬物使用は「ダメ、ぜったい」として強い意志の形成と断薬がめざされること等)、当事者を無視する援助実践となっていきがちなこと、そしてそれを語るあなたは誰かと問うことの忌避がある。

この点について烙印理論を唱えたハワード・ベッカーは、Whose side are we on ?（「我ら誰の側にたつべきか」）とわざわざ問うたのだ。「研究する私は誰なのか」というこの問い以降、研究の反省・内省も課題となった。

7. パトス論の見地から社会病理学をみてみること

社会病理学批判は、定義の問題、研究する者の立ち位置の問題を浮かびあがらせた。しかしだからその呼称を捨てるという選択ではなく、別様の深掘りができる点もあり、それを吟味しておきたい。社会病理という言い方がひらく別の面である。それは以下のようである。

パトス pathos という言葉がある。パトスはギリシャ語で、欲情、怒り、恐怖、喜び、憎しみ、哀しみ、苦しみ、痛み等の、身体に係留される感情を表現する。人間精神の能動性やエートス、理性と対比した言葉であるパトスは、受動的、感情的、情動的な面を指す言葉である。文字通りの病理学 pathology は、逸脱性 deviation、異常性 abnormality だけではなく、苦しみ、病気などを意味する接頭辞 pathos に伴われて、痛み、生きづらさ、怒り、哀しさ等、つまり苦悩 suffering を表象している。

このパトスは、破壊力をもつ。自己と他者にむかう。苦労や苦悩は自らを傷つける力となる。何かうまくいかないことである考えると他者にむかう怒りとして表現されることがある。親密な関係性や訴求しあう関係性にあってはその感情が受け止めて欲しいという期待とともに相手に向かうことがある。横溢する苦悩の感情となる。

あるいは逆に、他者もまた同じように苦悩するパトスをもつという想像力をとおして関係性が成り立つ。すると相互理解や共感性への回路がひらかれていく。感情は誰かに向かうことが多い。私的なものではない。感情を共有したり交歓したりすると人間関係が高揚する。苦難を理解することは共苦という作業をとおしてつながりが生まれる。怒りにまかせた他者への感情発露は暴力性を帯びる。こうして感情の公共性や共同性がみえてくる。そのために感情を言葉にしていく臨床は意味がある。感情は、自らを傷つけ、他を害する負の力ともなりうる。あるいは自らの苦悩に感受的であれば他者の苦悩にも想像力が作用するともいえる。親密な関係性や訴求しあう関係性では他者との境界が曖昧になりやすい。時にはそれは関係の侵犯ともなる。いずれにしても何らかの関係性のなかでは他者へのコントロールとして機能する。そのコントロールする行動は暴力性を帯びることがある。

まとめておこう。関係をとろうとする社会性は共在のかたちであるが、そこには相互のずれも含

まれ、場合によっては軋みや歪みとなる。関係性に苦悩することが多い。親子、夫婦、男女、師弟などの相互関係は訴求しあう非対称性がある。もちろん男と男や女と女の組み合わせでも非対称性がある。こうした関係は情動的でパトス的な関係性である。感情が主役となる。受動的あること、受苦的であること、痛みがあること、被害があること等にあふれている。受動的な被害感情ばかりではなく、そこから破壊的な加害へ転じる心理も生じる。赤裸々な「人間の脆弱さ」がパトスに表現される。

苦しみや病気をも意味する接頭辞パトス pathos は、人間精神の能動性や理性を意味するエートス ethos と対比され、受動的、感情的、情動的、身体的な側面を表現する、何らかの苦難に伴う感情であるが、それが自らに降りかかる、ままならない、コントロールしにくい事態として感受される。そのパトスは、そこからの解放や治癒のためにもがく人間の力や姿をとらえる。情念による力は人を駆動する。

8. ミクロ（機微）とマクロ（機制）

パトスは問題行動や逸脱行動を駆動する。苦難、苦悩への反応がままならない事態や自己への応答となる場合、被害が加害へと転化していく場合がある。他者の巻き込みである。とくに親密な関係性や訴求しあう関係性はそれが駆動されやすい。高葛藤が生じやすく、容易に暴力性を帯びる。感情的な一体性が想定されているからである。おまけに非対称性という凹凸が絆を強くする。

苦悩と苦難の個別性は高く、関係性の組成によって千差万別となる。これを機微（ミクロ）としてとらえる。さらに非対称性それ事態は社会の構造にも規定される。それを機制（マクロ）として把握する。両者の視点から考えるのがパトスとしてみる社会病理である。社会問題は社会構造に由来する苦難の把握に適しているが、諸個人の差異までは把握しない。パトスは、情念・感情の表出だけでなく、悲哀・苦悩のあらわれを視野にいれる。個人の内奥にも関心をもつので、臨床的である。しかしそれは個人性というよりも関係性をみる。その広がりのなかで問題をおさえる。だからパトスとしての社会病理学の理解と解決に向かう回路を探るために臨床社会学として接合してきた。

こうしてパトスの学としてのパソロジーは人間の悲痛や苦悩を研究することになる。それをとおして人間の本質を考える。苦悩が社会的なものであることを強調するためにパトスの学として社会病理を把握するアプローチは、発想としては有益なアプローチだと考えている。苦悩が社会的であることの学知という意味である。

類似のことは「病める人間の学」としての医学的人間学からパトゾフィー pathosophie としたのは『ゲシュタルトクライス』（みすず書房; 新装版、2017）等の著書により精神医学に新たな地平を拓いたヴィクトーア・フォン・ヴァイツゼカーにもみいだせる。彼のテーマはパトス論である（『パトゾフィー』木村敏訳、2010 年、みすず書房）。パトスを受苦として位置づける。それは「病智学」と訳されることもある。

9. 関係性を対象にすることの意味–「わたし」のなかに社会がみえること

パトスは苦労や苦悩の社会性へとひらかれていくべきである。そうすると共感の前に「共苦の現実」が視野に入る。他者の苦悩への想像力が人びとのつながりをつくる。しかし、苦悩や苦労は怒りの源ともなる。述べたように、親密な関係性や訴求する関係性をとおして対人関係に怒りが発露されることがある。言い換えると被害性と加害性の接近である。

社会問題のなかを生きる諸個人の個別性をとおして社会を語るために、個人としての「わたし」を劈くことがパトス論では大切だろう。その好例を紹介しておきたい。

1）桜の花びら一枚から

「わたし」との関係づけをどういくべきなのか。専門職者の反省・内省に向かうことになる。リフレクションという。対象者の人生（ナラティブや物語）を聴く。その苦悩や苦労を理解する。司法臨床の場合は逸脱や加害となる行動化の過程を聴く。記述のスタイルは小説のような物語記述となることが多い。たとえば石牟礼道子さんの「花の供養に」という文章は、切なくもあるが美しく力があるやりとりだ。その言葉は映像が浮かぶような描写である。水俣と水俣病の世界を描いてきた石牟礼さんは、坂本きよ子さんという水俣病で亡くなった女性のことを書いている。きよ子さんの母親から聞いた言葉をもとにした次のような記述だ。「きよ子は手も足もよじれてきて、手足が縄のようによじれて、わが身を縛っておりましたが、見るのも辛うして。それがあなた、死にました年でしたが、桜の花の散ります頃に。私がちょっと留守をしとりましたら、縁側に転げ出て、縁から落ちて、地面に這うとりましたですよ。たまがって駆け寄りましたら、かなわん指で、桜の花びらば拾おうとしよりましたです。曲がった指で地面ににじりつけて、肘ひじから血ぃ出して、「おかしゃん、はなば」ちゅうて、花びらば指すとですもんね。花もあなた、かわいそうに、地面ににじりつけられて。何の恨みも言わじゃった嫁入り前の娘が、たった一枚の桜の花びらば拾うのが、望みでした。それであなたにお願いですが、文（ふみ）ば、チッソの方々に、書いて下さいませんか。いや、世間の方々に。桜の時期に、花びらば一枚、きよ子のかわりに、拾うてやっては下さいませんでしょうか。花の供養に」と（石牟礼道子「花の文（ふみ）を―寄る辺なき魂の祈り」、『中央公論』2013 年 1 月号、後に 『花びら供養』として単行本になった。2017 年、平凡社）。

石牟礼道子さんはチッソのことを書く。水俣の言葉でその情念を描く。その背後には花びら一枚に託されたひとりひとりの患者のパトスに駆動されているようだ。

２）他者のまなざし

社会学者の見田宗介さんは「まなざしの地獄」という論文でこのことを追求した（最初は 1977 年に雑誌で発表され、その後は単行本になっている。『まなざしの地獄』河出書房新社、2008 年）。「まなざしの地獄」論文とは、1969 年、市民 4 人を射殺した連続射殺犯として、19 歳の少年「N・N」（永山則夫）の事件を扱っている。死刑が宣告され、1997 年に執行された。獄中で手記を書いた（『無知の涙』）。この時代の若者の苦悩の象徴としての

N･N が犯罪へと至る人生の経過をもとにして記されている。N・N は地方で極貧の子供時代を送り、中卒で上京。今は言葉としては無くなった集団就職だ。その手記の表紙には、漢字練習帳の写真が掲載されていた。逮捕されたあとに字を覚えようとして何度も練習をしていた証である。

「N･N にとって都市は､若者の｢安価な労働力」としての面には関心を寄せても、その人が自由への意思や誇りを持って生きようとする人間だという面には関心を寄せない場所でした。また社会には、出身や所属によってその人を差別し排除する構造もありました。｢思う通りに理解されない」ことに N・N は苦しみ、他者のまなざしに沿って自らを変形させていきます。」とも記す。

少年が市民 4 人を射殺した事件に向き合い、｢まなざしの地獄」という文学的な表現で、マクロな統計的背景分析をおこないながら個人の生きた経過を記述している。｢一少年の実存」を当時の社会構造に位置づけている。高い評価を受けた考察である。

朝日新聞が「時代のしるし」欄で見田宗介さんへのインタビューを掲載した。｢社会とは、一人一人の人間たちが野望とか絶望とか愛とか怒りとか孤独とかを持って 1 回限りの生を生きている、その関係の絡まり合い、ひしめき合いであるはずです。切れば血の出る社会学、〈人生の社会学〉を作りたいと願っていた。 1 人の人生に光を当て、その人が生きている社会の構造の中で徹底的に分析する。その最初のサンプルを提示する」のだと。｢切れば血の出る社会学、〈人生の社会学〉を作りたいと願っていた。」(『朝日新聞』、2017 年 3 月 22 日付け）と語っている。N･N の軌跡をとおしてパトスと社会分析（ロゴス）が交差する。

３）複数の声を聴くこととその記述

2015 年のノーベル文学賞は「多声からなる著作はわたしたちの時代の苦悩と勇気の記念碑」であるとしてスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチに授与された。彼女の著作の多くは翻訳されている。最新訳は『セカンドハンドの時代−「赤い国」を生きた人びと−』(松本妙子訳、岩波書店、2016 年)。彼女の聞き書きの発端は「真実はひとつの心、ひとつの頭におさまらないということ。真実はなにか細かく砕かれていて、たくさんあり、世界にちらばっている。それをどうやって集めればよいのか・・」(602 頁) というある評論家との対話からだったと訳者あとがきに記されている。人びとにとってのソビエトの体験が社会主義崩壊後の資本主義社会の現実への批判や諦念や希望とともに語られている。ソビエトは崩壊し、ロシアをはじめとした諸国へと変化したが、街のひとびとの声をひろうとそこにはソビエトが生きていて、古くなった思想、知識、体験をもとに生きている様子がみえてくる。それをセカンドハンド（使い古された時代）としてまとめている。崩壊したからこそ語りに値する、私たちの生活であったと確実にいまだからこそいえることが街の人びとの声が数多く集められている。共産党の元幹部、自死した人の家族、テロの被害者、デモに参加して弾圧された学生に微細な記憶を聞き取っている。そしてその整理の仕方が巧みだ。共産主義とは何であったのかについてのバズセッションを聴いているようだ。

この三つはすべてナラティブである。大きな物語を構成する微細な人びとの声である。哲学的な課題も加味されて生老病死の根源的な問いも必要となり臨床哲学が語られる。文学や音楽という表

現の世界でも傷つきやすさ・脆弱さ（vulnerability）が隆盛し、受苦的な表象作品が芸術作品に散見される（臨床文学とも言える）。学校での教育的援助に加味した臨床教育学も説かれている。さながら連字符的な臨床の学の時代である。

こうした臨床の知そのものの反省、対人援助におけるニーズの社会性を指摘、さらに社会学的知見を用いた臨床実践を行うアプローチを臨床社会学として構想してきた。社会関係の病みや偏り、家族集団のもつ病み等をも射程に入れることができるアプローチである（中村正、「臨床社会学試論－社会病理学との関係において」『立命館産業社会論集』第 41 巻第 1 号、2005 年。検索して PDF で閲覧可能）。

10. ナラティブセラピーでは祝祭的なナラティブという

パトス論をとおして社会病理を位置づける。社会構築主義をとおして社会病理現象を対象化・相対化する。烙印理論をとおして社会病理を異なる視点から眺め直す。個人に帰責しない問題解決の方策を検討し臨床の言葉に落としていく。研究する者の立ち位置を問う。こうした作業をしていくことで社会病理学のゆくえを探りたいと思う。

その手がかりにこのマガジンの関心事項である対人援助におけるテーマと重ねて考えておきたい。伝統的な「援助する側と援助される側の関係」の吟味が浮かびあがる。具体的には、われら誰の側に立つべきかというベッカーの問いにどのように応答するのかという課題である。この課題は、対人援助の諸実践において当事者主義が隆盛していることと無関係ではない。「first person（当事者あるいは第一人称）の視点」の再認識として把握できる。さらに、戦争、公害、薬害、犯罪、各種の社会的隔離や排除（ハンセン氏病患者等）や少数・先住民族抑圧等に巻き込まれた人たちの正当な地位の恢復も同じような文脈にある。さらに、「傷ついた癒し人（wounded healer）」、依存症当事者や慢性疾患患者たちの自称である「専門家した患者（expert patient）」、自助グループでよく語られる「援助者援助論（helper therapy principle）」、回復当事者たちが主導する「治療共同体（therapeutic community）論」、「ピアサポート（peer support）」も対人援助における新しい動向である。ナラティブセラピーはこの傾向に棹をさす。ナラティブセラピーの主導者のマイケル・ホワイトは支配的な物語の書き換えをとおして多様性の掘り起こしとして記している（マイケル・ホワイト『ナラティヴ・プラクティスとエキゾチックな人生－日常生活における多様性の掘り起こし』、金剛出版、2007 年）。

私も男性性ジェンダーと暴力の関連で研究と実践しているが、同じような主旨でまた別の物語を構成したいと考えているからである。男性性研究、ジェンダー研究の見地から男性の脱暴力の現場をつくりながらもう一つの声、暴力へと至る声を聴いている。ジェンダーとしてはマジョリティの側にある者の、暴力への自覚と責任をどう構成していくのか、その制度と臨床はどうあるべきなのかについての思案のためにである。そうするとわたしの内なる声と重なることが多い男性の経験にであう。社会の主流である支配的なジェンダー規範に埋没している男性性のもつ「社会問題・以前」の立ち居振る舞い方、感情表出、さらに対人関係

性の次元からあぶり出していく作業として、その重なりの自覚は大切だと考えている。

社会病理学のゆくえは単にその呼称をどうするのかということではなく思考を深く掘り下げるためにも重要な問いだと考えている。

なかむら　ただし

（社会病理学、臨床社会学、社会臨床論）

ケアマネの、システム視考

～専門職の質の向上？　研修に効果はあるの？！～

北海道で働くケアマネジャー

木村　晃子

質の向上に、研修って効果あるのか？

ケアマネジャーという資格は、更新制度になっていて、数年ごとに更新のための研修を受けなくてはならない。ケアマネジャーの資格の更新もあれば、主任ケアマネジャーの資格の更新もある。後者、つまり主任ケアマネジャーの更新研修を受ければ、ケアマネジャーの資格も更新されるため、両方を受講する必要はない。

これまで、何度かこの「更新」のために研修を受講してきた身である。忙しい業務の中で、3 日程度から 5 日間程度の研修を受講する。その効果はあるのか、ということに関しては、甚だ疑問だ。なぜなら、研修で習うことは既に承知済みのことも多々ある。「改めて復習の機会として・・・」などと謙虚な気持ちになっていても、時間が無駄と感じることは否めない。

一方で、この研修を提供（講師として担当）する立場にもある。自分は、研修の効果が発揮できるような研修の仕立てができているのか、と言うと、それも自信がない。様々な経歴の、或いは年齢の対象者に、単に「ケアマネジャー有資格者」という共通項だけもって研修を提供するには、相当の工夫がいる。受講生は毎年変わる。提供者としては、毎回悩ましく担当している。どうすれば、実践の役にたつのだろう、と日々考えている。

専門職の「質の向上」などというのは良く聞くフレーズではあるけれど、質の向上など研修でできるのか、ということには否定的な見解だ。所詮、質の向上が期待できるのは、質の向上をしたいと思う、実践者自身の心のありよう、姿勢に他ならない。だとすれば、「質を向上したい。」という気持ちを引き出すことができたら、少しは研修効果があるのではないかと思う。

人はだれしも、できないことをやり続けることは難しい。例えば、3 段の跳び箱が飛べない時に、5 段や１０段の跳び箱を飛びたいと思うだろうか。3 段が飛べて、ようやく 5 段に挑戦しようと思うのではないだろうか。苦労してようやく 3 段が飛べた人は、もしかしたら

もう疲れ切って、5段なんて飛びたいと思わないかもしれない。ある程度の余力を残して、3段が飛べるように、コツを身に着ければ、5段へ挑戦したくなるのではないか。

少し頑張ればすぐにできるけれど、上を目指すとすれば、練習が必要。練習が楽しければ、ちょっと上を目指すこともできる。こんな良循環を起こせる内容の研修になれば良いのだろう。これは、研修だけでなく、日々の実践現場での後進育成にも共通することだと思われる。されど、言うのは簡単。行うのは困難。

私たちは、日々忙しい。私たち（ケアマネジャー）の業界では求められる書類作成の数が半端ない。記録、記録、記録・・・訪問に行ったという記録。訪問の内容の記録。訪問に行き、訪問の内容の記録を完了したというチェックシートの記入・・・など、ある事柄を包装紙で包み、それをまた袋にいれ、鞄にいれ、という具合に、記録の数々になる。ケースファイルはすぐに分厚くなる。いつの時代から、こんなにも書類が増えたのだろう。求められている業務と、勤務時間はアンバランスだ。時間内に仕事のノルマは完了しない。これでは、疲ればかりが残ってしまう。

記録はなんのため、誰のためのものだろう。その根本を考えると、書類作成が私たちの主要業務とはならないことは当然なのだが、理解得難いのも事実だ。

本末転倒にならないように、実践力と、実践したことを証明する記録力。両方が必要になってくるのだろう。そのためには、やはり、労働条件や労働環境も重要だ。結局のところ、研修だけで、質の向上には寄与できないのだろう。これぞ、システム！

疲弊しないで、長く続けば、ちょっとは役に立てる時が来る、はず・・・。少々疲れ気味のケアマネジャー。今回は、ここまで。

カウンセリングのお作法第十三回

『聴く』のなかみ

ＣＯＮ(こん)カウンセリンオフィス中島　中島(みずとり)弘美

個別カウンセリングにおいて、大切なことは何ですかと問われたら、話をしっかり『聴く』ことと返答するでしょう。

対人支援の基本姿勢のひとつです。

『聴く』態度は、日常会話でのやりとりと異なり、さまざまな注意点があります。理解はできても身につけるまでに時間がかかるため、繰り返しトレーニングをする必要があります。

カウンセリングのお作法第二回(対人援助学マガジン２０号)に「聞く聴く訊く」を記しました。今回は、さらに『聴く』のなかみについて話します。

人に話しかけたとき、声が届かなくて、残念な思いをしたことはありませんか。

聴くという行為は、聴き手が話し手に対して適切な態度を反応するという意味が含まれているため、返事がない＝理解されていないと感じると、それ以上話せなくなります。もちろん二者間の信頼関係は築けません。聴き手の態度は話し手に大きく影響をします。

ここからは、『聴く』を考えるとき、その反対の「聴いていない状態」を明確にしてみましょう。そうすることで、『聴く』の輪郭がよりわかりやすくなります。

無視

支援を必要としている人の話を聴かない態度は、まず無視をすることがあげられます。うっかり、話をきき逃すと、話を聴いていないのと同じことになります。うなずかないことも同様です。無反応な態度にならないように、集中して話を聴きましょう。

説教

話の内容に対して、聴き手が、あなたの行動に問題があるので、改善しなさいと一方的に意見をいうことです。これも避けるべきです。

本人のためを思って伝えた内容だとしても、そのメッセージが攻撃的であると感じると、クライエントは萎縮して、話し続けられなくなります。詳しく話を聴かないうちに、決めつけて意見をいうのもクライエントにとって負担に感じます。

聴き手が避けるべき態度

無視

「話を聴いてよ～聴いてくれないの～もう話せない」

説教

「朝、起きられない、、、」

「夜中までスマホをさわっているからそんなことになるんだ！

生活習慣を見直す必要がある！」

「聴く」のなかみ
なんで・わかるわ・がんばれ　は控える

それでは、『聴く』聴かない行動について、例をあげて考えてみましょう。

「朝、なかなか起きられなくて困っています」とクライエントさんが話しました。聴き手のあなたはどうしますか？

初学者がやりがちな反応一　なんで

カウンセリングを初めて学ぶ人がやりがちな対応に
「なんで、起きられないのですか？」
と、理由を尋ねることがあります。
事情をくわしく尋ねたい気持ちはわかりますが、このことばは、話し手を追いつめることになりかねません。クライエントさんが話し始めた直後に、なんでとか、どうしてとかの言葉かけをすると、話が続かなくなります。

初学者がやりがちな反応二　わかるわ

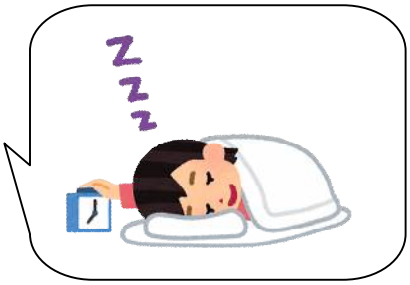
同じく、よくやってしまいがちな対応をあげてみます。
「わかるわぁ～私も朝、起きられないのです」という反応です。
安心させるつもりで言ったことばが、クライエントにとって違和感があることが多いです。聴き手の経験をききたいわけではありません。
友だち同士のおしゃべりなら、そうね～わかるわ、私もよ、というのが自然な流れかもしれませんが、安易にクライエントさんの話をわかるわ～という表現は、すべて理解しているかのように映ります。クライエントさんを理解するのは短時間では難しいことが多いです。この言葉は、控えましょう。そして、聴き手自身の経験話も持ち出しません。

初学者がやりがちな反応三　がんばれ

「そんなことといわないで、がんばって起きてよ、きっとできるよ！」
がんばれの連呼です。応援することばもついつい言ってしまいがちです。行き詰っている状態にあるクライエントさんを安易に励まさないこと、ここにも気をつける必要があります。
聴き手は何かの言葉を返したくなりますが、徹底して頷いて聴くことが求められます。

聴き手の態度

「朝、起きられ



聴き手は、うなずきながら「朝、起きられないのですね」

と言って待つと、クライエントは、続けて話しやすくなります

CON子さん　心理カウンセラー

クライエントさんに関心を持って話を聴いていると

リアクションが　はひふへほ　になっていることがあります

「はぁ～　ひぇ～　ふ～ん　へぇ～　ほ～」

「聴く」のなかみ

関心をもってうなずき、つぎの言葉を待つ姿勢

クライエントさんの話し始めは、朝起きられないことを話しておられるけれど、それは一部かもしれません。

何を伝えようとしているのか、何を理解してもらいたいと思って話しているのか?その背景を想像しながら、耳を傾けます。

実際には、

「朝、起きられないのですね」

と、うなずいて応じ、次にクライエントさんが話しやすいように待ちます。間があると、クライエントさんが話したいと思っていることをさらに言葉にされます。

ゆっくりと待っていても、どうしても、言葉が出てこない様子であれば、

「もう少し詳しく聴かせていただけますか」

とか、

「たとえば、どんな様子なのですか」

とさらに話していただけるように、ことばを添えます。

つまり、どんなことをお話しいただいてもいいですよ、くわしく聴かせてくださいという態度を示しながら、待ちます。

とくに、初回面接では『聴く』ことに徹します。はじめて、出会った人に思いのたけ全てを話すことはとにかくエネルギーが要ります。流れるように話す人は少なく、なかなか整理して話すことはむずかしいです。

ただただしく言葉を口にされ、もしかしたら、まとまりのない混乱している状態での話かもしれないので、理解を深めようとしながら、耳を傾けます。

トレーニング

聴くことの大切さを理解するためのトレーニングがあります。それは、自分自身がクライエント役を体験することです。すると、いかに相手の人に理解してもらうことが難しいのかがわかります。さらに、相手の聴く態度によって、話し手がさまざまな感情をいだくことも実感できます。

なかでもお勧めは、聴いてもらえない実感を体験することです。次頁に示しました。

聴いてもらえない体験をすると、聴くときに何が大切なのかがわかるトレーニングです。

演習　人の話を聴く/聴かないカウンセラー役とクライエント体験

三人組になりましょう

1	役割を決める	A さん→クライエント役　B さん→カウンセラー役 C さん→観察者(二人の様子をよくみる)役
2	テーマ	Aさんの話す内容　例「この一週間のできごと」など話しやすい内容 Bさん　人の話を聴かないカウンセラーを演じる
3	時　間 3 分間	AさんとBさんがカウンセリング　Cさんはその様子を時間まで黙って観察　Ⓐ→　←Ⓑ Ⓒ
4	ふりかえり 5 分間	三人で感想を話しましょう　観察者役も交えて ●話を聴いてもらえない体験をしてクライエント役はどう感じたか
5	くり返し	役割を交代して、すべての役を体験し、ふりかえる
6	まとめ	1 から 5 のあと、話を聴かない態度について　全員で話し合いをする →話を聴くときに何が大切かについて意見交換をする
☆	応用	2しっかり話を聴くカウンセラー役をする 3 以下同様

難病の
訪問カウンセリング（１）

藤　信子

保健所の難病（主として神経難病）の訪問カウンセリングに携わって 20 年になる。20 年を数えていたわけではなく、先日記録を見ていてわかった。始まりは A 保健所の難病チームから、難病の在宅患者に「疾病受容」に関して、カウンセラーとして関わって欲しいという依頼からだった。療養生活の相談にのる保健師が、疾病受容が進まない患者と会い、関係の作りににくさに苦労していることはわかったが、疾病受容とは難しい問題だと思った。単に心理的にそのプロセスが進むものではないように感じていた。私は精神科病院に勤務し、心理療法をしていた経験から、家族や周りの人から病気であることを受容される体験、そして生活の安定があってこそ疾病受容ができるのではないか、と思っていた。学生時代に「精神分裂病（現在の統合失調症）の患者さんは病識が無い」ということを聞いていたが、その後精神科に勤務して、患者さ

んの話を聞いていると、少し違うなという感じになった。頑固に自分は病気ではない、入院する必要が無いという人は、「自分が入院して仕事をできなくなったら、家族はたちまち暮らしていけない」と心配していた。それを聞くとそれでは病気だと認めにくいだろうと思った。一方、ソーシャルワーカーに資産の整理を手伝ってもらい、親と自分の生活のめどがついた人は、ほっとした様子で人混みの中で聞こえてきた声（多分幻聴）のことなどを話して、入院することにした。そういう経験から私は、病気の治療法がいまのところ見つからない難病の患者さんが疾病を受容することは、統合失調症より難しいかもしれないという感じを持った。ただ、それは感じなのでともかく、難病チームの保健師さんの熱心さに押されて、訪問カウンセリングを引き受けた。

「疾病受容」について考えていた時に探し当てたのが、南雲（2002）の「社会受容」の考え方であった。南雲はリハビリテーション心理学の立場から、障害受容には「自己受容」と「社会受容」がある、しかしこれまではもっぱら患者（障がい者）の「自己受容」のみが扱われてきたと述べている。そして社会が障害者をこころから受け入れる「社会受容」の重要性を説いている。この社会受容にはもちろん、自己決定、社会参加、バリアフリーなどを含む体制の問題が挙げられている。ここではリハビリテーションの場面であるため「障害受容」が述べられていて、難病の「疾病受容」とは違う点はあるだろう。難病の場合は、今のところ病気が治るという見通しはない。でも社会（周りの人）がまず疾病を受け入れることは、精神病の時にも感じていたように、やはり大事な点だと思い、「社会受容」を鍵として、難病の患者さんと家族の療養生活を一緒に考えることとした。

「社会受容」という概念をどのように具体的に見ることが出来るかと考えた時に、社会が障がいや疾病を受け入れるためには、まず「ケアする人たちのネットワークによる受容」を考えた。今まで聞いたことも無いような病気になり、身体面での機能障害が生じ、活動が制限され、これからの生活への不安が起き、うつ的になりがちで、また病気だということが信じられない否認、そして「なぜ私がこんな病気に・・」という怒りなど様々な思いがあると考えられる場合、患者・家族をネットワークで受け止めるという考え方をしようと思った。これが具体的な「社会受容」の一歩だろうと考えた。

患者のお宅を訪問し、療養生活について話を聞きながら、患者、家族のソーシャル・サポートについてアセスメントし、その利用を勧めることを、大事なポイントにした。ソーシャル・サポートは、ストレッサーの働きを和らげたり、ストレッサーに対して緩衝的な役割を果たす。日常的サービスや経済的問題も含む課題解決を手伝う手段的な道具的サポ

ートと、相手の感情に働きかけ、心理的な不快感を和らげる情緒的サポート等がある。ソーシャル・サポートの負の面もあるという近年の研究もあるが、大きく見てこの方向は、話す患者・家族に何が必要かをチームで考える時に有用だった。

ソーシャル・サポートの導入について話す中で、「疾病受容」の具体的な面が見えてきた。家の階段に手すりをつけることを、見た目が良くないと嫌がられることについて、よく聞くと、家族がなかなか病気を理解しないことへの不安を抱えていた人がいた。筋委縮性側索硬化症（ALS）の場合、病状の進行が早い人が多いので、ケアする側は、もし呼吸の麻痺が生じてきた時は、呼吸器を装着するかどうか、患者・家族の意思決定ができているか心配することになる。これはケアする側の気持ちとしては、患者・家族の意見が分かれていると、病院で呼吸器をつけられて、患者から「こんなはずじゃなかった」と嘆かれることが時々あるためである。そのため早く患者・家族の意思決定をして欲しいという思いがある。ただ、これは患者・家族の気持とは別のことである。

神経難病の場合、車いす、コミュニケーションツール、胃婁、呼吸器などいくつもの介護機器を導入する機会がある。訪問し話を聞いたり、家族へのインタヴューを行なった（石川・藤　2010）中で、介護機器を導入することは、身体的には楽になっても、病気の進行を認めなければならない辛さがある、ということもわかってきた。そういう意味では、疾病受容は１度「自己受容」すると、それで終わりではない、意思決定のたびにいろんな思いが生じ、病気を受け止めなければならないことになると考えられる。

文献

石川　順子・藤　信子（2010）ALS 患者家族へのソーシャルサポート：ALS 介護の特徴とソーシャルサポートの受け止め方．立命館大学人間科学研究第 20 号．41－52.

南雲　直二（2002）社会受容〔障害受容の本質〕．荘道社.

蟷螂の斧

次の一歩

社会システムを変える

番外編

団　士郎

連載三回目の人間コミュニケーション論を期待している人を裏切ってしまう。私にとって立命館大学大学院、在職最終年度の後期セメスターが始まったら、進行中のそれを書くモチベーションが下がってしまった。今年は今年でまた何かあるだろう。一期一会の積み重ねの結果が１５回の授業後に起こるだろう。その意味を文章で決めつけることはない。今年のライヴは今年のものとして、期待して、眺めておこう。そんな気分なので、ここにはまた気まぐれに書きたいことを書く。

ふと、ＰＣ、ワープロを導入して、データが残っている日誌の一番古いのはいつだろう？と思った。こんなことを考えるのは、いつもの私のあり方だし、加えて加齢要因もあるに違いない。でも、ワープロもＰＣもない時代ではなく、それらが登場し始めた時期の記録は、今とは違ったそれなりの何かがあるかもしれない。道具（キーボード）によってもたらされたかどうかは分からないが、生じているはずの変化と、不変化を振り返ってみようと思う。

あの頃、ワープロのフロッピーディスクにあったものを、業者に無理を言って変換してもらった。これにははエプソン k.k.の窓口担当と一悶着あった。当初、問い合わせに対して、データを他社機種やＰＣで読めるよう変換することは出来ないと言った。私は「そんな馬鹿なモノを販売しているのか！」と強く批判した。するとＰＣのソフトに、データ変換できるものがあるが，それは我が社の業務サービスにも仕事にもないといった。すったもんだの末だったが、エプソンの担当者が個人的に持っている変換ソフトで、私のフロッピーディスク数十枚を、ＰＣで読み込み可能なデータに変換してもらった。

それを９８NOTE というＰＣハードディスクに読み込んだ。それを更に外付けハードディスクや USB に落としておいたから、結果的に現存するデータが存在することになった。フロッピーのままのたくさんの記録は、読み込み機材のないまま山ほど捨てた記憶がある。

EPSON　WORDBANK から始まったハードの変遷は数え切れない。機械には詳しくないが、見つかった最古の日誌データは１９８６年１１月。３１年前、私は３９歳で京都府中央児童相談所・心理判定員(主任)だった。

二人の息子達がちょうど今、そんな年齢だ。自分の三十代なんてもう、想像もできない大昔の日々のようにも思えるが、その日誌をひもといて、何か書いてみることにする。

1986/11/6

沢木耕太郎「Switch」連載〔246〕を読んでたら、またまた日記が書いてみたくなった。日記といっても、読んでいる本や見たビデオ、芝居、映画、そのほか自分のまわりの気がかりな事を書きたいように書くというけのことだが。

この雑誌「Switch」は１９８５年に創刊され、今も健在で、スイッチパブリッシングから刊行されている。当時は扶桑社から出ていたんじゃなかったかと思う。３２年前、創刊一年程の新井敏記編集長は、私もそうだったように、沢木耕太郎ファンの若者だった。

ここで連載されていた長文の日誌は後に「２４６」のタイトルで大判単行本として同社から刊行された。この時点で、一ファンだった私と沢木さんに関わり合いはない。

古くからの友人・桂南光さんがきっかけでお目にかかることになり、ある夜の宝塚での食事会のことが、連載「２４６」に登場した。

残念ながら単行本になる時、その日の日記は外れたので、バックナンバーの号にだけ、「関西人は公務員でも面白い」という記述で登場した。そしてささやかに面識が生まれ、当時楽しんで発行していたミニコミＤＡＮ通信を送り続けた。今のツイッター、facebook のようなことを郵送で行っていた。

その後、氏のお嬢さんＲちゃんのことで少し関わりができた。おそらくその結果として、「家族の練習問題　第一巻」刊行時に、コラムを書いてもらえたのだと思う。

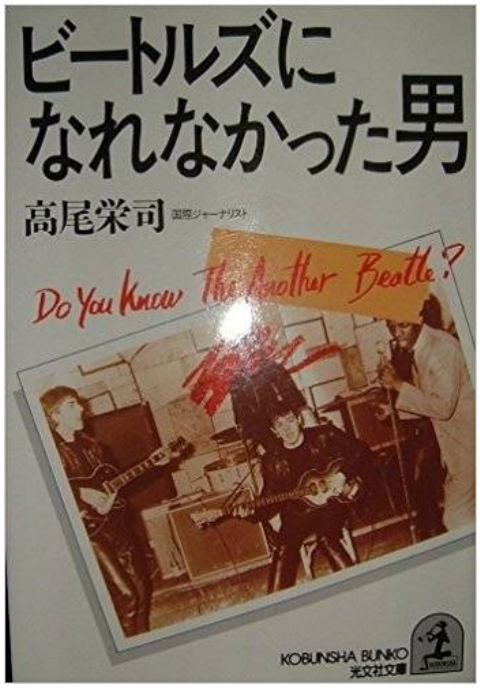
当時、東京の編集者の間では、どうやったら沢木さんから原稿がもらえるのか！と話題だったそうだ。更に第一巻には、大林宣彦監督からのコラムも掲載されている。

この二本が、第２巻以降の刊行に際して、多彩な方々からコラムをいただけるようになるのに大いに貢献しただろう。

「深夜特急」の読者から始まった沢木耕太郎世界との交流はその後も、様々な出来事として、私の暮らしの中に結実してゆくことになった。

1986/11/6 （の続き）

今読んでいる本は「ビートルズになれなかった男」高尾栄治　朝日新聞社刊。（写真は文庫版）**ビートルズにそんなに思い入れがあったわけでも、ことさらにファンであったわけでもないが、やはり僕の時代のハイスクール・ライフは♪プリーズ・プリーズ・ミー♪がBGMだろう。**



自分をビートルズの申し子のように語る人が、私と私の下世代には多い。でも、我が思春期のポップスを振り返って見ると、そんなことはない。

E.プレスリーの後の、ニール・セダカ、クリ

フ・リチャード、ハリー・ベラフォンテ、キングストン・トリオ、コニー・フランシス、フォー　シーズンズ、ヘレン・シャピロ、PPM 等、たくさんのアメリカンポップス世代。

ビートルズがそこに彗星のごとく現れた、という書き方はいかにも慣用句だが、たしかに当時、アニマルズ「朝日の当たる家」とか、CCR、ビージーズ等のグループも次々ヒットを飛ばしていた。

そんな中に「プリーズ　プリーズ　ミー」と「抱きしめたい」のドーナツ盤が現れた。そして洋版ポピュラー音楽全般もますます花盛りになっていった。私は今も、音楽が分かっている人間ではないので、結局この時代にもビートルズを見つけることは出来なかった。

昔の中之島フェスティバルホールには、ボビー・ライデル、オリビア・ニュートン・ジョン、ドゥービー・ブラザーズ、ロバータ・フラック、それからガラガラの京都会館でシャ・ナ・ナやビリーボーン楽団なんかを聴きに行っていた。

この本の主人公はピート・ベストという。ビートルズがリバプールから世界にはばたいてゆく直前まで、実質的にリーダーだった男の話である。ビートルズのドラムといったらリンゴ・スターなのだけれども、ハンブルグとリバプールのライブハウスで演奏をして人気のあったビートルズのドラマー、ピート・ベストはどうしてメンバーからはずれたのか。

ビートルズの成功が並のものではなかっただけに、その周辺にいて幸運を掴んだ者と、タッチの差で何も残らなかった者の間には、様々なドラマがあったに違いないというのが、著者の狙いである。何度もイギリスに足をはこんで、会える限り当時の関係者に出会って書かれたこの本はとても面白かった。

しかし一方で、通り過ぎてゆく者と、そこに留まった者との間のドロドロした確執は、成功の大きさに比例して凄まじいものであるなーと恐い気がした。

ピート・ベストはビートルズに関して一切批判や中傷をしていない。そそのかす音楽ジャーナリストをひたすら避けて20年を過ごしたという。負けてなるものかと別のバンドを結成して活動していたこともある。しかし余りにもビートルズの成功は大きく、その落差はいつも彼を脅かし続けた。死をも考え実行もした彼が今、リバプール市役所に勤めながら、日本から何度も足を運ぶ著者に口を開いている。

誰が幸せを手にいれたのか、誰が幸運をつかみ損ねたのか、幸運の女神は誰の頭上にいたのか、それはなんとも言えるものではない。ピートの母親は「あの子は本当に男らしい強い子だと思う」と言っている。

事実などというものは人間の数だけあるもんだとは分かっていても、やはり人はいろいろな事を言われながら生きてゆかねばならないものだ。辛いものだなーと思った次第である。

図書館で借りて読んだ本だがよく覚えている。いや、この日誌を書いて、それを読み返したせいで、記憶にとどまったのかもしれない。いずれにしても、思い出深い一冊である。

その後、この主旨でＴＶドキュメンタリーがたくさん作られた。ビートルズはとにかく偉大だった。でも、格別にファンだったとは言えない私は、ＬＰは［ＨＥＬＰ］一枚、あとドーナツ盤数枚を持っていただけだ。このＬＰは、現在、京都駅南口のイオンモールになっているあたりにあった松下電器の工場倉庫で一日、ニクロム線コイルを運び続けて手にした日当 2000 円で帰路のレコード店で買った。

ビートルズが我が青春だったなどと、後年になって語る事になる人達をうさんくさい目で見ていた屈折した聴き手だった。

今に至るビートルズの名曲を素直に聴け

るようになって、ＣＤ化されたものを購入したのはずっと後だった。

1986/11/7

昨日の夜中、せっせと今月末、東京で開催される児童相談所問題研究セミナーでレポートする「家族療法」のレジュメをワープロで叩いていた。不用な部分を消去するためのキーを押していたところ、突然わけの分からない模様の画面になった。そしてどのキーを押しても全くコントロールがきかなくなった。

故障だ。困るのである、絶対に今は困るのである。今夜から、明日の宿直勤務（児童相談所には一時保護機能があって、その時には交替の夜勤がある）の夜中、そして週末と、日曜日までギッシリと予定が組んである。それぞれ締め切りのある文章だから、ワープロが修理から戻ってくるのを待っているわけにはいかないのだ。焦った。

誰かに借りようかと思っても、友人、知人にEPSON WORD BANK 五十音配列キーボード等を使っている者はいない。今年の初めにフロッピー内蔵を売りに新発売された機種だが、毎日新製品が出るワープロ業界だから、安くなっているようならもう一台職場に置いておけば便利だし・・などとも考えた。

しかし定価138000円もするもの、とにかく何とか考えなくてはと朝を迎えた。

当時の事情を振り返って見ると、ワープロ全盛期の直前である。安価なものは二、三行表示の液晶画面が普通。記憶媒体としてフロッピーディスクが登場したのは、驚愕の記録保存媒体だった。それまで紙とし保存するものだった個人の記録が、データで残せる。当然後から加筆修正も編集もできる。

原稿を４００字詰め用紙に書いて、清書のために一から書き写すのが通常だった時代からの大転換だった。

それに、５０音入力のキーボードなんて当時でも化石だ。カナ入力ですらない。アイウエオ順にキーが並んだものだ。

ワープロを使い出してから、確実に文章を書く量が増えた。もともと書く事は好きだったが、清書するのが大嫌いで、そのうえ清書する尻から、直したくなってしまい、結局はその労力にウンザリして挫折するのがパターンだった。フロッピー内蔵の機種を選んだのはその革命的展開が理由だった。とにかく文章にして、それから何度でも編集や校正をすればいいのである。

だから、だからである。ワープロが壊れてしまったら文章を書く気がしないのである。職場でその話をしたら、同僚の早樫君がいくつかの店をあたってみてくれたが、なにしろ古い機種！なものでどこにもない。（今年の１月に新発売を買ったんだぞ）しかもフロッピーにこれまでいれた文書は、他機種では読み込む事はできないという。

「そんな馬鹿な」と機械に弱い私は憤慨するが、このエネルギーはなにももたらさない。ともかくなんとかしなくてはならないので、まず壊れたワープロを修理にだし、それから寺町の家電街に行った。

一軒目の大きな店で「ここには置いてませんけど、系列店に現品限りで1台おいてましたから、行ってみてください」という。急いでその店にゆくと「あ～昨日メーカーに返してしまいました」とのこと。4～5日で取り寄せますけど」と言ってくれる。販売価格は59800円だという。半額以下だ。しかし今直ぐ要るのである。4～5日は待てない。

仕方なしに店を出て、近くのワープロ・パソコンショップに入った。すぐ左手の棚に現品限り、特価品と書かれた古いワープロ機種が並んでいた。

そこになんとWORD BANKがあるではないか。この機種は全く同じ商品がSEIKOからcom-mediaという名前でも発売されていて、それもある。しかもなんということだろう、特価24800円!今年1月に138000円

で生協で、24回の分割払いで購入した僕は、まだ半分も払っていない。これはあんまりではないかと思ったが、ここはもう買うしかない。

そこで私は店員にこう言った。「この値段はアダプターついてるの？」（アダプターは別売りで5000円、前にはそれで買っている）「いやーそれは別です」、「こんな古いワープロ誰が買うの、僕はこの機種もってて、フロッピーがあるから要るんやけど・・、アダプターもつけてーな」、「ちょっと聞いてきます」と店員は奥に入った。更に店頭に並んでいた商品でしょうとかいろいろ言っていると、アダプターを付けて、インクリボンももう一本余分にサービスしますということで話がまとまった。

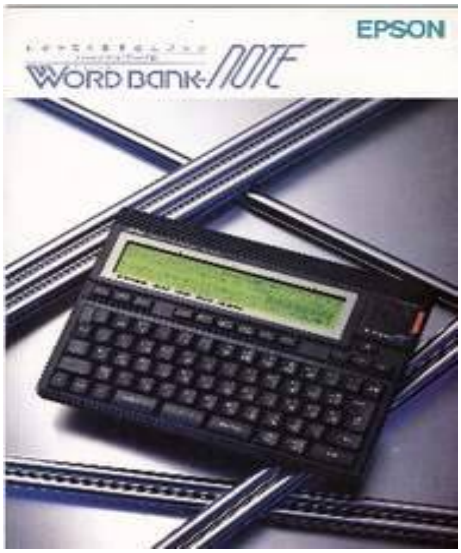
そこで倉庫にパッケージを取りにいったところ、現品ではなく、箱入りの新品が一台だけあるという。「それのほうが良いよ、それにして」と厚かましくも訳の分からないことを言って二台目を手に入れ、とにかくめでたく必要な文章を仕上げたというわけだ。

１月に１３８０００円で買ったものが、１１月には２４８００円で売っていた。何という進化。毎月のように各メーカーから発売されるワープロに進歩、進化があったのだ。当時の同僚高橋君は、ＦＵＪＩＴＳＵ親指シフトキーボードの合理性を熱く語っていた。

この大波の後に、パソコンの個人所有時代がやってくる。私にとっては、ワープロからＰＣへの移行は、保存データ問題だけではなく、しばらく使い慣れた５０音順入力から、アルファベット仮名入力への移行という、身についたシステムのリセットという負担を伴うものだった。

javascript: void(0)

＊　ここに書いたワープロは持ち運べるサイズではなかったが、同じ Epson の WordBank note も持っていて、鞄にいつも入れていた。



1986/12/3

１１月２３日に児童相談所問題研究セミナー（東京大会）で家族療法の報告をした。そこでフロアーからの「親の会会長」の発言を聞いて、色々な事を思った。

家族療法はひとつの技術にすぎない。それ以上でも以下でもないところの方法である。「登校拒否は情緒障害なのか？」という問いかけはレベルの違った別の議論である。そういう提起は、今考えているステージには同時に並び立たないものである。人によって事態の受けとめは様々であり、いちがいに本人の性格の問題であるとか、学校の問題だなどと決め込むのは信念であって、現象の事実側面について語っていることにはならない。

学校に行かなくてもいいじゃないかと議論したり、考えたりできる場と人を身近に持てる人にとっては、それは大きな人生におけるチャンスになろう。

しかしただ閉じ篭もって為すすべもなく流されている者に、そんな理屈は一段上の自由論争に見えるだろう。

私としてはむしろ、子供が登校拒否を始めたことによって、学校へ行かせよう、行かせようではなく、学校がおかしいのではないかと疑問を持ちだすプロセスを

体験する家族に関心がある。

問題であるとか、ないとかではなく、選択できる現状把握の、そちらの側に立つ人にとっての家族生活、力動に関心がある。

人はだれもなんの特徴も持たないで平均に生きていたりするものではない。具体的症状（現象）を持つ小集団が、信念に近い意見と立場をもってガンバルというそのエネルギーに関心があるのだ。

私自身はよくも悪くも、そんな大上段にかまえて今の社会システムに問題提起をして頑張ろうなんて気持ちはない。多くの人達がおおむね良好と考え提示している社会（私は気に入っているわけではない）の中で、個人はどのくらい自分自身で暮らしていけるかということに関心が強い。自分の家族に関してもそうである。

ただこのくらいのプレッシャーはこれまでも、これからも、社会を構成して人間が生き続けてゆく限り無くなることはない。この程度のことが乗り越えるにせよ、諦めて降りるにせよ、自分の才覚で対応できなくってどうするんだと思っている。

これが書かれるに至ったきっかけの出来事を、はっきり記憶している訳ではない。おぼろげな記憶だが、類推してみる。

会場に当事者（不登校児の親の会関係者）が参加していた。私はこの時、不登校ケースに関することを取上げながら、児童相談所における家族療法のことを発表していた。

それについてのフロアーからの質問という形で、「登校拒否は情緒障害なのか？」という発言があった。

私の記憶の中に、「情緒障害」という単語が、専門用語として落ち着いたことはない。単語として存在し続けるのは、「情緒障害児短期治療施設」と呼ばれる施設があったことによる。

仕事を始めて直ぐの頃、京都市には青葉寮という情短（情緒障害児短期治療施設）があった。全国にまだ 10 数カ所の時代だ。だが私の属していた京都府に，同種の施設はなく、是非とも必要だと余り深く考えずに思っていた。そしてその前提で、「情緒障害」についても、思い込んで発言していた時期があった。

しかし、「情緒障害」という言葉が、いわゆる専門用語ではなく、行政の中で使われているだけのカテゴリーであったこと。そして情緒障害が短期に治るのか？という疑問や、そもそも情緒障害って何だ？という疑問を早期に持ち始めていた。

現在では、様々な分類診断が発達障害のくくりの中に存在する。重なって「被虐待児童」とみられる子達が多く、情短と呼ばれる施設に入所している。

私は当時から今に至るまで、不登校は「学校業界」に関わった人々だけの話題だと思ってきた。「学校に行っていない」と「学ばない」は同じではないし、「高学歴の人」と「賢い人」も同じではない。

よってたかって学校第一主義を作り上げた関係者（大人）が、それに足下をすくわれていると考えてきたから、「不登校」は状態には見えるが、問題ではない。

食べ物に好き嫌いが多いから、栄養失調で餓死しましたなんて人はいない。好き嫌いは仕方ないが、生きるための栄養はとっておきなさいが正しい。つまり代替案だ。

「不登校」をしていると思っている考え方が、他のことをしなくさせる。不登校ならそれでも良いから、じゃぁ、何をしようか？と問いかければ良い。

更に、何かしていなければ、生きていけないなんてこともない。

だた、それが少子化の今の日本で、毎年十数万人なんて事態になっているのはおかしい。

1986/12/16

酒が全く飲めない。アルコールが体に合わないようで、少し飲むと頭痛がし、酒の匂いが息に残って、その匂いにまた酔ってしまって気持ちが悪くなるという最悪のパターンである。

ほんとに飲んだことがないし、飲んでみようとか、無理にとか、付き合いだからとか、そんなことも全くしないできた。酒の席に付き合うのも学生のころ、仕事を始めてしばらくもまだ嫌だったけれども、そのうち嫌でもなくなったし、ジンジャエールでよく酔えるもんだと冷やかされても気にならなくなった。そして少しくらい飲めたら良いなぁーと思うようになった。

1987年、40歳になる。実のところ僕は、いろいろ理由があって自意識過剰の結果、できないことや、したことがない事が多い。人前でマイクをもって歌を歌うなんてことは、30歳までは考えることさえおぞましいことであった。それが今では楽しい事のひとつになっている。

そこでフッと考えた。「よし、40歳をきっかけに酒を飲もう！」皆笑うのだ。

かくして練習が始まった。初めて自分の為に、酒屋にいった。そしていつだったか福知山の小牧さんたちと飯を食ったとき出てきた「桃の滴・吟醸純米酒」300mlを買った。一週間を目標に、患者が薬を飲むみたいに目盛りを計って飲んだ。目標を達成した。

次は先日、ロールシャッハ研究会で辻悟先生に「ドイツワインの白、良いやつから飲みなさい」と言われたのを思って、シュロス　フォルラーツ'81の中瓶を買った。これは4日で飲もうと決心してやり遂げた。

話を聞いた人は、300mlを一週間で飲む計画だといったら、「私なら10分もたせるのが難しい」と皆笑うのだった。

初日にエイッとばかりに飲んだあと、忘年会の余興の練習にギターを弾いて、しんどくなってきたので寝ようとして部屋を出たら、足をとられて廊下にひっくりかえってしまった。嫁さんはゲラゲラ笑っているばかりで、全くなんてこった。

次の日からは飲んだらサッと蒲団にはいることにして、無事続けている。幸い次の朝まで残っていることはない。（あたりまえか！）

この努力の結果、今年の忘年会では最初の乾杯のシャンペンをなんと二杯も飲んでフラフラになってしまった。しかしちょっとうまかったりもしたのだ。

回りの人達の世話になって酔いを冷まして、無事出番をすませ、二次会ではまたストロベリーフィズをしっかり飲みきった。そしてこれでまたフラフラになってしまった。歌を二曲歌って、介抱されて、いゃーまったく忘年会らしい忘年会で、これはなかなか良いもんだわいとつぎの練習用の酒を物色しているところである。もうちっと飲めるようになったら、飲みにいこか！！

あとにも先にも一度だけ、アルコールがたしなめるようになりたいと思って挑戦したのがこの時だった。そして敗北した。

それ以来、少しでも飲めるようになどという努力はやめた。その結果、冗談に一口飲むことすらなくなった。

1986/12/23　TUE

福知山児童相談所で心理判定テストカンファレンスがあった。4年前まで福知山に住んでいて、よく駅前のことぶきやタカラブネでケーキを買って帰った。

いつごろだったか、駅前東映という映画館がつぶれて、そこに建ったビルの一階に「フランス」という名のケーキと喫茶の店ができた。夕方には売りきれてしまうケーキも多い、少し小さめのおいしいケーキ屋さんだった。仕事の帰りにはひとりでよくアメリカンコーヒ

ーとモカとかフレーズとか名付けられたケーキを食べた。

京都に転勤になってから、わりにあちこちのケーキを食べた。伏見桃山のアスワとか、北山通りにあるとても高いケーキ屋さんとか、セカンドハウスのパウンドケーキとか、ココリコのパイとか、いろいろそのほかにも食べた。

しかし一番おいしいのは福知山のフランスだ。僕はそう思う。福知山へ出張があると、あのケーキが食べたいと思うのだが、定休日の水曜日と重なることが多くてなかなかチャンスがなかった。

ところが今回、クリスマスイヴの前日に出張で行くことになった。一月も前から手帳に”ケーキ予約”と書いて忘れないように、福知山児相の川崎くんにクリスマスケーキの予約をしてもらった。

当日、仕事を済ませるとワクワクしながらフランスに行き、「あら一こちらへ出張ですか」と店の奥さんに言われながら3200円の大きい箱を受け取った。そして鉄川さんと川崎くんと飯を食い、お茶を飲みながら「よにんばやし」(自分たちで発行していたミニコミ誌)の企画会議をした。

楽しく話がはずんで、最終の京都行きの列車に三人で乗った。僕は京都まで、鉄川さんは高津まで、川崎くんは綾部まで。

発車直前になって「団君ケーキは？」と鉄川さんがいう。「アッ・・」列車を降りて取りに戻れば、京都に帰るには後の寝台特急しかない。車掌さんに聞けば「寝台券と特急券が要りますから7100円かかります」という。「ア～～～ァ」と涙ながらに諦めた。ほんとに縁がない。

翌日、京都駅ポルタのバイカルでまた3000円のショートケーキを買った。こんな風に人は思い出を作ってゆくものなのだね。

懐かしい昔話である。３０年経つと、皆、次世代の家族に展開があって、われわれ世代の物語は昔話になる。

この時、家族は福知山市厚での１１年間の生活に終止符を打って、京都市東山区に暮らしていた。私の転勤によるものである。

子ども達は皆、京都府の田舎、福知山で育った。それから３０年経って、長男は横浜で、次男は芦屋で家族を営んでいる。末娘はこの 11 月に、ＮＹで演劇学校を卒業したところだ。私達はこの後、宇治市を経て滋賀県大津市の今の住まいにたどり着いた。

人は誰も長い長い旅をするものである。どうやら私の旅はもう大きく動くことはないが、次世代はまだまだ、あちこちにその足跡を刻み続けることだろう。

学校臨床の新展開 30

― スクールソーシャルワーカー１万人計画の行方 ―

浦田　雅夫

京都造形芸術大学

「学校臨床の新展開」などと大きなテーマで書かせていただき早 7 年、何とか 1 回のお休みだけで 30 回の連載。物事が長続きしない私が、内容が稚拙ながらもここまで続いたのは、叱咤激励しながら、あたたかく見守っていただいた団編集長はじめ編集にかかわっている皆様のおかげです。

さて、私は 2013 年度まで大学教員の傍ら週に１度、中学校のスクールソーシャルワーカーとして活動を行っていました。社会的にも、この間、子どもの貧困が注目され、「学校をプラットフォームに！」が合言葉となり、なかでも「スクールソーシャルワーカー」への期待は熱く！？、2019 年までに１万人に増やす目標も掲げられました。急激な量的拡充は質の担保がなされるのでしょうか。

2017 年８月１日に行われた、「子供の貧困対策に関する有識者会議」のなかでは、これまでスクールソーシャルワーカーの拡充を訴えてきた山野氏が以下のように述べています。

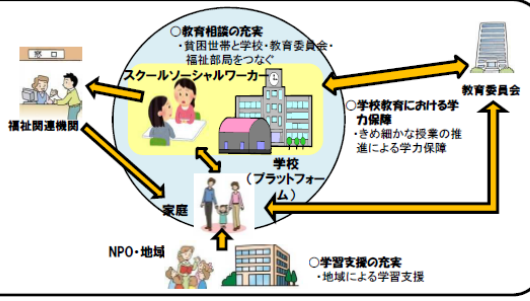
「学校プラットフォームについては、私も一生懸命推進しているところだが、スクールソーシャルワーカーはすごく増員されるということで、が、、（議事録のまま）どこの県もスクールソーシャルワーカーが何かできるのかわからないまま学校にばらまかれている。その人たちは、つながる仕組みがないので、学校へ一人急にぽんと入っても何もできない。そのため、数が入るということがすごくもったいない。去年 12 月でも相談件数はゼロというスクールソーシャルワーカーがいた。これが実態ででもある。」

「どうやって動いていくのか、ソーシャルワークの技術というのは厚労省管轄になってくる。例えば、児童相談所の児童福祉司の研修は厚労省でとりまとめている。今回、児童福祉法改正でかなり増員されている。ちゃんと育成から手を打っているが、スクールソーシャルワーカーは全く数だけ各自治体がとにかく増やしなさいとなっているため、非常にリスキー。クライアントからの連絡が携帯電話にどんどん入って、土曜日、日曜日に職業意識のコントロールがないまま動いているスクールソーシャルワーカーや自治体もある。、専門職としての認識の統一や周知が自治体にない。とにかく相談があったことは全部受けないといけない、夜昼関係なく。枠がないから、週１回というような勤務のため、そんなことも起きている。」

学校をプラットフォームとした総合的な子供の貧困対策の推進　（義務教育段階）

全ての子供が集う場である学校を、子供の貧困対策のプラットフォームとして位置づけ、子供の貧困問題への早期対応、教育と福祉・就労との組織的な連携、学校における学力保障・進路支援、地域による学習支援を行うことにより、貧困の連鎖を断ち切ることを目指す。

【子供の貧困対策に関する大綱(平成26年8月29日閣議決定)を踏まえ】



学校教育における学力保障

■家庭環境などによる教育格差の解消に向けた教員定数の措置　[H27]100人 → [H28] 250人（＋150人）

家庭環境などによる教育格差の解消に向けた取組を支援

教育相談の充実

■スクールソーシャルワーカー・スクールカウンセラーの配置拡充【H28要求額 58億円(+11億円)】〔補助率1/3〕

①福祉の専門家であるスクールソーシャルワーカーの配置拡充

○スクールソーシャルワーカーの配置【拡充】(週1日×3h)
[H27]2,247人 → [H28]3,047人(+800人、36%増)

○貧困対策のための重点加配【拡充】(+週1日×3h)
[H27] 600人 → [H28]1,200人(+600人、倍増)

※併せてスクールソーシャルワーカーの質向上のため取組を支援

【目標】 平成31年度までに全ての中学校区(約1万人)に配置
(ひとり親家庭・多子世帯等自立応援プロジェクト)

②スクールカウンセラーの配置拡充

○全公立中学校(10,000校)及び公立小学校(15,000校)への配置

○さらに小中連携型配置【拡充】(+週2日×4h)
[H27] 300中学校区 → [H28] 3,100中学校区

	[H27]	[H28]
中学校	300校	→ 3100校
小学校	600校	→ 6200校
計	900校	→ 9300校

○貧困対策のための重点加配【拡充】(+週1日×4h)
[H27] 600校 → [H28] 1,200校(+600校、倍増)

【目標】 平成31年度までに全公立小中学校(27,500校)に配置
(ひとり親家庭・多子世帯等自立応援プロジェクト)

学習支援の充実

■地域未来塾による学習支援の充実【H28要求額 6.3億円(+4.2億円)】〔補助率1/3〕
[H27] 2,000か所 → [H28] 3,600か所(+1,600か所)

【目標】平成31年度までに5,000中学校区(全中学校区(1万校区)の半数)

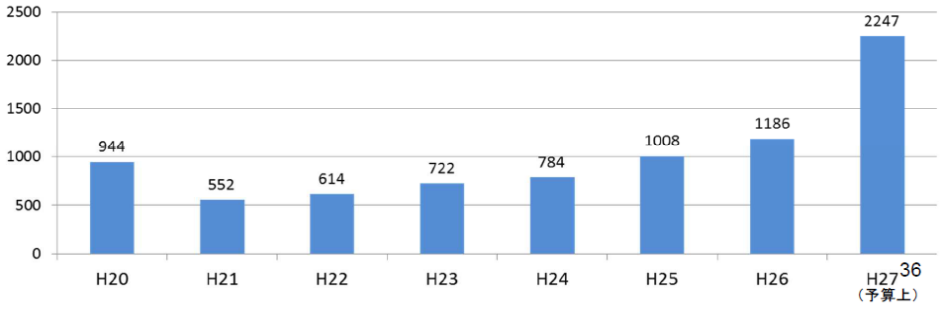
(注)地域未来塾
家庭での学習習慣が十分に身についていない中学生・高校生等を対象に大学生や教員OB等の地域住民の協力やICT等を活用した原則無料の学習支援

SSWについて（配置状況）

区分＼年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度
予算額	1，538百万円	14，261百万円の内数	13，092百万円の内数	9，450百万円の内数	8，516百万円の内数	355百万円	394百万円	647百万円
予算上の積算人数	141地域	1，040人	1，056人	1，096人	1，113人	1，355人	1，466人	2，247人 プラス貧困対策重点加配600人
SSW実人数	944人	552人	614人	722人	784人	1，008人	1，186人	

○ スクールソーシャルワーカー活用調査研究委託事業（平成20年度）―国の全額委託事業（10／10）
○ スクールソーシャルワーカー活用事業（平成21度～22年度）―都道府県・指定都市に対する補助事業（補助率 1／3）
○ スクールソーシャルワーカー活用事業（平成23年度～）―都道府県・指定都市・中核市に対する補助事業（補助率 1／3）

○ 平成21年度～平成24年度は、学校・家庭・地域の連携協力推進事業の一部として実施。
○ 平成25年度から、いじめ対策等総合推進事業の1メニューとして実施。



文部科学省初等中等教育局「児童生徒課学校における教育相談に関する資料」2015 年より

「難しい問題は、専門家へ」しかし、その専門家と言われる人が知識と技術と倫理を持ち合わせていなければ、一番困るのは目の前の子どもたちです。今後数年で、学校現場にはどのような変化が生じるのでしょうか。「学校臨床の新展開」は、この 30 回を持って一旦終了させていただけたらと存じます。今後は、ライフワークでもある若者支援や社会的養護を取り上げて行きたいと思います。

これまでのテーマ

1、「スクールソーシャルワーク元年」（2010 年 6 月）
2、「学校と児童虐待Ⅰ」（2010 年９月）
3、「学校と児童虐待Ⅱ」（2010 年 12 月）
4、「学校と児童虐待Ⅲ」（2011 年 3 月）
5、「ののさんのこと」（2011 年 6 月）
6、「ひとり親がふつう」（2011 年 9 月）
7、「ひとり親と子育て」（2011 年 12 月）
8、「今、この時代に教員であることの辛さ」（2012 年 3 月）
9、「消えた子どもたちはどこへ」（2012 年 6 月 15 日）
10、「外国人も住民票を。しかし・・・」（2012 年 9 月）
11、「家庭を支える社会資源」（2012 年 12 月）
12、「子どもたちの放課後」（2012 年 3 月）
13、「教育と福祉」（2013 年 6 月）
14、「夏休み」（2013 年 9 月）
15、「ケースの発見」（2013 年 12 月）
16、「誰のニーズか」（2014 年 6 月）
17、「妖怪と子どもたち」（2014 年 9 月）
18、「早期発見・早期介入」（2014 年 12 月）
19、「ネット社会と子どもたち」（2015 年 3 月）
20、「スクールソーシャルワーカーが足りない」（2015 年 6 月）
21、「此処じゃない何処かへⅠ」（2015 年 9 月）
22、「此処じゃない何処かへⅡ」（2015 年 12 月）
23、「居場所なき子らの生活保障」（2016 年 3 月）
24、「居場所なき子らの生活保障Ⅱ」（2016 年 6 月）
25、「居場所なき子らの生活保障Ⅲ」（2016 年 9 月）
26、「「不登校」スクールソーシャルワーカー」（2016 年 12 月）
27、「チーム学校？ チーム児童相談所？」（2017 年 3 月）
28、「チーム学校Ⅱ」（2017 年 6 月）
29、「変わり行くもののなかで」（2017 年 9 月）
30、「スクールソーシャルワーカー１万人計画の行方」（2017 年 12 月）

第２章

物語としてのキャリア

―森の語り場―

3. ひきこもりも３年すれば飽きてくる

リキは高校時代に不登校になり、それがきっかけとなって次第に家にひきこもるようになっていきました。それから丸３年間、彼は貴重な青年時代を自分の部屋で過ごします。私たちが出会った若者たちの中にもひきこもりの経験を持った者は少なくありませんが、リキのように本格的なひきこもりを経験した者は、むしろ少ないのかもしれません。

「ひきこもりも３年すれば飽きてくる」

リキは私たちに対して、そう話してくれました。それは、ひきこもりの経験者だからこそ言えるコトバであり、もうこれ以上のひきこもりはごめんだという切実な思いの表明でもあるのかもしれません。

ひきこもり生活も最初の１年目はよかった、とリキは言います。そして２年目にはだんだん苦しくなってきて、３年目は気が狂いそうになってきたと言うのです。そこで今回の語り場では、そんなリキのひきこもり生活のありのままの話を聞くことになりました。

塾長「リキと昔のこととか、ひきこもってる間どういう生活を送ってたかはあんまり話したことが無いよな」

リキ「僕もあんまり覚えてない」

塾長「リキは今いくつ？」

リキ「今２２です」

塾長「中学の時はバスケ部やったっけ？」

リキ「うん」

塾長「バスケをずっとやってて、○○高校に入ったんやんな？」

リキ「うん」

塾長「○○高校の特進にも併願で受かってて、比較的まじめで賢い子やったと。○○高校に入ってバスケ部に入ったんやんな？」

リキ「うん」

塾長「○○高校を１年の終わりで行かなくなったと。その時からずっと家にいるようになったわけ？」

リキ「まぁ最後らへんはずっと家にいた」

塾長「高２の頭、16歳からまるまる３年間はどこにも属さず、最後の方は家から出ることもなくという生活を送ってて、19歳くらいの時にここに来たのかな？」

リキ「うん」

塾長「ここに来るときに、初めお母さんが「うちにずっと家にいる息子がいるんです」という相談を電話でしてくれはった。連れて来てくださいって言ったんだけど、来なかったんやんな？」

リキ「いや、１回目は一緒に行ったと思う」

塾長「ほんと？」

リキ「一緒に来て、次来るのが２ヶ月くらい後やった」

塾長「そうそう、これもあんまりないケース。だいたい来たらすぐ次来るでしょう？彼の場合は来なかった。彼の場合は空白の２ヶ月があったけど、その２ヶ月は何してたん？」

リキ「何してたと言うか、まだ行く気分じゃなかったんじゃないですかね」

塾長「しばらくたって、私はお母さんに電話した。その後、連絡ないんですけど、どうしてますかって聞いたら、部屋片付けてますって。」

マナミ「出る準備？」

塾長「部屋がどんな状態になってたのかわからんけど、片付けてますって。それからなんか夜に…」

リキ「散歩」

塾長「そうそう、散歩に行ってますって。空白の２ヶ月の間は部屋を片付けるのと、犬の散歩か。そういうことがあって２ヶ月後くらいにリキはやってくる。それはマナミちゃんが言うように、きっと出るための準備期間やったんやろな。出るのにやっぱり２ヶ月かかると」

3 年間のひきこもり生活から脱出するための彼なりの儀式、すなわちそれは、彼なりの通過儀礼だったのかもしれません。ひきこもり生活からそうでない生活への移行は、リキにとって決して連続的なものではありませんでした。そこには彼なりの決心が必要だったのでしょう。部屋をきれいに片づけ、夜、人目を避けて犬の散歩に出歩くようになるのに、2 ヶ月という時間が必要だったのです。それは決心に至るまでの準備期間だったのかもしれません。

多くのひきこもり状態の若者たちがそこから脱出していく時、そこには何らかの決心が伴います。つまり、ひきこもり状態からの再出発の起点が、この決心だと言えるのかもしれません。それがたとえ些細なものであっても、そこから彼らは変わり始めるのです。

村岡「なんで行かなくなったかとか、きっかけとかはなかったの？」

リキ「きっかけっていうか、なんというか中学とのギャップとか、先輩とかが嫌っていうのもあったんですけど…、部活辞めてから喋れなくなったりしたから」

塾長「部活はいつやめたの？」

リキ「１年の終わりごろ」

塾長「でもクラブはやめても、クラスはある？」

リキ「でもクラスはあんまり。他のクラスの子の方がよく喋るから」

塾長「クラスのメンバーも、あんまりよくなかったって感じなんか。でもそれで行かなくなるわけ？」

リキ「なんか面倒臭くなって。徐々に遅刻とかしてたんですけど。中学が楽しすぎたんじゃないですか」

塾長「中学、高校のギャップが大きかったと。そんな面白くなかったんか？」

リキ「うんまぁ、微妙でしたね。面白い時もあっ

たんですけど、なんか嫌になってくるとどんどん嫌になってくるっていう」

塾長「その先輩が嫌ってのは、どういうことが嫌やったん？」

リキ「いきなりキャプテンが来なくなったり、よくわからんことで1年全体的にいろいろ言われるようなことがあったんで」

塾長「例えばどんなこと？」

リキ「例えばですか？よく覚えてないです」

塾長「まぁよくわからんことで1年に、いちゃもんを付けてくるわけ？「お前ら何考えてんねん」とか、そういう感じ？」

リキ「うん」

塾長「先輩がとりあえず嫌やと…。それで面倒臭いなっていうのもあって、ちょっとずつ遅刻するようになって、2年からはまったく行かないようになったの？」

リキ「いや、1年の終わりにもう学校やめますって。やめたくなったんでやめますって…」

塾長「そうなん。それは迷いもなかったの？やめることに」

リキ「うん」

塾長「やめてどうやった？すっとした？」

リキ「最初は気が楽でしたよ。でも徐々にあの時やめへんかったらよかったなって思いました」

塾長「最初はそれでよかったと、でもだんだん後悔してくるわけ？」

リキ「あんまりそういうこと考えないようにしてたんですけど、将来のこととか考え始めてからじゃないですか…」

塾長「学校行かなくなったら時間いっぱいあるやん。家には基本的に誰もいない。何をしてたん？」

リキ「1年目の時は、たまに出かけたりしてましたよ。適当にふらふらと」

塾長「たまに出かけるって、どんなところに出かけるの？」

リキ「どっか立ち読みしに行ったり」

塾長「本屋に行ったりとか。でもあんまり行くところがないんじゃない？」

リキ「まぁ行くとこあんまりないですね」

塾長「すぐ暇になるよね。誰もいないし、しゃべるやつもいない。友達との接触は全然なかったの？」

リキ「どんどんなくなっていきましたね。自分から連絡しなくなって」

塾長「ということは、だんだん孤立していくわけ？」

リキ「うん」

塾長「喋るのは家族だけ、みたいなパターンになっていく？」

リキ「うん。でもお父さんとは全然喋らなかったですけど。同じ家にいたのにほとんど夜中に行動してたから、2年くらいはお父さんに会わなかった」

タロウ「それは会わないように意識してたわけじゃなくて？」

リキ「あんまり会いたくないとは思ってましたけど。久しぶりに会った時は老けたなぁと」

塾長「2年も会わずに暮らせるものなんやな」

リキ「まぁ僕のお父さんがそういうのにあんまり無関心ってのもあるんですけど。なんか言ってきたりっていうのもなかったんで」

塾長「今は喋るんやろ？」

リキ「まぁ普通に」

塾長「この前の家島の時もお父さんに送ってきてもらってたもんな。どうですかみなさん？ここまでで聞きたいことは」

小牧「お母さんはどういう反応やったん？」

リキ「バイト行ったらとは言われましたけど、特に行動はしなかったです。行動しなかったっ

ていうか、時間が経つと徐々に行動できなくなったっていうのがあったんで」

小牧「お母さんとは、会話してた？」

リキ「お母さんとは、会ったら会話してましたよ」

塾長「家にずっとひきこもり始めると、わりとすぐその生活ってきつくなってくるの？」

リキ「まぁそうですね」

塾長「どれぐらいは大丈夫？」

リキ「１年くらいは大丈夫ですよ」

マナミ「部屋にずっといて何するの？」

リキ「寝たり、携帯でいろいろ調べたりとか」

塾長「そうや、ゲームはやってへん。パソコンもなかったんやんな？」

リキ「ありますけど、そんなに使ってなかった」

塾長「ゲームやらへん、パソコンもしない」

マナミ「それも意外」

リキ「本読んだり、でも寝てる時間が一番多かったような気がします。なにもせずにぼーっとしてました」

塾長「２年目からは、外に出ることも無くなったって言ってたけど、それからの丸２年間は、ずっと部屋にいたの？」

リキ「うん」

塾長「居間にも行かないわけ？」

リキ「飯食う時ぐらいですかね」

マナミ「外に出たいなぁっていう瞬間もなかった？」

リキ「ありますけど」

マナミ「面倒くさい？」

リキ「面倒くさいと言うか、ずっと家にいていきなり出来ないです。久しぶりに外出た時、近所の風景変わりすぎてびっくりしましたもん」

マナミ「朝にお母さんが「起きや！」とかは無し？」

リキ「全然ないです。朝起きたらいつもだれもいないんですよ」

塾長「最初の方はあったんやろう？たぶん」

リキ「どうでしょう。全然覚えてないですけど」

タロウ「学校行き！とかなかったん？」

リキ「それは、もうやめた後やったから」

村岡「やめることを反対されなかった？」

リキ「全然されませんでした」

村岡「つらそうやったんかな？しょうがないかなって思われてたんかな？」

リキ「まぁ好きにしたらっていう感じでした。そのあと定時制に行こうかなと思ってたんですけど、なんかうやむやになりました」

リキの場合、不登校になるきっかけは、クラブ内の人間関係でした。それは、ほんの些細なことでした。ところが高等学校の場合、義務教育とは違い、一旦学校を辞めてしまうと途端に様々な関係が切れてしまいます。学校との関係だけではなく、友達関係も含め、一気に疎遠になっていくのです。リキの場合、家族があまり積極的に介入しようとしなかったこともあり、短期間のうちにひきこもり生活へと入っていきました。

一旦ひきこもり始めると、あらゆることが悪循環を始めます。最初は、家族が何とか外へ出そうと働きかけていたことに対して疎ましく思い、何とか家に安心していられることを望んでいたのですが、いざ家にひきこもり始めると、それは思っていたような生活ではないことに気付くのです。何もやることがなくなり、そうこうしているうちに、ひきこもっている自分自身が嫌になっていきます。自分に対する自信がなくなり、ましてや外へ出て行くことがとても大変なことに感じられ、ますます家にひき

こもると同時に、そんな風にしている自分がますます嫌になっていくのです。

家族と衝突することや、そんな家族を罵ったり、暴れたりすることもあるかもしれません。しかし、そうやっている自分もまたどうしようもなく嫌になってしまいます。生きている意味を感じられなくなり、自殺を考えるようにもなっていくのです。リキもその例外ではありませんでした。

塾長「話を戻すと、だいたいずっと家にいて、携帯やるか本読むか寝るか、それぐらいしか行動のパターンが無く、友達にも会わないという状態。２年目ぐらいからずっとそうなって、２・３年目になって気持ち的には変化していくわけ？」

リキ「気持ち的に…っていうか、性格が変わってきたかなとは思います」

塾長「どんなふうに？」

リキ「こんなにネガティブやったっけとか、人と接するのが怖かったっけとか思ったりしました。ここ来た時、全然喋らなかったじゃないですか」

塾長「やっぱり喋るのが怖かった？」

リキ「ずっと家にいて喋らなかったってのもあるんですけど、どうやって喋ればいいかわからなくなりました」

塾長「昔中学の時は、そんなことなかった？中学の時は楽しかったって言ってたもんな」

リキ「うん」

塾長「そんな状態になるわけか。「ひきこもりは３年もすれば飽きてくる」って言ってたやんか。１年目はまずよかったと。２年目からかなり苦しくなってきて、３年目は気が狂いそうやったと。これ以上続けたら精神が崩壊するみたいに私に言ってたやんか？」

リキ「一時どうやったら楽に死ねるんかなって考えてました」

タロウ「それってちょっと考えたことあるな」

レミ「あるある、普通に。薬飲んだら楽に死ねるんかなぁとか」

タロウ「まず死に方を模索して…」

リキ「やっぱ痛いの嫌じゃないですか」

レミ「グーグルで検索しましたもん、私とか」

塾長「どうやったら痛くなく死ねるか？」

レミ「そうそう、何が一番楽な死に方かみたいな」

リキ「とりあえず睡眠薬のんで、屋上の所で寝て、寝がえりで死にたいなって」

塾長「睡眠薬のんでて、寝てて、ごろってやって、落ちて死ぬと」

一同笑い

リキ「ぽろって落ちて、いつの間にか死んでるって言うのが、僕のたどり着いた答え…」

塾長「一番面倒くさくない…なるほど」

レミ「私は寝てるうちに死にたいって思いましたね」

タロウ「僕はシンプルに飛び下りればいいかなって思って、ショッピングモールの３階ぐらいから一気に落ちて死のうかなって思ったことあります」

レミ「いや、それはなんか落ちる瞬間に痛いし、嫌やなって思って」

タロウ「痛みで気絶するかなって」

レミ「恐怖心に負けるじゃないですか」

リキ「やっぱ僕の方法が一番だと思いますよ」

一同笑い

タロウ「いやいや、それはねぇ」

リキ「一回目は無理でも、たぶん何回もやってるうちにいけますよ」

塾長「何回かやってるうちに成功するって？」

タロウ「その前に飲みすぎで、死ぬんじゃない？」

レミ「慣れて寝れへんようになりそう」
タロウ「免疫できて？」
レミ「そうそう試しすぎて」
塾長「でもまぁそうか。不登校になって、家にひきこもり始めると、やっぱりそういう風に死にたいって考えるんや…」
タロウ「僕はむしろあれやな、学校に行かへんようになる直前くらいにそう思ってた記憶はあるな。むしろ学校行かへんようになってから解放されて楽やった記憶がある、むしろ。学校に行かへんようになる直前が一番そう思ってたかな」

ひきこもり生活の 3 年目に自殺を考えていたことを実にあっけらかんと語り始めたリキ。すると仲間たちからも、次々と自分もそうだったという声が上がってきました。

不登校になりひきこもりの生活が長引くと、他者が介入しない分、どんどん考えがネガティブになっていくのかもしれません。これは何もリキに限ったことではなく、多かれ少なかれ誰もが抱く傾向なのでしょう。他者とのつながりがないということは、自分の思い次第でその考えの方向性が決まってしまうということ。つまり、自分のバイアスによってさらなる自分のバイアスを作り出していくため、バイアスそのものが自動的に強化されていくのです。従ってこの状態から抜け出すためには、他者の関わりが必要不可欠なものとなります。バイアスそのものが更新されることが大事だからです。

今回の語り場で、自分と同じような思いをみんなも抱いていたことを知ったことは、リキにとってこれまで思ってもみなかったことのようでした。生きていても仕方ないという究極の自己否定感は、自分だけが抱いていたものじゃないのだという思いが、リキの心をより開かせていくことになるのです。

塾長「ちょっとリキの話に戻るけど、リキのその精神的におかしくなって死のうかなっていうのは別にリキだけの話だけじゃなくて、タダシもそうやったし、みんな仲間でした。みんなそれは何度も考えるっていうのが普通みたいやね」
タロウ「考えてしまうよね」
レミ「うん」
タロウ「別に考えなくてもいいのに」
塾長「でも、その時に死なずによかったよね」
リキ「４年目いったら危なかった」
塾長「４年目危なかった」
タロウ「ここが救世主みたいなものやった？」
塾長「そう考えるとそうやね。それはやっぱり一回や二回じゃなくて、何回も思うわけ？」
リキ「思い始めるとずっと思いますけど」
塾長「ずっと思ってしまう…そうなんかもね。でも自分ではその状態から立ち直るための行動は出来ず？」
リキ「うんまぁ」
塾長「八方ふさがりな状態なんやな。そういう意味では、お母さんがよく動いてくれたよな」
リキ「市役所で働いてる知り合いが、最初ここを紹介してくれはって」
塾長「そうやそうや、お母さんはその話を聞いてきて、リキに相談したわけ？」
リキ「こういうのがあるで、とは見せてもらったけど、その時はあぁそうなんみたいな。その後、友達のメールアドレス変更のメールが来

たんですよ。そこに名前と一緒に○○大学って書いてあって、あぁもう大学生かって。そこからちょっと危機感を感じたっていうか。僕はずっと止まってたのに、みんな進んでるんやって思い始めて、とりあえずお母さんにこういうとこがあったよなって言って、６月ごろに１回ここに来ました」

塾長「はじめに聞いた時はピンと来てなかったけど、友達の進路がわかるメールが来た時に、前に聞いてたことがよみがえってきて、お母さんに働きかけるわけか」

リキ「選択肢がそれしかなかったですね。働くのも無理ですし」

塾長「でも、自分でアクション起してるわけや」

リキ「そこに行くって言い出したのは、僕だと思いますけど」

塾長「その一歩は大きいな」

リキ「なんでもいいから変えたかったんですよね。その生活を変えたかった」

塾長「そんなの、レミちゃんとかも一緒？」

レミ「一緒。ずっと暇でやることが無くて、ずっと１、２年ぐらい家にひきこもってたんです。ネットとかやってなんとか暇をしのいでたんですけど、もうどうしようも無くなってきて、どうにか変えなきゃやばいと思って。１年目の時に、知誠館あるって聞いてたんですけど、その時なんかもう親とかの話聞きたくなくて。ほんとにイライラしてて、親に話しかけられても、話しかけないで、みたいな感じで。やっと今来たみたいな」

塾長「そういうタイミングってあるよな」

レミ「あと、その時思ってたのが、どうせ知誠館来ても説教されて終わるんやろうなって。どうせまた上辺だけ言われて終わるんやって思って来れなかった」

塾長「会って、僕は説教してないわけ？」

レミ「いや、されたのかはわからないですけど。なんかまだちょっと理解力があるというか、上手く言えないですけど、他の人よりかはまだわかってくれはるなみたいな」

塾長「まぁ今日改めて思ったのは、普通に学校行ってる高校生は、たぶん死にたいとかあんまり考えないと思うな。普通に生きてる人達っていうのは、ある意味そんなこと考えなくても生きていけるのかもしれない。学校に行ってることって何なんだろうかとか、高校卒業するってことは何なんだろうかとか、家族って何なんだろうとか、たぶんいろんなことを考える。つまずくからこそ考えてしまうって、それはすごい大事なことやなと思ったりするんや。他の人達があんまり考えないことをいろいろ考える、だけどたぶん自分一人だったら答えが出ない。けっこう難しいから。だからこういう仲間がいたり、そういうことを議論できる大人がいたりとか、そういうことが必要なのかなと思う。そういう意味でそれぞれいろんな苦しみみたいなものがあるけれど、それはそれで大事なことかなと思ったりするんや。だから私に出来ることは、そういう経験をみんなしてきたとしたら、何か将来意味のあることにうまく使えないかなと思う。だからこういう場も必要やと思うんや。だってリキの話とかをきいたら、私も一緒やとか思うでしょ。リキはパティシエになろうって自分の道を決めたんや。働きながら料理の専門学校に通うために、今７時からアルバイトをしてお金貯めて。偉いでしょ、本当に。リキは、自分で自分の未来をつくってきたと、そういうことやと思うわ」

リキ「もう、ああいう生活は体験したくないですからね。ここに来だしてから友達に誘われて飲み会に行ったんですけど、友達によく復活

できたなって言われますからね」

塾長「そういうの聞くと嬉しいなとか思うん？」

リキ「嬉しいですけど、すでに働いてる人とかもいたんでやばいなとも思うかな」

塾長「でもかなり大変な状況から今の状況に復活させたわけやから、リキにとっても大きな自信やと思う。いいかげんなことばっかり言ってるけど、えらいところもある」

不登校になって、あるいはひきこもりになって初めて考えることがあります。普段は全く振り返ることのなかったことを、つまずくという経験があらためて気づかせてくれる。そのように、問題が持つポジティブな側面も存在するのです。問題をただ問題として捉えるのではなく、問題を新たな気づきへの機会として捉えることで新たな局面が拓かれていくことを、私はリキの語りを通して考えさせられることになるのです。

タロウ「リキのここに来てからの変化とかは？」

リキ「ネガティブやったけど性格がもとに戻ってきた気がする。昔みたいに」

マナミ「どれぐらいで戻ったん？」

リキ「どれぐらい？やっぱり他の人と話し始めてからやと思う」

塾長「リキにとって知誠館は、どういう存在なの？」

リキ「通過点ですかね。でもここがなかったら本当にやばかったですから、塾長は救世主ですね」

塾長「ここの生活の中で、何が自分にとっては支えや力になった？」

リキ「自分に近いような人たちがいたし、そういう人達との会話とか、塾長との会話とか、そういう日常的なことじゃないですかね」

塾長「やっぱり同じ状況を共有出来る仲間がいるっていうのは大きい？」

リキ「そういう人たちだけではだめだと思いますけど。マナミさん入ってきてから、スパイスになってる」

塾長「マナミちゃんていうのは、どういう存在？スパイスってものすごい抽象的な表現やけど」

リキ「マナミさんは、知誠館の太陽でしょ？」

タロウ「マナミさんが引っ張ってるんですよね、ここを」

塾長「あと聞いておきたいなと思うことある人？」

小林「高校を選んだ目的とかは、あった？」

リキ「やっぱり家から近いし、長く寝たいから」

小林「高校は行くっていう前提？」

リキ「もともと高校行って、大学行くって思ってたから。目的はなかったけど、それが普通かなって思ってました」

小林「３年間の経験から学んだなって思うことと、これからどういう自分でありたいとかこうなりたいっていうのはありますか？」

リキ「自分から逃げてしまったような感じなので、自分の嫌なこととかも我慢して逃げずにやっていきたいですね。ああいう生活に戻りたくないので、もっと前向きに考えていきたいです」

「知誠館は通過点です」と淡々と答えるリキ。「嫌なことから逃げずにやっていきたいですね」と決意を表現するリキ。そんなリキのたくましさに、私たちは微笑まずにいられませんでした。彼からこういった語りが出るようになることもまた、彼自身が自分と向き合った証なのです。変容は主体的な営みとして成立するものですから、自

分と向き合うことが必須条件となっていくのです。

塾長「ではみなさん、一言ずつ感想を」

タカシ「すごい人生やなと思いました」

モモコ「うちも自殺しようかなって思ったことあるから、同じやなって思いました」

シンイチ「ひきこもってる間、退屈じゃなかったん？」

リキ「どんどんやることなくなってくるし、同じ本５、６回読んだような気がする。だから限界やったっていうのもある」

タロウ「これまで昔のこととか気になるけど聞きづらかったし、こういう時にリキ君を知れたのはとてもよかったです」

マナミ「自分でここに来ようと一歩踏み出したのは、大きかったんじゃないかなと思います。よく頑張ったね」

レミ「すごい共感する部分多くてびっくりしました。ひきこもりは、みんな同じこと考えるんやなと思いました」

小牧「始め来た時はほんとに喋らへんし、どうしようかと思ってたけど、勉強はものすごい丁寧やし、自分で一歩踏み出すタイミングがあるんやなと思いました」

小林「沈んだ状態から自分を見つめ直して、これから忍耐強くやっていきたいって言ってはって、今すでにそういう人になってる感じもするんですけど、この先もっともっといい男になってほしいなと思います」

村岡「リキ君はやさしいし、ほがらかやし、おだやかやっていうイメージ。勉強がすごく出来るという以上に人を和ませたり、楽しませることも出来るし、笑わせて輪をつくることも出来るし。そういう所がリキくんなんやなと思うし、今のリキ君がすごい素敵やし、今のやわらかいままでも強くなってください」

塾長「いろいろこういう話をありがとう。みんなにとってもいい機会やったと思うわ。一つのライフストーリー、それぞれの人の過去の経験…今に至るまでのそれが貴重な経験で、みんなにとって大事な意味をもたらしてくれる、それぐらい良い経験をしてるんやと思う。そこから考えさせられたり、自分自身を振り返ったり。リキのことは、自分らにとっても大事なことになるなって思う。人生って楽しいことばっかりじゃなくて、辛いこととか、苦しいこととか、投げ出してしまいたいこともやっぱりいっぱいある。越えられる苦しみもあったら、越えられない苦しみもある。ずっとそれを一生ひきずらなきゃいけない苦しみもあると思う。そんなことでも、全部かけがえのない経験で、そのことでものすごく投げやりになってしまう人もいれば、そういう苦しみがあったから何か自分を変えていけるという人もいて。そんなことをリキの話を聞いてものすごく感じました。ここに来る時って言うのは、みんなほとんど動けない状態で来る子が多い。今度やる不登校を題材にした映画のキャッチコピーの中に蛹というコトバがあって、私もよくそう思う。ここに来た時というのはほとんど蛹の状態なんや。蛹の状態って何かと言うと、蛹の前は青虫でその後は蝶。蛹の期間はほとんど死んだ状態みたいなんや。だけど、ここのところで起こっていることは何かと言うと、青虫の体を作ってた細胞がどんどん死んで、蝶の細胞がどんどん生まれていく。つまりこれは新しい命をつくるために、自分の命をどんどん殺していく過程なんや。ここまさに知誠館で起こっていることっていうのはまさにそういう感じがするんや。だから、今までの過去の自分

の人生を殺していく、いい意味で自殺なんかもしれない。普通の自殺やったら、ただ死ぬだけや。でもここでは新しい命が生まれていくわけや。そういう風なことに私自身は出会いたい。出会って感動したい。それは君らから感動をもらうようなものやと思うわけ。まさに蛹のタイミングというのか。だからここは居場所じゃない。ここにずっといれるわけじゃない。蛹はある期間で終わるんや。一生蛹やったらあかん。だから私たちはあるタイミングで出会って、あるタイミングで別れなあかん。だからこそ君らはそうやって変わっていくのかなと思った。そんなことを、今日のリキの話を聞いて改めて思いました。良い話をありがとう」

「セカンドキャリア」というコトバがあります。読んで字のごとく、それは「二番目のキャリア」という意味です。今の社会の中では、ファーストキャリアがその個人の人生を決定するという保証はどこにもありません。リストラ、解雇、人間関係のトラブル…。様々な状況が、そのファーストキャリアの終焉を告げる可能性を作り出していきます。私たちは、当たり前のように挫折を引き受けながら生きていかざるを得ない状況に身を置いているように思います。だからこそ、壁に頭を打った状況から、いかに自分自身を再出発させるかという能力が求められているのです。これが「セカンドキャリア」というコトバの中に含まれている大事な意味なのです。

不登校やひきこもりの経験を持つ若者たちは、まだ十分な能力や十分な準備のない状況で、大きな挫折を味わうことになります。しかし彼らがその挫折経験から立ち上がることができたなら、それは彼らにとって、セカンドキャリア形成へと向かうかけがえのない経験になっていくように思います。先にも触れましたが、それはどうしようもなかった問題が、大事な意味を持った機会へと変わっていく瞬間でもあるのです。

リキの語りは、確かにみんなを感動させました。彼の変容の大きさが多くのことを物語っていたのです。リキの話を、私は蛹の変容の話で締めくくります。そして、蛹の期間がどこかで終わるのと同じように、いつかは知誠館を巣立っていく必要があることを告げます。ここは居場所じゃないということを了解しておくことは、とても大事なことなのです。私たちは、限りある中で出会い、限りある中で互いに影響を及ぼし合い、そして限りある中で巣立っていくからこそ、限られた時間枠の中で精一杯変容を遂げていくことができるのです。

『幼稚園の現場から』
31・幼稚園の音楽活動（その２）

原町幼稚園園長　鶴谷主一（静岡県沼津市）

トラや帽子店のこと

前回30号で**「幼稚園でやる音楽は、楽しくなけりゃ！」**ということを強調したが、その思いを持つに至った出会いが、東京葛飾の幼稚園で仕事を始めて３年目、1987年だったと思う。園長が「オモシロい人たちがいるから、見に行かないか？」ということで、姉妹園でやってたコンサートを見に行った。

千葉県柏市の幼稚園内の保育室で行われていた内輪のコンサートを後ろから見学させてもらったがものすごい衝撃を受けた。「なんてオモシロいんだ！なんて楽しいんだ！」彼らのやってた音楽は、いままで体験したことのない“子どもたちの歌”だった。

早速「ウチでもやってもらいましょうよ！」と園長に話しかけると、園長も乗り気ですぐに話がまとまり葛飾文化センターで親子コンサートを開くことになった。今でも覚えているが、薄暗い舞台裏で中川ひろたか、福尾のぼ、増田裕子の３人がゴソゴソ自分たちで準備をしていた。マネージャーもアシスタントもいない、公演料は３人で６万円だと聞いた。

1980年代当時、保育現場で歌われていた曲は、まど・みちおさんの「ぞうさん」などに代表される童謡や、ＮＨＫ「お母さんといっしょ」「みんなのうた」で歌われている曲、小学校で歌われる合唱曲を幼児向けにしたような曲。言ってみればクラシック音楽をしっかり学んだ作曲家の先生が作られた曲、というのが主流だった。（私のイメージですが･･･）

今も歌い継いでいきたい大切な名曲もたくさんあるが**「トラや帽子店」**というこどもの歌を歌うバンドは、そこに新風を吹き込んだ。

今でこそＪポップを子どもたちが口ずさんだりクラスで歌ったりしているけど、当時はバンドをやってるようなミュージシャンがこどもの歌をつくろうなどということは思いつきもしなかったと思う。

中川ひろたかさんが後に「こどもの歌にロックを持ち込みたかった」と話していたが、まさに子どもの歌に“ロック”が持ち込まれたのだ！ロックってなんだ？という話を始めると横道にそれるので置いておくことにして、どんな感じだったかを言い表すと**「童謡のように唱いやすく、歌謡曲のように親しみやすく、ロックのようにのりやすい！」**と当時のチラシに静岡の百町森書店の柿田さんが書いた。これがこのバンドのパフォーマンスを言い当てている。

「いままでとちがう！でもイイ！」

僕ら現場の保育者にとって「トラや帽子店」の出現は大きかった。おそらく日本中のアンテナの高い保育者がそう感じたんでしょう、業界内で爆発的に人気が急上昇して、追っかけまで出現するほどの人気バンドとなった。僕ももちろんその一人で、今まで苦手だった歌の時間が楽しくなり、クラスではトラや帽子店の歌を毎日子どもたちと歌っていたし、この音楽を子どもたちに届けたい！届けねば！という使命感のような思いまで持っていたので、香港の幼稚園に赴任した時には理事長と交渉してトラや帽子店初の海外公演を寄付を募りつつ幼稚園主催で行ったほどだ。

トラや帽子店が歌う曲は、クレヨンハウスから発行されていた「音楽広場」という月刊誌（前身は「幼児と音楽」という雑誌。現在はクーヨンという雑誌が後継となっている）に毎月「今月のうた」として連載されている曲を中心にどんどん生まれていった。メイキングは、中川ひろたか（作曲）・新沢としひこ（作詞）の二人だ。
新沢さんはトラヤのメンバーでは無かったけど中川さんとペアで多くの曲を作ってくれた。たとえば小学校の教科書に採用された「世界中のこどもたちが」、「にじ」などの名曲も初期の作品だ。

「トラや帽子店」というバンドは11年３ヵ月活動し、現在はそれぞれソロで活動を続けている。もう20年も前に解散してしまったバンドなので、若い保育者でその名前を知っている人もほとんどいないが、「あたらしいこどものうた」は今やスタンダードととらえても良いのではないかと僕は思っている。

▶その頃の中川さんたちの活動の様子は『なかがわひろたかグラフィティ』～歌・子ども・絵本の25年～（旬報社¥1,６００）に詳しく書かれていて、日本の幼児の音楽歴史を知る上でも面白い。

あそび歌

月刊「音楽広場」は今までにない新しい音楽を僕ら保育者に伝え続けてくれていた。それまで形式になんとなくとらわれていた僕は目から鱗が落ちるような記事をむさぼり読んでいた。画期的な記事が満載だった。
「新しい子どもたちの歌」
「今月のうた」
「音楽あそび」
「子どもたちのすきなヒット曲」などジャンル分けされた曲の楽譜が付録でついていたり、保育専門誌、音楽教室などの専門誌とは一線を画して子どもたちが音楽を楽しむための特集も新しかった。

その中に「あそびうた」というジャンルがあり、このジャンルのパイオニアでもあるクニ河内さん、湯浅とんぼさん、峯陽さんなどの曲と一緒に福尾のぼさんのあそび歌が掲載されていた。

福尾のぼさんはトラや帽子店のメンバーとなる前は、三島市役所勤務の公務員で、仕事の傍ら子ども会や保育者の研修会でリクリエーションの指導をしたり自作のあそびうたを披露していて知る人ぞ知る業界の芸人だったらしい。（その頃の野歩さんを知らない・・・）

トラや帽子店を結成する６年前の1981年には「福尾くんのあそびうたあつまれ」（ばるん舎）という本で、全国の保育現場で口伝のような形で受け継がれ、地方地方で展開してきたあそび歌（わらべ歌が発展したようなもの）を集めて図解入りで発行している。
その後、1986年の幼児と保育という業界誌のふろく「野歩さんとあそぼ」のあそび歌特集では“うたあそび人”という肩書きで紹介されている。

中川＆新沢コンビの新しい歌が世の中に出ると同時に、福尾のぼさんの「あそび歌」もこの頃ジャンルを確立したのではないだろうか。

今や還暦を過ぎた福尾のぼさんだが、園コンサートに来てもらって、乳児クラスと幼児クラスの２日に分けてあそびうたコンサートを毎年公演してもらっている。

野歩さんのあそび歌が子どもたちに受けるのは、聴くだけでなく参加することが楽しい時間が過ごせるからだ。乳児クラスは、０～年少児の子どもたちが参加するが、この年齢の子どもたちが約45分集中してコンサートを楽しめるのは、野歩さん以外に知らない。

あそび歌を楽しむ

それまでも保育の現場では必須スキルであった「わらべ歌」「手あそび」に、よりダイナミックに遊べる「あそび歌」が加わったことで、子どもたちと音楽をぐーんと近づけた。

あそび歌は、幼児の音楽には欠かせないと思う。歌を触媒とすることで、隣の人と手をつないだり、触れ合ったり、ギャグを楽しんだり、子どもたち同士や保育者と繋がったり楽しんだりすることができる。

一つ付け加えなくてはならないのは、僕が男性保育者だから、おそらく福尾野歩さんや中川ひろたかさんの作ったあそび歌がしっくりくるんであって、女性の保育者に合うかどうかは演じる保育者のキャラによって変わってくると思う。

僕自身が、ケロポンズの増田裕子さん作のあそび歌や女性の作家さんが作った曲をやっても、いまいち子どもたちに受けなかったり乗ってこないので、それぞれ保育者自身の性別やキャラや嗜好によって、自分に合うあそび歌を選ぶと良いのではないかと考えます。

僕は毎月の誕生会で、年中長の子どもたち約100人を前にしてあそび歌を歌わせてもらっているけど気づけば12年目になる。誕生会が始まる前の楽しい予感を醸し出す前座だから約10分で導入からある程度みんなで歌って楽しむことが目的だ。そのためいろんなあそび歌を試してきた。同僚の保育者と一緒に歌ったり、ジャクエツという保育業者の営業マンの人にギター伴奏を弾いてもらったりして続けてくることができた。

このたった10分の時間で覚えた歌を子どもたちは結構口ずさんでいるという。音楽の楽しさは、あそび歌を楽しむことからも伝えていけるのではないかと思って続けている。

譜面を載せるわけにいかないので、興味のある方には参考図書を紹介するので、ぜひご自分で子どもたちとあそび歌を楽んでほしいと思う。

▶福尾のぼ著「あそびうた大全集」
（1991年クレヨンハウス¥3689）
あそび歌を「まねしてあそぼう」「さわってあそぼう」「うたってあそぼう」「うごいてあそぼう」という４つのパターンに分けて編集されており、合わせてＣＤも発売されたことで、とても現場で使いやすい教材となった。この本でほとんどのあそび歌のパターンが出尽くした、野歩さんの集大成と言っても過言ではないと思う。その後に若いあそび歌の作家さんが次々と登場して活躍しているけど、基本的なパターンは野歩さんが作ったものに集約されているように感じる。僕がいちばん活用している本です。我が子が小さい頃は車で移動中は常にＢＧＭとして聴いていました。

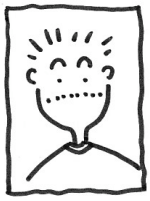
▶福尾のぼ著「福尾くんのあそびうたあつまれ」
保育現場で歌われてきた口伝を採譜してまとめた先駆的なあそび歌の本。
（1981年ばるん舎¥1,000）
オーソドックスな定番あそび歌を野歩さん流振付で紹介するとともにのぼさんオリジナルを掲載。

▶中川ひろたか著「あそびソングブック」
（2000年ひかりのくに¥1,500）
動きより先に歌がある感じなので「歌あそび」になるのかなあ、楽しい歌がいっぱいあって皆で歌うのに楽しい。動きの付いたものもあるけれど、わりとアバウトなので自分で考えても良いでしょう。曲はあそびうた大全集と重複したりしている。別売りでＣＤ有り。

▶湯浅とんぼ・中川ひろたか著
「とんぼ＆ピーマンのあそびうたクラブ」
（2003年チャイルド本社¥3,200）
比較的新しい教材本はＣＤブックが多くなり、曲のイメージがつかみやすくなった。
比較的短く単純な曲が多いので、新学期～１学期。年少組で使うことが多い。

▶藤本ともひこ＆中川ひろたか著
（2005年　世界文化社￥3,500）
保育雑誌プリプリの関連本としてＣＤ付きで発行された。「まっすぐなこどものうた」というコンセプトで作られ、シンプルなメロディーと楽しい歌詞でいい歌が満載！あそび歌というより、歌あそび。歌うだけでも楽しいけれど、僕らはオリジナルの振りを付けて音楽会のオープニングに元気づけで歌ったりしている。№１～３まで３冊発行されているので、その中からチョイスして歌っている。

　ついつい古い資料の紹介や懐古趣味みたいな内容になってしまったが、あたらしいこどもの歌黎明期ともいえる時代の情熱やアイディア、勢いが感じられるので、今でも若い保育者に伝えて子どもたちと歌っているが、ちっとも古びた感じは無い。もちろんこのほかにも紹介したい曲はたくさんあるがまた機会があればにしましょう。
　最近、原町幼稚園の教員たちは曲をYOUTUBEで探すことが多くなった。その中で気に入った曲があればダウンロードしたり、ＣＤが楽譜を購入するというパターン。音楽全般がそんな流れになっているので、そうなんだなあ、と思う。子どもたちも次に音楽会で演じる曲をＣＤで聴いたり、ネットで見たりしている。それはそれでイメージが持ちやすいが、保育者のオリジナルを生み出す力はちょっと落ちてきているのかなあ～とも感じる。
　あそび歌というジャンルを確立した福尾のぼさんは「あそびの例は示すけど、あとは現場でどんどんアレンジして楽しんでくれ！」と言っている。それがあそび歌の本質なのだろう。



原町幼稚園　園長　鶴谷主一（2017年現在）
1960年生まれ
1979年　都農聖愛幼稚園（宮崎県実家にて助手勤務）
1984年　彰栄保育専門学校にて免許･資格取得
同年　　葛飾みどり幼稚園に教員として勤務
1989年　オイスカ香港日本語幼稚園に主任として勤務
1991年　原町幼稚園（妻の実家）に勤務
2002年　原町幼稚園園長として勤務→現在園長歴15年
ＨＰ：http://www.haramachi-ki.jp/
MAIL：office@haramachi-ki.jp
Twitter：@haramachikinder

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「幼稚園の現場から」ラインナップ
第１号　エピソード（2010.06）
第２号　園児募集の時期（2010.10）
第３号　幼保一体化第（2010.12）
第４号　障害児の入園について（2011.03）
第５号　幼稚園の求活（2011.06）
第６号　幼稚園の夏休み（2011.09）
第７号　怪我の対応（2011.12）
第８号　どうする保護者会？（2012.03）
第９号　おやこんぼ（2012.06）
第10号　これは、いじめ？（2012.09）
第11号　イブニング保育（2012.12）
第12号　ことばのカリキュラム（2013.03）
第13号　日除けの作り方（2013.06）
第14号　避難訓練（2013.09）
第15号　子ども子育て支援新制度を考える
第16号　教育実習について（2014.03）
第17号　自由参観（2014.06）
第18号　保護者アナログゲーム大会（2014.09）
第19号　こんな誕生会はいかが？（2014.12）
第20号　ＩＴと幼児教育（2015.03）
第21号　楽しく運動能力アップ（2015.06）
第22号　〔休載〕
第23号　大量に焼き芋を焼く（2015.12）
第24号　お話あそび会その１（発表会の意味）
第25号　お話あそび会その２（取り組み実践）
第26号　お話あそび会その３（保護者へ伝える）
第27号　おもちゃのかえっこ（2016.12）
第28号　月刊園便り「はらっぱ」（2017.03）
第29号　石ころギャラリー（2017.06）
第30号　幼稚園の音楽教育（その１）
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

福祉系対人援助職養成の現場から㉛

西川　友理

A さんの場合

その日、ボランティア先から学校に戻ってきた A さんは開口一番、
「どうしよう、先生。やっちゃった。」
と言いました。

生まれて初めて、児童養護施設にボランティアに行った学生 A さん。小学校から帰ってきた子供たちの宿題をみた後に、夕食前まで一緒に遊ぶというボランティアでした。

どんなところだろうかとドキドキしながら飛び込んだ第一日目、想像していたよりもずっと歓迎されている雰囲気です。子ども達からの第一声こそ、「お姉ちゃん誰？何しに来たん？」と、つっけんどんではありましたが、実習生慣れ、ボランティア慣れをしている子ども達だったようで、A さんは色んな子ども達から声をかけられ、一緒に宿題をし、遊び、楽しい時間を過ごしました。

特に小学2年生のBちゃんはAさんのことをとても気に入った様子。他の子どもがAさんと遊ぼうとすると、「A姉ちゃん、なんで私と一緒に遊ばへんのっ！」と独占欲を見せてきます。困ったなぁ、どう対応しようかなぁなどと思いつつ、自分に愛着を示してくれるBちゃんに対して、まんざらでもないAさんです。

17時50分になりました。その施設の夕食時間は18時です。そろそろボランティアの時間は終わり、Aさんは帰ろうとしました。するとBちゃんが言いました

「A姉ちゃんは一緒にご飯食べへんの？」

「うん、お家に帰るわ。また来週来るからね。」

ふーん、とつまらなそうなBちゃん。そしてBちゃんは、Aさんの目を見て言いました。

「A姉ちゃん、お母さんおるの？」

Bちゃんの言葉を聞いたAさんは、「ぎくっとした」とのこと。そして一瞬止まった後、

「…さぁ、晩御飯やから早く手を洗いに行っといで！」

と洗面所に急かし、そのまま帰ってきたらしいのです。

「きっとAちゃんは私を試していたのだと思う。それに対して私、一瞬止まっちゃったんですよね。で、それからごまかした。これって、よくないことですよね・・・」

Aさんはずいぶん落ち込んでいます。

「なんか、試されている感じがした。どうしたらいいかわからんかったんです。」

「『うん、おるよ』なんて言ったら、傷つくかな…でも、嘘つくのもちょっと違うし…。」

「というか、一瞬止まった私を、Bちゃんは“見た”んですよね。私、Aちゃんにそんな姿を見せたんです。」

悶々と悩むAさんです。

Cさんの場合

Cさんはとある児童養護施設の1年目の職員です、子どもや同僚とのコミュニケーションにもやっと慣れてきたCさん。特にD君はCさんが大好きで、Cさんの言うことをよく聞く、とても利発な小学1年生でした。

ある時、Cさんが禁止している事を珍しくD君がやってしまい、Cさんを困らせた事がありました。D君と言い合いになるCさん。互いにヒートアップしていった末、D君が、

「せやんな！俺なんかもう自分で考えんと、ずうっと、もう一生、C先生の言うこと聞いてたらええんやもんな！」

と怒鳴りました。かっとなったCさんは、

「そうそう！そうやで、その通りです！」

と怒鳴り返しました。

その直後のD君の、冷たい表情。Cさんは一生忘れられないとのこと。小学一年生がそんな顔をするのか、というような冷たい目だったとのことです。うろたえたCさんは

「…ちょっと、言い過ぎたわ。ごめん。や、そういうわけやないよな。」

と言いました。

D君はプイとCさんに背中を向けました。

翌日、D君はいつもどおり、Cさんに懐っこく接してきました。もしかすると普段よりも甘えていた様子。しかし、昨日とは

同じ気持ちでなかなか接することが難しいC さんでした。

「昨日の D 君の試し行動、私はとっさに答えたけれど、あれは、よくなかったよな…。でも、D 君からあんな調子で怒鳴られたら、こっちもカッとくるやん…D 君に言わされたようなもんや。あれは試し行動やんな。」

E さんの場合

E さんはアルバイト先の施設にいる F ちゃんの行動にほとほと困っていました。F ちゃんはちょっとしたことで癇癪を起こし、E さんが困るような言動をします。

最近の F ちゃんは、宿題をしている最中に、漢字書き取りの量が多いとか、算数がわからないとか、E さんが F ちゃん以外の子どもの問いかけに答えたとか、とにかく少しでも F ちゃんの気に障る事があると、ムスッとしながらエンピツを床に落とします。

「E、うちダルいわ。こんなん出来へん。」そう言ってふてくされる F ちゃんです。

E さんは F ちゃんをなだめすかしてエンピツを拾い、F ちゃんの机の上に置きます。しばらくするとまた F ちゃんはエンピツを床に転がし、ふてくされ、E さんがエンピツをひろってなだめすかす。何十回と繰り返されるエンピツ落としに、E さんはどんどんうんざりし、エンピツを拾いあげる時にため息も出てきます。

しかし、ある時 E さんは、F ちゃんが施設の職員や E さん以外のアルバイトにはそのような態度をとらないという事をボランティア担当職員から聞きました。F さんはそれを聞いて少し優越感のようなものを感じました。

「F ちゃん、職員さん達にもそういう甘えを出せないんだな…しんどいけど、私が受け止めてあげなきゃ。でもこれっていつまで続くんやろか…。ほんまはちょっと、いやかなり、うっとおしいねんけどなぁ…。」

今日も何十回と嫌々エンピツを拾うんだろうなと考えると、アルバイト先に向かう足が重くなる E さんです。

子どもに「試されている！」と感じる時

自分が子どもから試されている、と思う時はどんな時なのでしょうか。

「試し行動」という言葉があります。これは、子どもが自分をどこまで受け入れてくれるか確かめるために、わざと相手を困らせるようなことをしたり、わざと怒らせるようなことを言ったりすることを指します。児童福祉の現場ではよく聞かれる言葉です。

しかし私は、試し行動と言われる行動が、果たして全て子どもの思いによってのみ成り立っているのかといつも疑問に感じます。

子どもが「わざと相手を困らせるようなことをする」と言いますが、本当に「わざと」なのでしょうか。

試し行動は、その子どもに“無意識的に相手の愛情を確認したい行動を選択する心の状態”があると推測され、これに基づくと考えられる行動をとった時に、その行動に対してどう対応するといいのか困る支援者がいる、という構造になっています。

だとするならば、世の中にある「試し行動」という言葉で表現される行動は、その

全てがする方が「試そう」としている行動だとは言い難く、された方が「試されている」と感じただけの行動も結構あるのではないかと思うのです。

「試し行動」は主観的表現ではないか

今回この文章を書くために試し行動の定義を調べようと、CINII や J-stage といった論文検索サイトで文献を探しましたが、あまり明快な定義を見つけることが出来ませんでした。

試し行動について書かれたエッセイのようなものや、子どもに関わる人に対するアンケート項目の中などにはいくつか見られるのですが、試し行動そのものについて書かれた論文自体が大変少ないのです。これは少し考えればわかる事で、「試した」「試された」あるいは「困った」「困らせた」ということはその場にいてその行動に関わったその人そのものが主観的に感じとるものであるために、論文の題材として分析できる客観的データとして取り上げにくく、論文などにしにくいためであろうと考えられます。それにもかかわらず、現場では本当によく聞く言葉です。

試し行動という言葉は、子どもを支援する側の者から主観的に名付けた行動であると言えます。しかし、その時その場における状況は、子どもをだけが作り出しているのではなく、支援者だけが作り出しているのでもなく、その 2 者のやり取りの中で生まれます、ということは、試し行動といわれる行動をとる子どもの心の背景に迫る事も大切ですが、同時に支援者が「試されたと感じた時の、自分自身の認識を見つめる事」も必要であると思うのです。

なぜ「試された」と感じるのか

「試された」という言葉にはどこか被害者意識の匂いがします。「試される」のはあまりいい気分ではありません。子どもから「試された」と感じ、困り感を持つ時、人はとっさに相手をねじ伏せようとしたり、十分対応出来ずにごまかそうとします。あるいは相手は年端もいかない子どもなのだから（ものを知らずに行動しているに違いない）…と考えたり、場合によっては可哀そうな子なのだから（わがままなことを言っても受け止めてあげないといけない）…と考えたりした上で、次の行動に出ます。

全てがそうだとは言い切れませんが、相手との関係性において試されているとか、困難を感じるとかいった時、実は自分の心にある抵抗を「この人は私を困らせようとしている！」と相手の行動に責任転嫁している事があるように思うのです。

特に子どもからの行動に対しては、その子どもとの関係において、自分の「相手よりも上位である大人の立場」を脅かされる事態が発生すると、支援者は混乱しやすくなるのではないでしょうか。その行動は子どもと自分自身の関係において発生しているのに、子どもの背景に迫る等の原因探しばかりをして、自分を計算の外に置いて考えることで、自分が思い込んでいる「相手より上位である大人の立場」を無意識に守ろうとするようなことがあるように感じるのです。

さらには、相手より上の立場であろうとすればするほど、どんどん疲弊してしまう

ように思います。相手より上の立場とは、あからさまに相手を見下し、軽んじた行動をするといったことだけを指すのではありません。子どもに対して強く正しく、自分が色々と助けてあげないといけない立場であると思い込む事もまた、子どもを自分よりも下の立場と認識することになる可能性があります。その認識を自分の自信を保つ手段として利用し、自分自身の自信のなさを守ろうとしているような時です。

しかし、大人は子どもよりも上の立場であるという考え方には何の根拠もないのですから、その立場を誇示しようとすると様々な場面で矛盾が生まれ、支援者の方が疲弊してしまうのは当たり前です。

つばさ園の実践

『子どものニーズをみつめる児童養護施設のあゆみ　つばさ園のジェネラリストソーシャルワークに基づく支援』という本があります。これには、京都にあるつばさ園という児童養護施設の実践が書かれてあります。これを読むと、つばさ園はその昔、体罰が当たり前だった時期があり、そこから膨大な試行錯誤を重ねて、現在では権利擁護と民主主義に貫かれた実践が行われている事がわかります。

この本にはたくさんの子どもの事例が書かれており、その中には世間一般には試し行動と呼ばれる行いについても書かれています。職員は、それらに対して困っていないわけではなく、またその背景に何があるのか考察していないわけでもありません。「（日々、子どもから）職員は試されています」という一言はありましたが、その行動が発生した時、子どもの行動に対して、「大人であるからという理由で上位に立とうとしていない」ということを強く感じます。子どもと向き合って話し合い、職員の思う通りになる結果ではなく、子どもに納得させることだけを目指した結果ではなく、子どもと職員が話し合い、ともに子どもが成長していく事を目指していることがわかります。子どもに対して、一人の人間としての敬意をもって接する姿勢が貫かれています。

またその実践のために、職員の人権がきちんと守られる文化が施設内にあり、職員同士はもちろん、職員と子どももまた、学び合う関係が自然に出来ている事がわかります。変に自分の立場を意地を張って保たなくとも、ありのままの自分自身でいて良いと大人も子どもも安心しているからこそ、向き合って話し合いが出来る環境になるのだという事を強く感じました。

１対１の人間同士として向き合うための安心感

アドラーは、人間のあらゆる悩みはタテの人間関係（支配←→被支配関係）に起因すると言っています。

一方で、社会性を持って動く時に、何らかのヒエラルキーや役割分担が発生し、リーダーシップが生まれ、それから自然と上下関係が生まれるスタイルに慣れきっている私たちです。そして、子どもというものは「守られなければ生きていけない、力なく考えの浅い存在」という視点に慣れている私たちです。

最近でこそ、児童の権利に関する条約等

により、子どもの能動的な意見表明を尊重する考え方は広まってきていますが、まだまだそのような場面は少ないと感じます。「力なく、モノを知らない子どもを守ってあげたい」という思いをもって、しかしその実はそのような力ない存在に影響を与えられる自分という安心と自信を得るために、子どもと関わる仕事を選んでしまう人もいると思います。

このような社会に慣れてしまった人が、1対1の人間同士として、子どもと話を向き合って話をすることは、よほど意識しないと難しいことかもしれません。しかし、支援する側の者が人間としての安心と自信を手に入れると、子どもと対等に話し合う感覚を手に入れることは、何かのきっかけさえあれば、そう難しい事ではないのかもしれません。

その後のAさん

「A 姉ちゃん、お母さんおるの？」と聞かれたAさん。その後、色々と自分なりに考え、実践を重ね、ある日、私に言いました。

「あれは普通に『おるよ』って答えたらよかったなと思う。普通に聞いてきたんだから、普通に答えるだけでよかったと思う。何か、自分で勝手に敵を作っていた感じ。」

そう言った彼女は今、障害児福祉の分野で、日々ご機嫌に働いています。

参考文献：

大江 ひろみ　石塚 かおる　山辺 朗子 著『子どものニーズをみつめる児童養護施設のあゆみ　つばさ園のジェネラリストソーシャルワークに基づく支援』　ミネルヴァ書房　2013年

境界あれこれ

6

～　過保護と程々　～

かうんせりんぐるうむ　かかし

河岸由里子

はじめに

子どもを育てる時、ついつい手や口を出してしまうということはどの親にも見られる行動だと思う。幼児期、よちよち歩きになれば、危ないことが無いように気を付けるのは当たり前である。一体いつ頃まで、どの様に、手や口を出していけばよいのか？あるいはどこから手を引けばよいのか？成長過程にある子どもたちの様子に合わせた関わり方とはというところについて考えてみようと思う。

乳幼児期
「安全に気を付けながら見守り、何でもさせてみる」

人間の赤ちゃんはかなり未熟な状態で生まれてくる。母乳やミルクを与え、おしめを換え、沐浴させて体の保清を心がけ、ミルクの量、体重の増加、元気の良さなどから赤ちゃんの健康状態をチェックしていく。当然、手も目もかける話になる。

ただその時期であっても、泣いたからすぐ抱く、泣いたからすぐミルクや母乳を与えるというものでもない。泣くことは赤ちゃんにとっての運動にもなる。従って少しは泣かせることも大事である。ところが、近所への遠慮や寝ている夫等家族への配慮で、極力泣かせないようにと、少し泣いたと思ったら口をふさぐおしゃぶりを与えたり、抱っこや母乳を含ませるなどを繰り返していれば、赤ちゃんは直ぐに泣くようになることも多い。

ある母親が赤ちゃんを泣かせていたら、近所の人がピンポンと玄関ベルを鳴らしてきたので、何かと思ったら「赤ちゃん泣いてるけど大丈夫？なんでも手伝うから言ってね」と言ってきたそうだ。訪ねてきた人は良かれと思って来たのだろうが、尋ねられた母親の方は、泣き声がうるさかったか

らだと思い、以来泣かせないように必死になっていると言っていた。あまり泣かせていると通報されることもある昨今、母親たちが泣かせることに過敏になるのは分かる。しかし、少し泣かせることも、実は大事なのだと伝え、ピンポンと来ても、「大丈夫です。有難うございます。何かの時にはお願いに行きますから。」と言っておくと良いのではと伝えている。そうすることで、訪ねてきた方も、何かの時には頼ってくれると思えるし、嫌な気分にさせずに済むだろう。近所との関係性も保たねばならないから、中々大変である。

さて、赤ちゃんも少し大きくなってくると、おもちゃをなめたり振ったりしながら遊んでみたり、声を出して楽しんだり、メリーゴーランドなどを目で追ったりして遊べるようになってくる。ちょっとの時間に家事をしなければならないので、赤ちゃんが一人で遊んでくれているのは有難いかもしれないが、あまり一人で遊ばせておくのも問題である。ここでもそばで見守り、声を出したときに声を返してあげたり、おもちゃをなめたり振ったりしている時に、おもちゃが手から落ちてしまったら、手につかませてあげたり、ちょっと声を掛けてあげたりということは、あった方が良い。早くひとりの時間を持ちたいという親の気持ちもわからないではないが、もう少し我慢して、ゆったりと流れていく赤ちゃんの時間に合わせて、そばで見守ってあげてほしいと思う。つまりこの時期は、哺乳やおしめの交換等に加えて、口や手を出すことが必要となる。家事をしながらちょくちょく赤ちゃんの様子も見えるようにしておくとよいだろう。

赤ちゃんにお座りができるようになると、関わる内容が変わってくる。向き合って座って間におもちゃを置いてやり取りしたり、お膝に抱っこして遊んだり、揺らしたり跳ねたりという少し大きな運動も喜ぶようになる。ガーゼのハンカチやハンドタオルなどでいないいないバーを楽しめるようになるのもこの時期。向き合って親子で楽しめるとても良い時間が持てる。赤ちゃんに何度もガーゼのハンカチをかぶせたり、おもちゃを手渡したり、もらったり、笑ったり、声を掛け合ったりと、赤ちゃんにとって親の存在がしっかり他の個体として認識され始める時期で、人と関わることの楽しさの基本生成上とても大切な時期である。

そして、這い這いで移動できるようになり、つかまり立ちや伝い歩きと言った動きができるようになってくると、赤ちゃんは親の後追いなどを始め、動く範囲が増大し、興味関心がどんどん広がって、いたずらが増える時期でもある。

この時期には危ないものを届かないところに上げるなど、安全を守る行動を親は取らねばならない。伝い歩きやつかまり立ちで転んでも大丈夫なようにと、マットなどを敷く人もいる。

ある母親は移動されることが大変だからと、這い這いをしようとすると押さえつけたり抱っこしたりしていた。その結果這い這いが遅れてしまい、つかまり立ちも遅れた。

赤ちゃんは自分がお座りできるようになるころから、視界が広がり、色々なものが良く見えるようになる。立てばもっと視界が広がる。その様な中で、興味を持ったものを確かめようと動く。触ろうと動く。そうして移動が上手になっていくのである。従ってこの時期は、動けるスペースの確保が大事になる。いつまでもベビーベッドの柵の中にいさせたのでは運動能力の発達は不十分になるだろう。

この時期ケガするからとか、誤飲が心配だからとか、見ていられないからとか、親の都合でずっと抱っこやおんぶで過しているのは、過保護な対応となってしまう。赤ちゃんは転びながらバランスをとることを覚え、転びながら、上手に転べる術を獲得している。なんでもそこで手を出してしまっては発達阻害を巻き起こしかねないのである。

また、転んだ時に、親が「あ！」と大きな声を出すと、大して痛かったわけでもないのに大きな声でびっくりして泣くようになったりもする。最初は親の声に反応しただけだったが、その後繰り返し転ぶ度に泣くようになったということも良

くある話だ。転んだ時に、「あらあら」とか穏やかな声で声掛けをすると、転んだらすぐ泣く子にはならないことも多い。

ひとりで歩けるようになってくると、行動範囲が一気に広がるため目が離せなくなる。家の中でも、気づくととんでもないことをしてくれたりする。２歳前後までは言葉での指示ではわからないことも多く、一番手のかかる時期でもある。しかし、子どもたちは親の行動をとてもよく見ていて、真似ようとする。上手に真似られる行動もあれば、上手くできない行動もある。そしてこれ以降になると、もっとできることが増えてきて、なんでもやりたがる時期が来る。

この時期に大事なことは、出来ることをさせてみることや、ちょっとの失敗なら失敗させてみるということである。

コップに水を入れたがるのもこの時期から始まる。最初はお風呂の時に練習させればよい。濡れても大丈夫な状態なのだからどんどんさせてみよう。そうすれば上手になる。上手になってきたら、こぼしても良いようにして、テーブルの上でコップに水を入れさせてみる。ジュースや牛乳の場合もあるだろう。そうしてこぼしても、「あ～またこぼして～！」とか「もう！」とか言うのではなく、「こぼれちゃったねえ。じゃ一緒に拭こうか？」などと言いながら片付けていると、子どもは失敗することをあまり恐れなくなる。それは無鉄砲にするということではないので、危ないことについては手や口を出すべきだが、何でもかでも禁止や制止をするべきではない。

跡片付けが面倒だからと手を出していれば、自分でやろうとしなくなるし、失敗をなじられてばかりいれば、失敗を恐れる子になるだろう。

２歳と言えども、出来ることはある。できることをさせ、多少の失敗を想定していれば、目くじら立てて怒ることも無いだろう。

こうして少しずつできることをさせていくのがこの時期大事である。それが子どもの自立心や自信に繋がっていく。幼稚園に行く頃になれば、自分で靴下や靴が履けたり脱げたり、ボタンやチャックを掛けられたり、ごみ捨てや洗い物など簡単なお手伝いもできるようになってくる。自分のことは自分でと、厳しく育てられている子は、かなりのことができるようになる。

例えば、小さいころから手伝いをさせられている子は、５歳でも簡単な料理が出来たり、赤ちゃんの面倒を見たりできる。このあたりから、子どもたちの個体差が大きくなってくる。経験したことの無いことにチャレンジする子としない子の違いは、やはり親がどれほどチャレンジさせているか、また失敗をなじらず、成功を認めているかにかかっていると思う。年長さんになれば年少さんの面倒を見ることになっている幼稚園や保育所もある。

幼児期の親の関わり方は、子どものやる気や興味関心、自尊感情や自信にとても大きな影響を与えると思う。だからこそ手や口の出し過ぎは控えたい。親の都合でやっていることの大半は手や口の出し過ぎと思うとよいかもしれない。

小学生

「ルール内でできるだけ一人でやらせて、できたら褒める」

小学生ともなればかなりのことができるようになる。しかし、１年生の間は、幼稚園や保育所とは異なる環境でもあるし、親子ともども不安になっているので、どうしても親の口出しや手出しが多くなる。時間割をそろえる、持ち物の点検、服装管理、宿題や家庭学習など、親の手助けが必要なことも多い。毎日帰ってくると「友達出来た？」「勉強解る？」「発表しているの？」と質問攻め。給食が始まれば、「ちゃんと食べた？」となる。運動会の練習が始まれば、「駆けっこ何番だった？」等々。初めての参観日は親も不安の中であろう。質問攻めになる子どもの身にもなってみよう。負担にしかならない。

日々の準備や家庭学習などの一切を親がやる家も多い昨今だが、それではやりすぎである。最

初は一緒にやり、徐々に見守るようにして出来たことを褒めるようにすれば、どんどん自分でやれるようになるだろう。できないだろうと親が勝手に決めて、手出し口出しを続けていたら、いつまで経ってもできるようにはならない。例え発達障がいがあっても繰り返しやることでできるようになることはたくさんある。

世の多くの親は２年生になったとたんに「もう２年生なんだから自分でしなさい」という。学校の先生方も、１年生の時は手取り足取りの雰囲気が強く、支援員さんも多く入っていたりと手厚いが、２年生になったとたんにガラッと変わってしまう。ある意味放っておかれることが増える。そうなると子どもたちの問題行動が増えてしまう。１年生と２年生の間にはっきりとした境界でもあるのかと思われるほどだ。子どもたちにも２年生になったという自覚を育てることはもちろん大事だが、急に態度を換えられてしまうと戸惑ってしまうだろうことも想定すべきだろう。

子どもたちにとってこの時期大事なことは何かと言えば、忘れ物をして先生に怒られたり、みんなの前で恥をかいたりしながら、自分のことを自分でやる大切さを覚えるということだ。なんでも親任せにしていれば、忘れ物は親のせいとなるだろう。これでは自立に結びつかない。

小学校低学年では、宿題や家庭学習、授業道具の準備、体操服、鍵盤ハーモニカ、給食袋など、必要なものの準備は自分でさせ、確認だけする。もちろん子どもからの相談にはのるし、質問に対しても一緒に調べるか、或いは即座に答えることもある。又最近では家の中が過ごしやすい温度になっていることもあり、外の温度や天気に合わせて服を選ぶということが難しいこともある。そういう場合は、親の一言が必要になるだろう。まだまだ手や口を出す機会が多いのが低学年だろう。歯磨きやふろの使い方などの確認も、この時期までは必要かもしれない。そして、危険な目に遭わないためのルールをしっかり決めておく必要はある。

高学年になってきたら、手や口を出す機会を減らしていく方が良い。うるさく質問することも嫌がられる。思春期に入ってきているからで、自分のことを自分でやりたい、自分でやれるという思いが強くなる。この時期気を付けなければならないのは、子どもが面倒くさがって親の手助けを求めるときに、親が乗らない事である。最近の子どもたちは面倒くさがり屋さんが多い。何かを調べる、準備する、片付ける等、家庭でも学校でもやらなければならないことは沢山あるが、遊びたい、ゲームをしたい、テレビを観たいが優先されて、大事なことがなおざりにされる。

親はこの時期から手よりも口出しが多くなる傾向がある。「宿題やったの？家庭学習は？」「明日必要なものはないの？」「必要なものは早く言っておいてよ！」「お手紙ない？」「はやくやりなさい、早く、速く」等々。口うるさい。あまりうるさく言われると、「うるさいなあ、今出そうと思っていたんだよ！」とか「今やろうとしていたのにやる気が無くなった！」などと口答えも始まる。こういう時期は一つの境目である。「うるさいなあ」と言われるようになってきたら、極力言わないようにし、自己責任でやらせる方が良い。そして、出来なくて自分が困っても手伝わない事である。夜遅くまで宿題を手伝ったとか、夏休みの宿題や自由研究などを親が手伝っているのを良く見聞きする。子どもの宿題を親がやってどうするのか？アイデアを一緒に考えるとか、出来ないところを教えてあげるくらいならともかく、全部親がやって出したなどと聞くと、何のための宿題なのか、自由研究なのかと思ってしまう。

高学年ともなれば、身の回りのことは殆どできるようになる。服装の選択もできるので、親は洗濯だけしておけばよい。家事も少しずつ手伝わせていれば、料理でもなんでも大人と変わりなくできるようになる。要は経験値である。やらせていればできるのだから、やらせればよい。やけどをするかもしれないし、手を切るかもしれないが、それを親が怖がってさせないでいればいつまでもできるようにはならない。学校でも家庭科で包丁を持つ時期でもあるので、どんどんやらせてい

こう。

色々な経験をさせたり、知識を与えることで、自分が将来何になりたいか、何に興味をもてるかなどに気づくきっかけができる。旅行や色々な行事への参加もできる範囲でどんどんすべきだろう。

但し、この時期以降は、全く手ばなしで良いということではなく、危険な情報や危険な人からどう自分を守るかについて、スマホやパソコンを使っている子に対しては厳しく指導しなければならない。目や手を放してよいわけではないのである。見慣れないものがないか、様子がおかしくないかなど、子どもの持ち物などもきちんと確認しておく必要はある。そういう意味では子ども部屋は親が自由に入り、片付けたりできる必要がある。

一人部屋を持つのは、中学生くらいからでよいが、兄弟関係とかいろいろな事情で小学生から一人部屋を持たせている家も多い。小学生の間はできるだけオープンな部屋が良いだろう。

中高生

「干渉手出しは極力減らし、子どもを信じ、自分のことは自分で悩み決めさせていく」

中学生くらいになると一人部屋の必要性もでてくる。親に対する秘密を作るのもこの時期であり、それも発達過程の一つなので、ある程度認めざるを得ない。

子どもを大事に思うあまりか、中学生や高校生の子と一緒に寝ている親に度々出会う。異性であってもお構いなしだ。家族全員でお風呂に入るという家族もあるが、それがその家のルールで小さい時から慣れていると何も不思議に感じないのかもしれない。しかし、年頃になれば、娘は父親と一緒にお風呂に入ることや同じ布団で寝ることに抵抗を感じるのが一般的である。このころからは、明らかに境界が引かれるべきである。子どもへの干渉や強要、手出し口出しを一気に減らしていかねばならない。

中高生では勉強や成績、部活動など、ついつい親が口出ししたくなることがあるし、人間関係や生活態度、行動についても文句や叱責が増える時期でもある。もちろん未成年なので、手出し口出しは減らしても目を離すことはできない。最近は不純異性交遊も多いので、男女の関係にもある程度過敏になるのも、親として仕方がない。しかし、日々問題行動のかけらもない子まで、うるさく監視したり口出しすれば、そういうつもりがなかった子が、間違った方向に動いてしまうこともある。心配だからと子どもの持ち物を確認し、日記帳を盗み見する親もいた。そんなことをしていたら、子どもは家出をしてしまうかも知れない。

いじめに過敏になり、自殺に過敏になり、或いは男女関係、万引き、SNS 等心配になるニュースがあふれている中では過干渉にならざるを得ないのかもしれないが、やはりここは、子どもを信じ、過干渉にならないよう気を付けるべきと思う。幼児期からずっと、自分や生き物の命を大事にすることや、人に迷惑をかけない事、法律を守ることなど、基本的なルールを伝えていれば、この年代になった子どもは余り馬鹿なこともしないし、困ったときに話せる関係性を親子の間で築いていれば、そんなに干渉しなくても大抵は大丈夫だろう。

この時期もう一つ大事なことは、自分のことを自分で考え受け止め、悩み、行動し、失敗し、立ち直る経験を繰り返しておくことである。その為には、親が先取りをしたり、行動を決めたり、失敗しないようにと導くことはしない方が良いだろう。それが子どもの精神的自立に向けての大きなステップになる。

高校卒業後

「親からの自立を促す」

高校を卒業したら、大学や専門学校或いは就職かに関わらず、出来るだけ一人で生活させ、親からの自立を物理的にも促すことが必要になる。家

から大学や専門学校に通う場合も、自分のことは自分でさせること。子どもから言って来ること以外は余り根掘り葉掘り聞いたりしないこと。もちろんそんなに色々聞けば子どもが嫌がる。しかし時折、良い子を続けて、嫌がる様子を見せず、小さい時から変わらぬ素直で親好みの子でいようとする子がいる。これは決して子どもにとっても親にとっても良いことではない。あまり物分かりの良すぎる親でいると、子どもは反抗することも無く、壁を破るという行為をしないまま大人になんとなくなってしまうのではないかと思う。薄いか厚いかの差はあるかもしれないが、大人になる・自立するための壁があって、それを自分の力で破れると自信につながるのではないか。その壁を作ってあげることが親の務めである。

まとめ

こうしてまとめてみると、過保護と程々の境界は、その時代時代で違うが、要は子どもの成長を考え、自立を考えて行動するかどうかによるということになるのではないか。程々より放っておくことになれば今度はネグレクトとの境界を考えることになるだろう。

過保護は、子どもの自立を妨げるだけではなく、精神的成長や失敗に対する耐性や、やり直す勇気を殺いでしまう。そしていつまでも親から乳離れできない子にしてしまう。多くの子どもたちが、未熟で幼いまま親になって行っている今の時代、乳幼児期から大人になるまでの間の親の関わりを今一度考えねばと思う。親は、子どもを中心に子どもの成長に応じ、物理的にも精神的にも徐々に離れて行くべきで、その距離が遠すぎず近すぎず程々であることが求められる。程々ほど難しいものはないが、子どもができること、出来そうなことに気づき、手出し口出しをせず、見守ったり、応援したりする姿勢ができれば、それが恐らく程々なのではないかと思う。

対人援助学マガジン第 31 号

生殖医療と家族援助

家族形成のための支援カウンセリング

～「子どもの出自」を問うということ～

荒木晃子

ことばの刃

前号の終わりに記述した以下の仮説がその後脳裏から離れず、今号に至る。

「親が自分を産むためにドナー女性を犠牲にし、その身体を傷つけた。選択した（不妊）治療のせい（原因）で、世論の批判を浴び、結果自分が生まれたことが（社会）問題になった」

うえは、今年、“ドナーからの提供卵子”で子どもが誕生したことへの世論を、その子が成長した後に知り、感じる（かもしれない）心情を危惧した仮説である。

筆者はいま、自然生殖を“善し”とし、生殖医療による妊娠を否定的にとらえる論者に対して、反対に問うてみたい思いに駆られている。「あなたの子どもの配偶子は、誰と誰のものですか。その子を、何処でどの様にして妊娠したのですか。」と。現状、日本国内で、返答によっては“意見されるかもしれない我が子の出自”を問われるのだと感じた際、迷うことなく答える勇気を筆者は持たない。

果たして、見ず知らずの他人に、先のように尋ねられたら、あなたはどう感じるだろう。ある人は、失礼だ！と怒りを覚えるかもしれないし、また人によっては、プライバシーの侵害ですと、反対にそれを問うた人を叱咤するかもしれない。他にも、日常の生活空間で共に生きる、ある一握りの人達の存在を忘れるわけにはいかない。その人達とは、目を伏せ、何も答えずその場を立ち去る、もしくは言葉を濁し真実を語ることを拒む人たちをいう。国内で、里子、養子の他に、不妊治療で生まれた子どもを育てる親たちは、その瞬間、たとえ表面上は冷静に対応できたとしても、少なくとも平常心でいることは難しいだろう。実際には、里親・養親となり子どもを育てる親以外にも、2015 年までに体外受精で生まれた“48 万人超の子どもの親たち”が、その“一握りの人たち”に相当する。

「子どもの出自」を問う社会

生殖医療施設に通院する不妊当事者は、自分たちに残された可能性に対し、医療者から提示される新たな治療に望みを託すのが通常である。しかしながら、未だ社会に容認されていない医療手段を用いて、幸運にも、妊娠/出産し我が子を胸に抱く喜びを得た当事者カップルには、必ずと言ってよいほどその見返り（？）が付きまとうといっても過言ではない。選択した新たな生殖医療技術（＝子どもが誕生するまでの一連の医療行

為）を否定する論客が現れ、彼らの意見を様々なメディアがトピックスとして取り上げ、専門家の意見として紹介するのはよくあることだ。生殖医療を肯定的に捉える社会とは言いがたい現状で、子どもの誕生までのプロセスの善し悪しを、例え専門家とはいえ、当事者以外が評価することは、果たして道理にかなう行為なのだろうか。ましてや、すでに結果として、子どもが生まれているのに、である。生殖医療で妊娠/出産することを肯定できないことは、子どもの誕生までのプロセスの善し悪しの評価である、としか思えない筆者には、いくら考えても納得できない言動である。

確かに、婚姻関係にある異性間（＝夫婦）で実施するタイミング法、人工授精、体外受精であれば容認できるとコメントする論者も存在する。彼らは、生殖医療技術についての知識を得たうえで評価していると推察するが、結局のところ、～は善くて～は善くないと評価することに変わりはない。また、精子、卵子、受精卵の提供や、代理母による懐胎といった「夫婦以外の第三者が関わる生殖医療は容認できない」とする論者が示す様々な根拠は、いずれも、いまひとつ説得力に欠けるものにしか思えない。なかには、すでに起きた問題を一例として、「このような問題が起きるから禁止」といった一見短絡的にも思える理由や、「日本の伝統的家族観が損なわれる」、「家族に混乱を招く」等の漠然とした理由を根拠にあげる者もいる。筆者にはそれらは全て、生殖医療を否定するための理由付け、もしくは、問題や責任を回避するための“そもそも論”にしか思えないのである。

人が起こした問題は、人知を結集して解決すればよい。たとえ医療であっても、家族問題であっても、そこに起きた問題の解法を探り、次は起きぬようそのシステムが変化するために努力を惜しむべきではない。そこに起きた問題は、過去の結果としていま表出した、未来への課題と考えるべきなのではないのか。ここで、「自然に子どもが授からないカップルが、誰かの/何らかの手助けを得て、何としてでも子どもを授かろうとするから問題が起きるのだ」と考える方々にご一考いただくために、次にあげる、生殖医療で生まれた子どもたちの声を届けたい。

評価が児に与える影響

生殖医療による妊娠・出産を否定的にとらえる言論は、結果として、不妊治療で産んだ/生まれた人々を否定することにつながるのではないか。本稿の執筆が始まって以降、このような懸念が頭から離れない。これは、これまでに講義や講演会などで生殖医療に関する話をした際、それを聞いた参加者から筆者に届いた感想やメッセージから感じるものでもあった。以下はその一部である。

・「私は体外受精で生まれた子どもらしいです。母は、どうしても自分で生みたかったといいますが、私は体外受精で生まれてきてもよかったのでしょうか？」

・「出来婚で 3 人の子どもを産んだ妹のときにはわからなかったのですが、姉の私は遅くに結婚したため子どもができず母に相談すると、『あなたは不妊治療で生まれたのよ』と言われました。不妊治療で生まれた私は、やはり不妊治療でしか子どもを産むことができないのかと不安です。ちなみに、自然妊娠で子どもを授かった妹も不妊治療で生まれたらしいです」

・「私の両親は離婚し、現在は母子家庭です。以前、大学進学のため、別居する父親に資金援助を頼むと『お前は実の娘ではない』と援助を断られました。驚いて母を問い詰めると、父が不妊症のため不妊治療病院で妊娠させてもらったといいます。両親の離婚原因は私だともいわれました。このことは誰にも相談できません。私は、生まれてきてはいけない人間なのではないでしょうか？」

ちなみに、この 3 つのメッセージは、筆者の話を聞いた一般市民や高校・大学で学ぶ方々から寄せられたもののの一部である。れらは、生殖医療技術が定着して以降、年々生殖医療の利用で生まれた子どもの数が増加し続けているという、日本産科婦人科学会報告とも一致する現象ではないのか。かつて生殖医療で生まれた子どもたちは成長し、今まさに生殖年齢（16才～40才）の真只中にある。彼らは、少子化問題を抱える日本にとっては、次世代の担い手でもある。

ARTで生まれた子どもたち

今から 34 年前、1983 年に国内初の体外受精（ART）児の誕生が報告され、その 2 年後以降、毎年、日本産科婦人科学会がARTによる出生児の統計を取り現在に至る。最新（2017 年 11 月時点）の報告によると、2015 年までに体外受精関連技術で累計 482,627 人の子どもが誕生しているという。以下は、公益社団法人日本産科婦人科学会登録・調査小委員会 2017 年 9 月報告である。次に示す図表と、厚生労働省のホームページで公開している国立社会保障人口問題研究所「第 15 回出生動向基本調査」（2015 年 6 月）を対比した結果が興味深かったので紹介する。

総出生児数に対するART出生児の占める割合

西暦	ART出生児数	総出生児数	(%)
97	9,211	1,191,665	0.77
98	11,119	1,203,147	0.92
99	11,929	1,177,669	1.01
00	12,274	1,190,547	1.03
01	13,158	1,170,662	1.12
02	15,223	1,153,855	1.32
03	17,400	1,123,610	1.55
04	18,168	1,110,721	1.64
05	19,112	1,062,530	1.80
06	19,587	1,092,674	1.79
07	19,595	1,089,818	1.80
08	21,704	1,091,156	1.99
09	26,680	1,070,035	2.49
10	28,945	1,071,304	2.70
11	32,426	1,050,806	3.09
12	37,953	1,037,231	3.66
13	42,554	1,029,816	4.13
14	47,322	1,003,532	4.72
15	51,001	1,005,677	5.07
累積出生児数	482,627		

上の表は、1997 年～2015 年までに国内で生まれた年間総出生児数に対する ART 出生児数の占める割合である。はじめに、赤いラインの上段をみると、1999 年の総出生児数 1,177,669 人に対して、ART 出生児数は 11,929 人と全体の 1.01％が体外受精関連技術で生まれている。その後、05～07 年にかけて、その割合は横ばいを示すも、その時期を含め ART 出生児数はその後も年々増加を続け、2015 年（赤いラインの下段）には、年間総出生児数 1,005,677 人に対して、ART 出生児数 51,001 人となり、全体の 5.07％を占めた。実に一年間に生まれた子どもの 19.7 人に一人が体外受精関連技術で生まれている。

表記されている最近 18 年間の累計を見ても、近年、喫緊の課題とされる少子化問題は明らかである。2011 年以降も減少を続ける中、2015 年の総出生児数は前年より 2,138 人増加し、5 年ぶりに増加に転じたものの、同年の ART 出生児数は、前年より 3,679 人増加している。このように、人口減少に反して、ART 出生児数が増加するこの現実に、目を向けようとしない世論の狭間に、ART で生まれた子どもたちが暮らしていることを忘れてはならない。

対人援助学&心理学の縦横無尽

（23）

心はグローバリゼーションできるのか？　お小遣いの問題から考える

TEA（複線径路・等至性アプローチ）から見た文化の捉え方

サトウタツヤ（**立命館大学総合心理学部**）・木戸彩恵（**関西大学文学部**）

★　日本の女子高生を対象にした最近のお小遣いの調査

『教育新聞』電子版（2017 年 10 月 2 日）https://www.kyobun.co.jp/news/20171002_01/によれば、㈱テスティーが 2017 年夏、16 歳から 18 歳までの女子高校生 618 人に「お小遣い」に関する調査を行った。それによれば、お小遣いのもらい方として、もらっている＝57.3%、必要な時にもらっている＝22.8%、もらっていない＝19.9%であった。定期定額でもらっている女子高生が約六割である。では、気になる 1 カ月にもらう金額は、1000～3000 円未満＝19.8%、3000～5000 円未満＝38.7%、5000～1 万円未満＝33.9%となっていた。なお、お小遣いの使い道は、「買い物」が最多で 39.2%、次いで「交際費」27.5%、「食費」14.3%だった。「買い物」と答えた女子高生が買う物は、「服（ファッション用品）」27.3%、「本」22.2%、「コスメ」16.5%などであった。

交際費は、まさか商談のためということはなく、友だちとのお付き合いということだろうが、どのように使われているのだろうか。また、これに関わって、お小遣いに関するこうした現象は全人類に普遍的なことだろうか？

★　お小遣いの使いかたに良い悪いはあるか？

人類普遍のお小遣いの使い方、というような大上段な問いに答えるのは難しいが、私がかつて関わった、日中韓越の４カ国で行ったデータから少し素材をひっぱり出してみよう（アンケートによるデータ収集は 2002-2005 年に行った）。この研究の全体については、ずばり『子どもとお金』というタイトルで出版されている（高橋・山本、2016）。

私たちは、以下の項目についてお小遣いを使うことは、それぞれ「良い（３）か悪い（１）か？」また、善し悪しは別として、「使うことが許される（３）か許されないか（１）」を、それぞれの国の子どもたちに３件法で質問した。

1) おかしや飲み物を買う
2) 外食をする
3) 文房具を買う
4) 自分の服を買う
5) 参考書・問題集を買う
6) 通学の交通費を払う
7) 給食費や学費など学校納付金を納める
8) 貯金をする
9) 玩具を買う
10) ゲームセンターに行く
11) 流行歌などのCDを買う
12) 遊園地に行く
13) 漫画を買う
14) アクセサリーを買う
15) 映画を観る
16) カラオケに行く
17) おやつを友人におごる
18) 友達にご飯をおごる
19) 友達にお金を貸す
20) 友達にプレゼントを買ってあげる
21) 家族にプレゼントを買ってあげる
22) 家で使う日用品を買う
23) 家のおかずの食材などを買う
24) 友達と賭事をする
25) 困っている人のために学校や教会や街などで寄付する

表1　国別学校段階別悪いお金の使い方(5位まで)

国	学校	1	2	3	4	5
日	小	賭け事	金貸す	メシ奢り	ゲーセン	カラオケ
日	中	金貸す	メシ奢り	賭け事	菓子奢り	納付金
日	高	賭け事	金貸す	菓子奢り	メシ奢り	納付金
韓	小	賭け事	おもちゃ	ゲーセン	メシ奢り	マンガ
韓	中	賭け事	おもちゃ	マンガ	ゲーセン	金貸す
韓	高	賭け事	ゲーセン	マンガ	おもちゃ	金貸す
中	小	賭け事	ゲーセン	カラオケ	CD	メシ奢り
中	中	賭け事	ゲーセン	カラオケ	メシ奢り	おもちゃ
中	高	賭け事	ゲーセン	おもちゃ	カラオケ	マンガ
越	小	カラオケ	外食	賭け事	菓子奢り	装飾品
越	中	賭け事	カラオケ	装飾品	ゲーセン	菓子奢り
越	高	賭け事	カラオケ	ゲーセン	外食	菓子奢り

このデータは 2002-2005 年にとったということをアタマの隅に置いておく必要はあるものの、国別、小中高の段階別に、それなりの傾向を読み取ることができる。

当然ながら共通性と差異が見いだされる。お金の使い方として、かなり共通に悪いこととして捉えられているのが、賭け事であった。ほとんどの国と学校段階において賭け事は悪事の１位であり、少なくとも３位までに入っているという意味で、非常に安定した「悪事」の地位にあると言ってよいだろう。

一方、悪事といっても２位以下になると日本とそれ以外で差異がみえてくる。日本の悪事、第２・３位には「おごり」「金を貸す」という項目が入っている。他の国では、おもちゃを買う、ゲームセンターに行く、カラオケに行く、などが入ってきている。つまり、日本では他者にお金が移動することが悪いことだと捉えられる傾向がある一方で、他国では、自分の遊興に使うお金が悪いと捉えられていることが分かる。

ここで、いわゆる「おごり」に関する差異が日本と韓国で顕著であるので、この点について、少し深掘りしてみよう。そもそも「おごり」という言葉が日本にのみ存在すること自体が、おごりが文化的であるということである。俗に文化は水や空気みたいなもので気づくのが難しいということが言われるが、この「おごり」についても私たちの仲間の韓国出身の研究者がいなければ、なかなか気づかなかったかもしれない。韓国には「おごり」にあたる言葉はない。ただ、払う、買う、という語があるだけだというのである。

韓国では、お小遣いが必要になる経緯が「おごりあい」だったりする。もちろん、オゴリという語はないので、誰かが支払う、ということになる。そうなると、今日は誰々ちゃんが全員分払ったから、次は誰々ちゃん、次は誰々ちゃん、という感じで、ある程度まとまったお金を払う機会が生じることになる。わかりやすくするために日本円で記述すると、一人 50 円のお菓子を買う際、５人組で行動していると、毎回、誰かが 250 円支払うということである。50 円だと手に握っていれば大丈夫な金額だが、子どもにとって２５０円は大

金。遊びに行く前に「手元資金」が必要になる。子どもたちはお金を稼ぐ術はないから、お小遣いをもらうことになる。かくして韓国の子どもたちは、「おごりあい（＝日本の表現）」のためにお小遣いが必要となるのである。

だが、このような支払い方法は、日本人（日本の文化で育った人）にとって強烈な違和感を引き起こすであろう。ヨソの子どもに払うために親からもらったお小遣いを使うなんて言語道断！というような感じであろうか。

では、日本と韓国、それぞれの国の人（＝それぞれの文化で育った人）がそのような行為をする理由を聞いてみると、以下の様になる。

なぜおごるのか（誰か一人が支払うのはなぜか）？　に対する韓国の子どもの答え

「皆で食べるのが楽しいから」「次に誰かが払えばいいから」

なぜ割り勘なのか？（それぞれが自分の分を支払うのはなぜか？に対する日本の子どもの答え

「毎回、自分で払う方がすっきりするから」「お互い気を遣わずにすむから」

さて、さらに韓国で子どもたちの様子を見ていると、誰かが全員分支払う時に、必ずしも皆が同じように支払うわけではなく、お金持ちの子どもが何回も支払うようであった。このことについて、韓国の親御さんたちに聞いてみると、「そうすることによって親の収入と無関係に子どもたちが仲良くなれる」とのことであった。一方、日本の子どもたちは、誰もが自分でその都度、支払いをする（これは韓国の子ども・親にとって強烈な違和感を引き起こす）ことに対する日本の親の答えは「そうすることによって親の収入と無関係に子どもたちが仲良くなれる」とのことである。

つまり、両国の親子とも、子どもの人間関係を良いものにしたい、という方向性というか価値は同じだということに気づかされる。しかし、それを実現するための行為がほぼ完全に逆方向であるということにも気づかされる。

ここで、自己に関する富士山型モデル（価値―記号―行為の三層からなる自己を考えるモデル）を援用すれば、価値のレベルでは両国とも「子どもの人間関係を良いものにしたい」ということは一致していると考えられる。しかしおそらくは記号のレベルが一致していないため、具体的な行為は全く逆方向になってしまい、お互いに違和感や軋轢を起こすのではないかと考えられる（参考：右図はフロイドの無意識モデル）。

価値のレベル

記号のレベル

行為のレベル

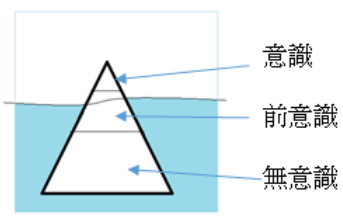


図１　自己に関する富士山型モデル（価値-記号-価値）

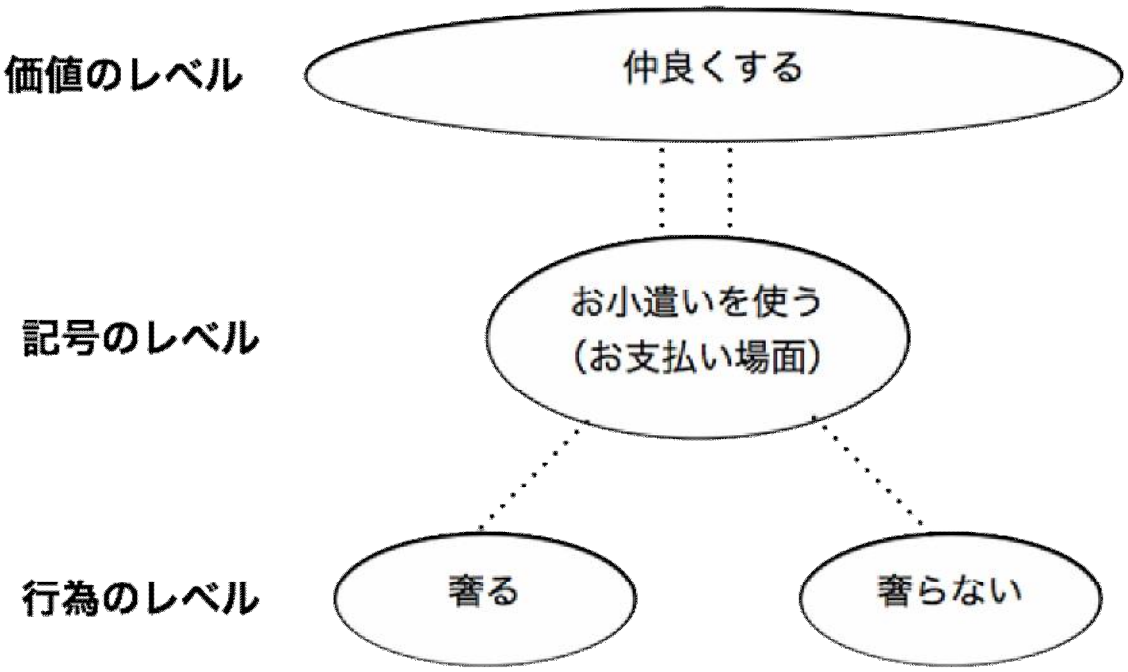


図２　価値-記号-行為のモデルとお小遣いの支払い方の差異の現れ

友だち３人と一緒にいる場面でジュースを１本ずつ買って飲むというような場面を想定してみると、そこで個々の子どもたちは「支払いが必要だ」ということはすぐに理解する（お金がなければ盗むという選択肢もありえるが)。すると、支払い方法を決めることになる。ここに TEM（複線径路等至性モデリング）で言うところの分岐点が発生する。分岐点では選択肢が発生し、自己対話と想像が発生する。また、それぞれの選択肢に向かわせる力（社会的助勢、社会的方向づけ）が発生する、のである。

そして、それぞれの判断で「一人ずつ払う」という行為や「誰かが全員分払う」という行為が発生することになる（日本語で表現すると、割り勘かオゴリかということになる)。

★　悪いことでもやっていいか？　という指標をとると！

ここまでは、文化における差異に目を向けてきたが、共通性について見てみよう。悪いことはやらないのか？という問題である。悪いと思っていることをやらずにすむなら個人の生活も社会生活も平穏であろうが、実際にはそうではない。「わかっちゃいるけどやめられない」ということがあるはずだ。この問題を先ほどの日中韓越の４カ国の子どもたちを対象にしたアンケートからあぶり出してみたい。

たとえば、「賭け事」という項目について、「悪い（１)」と答えて、「やることは許され

ない（1）」と答えるなら、そこに矛盾はない。後者と前者の差（引き算の答え）はゼロとなる。一方、「悪い（1）」と答えても「やることは許される（3）」と答えるなら、後者と前者の差は2（引き算の答えはマイナス2）となる。
このようにして算出された指標＝「悪いことでもやっていい指標」を見てみよう。つねに「悪いことはやらない」としているのであれば、その差はゼロのまま推移するはずである。先ほどの２５の項目について、それぞれこの数値を算出したうえで全項目の合計点をグラフにしたのが下の図である。この図においてはゼロが、善悪と許容度が一致しているラインである。

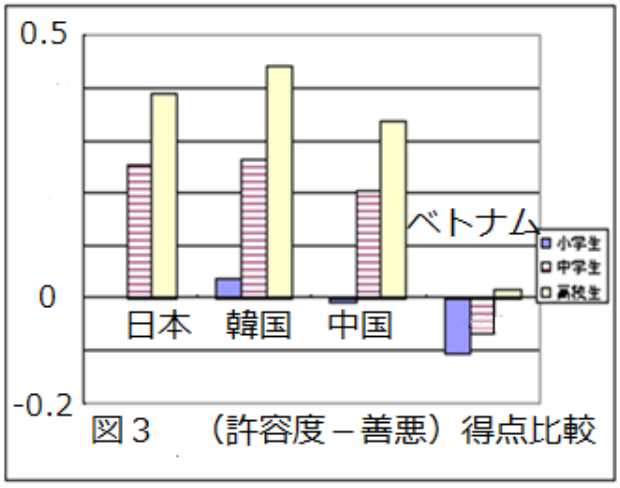


図３　（許容度－善悪）得点比較

ちょっと分かりにくいが、小学生は青、中学生は赤の縞模様、高校生は黄色のグラフである。この図から読み取れることは２つである。まず一つ目、ベトナムの小学生と中学生、中国の小学生に関しては、マイナスの数値であったから、たとえ、良いと思っていることでも使うことが許されないと考えている傾向を読み取れる。そして二つ目であるが、各国とも、小→中→高にしたがって数値が高くなっており、その形状（右上がり）は同じである。つまり、「悪いことであっても行う」という方向に発達的にシフトすることが分かる。
私たちのお小遣い研究のデータからは、人は成長するにつれて「割ることであっても行う」ように育っていくということが読み取れるのである。
文化心理学の役割とは、おそらく、個別の国や文化の違いを記述すると共に、その共通性を描くことにあるはずである。このことは、文化人類学が文化の構造を明らかにして人々が行なっている行為を理解できるように理論構築したことと比肩できるかもしれない。つまり、文化心理学は，文化の差異を認めた上で，その差異の背景にある共通性を見出して理論化しようとしているのである。

★心はグローバリゼーションできるのかー寛容性とは？

（価値―記号―行為の三層からなる）富士山型自己モデルのようなモデルこそ普遍的な心の理解かもしれない。目の前の行為の差異に驚いて絶望するのではなく、その行為の違いを導く記号を理解して、その背後に潜む価値の共通性を探究することこそが、寛容性なのではあるまいか？

文献　高橋登・山本登志哉（編）　2016　『子どもとお金』　東大出版会

きもちは、言葉をさがしている

「紅茶の時間」とその周辺

第 30 話

水野　ス ウ

夏休みのあさイチ

8月30日の朝、新聞のテレビ欄で見つけた、NHKあさイチの特集番組「戦争はイヤ！子どもと考える」。北朝鮮からミサイルが飛んできた翌日というタイミングもあり、タイトルにひかれて、チャンネルをまわしました。

登場した子どもたちは小学生から中学生。日本が70数年前に戦争していたことはよく知らないけれど、この先、戦争が起きるかもしれない現実世界の緊張については、どの子も相当、自分ごととして感じている様子です。

だけど、実際には経験したことのない「戦争」って、いったいどういうものなんだろう。そのことを知るために子どもたちは、戦争を経験したことのある二人の外国のひとの元へ、お話を聞きに出かけて行きました。

その一人が、日本に住んで37年になる、イスラエル人の家具職人、ダニー・ネフセタイさん。18歳から21歳までイスラエル軍に所属していました。埼玉県の秩父にあるダニーさんの自宅兼家具工房を訪ねた日本の小中学生たちに、彼は真剣な表情で語りました。

ダニーさんの生まれ育った国では、高校卒業と同時に、男性も女性も全員軍隊にはいること。通っていた小学校の教室には「国のために死ぬのはすばらしい」という言葉が貼り出されていたこと。人を殺すのは良くないけど、戦争はしょうがない、と小さな頃から教わってきたこと。空軍時代、教官から「君がこの戦闘機を使いこなせば、イスラエルの子どもたちが毎晩安心して眠れるんだ」と言われ、みんなのために訓練に励んでいたこと。

そして2008年、イスラエルはパレスチナのガザというところを大々的に攻撃して、空からたくさんの爆弾を落とし、大勢の子どもたちが一度に死んでしまったこと――。

それまで、イスラエルは子どもを殺すような攻

撃をする国ではないと信じていたダニーさんは、空爆に参加した仲の良い友人に、どうしてそんな攻撃をしたんだ、と尋ねます。返ってきたのは、「しかたなかった」。その言葉は、ダニーさんがはじめて、自分の生まれた国がしていることを疑いだす引き金になりました。

しかたなかった、と言わないで

イスラエルで繰り返し言われる言葉「戦争はしょうがない」と「国のために死ぬのは素晴らしい」、この2つが合わさると、疑問もなく人を殺せるようになってしまう。「しょうがないという言葉だけは、使わないでほしい」ダニーさんは目の前の子どもたちに、何度もそう言っていました。

ダニーさんからのお願いと提案は、おとなの私にとっても確約するのがむずかしい、でもとても大事な視点だとあらためて感じました。

そして、パレスチナと何十年にも渡って争い続けている遠い国で育った、私のまったく知らない人が、その現状をしかたないと認めること、努力を諦めることを、拒んでいる。そのことに対して、私はもっと謙虚でいなければ、とテレビを見ながら思いました。

しかたない、という言葉を口にしたとたん、考えはそこでストップしてしまいます。それがこと戦争であれば、あらがうことを諦め、黙ってその状況をうけいれる自分になってしまう。きっと一人ひとりのそんな、しかたない、が積み重なって、戦争っていうのはつくられているんだ。それなら私は、しかたないって言いたくないし、考えることもやめたくない。しかたないっていう言葉がこぼれ落ちそうな時、心折れそうな時、一人でためこまないで、誰かとちょっと話してみる。しかたない、以外の言葉を探してみる。そんな時間がきっと、私たちには必要不可欠なんだ。

番組が終わるとすぐ、メモしていたダニーさんの言葉を短く書きまとめてFacebookにアップし、それをプリントアウトして旅のかばんに入れました。私はその日の新幹線で上京し、滞在中に埼玉県の上尾市で憲法のお話会をすることになっていたので、どうしてもこのダニーさんのお話もおすそ分けしたい、と思ったからでした。

上尾の出前先で

上尾では120人の大きめの講演会と翌日のこじんまり「紅茶の時間in上尾」との2回、憲法を語りました。どの日もダニーさんの言葉をおりこみながら。2日目は、私の書いたダニーさんのお話のまとめを、主催者さんがていねいに印刷して参加者さんたちに配ってくれました。

するとたまたま私のとなりに座っていた女のかたが、うれしそうに言うのです。「私、ダニーさんのおうちに行ってお話を聞いたことがあります！ダニーさんのおつれあいのかほるさんの手料理もいただいてきました」。

あらま！　そういえばこの上尾も、ダニーさんの暮らす秩父も、同じ埼玉県なのでしたね。

お話をうかがってみると、その方、深沼マリさんは、ご自分の元のお住まいを空き家再生というかたちで活かそうと、その場をP-1ラボ（peace first、の意味をこめてP-1、読み方は、ピーチラボ）と名づけ、ギャラリーに、シェアハウスに、集いの場に、と活動しはじめたところだそうです。

出逢えた記念にダニーさんの書かれた本を一冊プレゼントしますね、と深沼さんは、その場でうれしいお申し出をしてくれました。

ダニーさんの本

やがて届いたダニーさんの本。タイトルは『国のために死ぬのはすばらしい？』（高文研）。一気に読みました。イスラエルの歴史、パレスチナのこと、ああ、ほんとに知らないことだらけです。

幼いころからの教育と、とりかこむ社会の価値観の中でごく当たり前に、国のために死ぬことは

すばらしい、と刷り込まれてしまう、その過程がダニーさん自身の経験を通してとても具体的に描かれていました。また、悲しく辛い過去をもつ国で生きていくことの、人々の心への過酷な負担も、ダニーさんの本から感じとることができました。

そして何より、ダニーさんが、自分のいま生きている社会で、おかしいと思ったことにおかしいとていねいに声をあげ続ける、ふだんの努力の憲法12条をしていることに、共感もし、感動もし。

ダニーさんに感想をお伝えできたらと思っていたところ、ダニーさんがFacebookをなさっているのを知りました。深沼さんからプレゼントしていただいて本を拝見しました、とメッセージを送ると、とてもリラックスした、感じのいいお返事がすぐに返ってきて。ますます、いつかお逢いできたらいいな、お話もじかに聞いてみたいな、の想いがつのりました。

そこへ深沼さんから、P-1ラボでダニーさんのおはなし会、勇気出してすることに決めました！とのお知らせ。深沼さんいわく、小さな場だから……と迷っていたけれど、スウさんとの出逢いが背中をおしてくれたんですよ、と。

本人が何も意図しないところで、ひとは自ら動き出す。深沼さんがそうやって勇気をだしたのなら、私もえいやっと日帰りで、ダニーさんのお話を上尾まで聞きに行こう！

それを知った深沼さんは飛び上がってよろこんでくれて、せっかくの機会だから、ダニーさんとスウさんのトークセッションもしましょう！　あれよあれよのうちにそんな運びになりました。まさに、ひととひとの出逢いが、化学反応を起こすおもしろさです。

ダニーさんのお話@上尾

かくして11月5日、ダニー・ネフセタイさんのお話「国のために死ぬのはすばらしい？」を聴きに、私は再び上尾へ。せっかくのお話なので、記録と共有の意味をこめて、ここにその日のダニーさんのお話を書きまとめます。

＊＊＊

家具職人であるダニーさんは、家具をつくることと、社会活動することを同じくらい大事にしている、と言います。

家具職人としてのダニーさんの夢は、100年生きてきた木で、次の世代も使える家具をつくること。それと同時に、日本に住むイスラエル人としての夢は、次の世代も住める地球をつくること。だから、社会活動をする。自分から発信する、行動する、何気ない会話の中でも社会について語る、この日の上尾のように、どこへでも出かけて行って講演する。ダニーさんにとって、ものづくりと社会活動は、同じ重みを持っていることなのです。

ダニーさんは、日本での永住権は認められていますが、選挙権はありません。日本では二重国籍が認められていないからです。日本での選挙権を手にするためだけにイスラエルの国籍を失わなければならないことは、イスラエル人としてやっぱり悲しい。ならば、投票で社会を変えられないかわりに、それを上回るくらい、イスラエル人である自分にしかできないことを、と8年前から講演活動をはじめたのだそうです。

テーマは、平和と戦争に関すること、18歳になったら男女問わず軍隊にはいる母国のこと、日本がどんどんイスラエルに似てきていること、3.11後は、「原発危機と平和」と題して、脱原発／脱無関心をうながす話をすることもあれば、「外国人の目に映る人権」と題して話すことも。

ダニーさんが小学生だったころ、教室の黒板や修学旅行先で見る銅像に刻まれていた言葉が、「国のために死ぬのはすばらしい」でした。そこにはもちろん「？」はついていません。

学校の校庭には古い戦闘機がおいてありました。4年前に里帰りしたら妹さんの子どもが通う小学

校には古い大砲がおいてありました。校庭には、この学校を卒業して戦死した人たちの名前を刻むための石碑もありました。

高校を卒業したダニーさんは、多くの人がそうするようにごくごく当たり前に軍に入り、3年の兵役につきました。19歳で戦闘機のパイロットを目指したダニーさんは、教官に言われるままに、自分がこの機を使いこなせるようになればイスラエルの子どもたちが毎晩、安心して眠れるんだと信じていました。それは同時に、パレスチナの子たちに眠れない夜を過ごさせることだ、ということは想像もできなかったと言います。イスラエルは平和を愛する国だが、相手は違うんだ。悪いのはあっちなんだ。ずっとそう言われて、それを信じていたんだ、と。

空軍を退役した後、アジアを旅してまわり、寄り道のつもりでやってきた日本で、中世のユダヤ人の歴史を学んでいるかほるさんと奇跡の出逢いをし、結婚をして、父親になったダニーさん。

でも彼は、妻のかほるさんから、イスラエルのしていることはおかしいよ、と言われても、なかなか聞く耳を持つことができなかったと言います。そんな中起こった、2008年の大規模なガザ攻撃。日本で暮らし始めて25年あまりたった頃のことでした。

たくさんのパレスチナの子どもが死んでしまったニュースを、ダニーさんは信じられない思いで見つめていました。同期で軍にいる友人たちに攻撃の理由をきくと、誰もが「しかたなかったんだ」「他に方法がなかった」と言います。友人たちはみんなすばらしい人たちです。悪魔はいません。だけども、素晴らしい人でも人を殺せるようになってしまう。それが戦争なのです。

民間人も殺しながら、悪者は相手の方、イスラエルは子どもを殺す国ではない、と言い続ける自分の生まれた国、イスラエル。その時から、ダニーさんは徹底的に国を疑うことを始めたのだと言います。いっぱい勉強した、いっぱい調べた。自分の信じていた国を疑うのも否定するのも、とてもつらくて苦しいこと。けれどもそれを超えて、ダニーさんは自分が知りえたことと平和への願いを、日本語とヘブライ語で自身のブログに書き始めました。

ダニーさんのファミリー・ツリー

ダニーさんの父方のおじいちゃんが生まれたのは、オシフィエンチムというポーランドのかわいい田舎町。1920年におじいちゃんはその村を出て、イスラエルに移住しました。

後にその小さな町はドイツに占領され、アウシュビッツと呼び名を変えられることになります。5年の間にこの収容所だけで150万人が殺され、イスラエルに移住しなかったダニーさんのおじいちゃんの親戚の多くも、この地で命を落としました。

一日に8,000人が殺されたこの町では、女性もホロコーストにかかわっていました。ダニーさんが見せてくれた1枚の画像には、楽しそうに笑うナチスの職員の女性たちが写っています。一方でたくさんの人を殺しながら、その一方で、罪の意識を感じることなく、笑いながら楽しく日常を送っている人々……これは一体どういうことなのだろう。

終わらないイタチごっこ

ところで、現在の中国の国防費を知っていますか？正解は16兆円。日本は、5兆円。今のままでは、どうやっても武力で中国に対抗することはできません。税金を増やして国防費を16兆円にする？その時になったら相手の国防費はきっともっと増えているでしょう。国防費ってそういうもの。終わらないイタチごっこなのです。

お金で足りないなら、国のために死ぬ教育をしないと、勝てない。そこに日本は戻ろうとしているのだとダニーさんは言います。日本を取り戻す、って、まさにその方向に向かっているという

こと。すでに、アメリカの最新戦闘機の部品の4割は日本製です。

ヘルマン・ゲーリングの有名な言葉があります。「普通の人間は戦争を望まない。しかし、国民を戦争に参加させるのは簡単なことだ。国民には攻撃されつつあると言い、平和主義者のことは愛国心に欠けていると言い続ける以外には何もする必要がない」

世論調査によれば、日本人の75%が北朝鮮を攻撃してもいい、と思っているそうです。メディアのあおりで、北朝鮮と聞けばあの人の顔しか思い浮かばなくなっているかもしれません。だけど、北朝鮮を攻撃するということは、そこで普通に暮らしている人々を攻撃すること。そのことになかなか想いが至らない。ダニーさんが問いかけます。攻撃していいと思う人たちに言いたいんだ。それはヒロシマやナガサキを容認するということだよ、と。

フランスの寓話、「茶色の朝」でも描かれているように、人々はたとえ間違っていることでも、一度流れができてしまえば、いかに簡単に同じ方向にいってしまうか、ということなのです。

9.9%の人に

日本の有名人の多くは、大きな影響力を持っているはずなのになぜなかなか声をあげないのか。それは、ホロコーストの職員と同じだとダニーさんは言います。「立場上、個人的な意見は言えない」「国策だから」と言う彼ら。自分の立場のことは考えても、自分がしたこと、あるいは何もしなかったことによって、他者にどんな影響を与えているのか、考えることができなくなってしまっているのです。

この言い訳が存在する限り、差別と戦争は無くならない。このことを理解するのに必要なのは、想像力とハートだとダニーさんは言います。私たちの自由がなくなる瞬間とは、共謀罪で一人目の逮捕者が出た時ではありません。一人目が発言する前に、こう言うことを言っていいのだろうかと悩み始めた瞬間がその時なのです。

3.11後、ダニーさんは仲間たちと「原発とめよう秩父人」を立ち上げました。今も2週に一度集まり、脱原発にかぎらず、さまざまな社会問題について話しあい、行動しています。だけど、3.11から6年が経ち、原発はなくなるどころか次々と再稼働を始めているという現実。これまでしてきた活動によって原発が止まらないのなら、これからは、今までやってこなかったことをするしかない。自分たちが逃してきてしまったのはいったいなんなのだろう――？

ここで、この日のキーワードになりそうな数字が、ダニーさんの口から出てきました。今の日本では、おそらく90%の人が政治や社会のことに無関心だろう。関心をもって行動しているのは0.1%。残りの9.9%が、関心はあるけど行動までは、という人たち。

これまで活動してきた0.1%の人たちは、無関心な90%の人をなんとか変えよう、動かそう、と頑張ってきたかもしれません。だけど、今必要とされているのは、関心はあるけれども次の一歩を踏み出せないで戸惑っている9.9%の人たちの背中をそっと押してあげられるような、そんな働きかけなんじゃないだろうか。そのために、自分たちに何ができるだろう。

ダニーさんは今、仲間たちと、これまでしてきた活動をいったん見直して、まだ一度もやったことのないことを試してみようと、プロジェクトチームを作って新しいアイディアをだしあっているところなのだそうです。

ダニーさんのお話を聴いて

ダニーさんの本を前もって読んでいたにもかかわらず、目の前でライブで聞くのは、やはりすごい迫力です。

何より、「国のために死ぬのはすばらしい」、イスラエルで今も生きているこのキャッチフレーズが、ほんの70数年前の日本に、おそろしいほど重なりました。そのすばらしさの証として、戦死した人たちは靖国に行けたのですよね。逆にいうと、「すばらしいこと」にしておかないと、国のために死んでくれる国民がいなくなってしまう、ということかもしれない。現に今、教育がそっちの方向にむかっていることとあわせて、その暗い予兆を痛烈に感じるお話でした。

戦前そんなふうにいのちが、個人が、ないがしろにされたことの大転換として、憲法13条には「個人の尊重／個人の尊厳」がうたわれているのです。私のいのちはかつてそうだったような、国のもの、国を存続させるためのとりかえのきくパーツではありません、そうはっきりと言える根拠が13条にある、と私は確信しています。

けれどもその一方で、それを打ち消そうとする力がこの数年間におそろしく成長してきていることも、ひしひし感じるのです。

ネットの中では毎日、決して少なくない数の人たちが死にたいとつぶやいている。それって、その人が他者から、この社会から、粗末にされ、無視され、自分には何の価値もない、生きている資格がないんだと思わされていることの裏返しのようにも思えます。

今ほどのひどい格差社会になってしまった原因を、すべて政治のせいにできれば楽だけれど、そういうわけにもいきません。今の社会をかたちづくっているひとかけらとしてのわたし／あなた、その集合体が今の現実社会なのだから、責任のひとかけらはもちろんこの私にもあるわけで。

死にたいという願いをかかえて生きている、とりわけ若い人から見えている大人のわたしたちは、はたして自分を生きているか？　人と人とのつながりの間で、人間として生きているか？　そして何より、自分とつながる目の前の人を、個の人として大切にしているか？　そう問われている気がしてなりません。

ダニーさんの人権センサー

ダニーさんの持っている人権感覚のセンサー（自分には都合よくて、まったく痛くなくても、その一方で泣いている、痛みを感じている人たちがいることに気づく）にくらべて、私たちの人権意識センサーはどうも鈍すぎるようです。

そもそも、人権、という漢字二文字が、何か自分の日常から遠く離れたところで浮遊してるように思えてしまっている。自分が踏みにじられる側になってはじめて人権が自分ごとになる場合もあれば、そうされていてもなお、踏みつけられているのが自分の人権だと気づかない人もいるでしょう。

人は、まわりからいつもあまりに大切にされないでい続けると、それが当たり前みたいに感じてしまう。上の立場（たとえば雇用主や管理者や権力の側にいる人たち）からすれば、むしろそのまま気づかないでいてくれた方が、まちがいなく好都合なのでしょう。

伝える時に必要なもの、13条のきもち

どんなに大事なこと、知ってほしい話であっても、聴いている人に届かなければ意味がない、と言いきるダニーさん。実際、彼の話は、内容は重く深刻なはずなのに、ユーモアがあり、個人攻撃をせず、事実をうらづける具体的な数字を見せながら論理的に話してくれるので、抵抗感なくお話がスッとはいってきます。

映像で見せる部分にも、伝えるためのさまざまな工夫。福島の原発の汚染水を隠すのに、オリンピックの五色の５つの輪っかが、空から飛んできて原発にふたをしたり。イスラエルのネタニヤフさん、安倍さん、トランプさん、3人が3人ともこっちを指差している図は、まるで三つ子の写真のようだったり、と。

それは、彼の意識センサーや人権センサーに赤ランプがつくたび、これをどうやって人に伝えよう、と真剣に考え、画像や添えるコメントを毎回工夫してよりよく伝えようとする、彼の努力のたまものだったことが、今回お話をきいてよくわかりました。

8年前に彼が講演活動をスタートさせた時、最初の1年間はおつれあいのかほるさんがすべての講演会に同行し、彼の話をチェックするための厳しい耳をもって参加したそうです。この言葉はきつすぎる、これではうまく伝わらない、この言い方だと日本人にはかなり抵抗感がある、などなど「ぼくの90分の講演に対して、かほるからのチェックは2時間もかかったんだよ！」とダニーさん、笑っていました。

なんとか相手に伝えたい、と願いながら誠実に努力する時、相手を大切に思い尊重するきもちが、自然に伴ってくるものなのだろうな、とダニーさんのお話のはしばしで感じました。それはわたし的に言うと、ダニーさんが13条の精神を実践しているということだと思います。

私も、憲法のおはなしの出前先でいつも、自分が大切な存在であるのと同じように、あなたも、そしてほかの人も、とりかえのきかない大切な存在だよ、と言い、それが個人の尊厳の13条としっかりリンクしていることをお話するのだけれど、その時、私自身がそこにいる人たちを尊重するきもちでもって語らなければ、その13条は伝わりっこない、と感じています。

それだけに、この日はじめて逢ったダニーさんが、まるで13条を介してつながった得がたい同志！のごとく見えました。おかげで単にお話を聴けた、という以上の豊かさに満ちたきもちをおみやげに最終便の新幹線に飛び乗り、石川にとんぼ返りをしたのでした。

そして、アメリカ大統領

ダニーさんのお話を聴いた翌日、目にしたのは来日したトランプ大統領が、アメリカの迎撃機を買うよう安倍さんに迫ったというニュース。日本にミサイルが飛んできたら、日本はそれを使って撃ち落とすことができるし、アメリカはそれで雇用がふえて儲かる。それは両国にとっていいことだ、そうだろう？と。そして安倍さんはその商談を了承したというのです。

まさにダニーさんが、今の日本はイスラエルにすごく似てきている、と言っていたことを証明するような現実。イスラエルが毎年、アメリカから兵器を購入する大得意先であるように、日本もこの先イスラエルを見習って、終わらないイタチごっこにさらにはまるのでしょうか。100年の家具づくりと社会活動、ダニーさんのしごとはまだまだずっと続いていく……。

2017.11.24

それでも「遍照金剛言う」ことにします

第 17 回

脱精神科病院（終）「生活支援と生活の「管理」の関係②」

三野 宏治

はじめに

2009 年に地域活動支援センターで精神病／障害者と精神保健福祉士などの専門家に対して「専門家当事者の対等性とはあるのか」という問をたて議論を行った。この議論の紹介と分析から支援が内包する「管理」について述べていく。調査に先立って筆者は「財団法人大同生命厚生事業団　地域保健福祉研究助成」に申請を出した。申請書には次のように書いた

> 精神保健福祉領域において精神保健福祉士をはじめとした支援者たちは、精神病／障害者本人と対等な関係を築くように教育される。また、従来の専門家による直接的な支援の他に、セルフヘルプなど本人の力に注目し、その活動へのはたらきかけを重要な支援の方法として捉えようとする考えもある。しかし、実際の支援の場面で、例えば従来の福祉施設で行われる活動で、本当に「対等」は可能であり、実現されているだろうか。またそれは常に望ましいものだろうか。例えば自他に対して加害的な行為がなされる場合があり、精神科医療における行動制限や非自発的入院と同根の問題がある。本人たちに委ねる場合より、作業や組織の運営にとって明らかに有益な別の選択肢があることがあるが、このような場合どうしたらよいか。また、実際には対等でないのに、対等な関係の下でなされているゆえにある対応が正しいとされるなら、その対応は本人に対する加害ともなりうる。

審査の結果、幸運にも対象に選ばれ助成を受けることがでた。そして大阪府交野市の地域活動支援センターにて、利用者（当事者）支援者（専門家：精神保健福祉士）と筆者による意見交換および討議と精神科クリニックおよび授産施設への調査、精神科医、精神科ソーシャルワーカー、保健所精神保健福祉相談員への聞き取りを行った。また、並行して調査を大阪府交野市の授産施設ミルキーウェイ で行い、静岡県浜松市のぴあクリニックで「対等性」ついての考えを聞いた。

専門家と当事者の関係について精神保健福祉士養成のテキスト等では「対等な関係」を求めている。しかし、問題は単純ではない。実際の福祉場面では支援者が存在する。そして、当事者は支援を受ける。支援は「当事者のためのもの」である。しかし、同時に支援は「支援者の持ち物」でもある。支援が「支援者の持ち物」であるならば、その支援は支援者の手で如何様にもその形は変えられる。換言すれば当事者はその支援に直接力を及ぼすことができない。さらに、支援が「支援者の持ち物」であるなら、そこに支援者の都合が入り込む余地がある。では、支援者が自らの都合によって支援の形を変えている意識があるのだろうか。まず、調査で得られた支援者と利用者の考えを紹介しながら、彼らが支援と「管理」を如何にとらえているのかを紹介する。

ここで紹介するグループインタビューは、2009 年 9 月 16 日から 2010 年 6 月 30 日の間で 25 回行った。2 週間に 1 度、水曜日の 14 時から 15 時に地域活動支援センターの談話室の一角で行うことを初回に伝えた。談話室は 20 畳ほどの畳敷きの部屋で机を囲んで話を行った。出席者数は当事者 4 人から 10 人と専門家 1 人から 3 人であり、その都度参加者は変化した。筆者は司会進行を務め、各回の冒頭に前回の話を確認し、発言を促す役割を担った。記録は IC レコーダーによって記録し文字化を行っている。また、記録自体は公表しないこと、記録をもとに報告書と論文等の執筆・発表を行うことの同意を得ている。

インタビュー初回は調査の目的を伝え、各々の考えを自由に述べてもらった。1 回目のインタビューから 15 回目のインタビューでは各々の考えや意見交換が主であったが、同じ内容の議論が繰り返されたことから、2010 年 3 月 24 日の 16 回目のインタビューにて、司会の筆者が「対等ではない場合」という課題を設定した。課題設定後の 16・17・18 回のインタビューでは当事者から様々な経験が語られ、その経験に対する意見が交わされた。

調査時の支援者の態度

グループインタビューが始まった当初は、当事者の発言がインタビュー時間のほとんどを占め、専門家はほとんど何も述べない事態が続いた。数回の意見交換の後、発言の少ない理由を問うと「専門家の自分が意見を言うことで、これまでの当事者の意見が覆されはしないかという危惧がある」や「利用者の意見を聴くために、専門家はあえて話さない。そうやって当事者が話す間を作ることが専門家の支援の態度であると考え、そのような態度をとってきていた」と回答している。

専門家のそれらの考えに対して「話を聞くという態度は専門家として正しい場合あるが、常に専門家が話を聴くという態度は診察場面の医者と同じで、求めるものとは違う」「私は聴いてほしいときは言う。それをできないと思われるのは支援以上の過保護だ」と当事者の反論を招いた。

これらの考え方のずれは何ゆえ起こるのか。「対等性」という言葉の持つ多義性が原因の一つであることは間違いない。問題は言葉の性質だけではない。言葉の多義性に問題があるとし、様々な解釈ができない表現では倫理綱領や行動規範はマニュアルに変質する恐れ

がある。ゆえに、あえて多義的な言葉を用いる必要がある。その狙いをどのように理解すればよいか。

「対等性とは何か」に注目したきっかけは、筆者の福祉の実務経験での混乱にある。精神保健福祉士として福祉現場に携わるなかで行動規範に基づいた「対等性」の重要性は研修などで耳にしていた。あるべき姿と理想の追求では成し得ない現実の問題をどのように捉えればよいかという疑問のきっかけであった。ほとんどの場合「対等性」は関係性の規定であるにもかかわらず、行動規範などで専門家にのみ強調されることは自明である。「対等性」が専門家のみに強調されると、「対等性」の意味づけはどうなるのか。

専門家の仕事（支援）では、当事者の意見を全て尊重し要望に漏れなく応えると、成立しない場合や事態が含まれる。当事者の意向とは別に管理的な動きをする場合もあり得る。権力性は専門家というポジションだけで、ある程度付与されてしまうものである 。専門家の仕事の特性と専門家が持ち得てしまう権力性を自身が自覚し、仕事（支援）を行うことを強調する必要がある。倫理綱領は専門家の権力性への「戒めの言葉」という役割を持たされている。「戒めの言葉」から導かれたあるべき姿が「対等性」である。規範は戒めという目的は達成したが、あるべき関係と現実の関係を混同する危険性をもつことは指摘した。「対等性」という考え方が有効なのは、関係性の問題として双方の問題としたときである。しかし、現状では専門家と当事者がその権力性でまったく非対称であるがゆえ、専門家にのみ強調されている。「対等性」が専門家にのみ規範として強調されると、戒めの言葉あるいは戒めを強化する役割以上の意味を持ちえない。専門家たちはこの言葉に戒められているのだろうか。

19 回目のグループインタビューで、筆者の「対等でないと思うときは」との問いに、ある当事者は専門家の権力性にかかわる経験を語った。「病気でわけがわからなくなって、隣人を殴ったので救急車で運ばれる途中に暴れた。結果抑制された。その後措置入院になった。その後 5 年間入院し続けた」この経験に対して他の多くの当事者が「仕方のないことだ」と意見を寄せたが、彼は「どこが仕方ないと思いますか」と疑問を呈したことから、当事者の責任に話が及んだ。

数回の意見交換を経て、暴れて他人に危害を加えたこと。結果として抑制されたこと。措置入院になったことや 5 年間も強制入院させられたことに、全てが「仕方ない」とはいえない結論に至った。まず、病状の悪化は病気であるので誰の責任でもない。しかし隣人を殴ることや暴れたことは、その被害者が自分であったら困るという観点から良くはない。暴力沙汰を起こし、今後も訳がわからないまま暴力沙汰を起こしてしまうかもしれない自身を考えたとき医療が最も有効な方法かという議論はあるが、現状では入院という選択肢もあり得る。しかし、暴れて暴力をふるった状況を勘案しても 5 年の措置入院は不正義であるし、根拠の「治っていない」という医師の説明も受け入れがたいという内容である 。次に、入院中の保護室の話が出された。「入れられた理由が良く分からない」や「暴力的な振る舞いがあったのは事実だが、話し合いの時間や自分の言いようをきいてくれたのなら、

違った結果であったかも知れない」という意見も聞かれた。保護室の使用は、専門家の理由はあったのだろうが伝わっていない。また、事後も含めて納得の出来る説明はなかったという。

説明と同意に関して、どのような対策がなされるべきなのか。米国の精神病／障害者の地域ケアシステムである ACT（the program of assertive community treatment）では、心神喪失状態に陥って自傷他害行為に及んだ場合に「身体拘束も必要である」との同意書を当事者と ACT チームの間で締結する。同意書の締結が身体拘束を肯定するか否かの吟味は措く。筆者の調査事例と ACT の同意書は、当事者の果たし得る責任を考える起点となった。自身の病気に医師や PSW の判断のみで納得がいかないならば、自分で自身の病や障害をより理解し、説明し、マネジメントする必要があるのではないか。

強制入院には保健所の精神保健福祉相談員が「ソーシャルワーカーは関係ができていないその人たちの自傷他害行為への介入は躊躇がある。一方で関係性ができている場合には関係が出来ていないに比べるとためらいがない。それは当座その人が本来行う自己コントロールを一時的に専門家が預かることで、回復の見立てがつくからだ。強制入院後のケアの段階でどのようにして、そのコントロールをいかに返していけるのかについて、それまで築いた関係性から見通しがつくからだ」という見解を述べた。

この見解は関係性の問題とかかわりが深い。述べられた「回復の見立てがつく」という箇所の見立てをつけるのは誰か、という問題は非常に重要である。回復が専門家の文脈でのみ進められるなら、説明と同意の手続きがあっても根本的な問題は解決しない。また、専門家の工夫や方法だけでは解決しない問題であろう。

専門家は戒められ、同時に「管理」をおこなう

専門家がある関係を良いものとして治療や支援関係を進める際、専門職者として果たすべき仕事を優先させるあまり、専門家が考える良い関係が一方的になる危険性を発言は示している。症状が落ち着くことを専門家の医師は良いとし、当事者は副作用を問題としている。薬は医師が目指した症状の緩和を果たしたが、当事者は緩和と満足は違うと言う。

> 医者は「薬で病は治せない場合があり、そのようなときでも関係性の中で症状が回復していく場合が多くある」というが、私は薬の副作用でよだれが出たり、震えがとまらないことがあった。医者は「必要な薬だから仕方ない。」というけど、よだれが出てもいい生活をしていない。治療とか薬とかを中心に生活しているわけじゃないから困る。副作用の問題についてどう考えるのかは、私と医者はちがう。でもそれじゃ困るんです。

> 「あなたは病気だ、障害者だ」とか言われても「違う」と思う。ただ、「あなたは障害者である前に一人の大人じゃない」といわれても、（病気か障害か原因はわからないが）あなた（専門家）に出来て、私に出来ないことはたくさんあるし、ここ事実できなくて困ってるのは本当なんです。でも、主治医やワー

カーさんには強くいえないんです。いろいろ世話になっているからね。

当事者は医療や福祉の領域のみで生きていないことを専門家は繰り返し教わり、意識する。本人の自己決定を尊重した関わりを専門家は目指す。上記の発言は、専門家が教えられた当事者の姿と目指すべき「関係性」が実際の問題は別であることに考えを及ぼす必要があることを示している。自己決定を促し決定しても、それが即ち「正しい」ことであるとは言えない。治療関係や支援関係で築かれた関係性は、専門家の意識や働きかけしだいでは即ち新たなものへ脱することを許さない。当事者の生活で医療や福祉が占める割合が必要性も含めて大きいことを理解した上で、専門家は何をどういった手法で目指すのか、当事者は自身が何を求め、何を不必要とするのかを再確認する必要がある。

支援者たちは支援が行われる場所や種類を問わず、当事者の判断や決定よりも支援が優先される場合をある部分では自覚している。それゆえ、入所施設の批判に理解を示す。本人の決定より優先される支援は良くないという理念のもと、地域生活が行われながら、地域でも支援のもつ「管理」は発揮されることも自覚している。また、苦情で支援が強化される可能性があることも気づいているだろう。出来上がった信頼関係があって支援が成り立つことにはそれほど自覚的ではない可能性がある。仮に支援者が考える「社会のルール」に対し、精神病／障害者が異を唱えた場合、支援者はどう考えるだろうか。当事者の主体性の発露で望ましいと考えるか。当事者の主体性の発露としてよい精神病／障害者の望みと支援者が考える「社会のルール」と衝突した場合、「正しく決めることが出来ていない」と判断してしまわないか。「正しく判断できない」から、手厚い支援が必要という結論に達しないか。仮にこのように考えるなら、入所施設で支援を行う考えと同質と言えるだろう。

では、精神科病院の対応はどうか。精神科病院での治療に本人のやりかたや要望が反した場合、精神科病院の価値が優先されることがある。例えば、治療を受けたくないと患者が主張しても入院させられることがある。「嫌だ」と強く言うほど「病識がなく重症だ」と判断されかねない。本人の主張と治療方針の摩擦の問題は、治療の場を地域に移せば解決するのか。治療を拒んで通院しない者を追わないのであれば、本人の主張が受け入れられたとも言えるだろう。しかし、医師や精神保健福祉士は「通院しない」状況を阻もうとする。良好な治療関係や支援関係を構築することで専門家を「信用して」もらう。

メンバー（利用者）の 2 人がいがみ合い言い争う。一旦は別の部屋に別れるなどして距離を取るがいつ殴り合いになってもおかしくない場合、私なら一方のメンバーへ「タバコでも吸わないか」話しかけます。たばこを吸いながら昨日のテレビの話や趣味の話に興じる。これはメンバーの怒りを和らげることが目的ではありません。たばこを吸いながら一時的であっても、そのメンバーと良好な関係を急速に強く築くことを目的としています。そしていざ殴り合い寸前のところで、煙草をともにしたメンバーに向かって「私からお願いします。堪えてはくれないか。」と言うのです。そして両者を分かち時間をつくって、つくった時間で煙草の彼には自分が、一方のメンバーは別のスタッフに対応させて話を聞いたり調

整したりするのです。

筆者が調査時に精神保健福祉士から聞いた事例である。筆者にも同様の対応をした経験がある。支援者にとってこれらの配慮や手段は自らの支援や治療に有効であるかもしれない。彼らの支援や治療がうまく機能すれば、精神病／障害者の役立つ場合もあるだろう。他方、一旦信頼関係が出来上がった利用者との間で強く良好な関係を短時間で再現して利用することは可能だ。その関係性は無自覚のうちに専門家の行動を増幅させることも否定できない。精神病／障害者は「自らの発言を控え」「あえて話さない」ことを支援者としての配慮とする精神保健福祉士に「子ども扱いしている」と言う。措置入院を経験した人は「暴れ暴力をふるった状況を勘案しても 5 年の措置入院は不正義であるし、措置入院が続く「治っていない」という医師の説明に関しても受け入れがたい」と語る。仮に「子ども扱い」されている、または「自らの主張を受け入れられない」場合どうすればよいか。まず考えられるのは、そのような施設や機関を利用せず、他を利用すればよい。しかし、現実的に上手くはいかない。なぜなら利用できる施設や機関が少ないことが理由であろう。

精神病／障害者その人と医師や精神保健福祉士が支援や治療を媒介に構築してきた「関係性」が、他の利用を阻害する可能性がある。支援や治療を媒介に「関係性」を構築する場所の多くは施設であり、病院や診療所である。その施設や病院や診療所という「場」は専門家の職場であり、配置された物や用意された器具は、医師や精神保健福祉士が仕事をする際に必要なものである。それらの物や器具が配置された、支援者の支援に都合が良い環境では「関係性」を支援者にとって都合の良いものに誘導し、維持することは不可能ではない。「措置入院介助の訴えを聞き入れられない」のは「治っていない」という判断とともに「聞き入れなくても良い」環境とも言える。「子ども扱いしている」と指摘された精神保健福祉士は「あえて話さない」ことをせずに自らの考えを強く主張するだろうか。仮に「対等性」という言葉が精神保健福祉士や医師などの支援者の戒めの言葉であり、関係を点検するコンセプトになり得たとしても情報量に違いがあり、なおかつ支援の場が「支援者の土俵」であるなら実効性があるのだろうか。

では次に、クラブハウスモデルという取り組みを紹介する。クラブハウスモデルでは支援者による支援がないと言う。ただ、専門家であるスタッフと当事者であるメンバーという属性の違いはあり、それをクラブハウスモデルは否定しない。では仮にクラブハウスモデルに支援者による支援がないとして、スタッフによる「管理」の可能性はないのか。

クラブハウスモデルとは何か

1985 年 10 月に共同作業所全国連絡会アメリカ障害者施設視察団の一員としてが、アメリカ各地の障害者リハビリテーション施設を視察した秋元波留夫の記述において、秋元は次のようにクラブハウスモデルを紹介している。「その特徴はかつて精神障害を経験した「元患者」たちの創意によって始まった、文字通り自助活動の組織だということである。

現在ではその活動の規模は拡大して、リハビリテーションの専門家、精神科医、市民ボランティアが参加、協力しているが、障害者が主人公であるという基本的性格は変わっていない」（秋元監修 共同作業所全国連絡会 編 1988:15）。秋元は、ファウンテンハウスの成り立ちや活動内容を「精神障害者施設とリハビリテーション」という章の一節で取り上げ、日本における当事者の状況を Paternalism と述べ「ファウンテンハウスの活動とはほど遠く、ようやく芽生え始めた当事者運動と作業所の仲間に支援を惜しまなければ日本のファウンテンハウスが育つ」と課題を提起している。秋元はクラブハウスモデルのどういった要素に注目して期待を寄せたのか。

秋元の言うように、クラブハウスモデルは、米国のニューヨークで始まった精神病／障害者の自助活動による相互支援を基盤にした活動である。世界 27 カ国 300 か所以上のクラブハウスが国際基準に従って活動を行っている。 クラブハウスの利用者はメンバーと呼ばれ、支援者（スタッフ）に指示されたり管理されたりする立場ではなく、パートナーシップの関係を保ち、様々な「仕事」に携わる。その「仕事」には福祉的就労という意味合いはなく、工賃も発生しない。クラブハウスでは、スタッフのマネジメントによりメンバーが主体的に「仕事」に参加する。その「仕事」への参加によって自助の力を養い、相互支援活動を培う。現在、全世界で 300 以上のクラブハウスが同一の国際基準の下活動を行っており、半数以上の 217 がアメリカのクラブハウスである（2008 年）。

では、クラブハウスモデルの成り立ちを紹介しておこう。クラブハウスモデルの始まりは、1944 年にニューヨーク市で州立病院を退院した 4 名の精神疾患を持つ人たちによって自助グループ作ったことによる。そのグループは「We Are Not Alone」と言い、頭文字をとって「WANA」と名付けられた。当初、「WANA」のメンバーは図書館や教会あるいは YMCA の集会所などを借りミーティングを行っていた。入院している仲間や退院をして一人でいる人たちを訪問し、励ます活動を始める。しかし、友愛訪問などの自助活動を行うには、彼ら独自の場所が必要であった。そこで「WANA」は、1948 年にボランティアらの協力によってマンハッタンにビルを購入する。これが最初のクラブハウス「ファウンテンハウス」で、その後、ソーシャルワーカーなどの専門家が活動に加わり、「仕事」を中心に据えた活動が始まる。1950 年代に州立病院のソーシャルワーカーであったジョン・ビアード（J.Beard）が所長としてファウンテンハウスに参加したころから、クラブハウスモデルの原形である「仕事」を中心とした取り組みが始められている。ファウンテンハウスは、1977 年に CMHC の助成金でクラブハウスモデルについて研修啓発活動を行い、全米にクラブハウスモデルが普及する。

クラブハウスモデルでは支援する／されるという関係を意図的に排し、活動の場そのものを「福祉的支援の場ではない」としている。秋元も著作で取り上げて評価している取り組みである。従来の支援関係がクラブハウスにはないとは言えないだろう。専門家が支援者であり続けることがなく助け合っていることがクラブハウスの特徴とも取れる。しかし、スタッフとメンバーという区分けは歴然とある。スタッフとメンバーの関係の規定なども

明示される[i]が、従来の福祉施設とは違う関係が存在する根拠とできるだろうか。

専門家の支援の有無

クラブハウスモデルのメンバーとスタッフたちは、他の人たちと「仕事」に参加することで自立に向かわせる点に活動の価値を主張する。当事者と専門家の関係を「パートナーシップ」と規定する特徴があり、研究者や実務家から注目される点でもある。筆者は国内のクラブハウス数か所で延べ 4 週間の参与観察を行った。その参与観察中に遭遇した暴力を振るったメンバーに関するミーティングを検討する。

ミーティングはデイ・プログラム終了後に行われた。当日ミーティングが行われることは事前に決まっていたようで、数人のメンバーはデイ・プログラムには参加せずミーティングからの参加であった。筆者はミーティングがあることを事前に知らされていなかったが参加を許された。ミーティングには暴力的行為をしたメンバーは参加していなかった。16 時 30 分ごろから始まった話し合いは約 3 時間に及んだ。

まず、ミーティングの司会と書記、そしてホワイトボード記入係が決められた。これはクラブハウスモデルの流儀に則っている。司会役のメンバーが経緯を説明し、スタッフが補足を加えた後に参加者の意見が順番に述べられた。冒頭あるメンバーが「暴力的な行為を目の当たりにして怖い」と意見を述べた。その後も「今度は自分にも被害が及ぶ可能性を考えると、利用を認めるべきではない」という意見が続いた。対して「彼はここが好きだと言っているし、他に行き場はない。今回は利用を認めればどうか」という意見も出された。その後、議論は彼の障害特性に及んだ。あるメンバーは彼の障害が精神障害ではないことを指摘し、クラブハウスの利用が彼に不利益になることを述べた。対して、スタッフは彼の障害の説明をした上で、スタッフがその障害について学習をしている旨の発言をした。別のスタッフは彼が暴力的な出来事があった後に反省をしており、クラブハウスの利用を望んでいることを電話で話したことを伝えた。そのようなやり取りの後「議論の過程や結論をだれが彼に伝えるのか」という問題が出された。「暴力的な人物に接触するのは荷が重い。このような場合スタッフがその任に就くのが妥当ではないか」というメンバーに対し、スタッフは「議論が十分になされていない中、スタッフであるからやるべきだという結論はクラブハウスの流儀になじまない」という意見を述べた。ここで「継続的に話し合いをする必要があるのではないか」というスタッフからの提案でミーティングは終了し、結論には至らなかった。

福祉研究者やクラブハウスモデル実践者の多くが、福祉の実践を管理的で専門家主導と指摘した上で「依存・スティグマ・孤立の克服」や「専門家による管理ではなく自治」がクラブハウスモデルの特徴と評価する。しかし、福祉実践のどの部分が「専門家の管理」なのであろうか。同時に、クラブハウスモデルの言う専門家と当事者の関係の規定である「パートナーシップ」とそれに基づいたプログラムや実践が専門家の管理から脱し得ているのか。「パートナーシップ」を強調するクラブハウスモデルにおいて、専門家と当事者の

このような関係性はないのだろうか。

精神障害の分野では 1970 年代後半から作業所が作られ、福祉施設となって活動を続けている。その活動の特徴はメンバーと職員の共働にあるといってよいだろう。共働を中心として、その進め方や福祉施設利用におけるルールなどをメンバーと職員によるミーティングで決める。専門家である職員はこれらの活動がメンバーを「主体」にすると考える。同様にクラブハウスモデルにおける諸活動によってメンバーは自治・責任の主体となる主張の根拠も共働という手法に求められる。

クラブハウスモデルでは、ある問題をクラブハウスの問題として皆で話し合うことが行われる。それは公開相談の可能性がある。前述のミーティングを例に考えてみよう。クラブハウスにとっては暴力的な行為を行ったメンバーの利用を決定する話し合いであるが、加害者にとってはクラブハウスを継続して利用したいという訴えである。

3 時間の話し合いでメンバーは加害行為を起点として、彼への不安や思いを述べ、スタッフは経過の説明と事実を述べた。「怖い・不安」という感情的な感想は述べなかった。ミーティングではスタッフも同様に発言ができる。スタッフの一言が決定的ではないにせよ尊重される。前述した多くのメンバーとの良好な関係の上での発言ならなおのことだ。原理原則からスタッフは「怖い奴だから利用をやめてもらいたいのです」との意見を述べることも可能であった。「彼は行くところがないから受け入れた方が良いと思う」とメンバーと同様に言うこともできただろう。

しかし実際にはそれらのことは言わず、事実関係の確認と自身の取り組みについてのみ述べるに留まった。これはスタッフの発言力が大きく議論を決定してしまうことを意識しているのではないか。個人面談が利用者の依存的な体質を支持し、専門家の思惑通りに利用者を誘導する側面があることは認めるものである。そのような側面を解消するためにミーティングという方法が採用されたとしても、専門家の権力性は消えないことは、クラブハウスモデルのスタッフの発言の抑制でも明白だろう。

事例の結論は利用中止か利用継続しかあり得ないのだが、ミーティングが進んでも各々の主張が歩み寄りを見せない場合どうするのだろうか。結論に至らない議論が続いた後に意見を求められたスタッフの発言は議論にどのような影響を与えるのか。これはクラブハウスに限った問題ではなく、福祉施設のミーティングでも見られる問題だ。確かに国際基準ではスタッフだけがメンバーの在籍や除籍に関する決定権を持つことは否定されている。しかし全く決定権がないわけではなく、当事者と同じだけの決定権を持つ。福祉施設などでは最終的な決定権をスタッフが持つことが多い。合意形成のための話し合い自体がないことも珍しくないなかで、クラブハウスにとって重要事項に関して、スタッフとメンバー双方の合意の下で決定しようとしていたことは異質であろう。

しかし、そうした方法をもってメンバーとスタッフの立ち位置は同一であるとは言えない。国際基準ではスタッフを専従職員とするように明示されている。専従職員であるなら、クラブハウス開所日には毎日勤務しており時間の上では多くのメンバーと関係を構築し、

強化を図ることが可能である。日々の活動によって多数のメンバーと関係を構築するスタッフの発言力は、合意形成の意見交換で同じ重みと言えるのか。スタッフの潜在的な発言力や権力性はないと言ってよいのだろうか。日々の活動によって構築された関係は従来の福祉施設でも見出だせる。専門家はメンバーとの関係を意識的あるいは無意識のうちに利用し、会や作業を円滑な運営に利用することがある。

クラブハウスモデルの実践自体、スタッフとメンバーの関係を意識し、従来の福祉施設などで見られる役割を意図的に解除した取り組みである。しかし、クラブハウスモデル実践を取り囲む福祉実践や精神科医療は従来のものだ。クラブハウスモデルを利用するメンバーは従来通りの関係で実施させる精神科医療を受診している可能性がある。半澤が紹介するように、従来の福祉施設での関係や関わり方に疑問を持つものがクラブハウスを利用することもあるだろうが、クラブハウスモデルでの流儀になじめない時、個人面談など専門家の力を欲する場合などは、従来の福祉施設の利用も可能である。仮にクラブハウスモデルのミーティングにおいて、当事者の意見が専門家からみて明らかに不利益をもたらす恐れがある場合や得策でない場合でも「それで良い」と当事者が言った場合、クラブハウスのスタッフはどうするのか。議論が十分になされていて、それでもなお「暴力的な人物に接触するのは荷が重いので、スタッフであるからやらなければならない」という意見が多くみられ、結論として採用するのであればクラブハウスの流儀と言えるのか。

これらの問題は従来の福祉施設と同じである。クラブハウスは州立精神科病院の解体後の社会的「受け皿」として注目され、地域における精神病／障害者の生活を支える拠点となった。その活動の起点は支援者が設えられたのではなく、当事者の自助である。しかし、その後にソーシャルワーカー等の専門家が加わる。専門家の加入によって活動の規模が拡大する。クラブハウスの活動は現在、北米を中心に全世界に展開している。WANA から 70 年ほど経った現在のクラブハウスも、参加者たちは自助を基盤にした活動を強調している。自助の強調は国際基準に明記され、支援者による個人面談等を行わない、ケース記録やカルテといった支援者の一方的な記録を排除するなどの活動によって具現化されている。これらから、支援者の支援が精神病／障害者の生きる力を阻むことや支援に内在される「管理」について自覚的であると言える。ただ翻って言えば、クラブハウスの国際基準とそれに準拠した活動は「管理を排除するクラブハウスにおいてもなお、専門家の「管理」があり得ることを自覚したうえでの営みである」と言えないだろうか。

まとめ

支援者たちは自らの支援が利用者に対して影響力を持つことは自覚しているようである。ただ、自らの支援が利用者の生活を「管理」しているとの認識は強くないようだ。支援者は彼らの考える「良いこと」を一方的に提案し、その提案を受け入させることには肯定的ではない。それが利用者の自己決定を阻害することを知っているからだろう。しかし、見守りという目には見えない「管理」のもと、利用者が行動することも少なくない。

精神科病院から退院し病院周辺にあるグループホームに住み、毎日朝から夕方まで精神科デイ・ケアに通いそこで一日の大半を終えるという人は少なくないだろう。しかし、これをもって地域生活といってよいのか。確かに支援者の「目」は届きやすい。そしてそれを見守りと言えなくもない。しかしそれは、見守りというソフトな「管理」であろう。さらに、濃厚な見守りが可能な場や時間は支援者が支援を提供する場でもある。

クラブハウスモデルの主張と実践は、支援者の支援と「管理」を考える際に役に立つ。仕事を媒介とした気づきや回復を促すクラブハウスモデルの方法論となじまないので個室での個人面談は行わない。この点において福祉施設の職員と利用者の関係とは違うと言える。施設での共働においても気づきや回復の促しは存在するだろうが、施設では個人面談を行うことや専門家は支援者という関係性が積極的に肯定される点で治療的であると言えなくもない。

数か所のクラブハウスのスタッフに「相談をしたいというメンバーに対してはどうするのか」と問うたところ、「相談できるところ、地域生活支援センターなどで相談すればよい。特に問題ではない」との話を聞いた。個人面談という福祉的・治療的関係をクラブハウスモデル外で担保することで「クラブハウスモデルでは個人面談は行わない」という主張は施設内の作業部門では利用者と職員は共働しているので施設の職員と利用者は横並びの関係という主張と同質である。クラブハウスモデルに参加するメンバーが自立しており、彼らによる自治で運営されているならば、専門家であるスタッフはいらない。自立へ向かうような取り組みであるから、専門職であるスタッフの仕事が必要とされる。クラブハウスモデルのメンバーは自立を目指している途上で、スタッフが支援を行い、その仕事に対して金が払われているとの考えは間違っていないだろう。精神障害のある人がクラブハウスモデルへ参加することでプログラムを主体的に選択・活動しているとは言えるが、支援の主体になっているとは言えない。施設をはじめとする福祉施設に見られる支援者と利用者という関係が管理を生み、管理が自立を阻害するというなら、支援によって自立は生まれないとも言える。

ここで注目すべきは福祉施設や医療機関での取り組みは「医療・福祉のフレーム」で行なわれている。医療機関と比較して福祉施設の支援は「管理」が少ないとしても、福祉施設は医療機関と互いに影響を及ぼしあい、助け合うことで成り立っている。それらの環境は、専門性を持った支援者と利用するメンバーという関係の上で成立している可能性が高く、それら支援者との関係のなかで生活をしている当事者は少なくないだろう。換言すれば当事者は「医療・福祉というフレーム」によって生み出されていると言える。

地域移行の後の社会的「受け皿」を考える際に「医療・福祉というフレーム」を離れることを想定することは必要か。支援が行われる場が「支援者の土俵」である施設や病院である場合、支援の「管理」の側面は強化される。他方、それらの「管理」が強調された支援が必要な場合があり、それを望む人たちもいる。治療場面では治療者による「管理」が必要であり、必要とされるのが入院治療だろう。しかし「管理」の必要・不要の判断は患

者側につきにくい。医師の判断により、必要となれば入院が継続される。ただ、医師がもつ必要性の判断基準は治療の要否だけではない。例えば社会的入院である。退院するところがない人を退院させることはできない。この判断は間違ってはいない。しかしそれでは何も変わらない。ではどうすればよいか。

筆者は次のように考える。まず精神科病院をまず「脱」して地域で暮らす。それによって本人の判断と管理が主張しやすい場で暮らすことができる。当初はグループホームでもよい。ただ、それは施設であると認識する。そこに留まることは可能だが、その後アパートなどで暮らすことを目指す。そこに福祉サービスだけでなく、有料介助者などを当事者が雇う。政府は雇うためのお金は当事者に給付する。また支援者は近隣からの苦情を引き受けず、まずは当事者に引き受けてもらう。「自傷他害を防ぐ」程度の原則は必要だろうが、この原則の解釈拡大とそれに依拠した介入を防ぐために、同時に「本人にまず引き受けてもらう」ことを社会的「受け皿」の基本的な考えにする。政府は「管理」が含まれていようが支援者の支援のないところに予算はつけないという困難さはある。精神科病院を「脱」し、地域で暮らすことを考える際に必要だと考える。

参考・引用文献

秋元 波留夫 監修 共同作業所全国連絡会 編 1988 『アメリカの障害者リハビリテーション』,ぶどう社

三野 宏治 2009「日本におけるクラブハウス言説の潮流についての研究」『Core Ethics』vol.5: 315-326

――― 2011 「精神障害当事者と支援者との障害者施設における対等性についても研究――当事者と専門家へのグループインタビューをもとに」,『立命館人間科学研究』第 22 号

――― 2012 「対人支援関係における専門家の権力性に関する考察」,『対人援助学研究』1

★★★★★★★★★★★★

★★★★★★★★★★★★

男は痛い！

國友万裕

第25回

『彼女がその名を知らない鳥たち』

1. コネクティング・ザ・ドット

対人援助学会の大会の打ち合わせのために、中村正さんと 1 年ぶりに温泉に行った。正さんとはここ数年、何度も温泉で話をしていて、たっぷり裸の付き合いをともにしていただいている。お互い裸になると近くなった感じがするので、とても親密になった気がして楽しいものだ。考えてみると、正さんと初めてお会いしてから、もう 20 年近い月日が流れようとしている。最初の頃は、一緒に風呂にまで入るような仲にはなると思っていなかった。

俺がある男性グループに足を踏み入れたのは 34 歳の時、19 年前のことだ。当時はまだジェンダーに関する議論が盛んだった頃で、大阪の男女共同参画センターで、そのグループの分科会が行われて、その時のファシリテーターが正さんだった。俺はそのあと、そのグループに深入りしていくことになるのだが、正さんは DV の分科会、俺は DV の分科会に参加したこともあったけど、メインはメディアのプロジェクトだったので大して親しいわけでもなかった。俺は 2 年間、べったりプロジェクトを頑張ったのだが、その後、他のメンバーと決裂してしまった。今思えば、俺も悪い、でもあの頃は相手のことが見えなかったのだ。「人間って、べったりし過ぎると相手のことが見えなくなってしまうものなのよ」と以前女性のカウンセラーから言われたことを思い出す。そうなのだ。その人と俺はべったりし過ぎて、お互いを傷つけあうことになってしまっていた。プロジェクトで頑張っていた当時は生涯の師弟関係になれる人かと思っていたのだけれど、愛は突然憎しみへと変

わっていく。その人は俺のことを一生許すことはないだろう。最近になって、学会等で顔は時々見ているが、目線すら合わせることはない。懇親会でも別のテーブルに座る。あそこまでこじれるとお互いに修復の余地はないのだ。それはそれでいいのかもしれない。徹底的に付き合って、徹底的に憎しみ合う。恋愛だって、そういう終わり方をするときはあるのだから。

その人と決裂してから7年くらいはトラウマ状態が続いた。大阪のそのグループのセンターがあった界隈には行くことすらできなかった。俺はその間、京都で当時知り合いになった人たちの催しに時々顔を出していた。そこで正さんにお目にかかることはあったものの、挨拶程度の付き合いだった。

それが親しくなったのはいつ頃からだろうか。6年くらい前から、一緒にお芝居に行ったり、風呂に入ったり、食事に行ったり、共同研究したりと本当に親密になってきた。出会った点から20年近い月日を経て、親密になる点がつながったのだった。

一方で、かつて、同じプロジェクトで頑張っていた女性とは喧嘩したわけでもないのに自然消滅的な関係になってしまった。スポーツクラブで彼女が運動しているのを何度か見かけているのだ。何度かすれ違ったし、彼女は俺のことに気づいているはずだが、至近距離に立っても、彼女は話しかけて来ようとはしない。俺の方もなんとなく話しかけられない。全く見知らぬ人であるかのようにすれ違っている。思えば、もう10年。おそらく、彼女もかつてのことは思い出したくない。あのグループはトラブルも多かったし、忘れてしまいたいのだろう。これはこれでいいのだと思う。

いつの間にか見知らぬ人になってしまう人、大げんかをして別れる人、思いもよらず親密になる人、人間関係の出会いと別れは様々である。とりあえず、正さんとは出会った点と親密になる点がつながった。ドットがつながったのだ。スティーブ・ジョブズが講演で使った「コネクティング・ザ・ドット」という言葉は有名である。未来のことはわからない。後で振り返って、ドットとドットがつながったことを実感する。人間は運命に左右されているのである。

2. What's a Small World!

「人間って、何が幸いするかわからないわよねー」

俺が2冊目の単著を出した時のことだ。行きつけの自然食レストランの女性からそう言われたものだった。不登校で友達もなく映画ばかり見ていた若い頃、ジェンダーに苦しんで誰にも理解してもらえなくて葛藤していた時代、その時代があってこそ、今となっては映画とジェンダーの本を出せる。確かに、映画とジェンダーに関しては少年の頃の苦しみが年取ってからの研究へと繋がっていったのである。これもコネクティング・ザ・ドットだ。

レストランの彼女とも不思議な縁なのである。彼女のレストランを知ったのは彼女の義弟に当たる人が長野の大学の先生で、ある学会でお会いした時に、「京都に住まれているのならば、ここに行ってあげてくれないか」と頼まれたことからだった。

一旦、行ってみると料理がおいしいだけで

はなく、あちこち俺の知人の人たちと彼女がつながっていることがわかってきた。俺の家の近所のカフェの人、大学の近くの食堂の人、ジェンダーの活動の人、対人援助学会の会員の人、さらには元大学の非常勤講師組合のリーダー的な存在だった女性まで、皆、彼女と友人で交流している。なんと狭い世の中！What's a small world!！　やはり、人との巡り合いは運命である。ドット同士が繋がっているのだ。

3. たどり着いたドット

大学院の修士課程時代の先生に思い切って電話したのは、今から 17 年前。ちょうどプロジェクトの後、初めての講演依頼が来て、調布市で講演をする頃だったと思う。

この先生には本当にお世話になった。この先生がいなかったら今の俺はない。神様のように優しい先生だった。しかし、一つだけ困っていたのは、この先生は早くに就職したほうがいいという考えであるところだった。俺はこだわりの強い人間なので、どこの大学でもいいという気持ちにはなれない。しかし、大学の状況は年をおうごとに厳しくなっていて、小さな潰れかけの大学であっても早くにポジションを得ないと、一生冷や飯ということになる。その先生はそう思っていらしたのだった。

連絡を取ったら、またそのことを言われるだろうなあー。そう思って俺は、その先生が退官して、京都に来られなくなってからは電話すらしていなかった。年賀状も出さなくなっていた。ところがある日、突然思いついた。連絡してみようと、あれだけお世話になった先生なんだから、そのあと、ずっと音沙汰なしでは、あまりにも薄情だ。その先生は、東京在住で週に 2 日ほど京都に来られていたのだが、もう大学院も定年になって来られなくなっていた。でも、人づてにまだお元気だとは聞いていた。思い切って、電話をすると奥様が出られた。

「先生、まだお元気でいらっしゃるんですか？」

「もうアウトなんです。ハガキかなんかくだされば喜ぶと思います」という返事だった。

先生はまだ亡くなってはいなかったのだが、その時点で 80 を過ぎていたし、このところ体調が悪くて、もう電話に出られるような状況ではないらしかった。しかし、奥様と話ができたことで、喉に詰まっていたお餅が落ちたような気分だった。早速、ハガキを出した。「就職は決まっていないけど、元気にやっています」と。

その 1 ヶ月後、その先生はなくなった。まさに虫の知らせだった。あとでその先生の書かれた冊子が送られてきたのだが、俺が電話した時はもう死を待つ状況だったみたいだ。俺のハガキを見て、安心して、天国に旅立たれたのだろうか。そうだったら嬉しいなあ。

この先生は修士課程時代の恩師なのだが、博士課程時代の恩師とは俺が最初の本を出した後に 16 年ぶりの再会となった。この先生は論文の指導をしてもらった先生である。考えてみるとあの頃は必死で、電話で 1 時間くらい引っ張ったこともあった。迷惑だったろうなあー。ビッグネームな先生で、その先生を頼る人は他にも何人もいたし、俺はそれほど親密ではなかった。だんだんと大学への就職状況は厳しくなっていき、俺の大学院時代の

前後だった連中は専任が決まらないまま、やめてしまった人も何人もいた。俺はどうにか１冊は自著を出したいと頑張った。どうにか出せた頃、その先生ともう一度会いたいと思った。それを知り合いの出版社の人に話したところ、俺とその先生の再会をセッティングしてくれた。日本料理を食べながら、久々にお話しした。15 年も会っていなくて、その先生はもう 80 なのだが、ほとんど変わっていらっしゃらなかった。俺の本を渡し、握手して帰った。

あの頃は恐れ多くて付き合えなかったが、今となっては付き合える。この先生との出会いもこれで結果オーライとなった。ドットとドットがたどり着いたのだった。

4. メロンさんが死んだ。

11 月の初旬、母に電話した。

「今日はメロンさん（仮名）のところに行ってきたのよ。新聞に 100 歳で亡くなったという記事が出ていて、娘さんがいらっしゃるから、そこまで行ってきたの」と母。

僕の実家は商家だったのだが、メロンさんは僕のところで働いていたおばさんだった。実名を出すわけにはいかないので、メロンさんという仮名にしたのは、この人、僕が大学の頃にメロンをいっぱい京都に送ってくれたのだった。

もうとっくに亡くなっていると思っていたら、100 歳まで生きられて、49 日が終わったばかりなのだそうだ。娘さんが、「万ちゃん、万ちゃんと話していて、あなたの子供の頃の写真をたくさん見せてくれたわよ」と母。

へー。知らないところで俺のことを思っていてくれた人がいたのだった。もううちの仕事を辞めてから、30 年以上も経っているから、とっくに俺のことなんか忘れていると思っていた。そうじゃなかったのだった。娘さんまで俺の名前を口にするということは家で相当話していたのだろう。

俺はやはり幸せなんだなあーと思った。

俺は、嫌われたり、憎まれたり、白眼視されたりしたときのことばかりを覚えているけど、実際には愛してくれた人もたくさんいたのだった。俺と愛のドットでつながっている人はたくさんいるのだ。

5. 共有できない思い出

先日、韓国語の先生と話した。韓国といえば、何と言っても軍隊のイメージがある。

３年ほど前に教え子と食事に行った時のことだ。その子は大学在学中スポーツクラブでバイトをしていて、高校時代はラグビー部だったと聞いている。「僕の人生はスポーツの人生なんですよ」と語っていた。その彼が、「韓国に生まれなくてよかった。軍隊に行かなくて済むから」と突然、言い出したのだった。彼みたいなスポーツマンだったら、体力的には十分、軍隊についていけるだろうし、男の世界にも慣れているはずだ。その彼であっても、軍隊なんかには行きたくないのだなあと思って、ホッとした。

韓国の場合は、男は皆兵役につかなくてはならない。しかも、良心的兵役拒否がないので、拒否したら刑務所行きである。その先生の話だと、実際に刑務所に入れられる人もいるとのことで、「刑務所の方がマシですよ」とおっしゃっていた。そういえば、前に韓国か

らの留学生の男子と話した時も、軍隊にいた時は上官の人を殺してやりたいくらいだったと話していた。それくらい軍隊はつらいのだ。男だけがこんなつらい目に合わされるなんて、俺は絶対に許せない。これは深刻な男性差別なのだが、韓国の男性たちはそれを受け入れているのだろうか。

そのことを尋ねると、刑務所の方がマシなんだけど、行かなかったら「そのあとの人生で、体験を共有できなくなるんですよ」とその先生はおっしゃっていた。すなわち、同じ過去を共有していないため、男の仲間に入れなくなるのだ。

俺の場合は、高校に行かれなかった。大概の人は高校には行くから、行かなかったことが、共有できる過去がないという孤独につながっている。俺は履歴書を書くのが辛い、修学旅行の高校生を見るのが辛い、高校の頃スポーツをやっていた人の思い出話を聞くのが辛い。俺はあの時、一人の殻に閉じこもっていて、同年代の人たちと話をすることすらなかったのだった。

俺にとってまさに学校は軍隊だった。殴られることの恐怖に怯え、上半身裸を強制され、髪は短くしろと言われ、理不尽な校則に縛られる管理教育の世界であった。だから、不登校になったのだが、他の男たちはどうにかやり過ごしてきているから、俺みたいな男を理解してはくれない。この十字架をずっと背負う苦悩は並大抵ではなかった。学校は刑務所以上に地獄であっても、続けなかった人間はそのツケを払わされるのだ。軍隊に行かなかった韓国の男たちが払うツケと同じツケを。

6.つながるドット

50を過ぎて、ドットはどんどん繋がってはいる。俺は若い頃、親不孝をしまくった。弟にも迷惑をかけた。母は散々苦労したが、60を過ぎる頃から人生が開けて、世界中を旅した。今は80近いが元気にしている。俺は、若い頃は親や兄弟のことを考える心のゆとりなんかなかったが、今はゆとりができてきて、親孝行もしている。今一番願っていることは母が幸せに一生を終えてくれることだ。そして、弟が良き伴侶に巡り会えることである。俺は母や弟の幸せの邪魔になることだけはしたくない。こういう自分になれたのも、これまでの紆余曲折があったからで、これもコネクティング・ドットだ。

皆が学校に行っている時に友達もなく過ごした時間は、今になって、教え子たちが埋めてくれている。俺は大学くらいの頃焦っていた。今、海や山で遊ばなかったら、スポーツをしなかったら、一生、そういう時期を過ごすこともなく一生を終えることになるのだと。しかし、そうはならなかった。俺は21の時にプールに通い始めて、53歳になった今日まで、32年間プールもしくはジムのない生活をしたことがない。大概の人は一時期は入会しても、何かきっかけがあると辞めていく。しかし、俺は子供の頃スポーツができなかった悔しさがあるから、今でも辞めずに続けている。

また、この原稿を書いている3日後には専門学校で教えていた男の子と飯に行くことになっている。彼と会うのは3度目だ。1回目はプールの後、飯。2回目は飯の後、風呂。今回は飯だけになるのか、風呂も行くことになるのかわからないが、とにかく彼は俺と会いたがってくれている。ラインで、行きたい

と彼の方から誘ってきた。俺はもう２度も付き合ったし、もう彼の方が嫌がると思っていたのに、彼の方からまた行きたいというのだ。こんな喜びはない。

彼は学生時代はスポーツクラブのインストラクターをやっていて、クラスで一番のマッチョくんだった。その彼と風呂やプールに入れる。俺はこういうやつと友達になりたいという気持ちは小学校の頃からあったのだけど、スポーツがからっきしできなかったため、すべての男性的な活動から身を引くより他なかった。でも今はスポーツ万能で体躯の立派な彼と友人なのである。

若い頃に得られなかったものは、思わぬ形で運命が与えてくれる。これも一種のコネクティング・ザ・ドットだろう。

6.『彼女がその名を知らない鳥たち』（白石和彌監督・2017）

まだつながっていないドットがある。それはやはり女性恐怖だろう。俺は本当に女性を憎まざるをえない運命を背負って生まれたらしい。今でも俺は女性を批判の目で見るという習慣がついてしまっている。先日の対人援助学会の大会に九州の女性が来られていて、彼女にその気持ちをぶつけた。彼女も、確かに九州の女性は炭鉱の女性のように荒々しくて、一見、男尊女卑社会に見えても、実際には女が男を泳がせているんだということには共感してくれた。

世の中の男は健気だ。女のために一生懸命働いて稼いで、家に帰ると妻と子供が癒着していて、男は片隅に追いやられる。離婚なんてことになったら、女性の方に問題があったにしても、子供は女性に取られる。なぜ、皆、こんな人生を受け入れてしまうのか。

俺は沢山の女性からトラウマを負わされたせいで、女に無償の愛を与えたいという気持ちがなくなってしまっている。むしろ、一方的に尽くしてくれるのであれば女性を受け入れても構わないという心理になってしまっている。これを言うと男尊女卑的な昔風の男の言い草みたいに聞こえるだろうが、そうではないのだ。逆である。むしろ、俺は、今まで女性に傷つけられてきたから、そのお詫びを女性たちに求めているのである。こういう考えでは、いつまでたっても女性と建設的な関係を持つことはできない。俺はこのまま女性と付き合わずに一生を終えるのだろうか。いつか思わぬ形でドットがつながる日が来るのだろうか。

今回のこの映画、俺とはまるで正反対の男の話である。大して期待してはいなかったのだが、予想外の感動だった。阿部サダヲが好演で、いじらしいくらいに一人の女を愛し抜く男を演じている。蒼井優が演じる女は身勝手で浮気者。彼を傷つけるようなことを言いまくる。しかし、彼はめげずに愛し抜く。そして、彼女の人生の後始末を自分が引き受けることで、自分の人生を全うするのである。

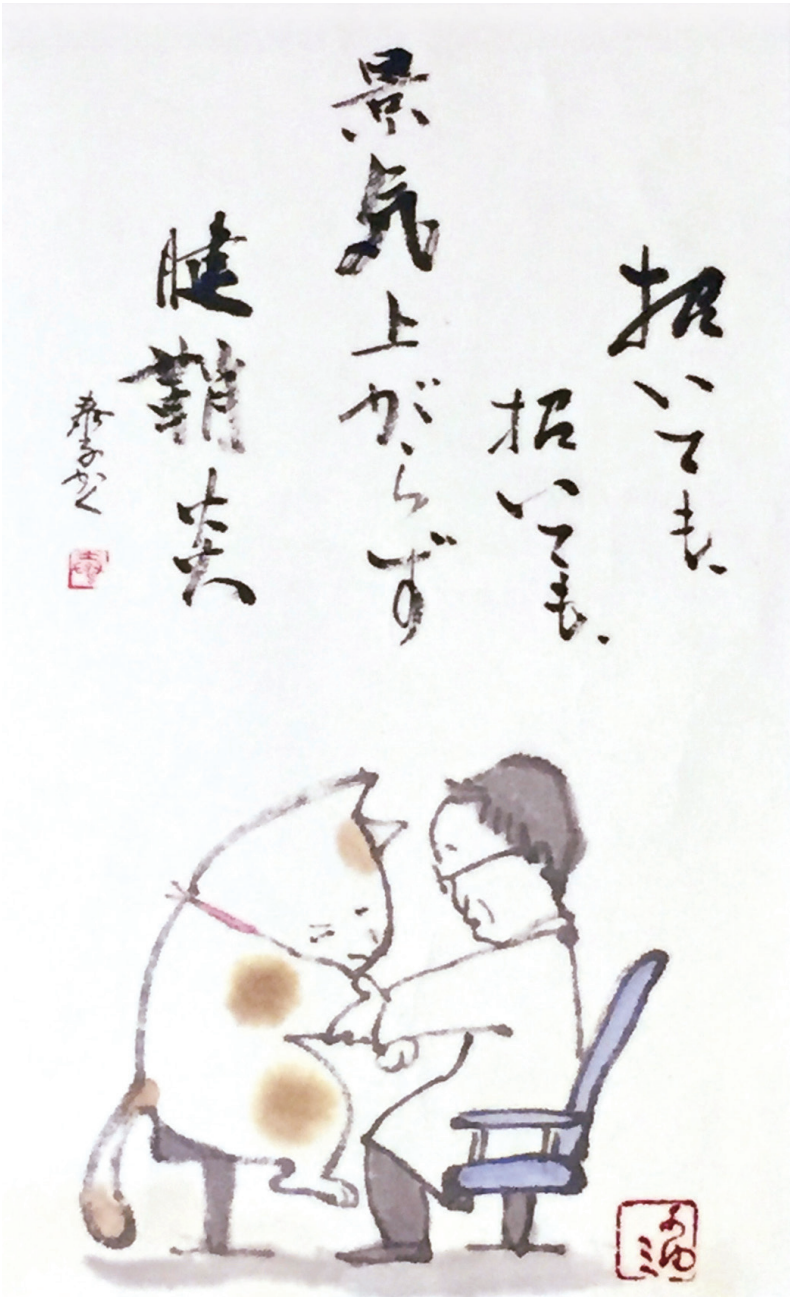
切ないなあー。こんな男、悲しいなあーと思いながら、涙が出そうになった。やはり、愛されるよりも愛する力を持つ男は気高いものがある。ちょっとはこういう男を見習わなくてはならないのかもしれないけれど、俺はやはりこういう男にはなれない。

もう 30 年近く前の話で恐縮なのだが、郷ひろみと二谷友里恵が結婚していた頃、二谷が『愛される理由』という本を出して、大ベス

トセラーになったのだが、この本、元々彼女は『愛する理由』というタイトルで書いたのだと聞いている。それを出版社が女性に受けることを狙って、『愛される理由』に変えてしまったのだった。

俺の方が愛してしまったら、女性に愛を与えてしまったら、それこそ俺は男性ジェンダーを引き受けたことになる。女性の望む男の役割を引き受けることになる。悲しいかな、それが俺にはできないのだ。俺のジェンダー拒否病は深し。

『彼女がその名を知らない鳥たち』、文字通り、男は痛い！映画です。ぜひ、ご覧ください。



招き猫

招いても、招いても、景気上がらず 腱鞘炎

三嶋あゆみ

援助職のリカバリー

《24》

～「セックスレス」に立ち向かう(5)～

袴田　洋子

ネットで「セックスレス」を検索してから、京子は、今までに踏み入ったことのない世界を冒険しているような気分になった。しかしながら、冒険と表現するには、かなり失礼なようにも感じた。そこには、夫婦関係に切実に悩む老若男女の声が数多く寄せられていたからである。新婚３ヶ月なのに、すでに性交渉がない夫婦。子どもが生まれてから、まったく性欲が無くなり、夫の思いに応えられないことに悩む妻、そして、その夫。配偶者からの求めにどうしても応じる気になれずに、不倫を容認すべきかどうか、真剣に悩む人もいた。京子と同じように40 代後半になっての更年期障害に伴う突然の性欲増強に戸惑う女性の悩みもあった。夫婦の夜の営みに関する悩みは、多種多様だろうと思っていたが、セックスレスということでは、皆、同じ悩みを抱えているようにみえた。こんなに多くの人たちが、同様に悩んでいると思うと、「自分だけではない」と、ありきたりなような言葉ではあるが、安心した。が、同時に、安心している場合ではないとも思った。年々増加している離婚の背景には、こんな事情がかなり影響しているのではないかとも思われたからだ。

日本は、女性が性的なもの、女性がセクシャルなことを表現することに、寛容ではない文化があるような気がする。性的なことに興味が湧く思春期や学生時代を過ぎると、女性が自分のセックスライフについて語る場所は、あまり無いように思われた。人気の海外ドラマ「セックス・アンド・ザ・シティ」では、アラフォー世代の未婚、既婚の女友達同士が、赤裸々に自分たちのセックスライフを語り合うシーンが話題となった。女性にも性欲があるということ、女性も自分の性欲を大

事にしていいということが、表現されているかのようだった。「女性には性欲がない、と考えている夫たちが多い」と、とあるサイトに書かれているのを読み、京子は、「夫たちだけではない。妻である女性自身も、自分の性欲を見ないようにしているのではないか」とも思った。少なくとも、自分はそうだった。京子は、「セックスレス」というキーワードから、今の日本の女性たちが置かれている状況を、さまざまな面で想像することが出来た。少子化という問題、セックスレスも大きく関係しているのではないだろうか。

まず、日本の家屋事情は、夫婦のセックスに不向きな気がする。２LDKや３LDK の狭さで、子どもが夜、遅くまで起きている年頃になったら、気になって夜の営みどころではないのではないか。セックスレスにならないために、「たまに夫婦でラブホテルに行き、気分を盛り上げている」というネット投稿を読み、「夫婦でいることに、努力をしているんだ」と京子は深く感心した。しかし、費用のことも考えれば、そう頻繁には、ホテルは利用できないだろう。なかなか簡単に解決できない問題だ。また、セックスに前向きになれない女性側の要因として、「痛み」があることがわかった。女性が気持ち良く感じて、膣内が濡れてくれば、男性をスムーズに受け入れることが出来る。が、加齢に伴い、潤いにくくなってくる。そのような状況でパートナーの挿入になれば、セックスは、痛みに耐え、早く夫が射精してくれないか、願うばかりになってしまう。「セックスレス」というたった一つの言葉の検索から、想像をはるかに上回るカップルの悩みを目にして、京子は、時間の経つのも忘れて情報収集していった。そして、一つ、確かなことがあると思った。セックスについて、日本は、まったく教育が行われていないに等しいのではないかということだった。

翌日の昼休み、京子は、先輩薬剤師の一人である野口香に、自分がセックスレスについて調べていることを一気に語った。在宅で亡くなったがん患者の克彦の長男家族がきっかけになり、夫婦の在り方について考え始めたこと、更年期障害に生じる女性の性欲の高まりのこと、セックスレスに悩む夫婦が、想像以上に多いらしいということなど、医療専門職らしい理論的な仮説を交えて、勢いよく話す京子を、香は、驚いた表情で聞いていた。が、すぐに真剣な眼差しになり、じっくりと京子の研究報告に耳を傾けた。

「なので、夫婦にとって、セックスって、やっぱり大事なものだと思うんですけど、何をどうすればレスが解消

できるのかって…」と京子が、もごもごと言い淀んだ言葉にかぶせるように、香は言った。「滝沢さん、女性もセックスで気持ち良くなるよう、努力が要るのよ。男性のせいだけにしていてはダメなの。今は、潤滑ゼリーとか、女性のために真面目に考えられたグッズとか、たくさんあるのよ。」

トランスジェンダーをいきる

（２３）

「自己物語の記述」による男性性エピソードの分析

牛若孝治

周辺化された男たち

ジェンダー化された鍼灸マッサージ治療院

１　始めに

男の心身に障碍がないこと、男は外見へのコンプレックスを感じていないこと、男は女性を性愛とする異性愛規範に則った性的嗜好を持っていることを前提に所帯をもち、稼ぎ手にしての役割を果たすこと等、男であることに対する何らかの基準を共通に満たしていることを条件に、男社会が構築されているように思われている。

しかし、現実の男たちは、これらの基準をすべて満たしているとは限らない。そこで筆者は、一般的とされている男社会の基準を満たしていないと思われている男たちを総称して、「周辺化」と意味づけた。その上で、どのようにして「周辺化」が起きているのかについて、特に筆者が成業としている鍼灸マッサージ師の仕事のあり方を通じて、男たちにどのようなスキルが求められているか、ジェンダー化された鍼灸マッサージ治療院の構造と、身体の性別は女性・ジェンダーの性別は男性の筆者が、女性として治療院に勤務した経験みについて記述する。

２　男社会から周辺化された男たち

心身の障碍、外見への何らかのコンプレックス、ゲイやバイセクシュアルのような女性を性愛とした異性愛嗜好からの逸脱、経済的困窮などは、標準とされている男社会の中では、排除された状態にある。彼等は、自らの意思とは無関係に、一方的に社会から「周辺化された状態」といえるだろう。この「周辺化された状態」をベースに、彼等がどのように受容しているかを２つのパターンに分類する。

①二重の「周辺化」

これは、心身に障碍のある男同士のホモソーシャルな関係性において、再十度の障碍または重複障碍のある男たちが更に「周辺化された状態」をいう。したがって彼等は、一般的な男社会から周辺化された上に、自分より軽度の障碍のある男たちからも周辺化されているという「二重に周辺化された状態」におかれている。逆の言い方をすれば、軽度の障碍のある男たちが、自分たちより重度または重複障碍のある男たちを周辺化することで、より一般の男社会のあり方に近づこうとする現象、つまり、自分より重度または重複の障碍のある男たちを周辺化することで、自分の優位性を堅持したいという心性がそこにある。その代表例が「ジェンダー化された治療院システム」である。

（1）ジェンダー化された鍼灸マッサージ治療院システムの概要

特に、あんまマッサージ指圧では、一般的に、「男は女より体力があり、指の力も強いが、女は身体も小さいし、体力も指の力もない」という、男女の生物学的構造の相違を根拠としたジェンダー意識の下、鍼灸マッサージ治療院でもその意識を自明視している。だから、強いマッサージを希望する場合は男・それほど強いマッサージを希望しない場合は女、というように、来院者が希望するマッサージの強度と術者の性別が記号化されて割り当てられることもしばしばである。

このようなジェンダー意識は、鍼灸マッサージ治療院に従事している術者だけではなく、事務の受付や個々の来院者も共通に持っているだろう。もちろん、術者個人名で指名する来院者もいるが、例えば来院者で、初めから強いマッサージを希望する場合は男・それほどの強いマッサージを希望しない場合は女、というように、術者個人名で指名するのではなく、術者の性別で指名することも多い。

身体の性別は女性・ジェンダーの性別が男性の筆者は、盲学校時代、鍼灸マッサージ師免許取得のための勉学に励んでいたころは、女子の中でも痩せ型で、あんまマッサージ指圧の技術においても指の力がそれほどなかったので、いつも劣位に立たされていた。しかも、ジェンダーが男と言うことで、実技の時間は今振り返っても地獄のような日々だった。筆者は、鍼灸マッサージ治療院のジェンダー化されたシステムを意識して、なんとか劣位から脱するために、マラソンや水泳などのスポーツを通じて、基礎体力を付けていくと、それに伴って力も着いてきた。

（2）視覚障碍以外の障碍または病気を有する鍼灸マッサージ師へのバッシング

しかし、このようなジェンダー意識に基づいた自明性は、しばしば裏切られることがある。

特に、視覚に障碍のある男たちが中心で経営している治療院は、交通機関の利便性を問わず、一般社会から周辺化されたコミュニティーとして認識されやすい。しかもその中で、視覚障碍以外に、たとえば人工透析を受けている人や、過去に大手術を受けた人など、男でありながら、あまり体力や指の力がない人が多かった。視覚障碍のみの男たちと比較して、視覚以外の障碍や病気を持つ男たちが、体力や指の力不足による業績の低迷によって、視覚障碍のみの男たちからより周辺化された状態に置かれやすい。これは、視覚以外の障碍や病気を持つ男たちが、「男なら体力や指の力があって当然」というジェンダー化された治療院システムから逸脱し、排除されていること、つまり、そ

のような男たちとて、男の身体を持つがゆえに、体力も指の力もあって当然、というジェンダー役割を果たしていないことを示している。そのような男たちへのバッシングは、視覚障碍のみの男たちだけに留まらず、来院者からの直接・間接的な方法で行われる。そこに、「男の癖に」というジェンダーバイアスが加わると、男たちの男性性が疑われるほどに貶められる結果にもなる。したがってこの局面では、男たちが視覚以外の障碍や病気を持っていることへの考慮はまったくなされず、視覚障碍のみの男たちと同等の体力や指の力があるものとして扱われるのである。

また、視覚以外の障碍や病気を持つ男たちへのジェンダーバイアスをかけた視覚障碍のみの男たちの心理状態として、視覚以外の障碍や病気を持っていないことへの優位性を堅持しながら、一般の男社会に近づこうとする心性が見て取れる。すなわち、視覚以外の障碍や病気を持つ男たちを周辺化しなければ、自己の優位性を保証することができない、あるいは彼等を周辺化することで、より一般的な男社会に近づくという幻想を持っているといえるだろう。

（3）周辺化した彼等を鼓舞する目的で利用された自己の女性の身体

更に、視覚以外の障碍や病気を持つ男たちへのバッシングはそれだけに留まらない。

10年以上、女性としてあちこちの治療院に勤務した筆者は、学生時代から続けていたマラソンや水泳などのスポーツを通じて基礎体力作りをしたことで、指の力も着き、来院者からの指名も多かった。そこで、業績においても男たちと同等に、しかも、視覚障碍のみの男たちとほぼ同等だったこともあった。ただ、女であると言うことで、最初から来院者に敬遠されたことや、実際にマッサージの施術を行った際に、女であることで指の力不足を自ら感じたり、来院者からのクレームなどで不本意な結果に終わったこともしばしばだった。

とはいえ、男たちからみると、筆者の業績は、相対的にジェンダー化された治療院システムからは逸脱した結果、つまり、女なのに男波に業績を上げている、と思われたのだろう。そこで、男の身体を持つ視覚以外の障碍や病気を持つ男たちが、ジェンダー化された治療院システムからの逸脱者というだけではなく、女の身体を持つ筆者の、これまたジェンダー化された治療院システムから逸脱した男並の業績を引き合いにして、更に彼等を鼓舞するという方法が見て取れる。そこには、ジェンダー化された治療院システムからの逸脱者である彼等を、「男の癖に」というジェンダーバイアスによって、いったん男性性を疑わせるようなバッシングをしておきながら、女の身体を持つ筆者が、ジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績を示していることをうまく利用して、彼等を鼓舞しようとする意図が伝わってくる。

要するにここでは、視覚障碍のみの男たちによって、視覚以外の障碍や病気を持つ男たちをいったん周辺化した上で、その周辺化した彼等を鼓舞する目的で、女の身体を持つ筆者の「男波の業績」が利用されたのである。もっと言うなら、周辺化した男たちを鼓舞するための材料として、女の身体を持つ筆者のジェンダー化された治療院システムから逸脱した業績ではなく、筆者の「女の身体」が、周辺化した男たちを鼓舞するための材料として利用されたのである。

3　終わりに――現在、男性として雇用されて

2 年前より、一人で病院や治療院に行くことが困難な人たちの家を訪問して行う訪問マッサージの仕事をしており、現在は男性として雇用されている。男性として雇用されたことで、筆者の心理的状態は安定し、今のところ、職場の上司や同僚たちからの理解は得られていると筆者は考えている。

しかし、筆者には不安が残る。それは、現在訪問している患者から、他の男たちより指の力がないと思われていないか、ということ、つまり、体力や指の力で、他の男たちから「周辺化」されないか、ということである。もちろん、筆者の身体はもともと女性であるから、男たちから「周辺化」される要素はあるのだが、マッサージの仕事において、他の男たちから「周辺化される」ということが、筆者にとっては恐怖以外の何者でもない。このように考えてみると、筆者にとって「周辺化される」というのは、切ても切れない課題のように思われてならない。

牛若孝治（立命館大学大学院先端総合学術研究科）

役場の対人援助論

（２２）

岡崎　正明

（広島市）

「電話にまつわるエトセトラ」

「はい、もしもし」

この仕事をやっていると、「電話」は大切なツールだ。

おそらく使わない日は無いといっていい。相談のスタートが電話からということも多いし、関係機関と情報交換をしたり、アポを取ったり、何かと便利。最近はメールやLINEなどのネットツールもあるが、それでもやはり公的相談機関では電話が圧倒的に主流だろう。

「電話が嫌い」という人が利用者にも支援者にも一定数いる。確かに顔が見えないやりとりは伝わりにくい。ただ私自身、電話に特段の苦手意識はない。それはおそらく実家が商売をしていたことと、無関係ではないように思う。学校が終わると店の周りでウロウロして育った私は、両親の電話対応をいつも間近に見ていた。

「ねぇ、かあさん。１００円ちょうだいやぁ」

「しつこいねぇアンタも。ダメったらダメよね！（ジリリリリン。ガチャ）っはい、いつもあり

がとうございます。お食事処おかざきです！」

0.5秒前のやりとりが無かったかのような切り替え。声のハリ、テンポ。これが仕事。これがお客さんへのあるべき態度。門前の小僧じゃないが、そういう学習を知らず知らずのうちにしてきたのだと思う。

だから勝手な自己評価かもしれないが、比較的カンジ良く電話応対できるほうだと認識している。丁寧だけど固くなりすぎず、相手の調子に合わせて、言いたいことをしっかり聞いて･･･。

余談だが学生時代、子どもたちが事前に送られてきたテストに答えてＦＡＸで送信

し、それをこちらで採点して、子どもに電話をかけて答え合わせと指導をするという、教材会社のアルバイトをしていた。

アルバイトは皆「フクロウ先生」「リス先生」など、動物の名前がついており、私は競馬好きがこうじて「ウマ先生」と名乗っていた。会社のマニュアルとして、明るく楽しい雰囲気で話し、ときには子どもの雑談にも応じなければならないが、中にはやたら事務的なライオンとか、沈んだ雰囲気のウサギとかもいた。

周りが気になってハジケられない種族を尻目に、ウマ先生は「いいね～！正～解♪」などと、快調に飛ばしていた。いろんな子どもと話すのも、受話器の後ろで家族の生活が時に垣間見えるのも面白かった。

衝撃の電話

だが役所に入り、福祉関係の部署で働くようになると、ことはそう簡単ではなかった。これまでの人生で関わったことのないような電話の話に、うろたえることも多かった。

特に初めて「今から死にます･･･」という電話を受けたときのことは、強く覚えている。

相手は若い男性だった。ちょっと怒った口調で、「君に言ってもしょうがないが、世の中は不公平すぎる。生きていてもしょうがない」というようなことを話された。

私は心の中で「落ち着け、落ち着け」と落ち着かない口調で唱え、今できる最善を考えまくった。「死ぬと言ってくる人が本当に死ぬか？」「そんなこと分からん」「ひどいうつ病とかなら、発作的にしてしまうかも･･･」「でも誰かと話したい思いはあるんじゃ？」「彼が思いとどまる気になるにはどうしたら？」「止めて欲しい？」「ヘタなことを言って逆効果になったら･･･」グルグルと考えが回るが、正解など分からない。誰にも相談できないし、関係機関にまわすわけにもいかない。

私はとりあえず「死にたいと思うほどの辛い思いをされたのですね･･」とセオリー的な共感の姿勢を伝え、しばらく話を聴いた。

それから「そんな辛い状況でも、あなたは電話してくださったんですね」と感謝のようなことを伝えたと思う。そして「自分が死んでも誰も悲しまない」という彼に、「しっかりと思いを話してくださる様子から、とても誠実な方という印象を受けます。少なくとも私はもしあなたが亡くなられたら、非常に残念に思います」というようなことを伝えたように記憶している。

彼は死ぬとも死なないとも言わず、「分かりました」というようなことを言って電話を終えた。10～15分程度の話だったと思う。

彼がその後どうなったのか。当然私には知る由もなく、あの対応が良かったのかマズかったのか、いまだ分からない。しばらく悶々としていたが、毎日相談が次々と入る中で、良くも悪くもそれは次第に薄れていった。

あの電話が私に人の相談に乗ることの重みと、答えの出ないことを抱えて働くという現実をつきつけてくれた。そういう大切な体験だった。

マニュアルなんかない

そのほかにもいろいろな福祉の現場で働き、いろんな電話を受けた。
精神障害で極度の躁状態の男性は、こちらが相槌を打つ間も与えてくれない、まさしく本物のマシンガントークだった。本当にどこで息継ぎをしているのか？という勢いで 30 分以上ぶっ続けで言葉を撃ち出してくる。そのエネルギーに圧倒された。大げさではなく、人間の能力のすごさを感じた。ちなみにマシンガントーク（talk：会話）というが、マシンガンスピーク（speak：話す・演説する）という方が、正しいのではないかと思ったりする。少なくともその時の電話で、私は彼とトークできた印象が無い。

児相時代にも記憶に残る電話はいろいろある。子どもの保護のことで意見が対立している親御さんからは「お前の家族がどうなってもいいんだな！」と脅され、背筋が冷たくなる経験もした。
たびたび「隣から子どもの泣声がする」と連絡してくださる女性は、よくよく聞くと誰もいないはずの空き室や、壁の中から声がするとの話で、どうも統合失調症の症状で幻聴が聞こえているらしかった。しかし本人は本当に聞こえている感覚だし、心配して連絡してくださっているのだから「勘違いですよ」と言う訳にもいかず、その都度お話しはちゃんと聴いて、その方の治療が進むよう関係機関につないだ。
解離性障害（いわゆる多重人格）の女性からかかってくることもあった。別人格が勝手に買物をするので、気づいたら見たこともない商品が多量にあり、困っていると彼女は話した。母子家庭のお母さんだった。
彼女は過去に性暴力の被害に遭い、気がついたら襲われている自分を、天井から自分自身が見下ろしていたという。私は解離性障害の方への対応を学んだことなどなく、もちろん職場にそんなマニュアルは無かった。
私は相手が本人であれ別人格であれ、ただただなるべく丁寧に話を聴いた。別に自慢ではなく、それくらいしかできることがなかった。そして、自分は子どもの養育者として失格なのではないかと心配する女性に、彼女の努力や、できている点を労って返した。子どもたちはいろいろ問題を抱えながらも、がんばって学校に通っていた。

高齢者の相談窓口では認知症の方や耳の遠い方への対応に困ることがあった。電話の第一声から「なんで私はそこに電話したんじゃろうか？」という、禅問答のようなこともあった。１０秒前に言った事も記憶に残らず、同じ話しが何度も続く。そんな時は、「それはもう、うかがいました！」なんて言っても逆効果なので、くだけた方言でなるべく明るく聴き返した。電話の相手は話の内容そのものよりも、受け入れてくれているかどうかの雰囲気を大事にしていて、声のトーンや抑揚などで、敏感にそれを察知している感じがした。
ある１人暮らしのおばあちゃんは、「家には食べ物も水も無い。助けてくれ！」と訴えられた。実はそのお宅にはヘルパーも定期的に入り、食べ物も飲み物もきちんと確保されているのだが、朝起きて 1 人だと不安になるらしく、頻繁に電話をかけてこられた。「ヘルパーさんが行きますよ」と最初は説明していたが納得してくれない。「アンタが来てくれんのか！」と食い下がるため「行きます！」と半ば売り言葉に買い言葉で伝えると、ようやく落ち着かれた。
翌日万一の事があってはと訪問すると、当然そんな電話のことも、私の名前も忘れていた。（ですよね…）

それからは『正しい説明』よりも、『安心できる言葉がけ』を優先させた。

役所の電話は誰でもかけることのできる開かれたものだ。老若男女様々な人がかけてくる。切迫した話もあれば、要領を得ない話、ときにはイタズラみたいな電話もかかる。これがどこかの企業のカスタマーセンターのようなところであれば、かけてくる人間の目的はおおよそ絞られるのでマニュアル化しやすい。しかし役所の、とくに福祉関係の部署ではなかなか難しいように思う。

個人的には安易なマニュアル化よりも、職員同士でスキルの共有を図る方が役に立つように思う。ちなみに私が大事にしているのは、想像力を最大限に駆使して相手の状況を汲むこと。そして会って話すときよりも少し多弁に、たびたび復唱をしたり、声のトーンや言い方で、こちらの雰囲気が伝わるような表現をしたり。その程度だ。

受話器からのぞく人生

この仕事を始めて 15 年。受けた電話は数え切れない。仮に 1 日 1 件相談電話を受けたとしても、3000 件以上は話を聴いた計算になる。簡単な問い合わせや、事務連絡まで入れれば、その数倍になるだろう。

そんな数多くの電話を受けていると、時に忘れられないお話を聴かせてもらうこともある。

ある高齢女性から、市内中心地から少し外れた A 地区について、こんな問い合わせがあった。

「A 地区で入居できる高齢者の施設は無いか？または建設予定などは無いか？」

A 地区には認知症のためのグループホームはあったが、電話の相手は認知症ではない。地区にはそれ以外に高齢者施設はなく、できる予定も聞いたことが無かった。私は、「どうして A 地区でお探しなのですか？近隣の別の地区ならあるのですが…。A 地区が便利がいいからですか？それとも、以前お住まいになっていたとか？」

とたずねた。女性は「違う」と言い、少し躊躇しながら（でも聞いて欲しいという感じで）、「子どもにも内緒なので絶対に口外しないで欲しい」と念を押し、堰を切ったようにこんな話をされた。

「私は戦前 A 地区にあった私立高校に通っていた。貧しい家の出だったが、勉強ができたので、両親が苦労して私をその学校に入れてくれた。学校では級長をしたり、成績も優秀。特に国語は学校でも 1 番で、担当教師に褒められた。担当教師は大学を出たばかりの若い先生で、次第に距離が縮まり、高校を出たら結婚しようと告白された。とても優しい人だった。教師の母親は、息子が貧しい家の娘と結婚することに反対だったが、それでも彼は結婚しようといってくれた。しかし戦争が始まり、働き手だった兄が徴兵され、私は田舎に帰らなければならなくなった。私は学校を退学し、教師に別れを告げて実家に戻った。その後私は親の勧めで見合い結婚をし、子どもも生まれた。教師はお金持ちの家の婿養子になったと、噂で聞いた。今でもときどき思う。あの時退学しなければ、田舎に帰らなければ、どんな人生だったろうかと。学校は移転して A 地区には残っていないが、あそこの河川敷や古い並木といった風景は、

担当教師との想い出がつまっている。そこで残りの人生を過ごしたいと思って…」

私は黙って話を聞いた。おそらくそれは、何十年間、誰にも語られることのなかった話だ。そんな貴重な話を聞かせてもらえることが、大変ありがたい仕事だと感じた。そしてこれは、電話というツールだからこそ聞けた話のように思われた。

電話ではできない話。

電話だからできる話。

いろいろあるが、他人の人生について聞かせてもらう仕事の大変さと醍醐味を、今日も噛みしめながら受話器をとっている。

※ ご紹介した話は個人情報保護のため改変してあります。

発達評価の意義と限界
新版Ｋ式発達検査をめぐって　その㉑

大谷　多加志

発達検査もそうですが、人間の精神活動について数値化して示そうとすると、少々厄介な問題が生じます。脈拍や血圧、脳波などの生理学的指標については、対応する測定機械を用意し、適切な手順で検査を行えば、客観化した数値を示すことが可能です。一方で、たとえば「性格」などの心理的指標については、そう簡単ではありません。「性格」についての自己評価と他者評価が異なる（例：他者からは物静かで穏やかな人だと思われていたが、自己評価は全然違う）というケースも少なくないでしょう。これには、情報の差も影響しています。ジョハリの窓（図 1）は、対人援助の基礎学習の中でご存知の方も多いと思います。

	自分が知っている	自分が知らない
他者が知っている	開放の窓 （開かれた窓）	盲点の窓 （気づかない窓）
他者が知らない	秘密の窓 （隠された窓）	未知の窓 （閉ざされた窓）

図１．ジョハリの窓（Joseph Luft & Harry Ingham, 1955）

ジョハリの窓の「開放の窓（開かれた窓）」の部分が大きい方であれば自己評価と他者評価は一致しやすくなるかもしれませんが、多くの場合は大なり小なり「秘密の窓（隠された窓）」「盲点の窓（気づかない窓）」の部分が存在しますので、この部分は自分と他者とで認識の齟齬が生じやすいと考えられます。

前置きが長くなりましたが、要するに、心理的指標についての評価はどうしても相対的であったり主観的であったりするものになりやすいという特徴があります。そのような問題に対応し、できるだけ客観化して数値化できるように、心理的指標を測定するための「心理尺度」というものが、数多く作成されています。

つまり、発達検査や知能検査も、「発達」や「知能」について作成された「尺度」の一つであると言えます。さらに、「発達」についてもさまざまな側面があるわけなので、

「言語発達」や「社会性の発達」、「運動面の発達」など、さらに部分的な「発達」を特化して評価するための尺度もあります。全般的な発達を評価する尺度と、部分に特化して評価する尺度は、どちらが優れているという優劣があるわけではなく、うまく組み合わせて有効に使うことが肝要だと言われています。このように検査を組み合わせて使うことを「テストバッテリーを組む」と言ったりします。

このような「尺度」はそれぞれに対応する心理的指標について測定することを目的に開発されたものです。しかしながら、対象とする心理的指標について完全に評価できているかと言えば、そうとは限りません。むしろ、完璧に評価することは不可能であると考えた方がいいかもしれません。

例えば、発達検査における「一人立ち」の評価について考えてみましょう。通常、子どもは「つかまり立ち」を経て、「ひとりで立つ」ことができるようになっていきます。そして、「つかまり立ち」は可能であるけれど支えなしに「ひとりで立つ」ことはできないという状態が、一定の期間で存在します。例えば、「運動発達」について評価する基準が「つかまり立ち」と「ひとりで立つ」という観点から設定されていれば、この期間は、その尺度では「同等」と評価されます。

しかしながら、実際の子どもの発達は、もっと連続的なものです。なんとかつかまり立ちが可能になった時期と、一人立ちができる直前とでは、実際の状態としてはかなり異なるものと考えられます。

図 2 に示したように、実際の発達の変化に比べて、どうしても評価尺度は粗くなってしまうと言えます。実際の発達の進み方は、青の線で示したように連続的なものですが、一方の発達評価の基準はあくまでも段階的なものだからです。

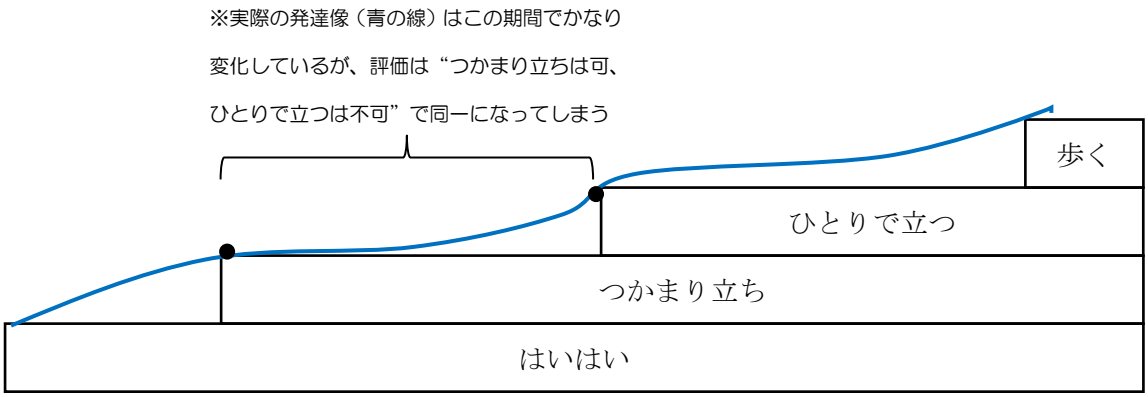


図 2　発達の連続性と発達評価の段階

また、それ以外にも、完全に評価しきれない要因があります。大谷（2016）において、乳幼児の発達評価に「ふり遊び」の観点を取り入れることが可能かどうかを検討したことがあります。「ふり遊び」は、簡単なものでは「食べまね」、「飲みまね」のような簡単なふりを楽しむという水準のものもあります。さらに発展していくと「レストランごっ

こ」のようにふりを組み合わせた連続的で構造的な遊びへと発展していきます。原初的なふり遊びの構成要素を考えてみると「スプーンですくうふりをする」ことによって、「そこに食べ物があることを表現する」ような行動がみられます。このような「ふり」は、言葉の発達と密接に関連していると言われています。つまり、「あるものを別のもので表す」（この場合は“すくうふり”で“食べ物”を表す）という点において、言語との関連性が認められるからです（言葉で言えば“マンマ”という声や音で、“ごはん”を表す）。大谷・清水・郷間・大久保・清水(2016)では、Mucune(1981)のふり遊びの発達の段階（図 3）に合わせて、水準 1、水準 2、水準 3 の三つの段階でふり遊びの発達を評価するための項目（仮に項目 A、項目 B、項目 C と命名します）を作成しました。

図 3　象徴遊びの水準（McCune, 1981 を一部改変）

水準	基準
1	物の用途や意味を理解していることを示す（慣用操作）。ふりはみられない。（項目 A）
2	自己に関連のある活動のふり遊び(自己へのふり)をする。象徴化は子どもの体に直接関係している。（項目 B）
3 - A	人形や他者、または行為の受け手がふり遊びに含まれる（他者や人形へのふり）。（項目 C）
3 - B	犬、トラック、電車などの物や他者が活動のふりをする。
4 以上	行為やふりの連鎖、関係づけが見られる。

当初の予測では、象徴遊びの水準の低い順である、項目 A→項目 B→項目 C の順に達成されていくものと考えていました。しかしながら、実際に乳幼児にこれらの課題を実施してみると、項目 A と項目 C が達成可能になっても、項目 B が達成されないというケースが相当数見られることが明らかになりました。これは、ふり遊びの発達段階から考えると不合理な結果です。つまり、項目 B に該当するような「ふり」は、検査場面という環境下では適切に観察されにくく、発達評価の指標として有効に機能しないと考えられます。

つまり、発達研究の中で「ふり遊び」が段階的に発達していくことは確認されているのですが、「発達検査（発達評価）」の場面に、その段階を機械的に取り入れることはできない、ということです。このことも、「発達評価」の一つの限界であると言えます。

このような制約と限界を踏まえた上で、なお発達評価はやはり有用な手法であると考えます。次回は発達評価の「意義」について再考してみたいと思います。

引用文献

MuCune-Nicolich, L. (1981). Toward symbolic functioning: Structure of early pretend games and potential parallels with language. *Child Development*, *52*, 785-797.

大谷多加志・清水里美・郷間英世・大久保純一郎・清水寛之 (2016). 乳幼児健診における「ふり遊び」課題の利用可能性－発達スクリーニングおよび発達検査における活用－」（人間文化 H&S（神戸学院大学人文学会）, *39*, 1-12

講演会＆ライブな日々⑬

古川　秀明

「和歌山　串本　台風旅」

荒波越えて

８月７日、翌日にある講演会のために和歌山向かう。
しかし、台風５号が和歌山に～～～！

えらいこっちゃ！えらいこっちゃ！
和歌山直撃コースやん。
しかし、プロはどんなことがあっても仕事に穴をあけてはならない。
午前中に大阪を出ればなんとかなるかも・・・。
よっしゃ～！おしゃくれ号でぶっ飛ばせ！
大阪はまだ曇り空程度だった。
高速道路を走り、堺や岸和田あたりも大丈夫、何とか通過。

この調子で行けば台風が和歌山に上陸する前に到着できるかも。
ところが、台風は予想よりも早かった！
順調に走っていたが、和歌山に入ったらすぐにどえらい風と雨のお出迎え。
ラジオの情報では、風速２５メートル
ちょうど今、台風のド真ん中を走っているらしい。
和歌山の高速道路はトンネルが多い。
いつもはなんとなく「トンネルは暗くて嫌だなぁ」と思うが、この日ばかりは雨風の影響のないトンネルが有難かった。
しかし、トンネルを出る度に滝のような雨と風速２５メートルが襲いかかる。
車は風で横にあおられる。
そのあおられ方が半端じゃない。
車が浮く感覚。
その凄さは、名古屋を通過した時のこの報道写真をみればわかる。

なんとトラックが風でひっくり返ったのだ。
トンネルを出たら暴風雨の影響で走っている車が一斉にブレーキを踏む。
追突の危険度が倍増する。
だからみんな車間距離を思いっきり取る。
湯浅御坊道路を通過。
私が通過した５分後に湯浅御坊道路は台風の影響で封鎖された。
まさに危機一髪。
それでも目的地まではまだ遠い。
しかも海沿いの道を走らないといけない。
地元の人の情報によると、台風が来ると海沿いの道は閉鎖されるらしい。
過去の台風の時に何度か車が波にさらわれ、死者も出た。
それくらい台風の風は波を大きくする。
けど、誰が何と言おうと、もう走りだしているのだから進むしかない！
頭の中でこの歌がグルグルと回りだした。

＜だけど僕らはくじけない！泣くのは嫌だ笑っちゃお！進め〜〜〜！＞

海が見えた

高速道路を降りると目の前に海が広がっていた。

その波は半端じゃなかった。

なるほど、こんな波なら車もさらわれる。

太平洋の荒波は凄い。

だけど、見ていて壮観だ。

ドッパ〜ン、ザッパ〜ン！

考えようによっては、こんな景色はめったにお目にかかれない。

いくら見ていても飽きない。

コンビニでコーヒーを買い、真っ黒な空と波の音、風の音、雨の音を聞く。
自然に哲学的になる。
こんな時間があるから旅はやめられない。

そうこうしているうちに台風は足早に過ぎ去って行った。
水平線の向こうは晴れ間が出てきた。

波も穏やかになり、なんだか荘厳な景色に変わってきた。
ラジオによると、高速道路はまだ閉鎖中。
さて、そろそろ出発しよう。
潮岬の近くで主催者の人と合流。
台風の中やって来たので、みなさんとてもびっくりされていた。
そりゃそうだろう、誰がどう考えても無謀だ。
しかし、私は来たのだよ。
明日の講演会＆ライブの中止や私の代役探しも検討されていたとのこと。
いやいや、私がやらせていただきます。
主催者の方が潮岬に案内してくれた。

和歌山の綺麗な海が広がる。
台風一過で空気も澄んでいて、とても気持ちが良い。

主催者の人も、近くに住んでいるから普段はあまり来ないけど、こんな潮岬を見るのは初めてだそうだ。

潮岬には潮岬観光タワーがある。
これは相当昔からあるぞ。
バイクでも何度か来ているから懐かしいなぁ。
どこか１９７０年代の匂いがまだ残っている建物だ。
台風の中がんばって営業していた。
季節の良い晴れた日にはライダーがいっぱい集まっていた。
当時はアメリカンバイクにはまっていたので、ピカピカに磨いて自慢げにバイクを置いたものだ。

この雰囲気がなんとも昭和ですなぁ。
昔はドライブインなんて言葉もあった。
今でいう道の駅かな。
ちょっとタイムスリップ気分。
というか、年取ったことの実感やね。

潮岬展望タワーの前には有名な「望楼の芝」が広がる。

だだっ広い芝生の広場だが、ところどころこんもり盛り上がっているところもある。
潮岬の先端に広がる約 10 万㎡の大芝生。
その昔、海軍の望楼(物見櫓)があったところで、「太陽の 出て没るまで 青岬」と山口誓子によってうたわれているように、眼前には緩やかな弧をえがいて太平洋が広がり、地球が丸いことが実感できる。

こんな感じ。
ね、ここなら敵艦隊をすぐに発見できるでしょ。
それに鯨がやってきたこともわかったそうだ。
とろどころこんもりしているのは海軍の砲台があったところ。
つまり、こんもり盛りがったところに大砲を据えて、海から来る敵艦隊を攻撃するための砲台。
そしてその先にあるのが本州最南端の地。

どうでぃ！
嵐と共にやってきた～！
誰だ誰だ！敵を蹴散らす正義のふるかわ～～！
（古い歌です。この歌を聞いてショッカーを思い出したあなた。立派な中高年ですよ（＾ｖ＾））
本州最南端にはこんなのもありましたよ。

ここから本州最北端の人に手紙を出してみたいなぁ。
本州最北端てどこだろう・・・。
（青森県の大間崎でした。いつか旅したいなぁ）
潮岬灯台
明治３年に初めて灯りが点いて以来、１００年以上現役稼働している凄い灯台。

白い灯台が青い海と緑の丘によく映えてる。
灯台をみると必ず「喜びも悲しみも幾歳月」の歌が頭の中に流れてくる。
デコちゃんこと、高峰秀子さんが出ている映画は全部観てるもんね。
音楽は木下忠司。
どうやったらこんな哀愁漂うメロディーが浮かんでくるんだろう。
女性コーラスの付け方もかっこいい。
このパターンは当時の歌謡曲によくみられるパターン。
例えば橋幸男の「江梨子」という名曲もこんな感じ。
女性のソプラノの高い声が男性のアルトによく響いている。
と、まぁそんな音楽解説をしている場合ではない。
とにかくこの灯台は美しい。
お城で言うなら白鷺城てとこかな。

灯台の前まで行くとこんな感じ。
１００年間にいろんな人がこの灯台を訪れたんだろうなぁ。
旅に出ると想像力が強くなる。
あかん、また旅に出たくなってきたぞ。
これぞ灯台のお役目!
昼間の灯台はヴィーナスのように美しい姿でいるが、夜は働く凄腕キャリアウーマンに変身する。

トワイライト・タイム
灯りが点灯したぞ。
まだ周辺が明るいからさほど灯りの強さを感じない。
だけど、これはこれで十分綺麗だ。
人工物も捨てたもんじゃない。
さてさて、あたりが真っ暗闇になると・・・

どうでぃ！
この見事な灯りが目に入らないかよ～。
すんごいぜ～。
まるでカメハメハ～～～
これなら沖ゆく船の安全を守れるね。
美しい姿とたくましい仕事。
う～ん、俺も灯台みたいになりたい。

白い柱に木の看板を打ちつけてあるのがまたレトロで良い。
このあたり一面、黒潮の香りがしてとても気持ちがいい。
まさに潮風。
しかし、あっという間に体がべちゃべちゃにちゃにちゃしてきたぞ。
海水浴した後みたやわ。
ま、これも海に来た証だね。

灯台君、いつかまた会おうね。
灯台カウンセラー目指します！

（旅はまだまだ続きますが、続きは次回に・・・）

シンガーソングカウンセラー
ふるかわひであき

養育里親

～もうひとつの家族～

19

坂口　伊都

はじめに

この 8 月 2 日に第 16 回「新たな社会的養育の在り方に関する検討会」のなかで「新しい社会的養育ビジョン」がとりまとめられました。これは、子どもの権利主体を明記し、パーマネンシーを保障するために家庭重視を明確にした児童福祉法改正を具体化する理念だそうです。理念としてはわかりますが、驚いたのは数値目標です。その内容を紹介します。

特に就学前の子どもは、家庭養育原則を実現するため、原則として施設への新規措置入所を停止。このため、遅くとも平成 32 年度までに全国で行われるフォスタリング機関事業の整備を確実に完了する。

- 愛着形成に最も重要な時期である３歳未満については概ね５年以内に、それ以外の就学前の子どもについては概ね７年以内に里親委託率 75%以上を実現し、学童期以降は概ね 10 年以内を目途に里親委託率 50%以上を実現する（平成 27 年度末の里親委託率（全年齢）17.5%）。
- 施設での滞在期間は、原則として乳幼児は数か月以内、学童期以降は１年以内。（特別なケアが必要な学童期以降 の子どもであっても３年以内を原則とする。）
- 概ね５年以内に、現状の約２倍である年間 1000 人以上の特別養子縁組成立を目指し、その後も増加を図る。

それにしても壮大な目標だと、児童福祉関係者のほとんどが唖然としたと言われています。

そういう私も目が点になりました。見間違いではないかと、再度読み返しましたが、この目標でした。

このビジョンが出される前は、「社会的養護の課題と将来像」で平成 41 年末までに 15 年をかけて本体施設、小規模施設、里親・ファミリーホームそれぞれ 1/3 ずつにしていく方針で、それに向かってそれぞれ計画を出しています。できるだけ家庭に近い養育を提供する「家庭的養護」が推奨され、それに伴い小規模化にするために改造改築した施設もあります。急な全面的な見直しに困惑するのは当然でしょう。ビジョンの数値目標を達成していけば、当然、乳児院や児童養護施設の存続に影響を与えますし、求められる機能も変わってきます。

この将来像は、里親制度が大きく占める諸外国で、数十件の里親宅をたらい回しにされるドリフト問題が起きている点に注目し、日本では施設も里親もある選択肢が子どもの利益に繋がるという考え方からきていると聞いていたので、その方向で進むものだとばかり思っていました。子どもが抱える背景や年齢によって落ち着いて暮らせる条件はそれぞれ違い、頼れる大人ができる限り変わることなく存在し続けるいう前提が整えば、子どもの安定につながるので、その体制に力を入れて欲しいと期待もしていました。それが、いきなり方向転換になったというわけです。

表題も「社会的養護」から「社会的養育」へ。ビジョンには、「家庭への養育支援から代替養育までの社会的養育の充実」とあり、「サービスの開始と終了に行政機関が関与し、子どもに確実に支援を届けるサービス形態を社会的養護と定義する。また、保護者と子どもの分離が必要な事情があり、分離した後の代替養育を公的に保障しサービスを提供する場合は、措置・契約の形態如何に関わらず、社会的養護に含める。具体的には、在宅指導措置、里親・施設等への措置、一時保護の児童相談所の行政処分はもとより（略）社会的養護には、保護者と分離している場合と分離していない場合の両者を含むが、分離している場合を特に代替養育と呼ぶこととする。」としています。代替養育にとどまらず、コミュニティや家族の変化に対して養育支援の在り方を整備していくという意味合いを含むようです。

世間には、相変わらず里親制度が認知されていませんが、内部では大きな揺れが起きています。乳児院や児童養護施設の今後はどうなるのか、里親には何が求められるようになるのか等不確定要素が満載です。12 月に厚生労働省から目標数値が改めて提示されると耳にしました。今後、修正が加えられるでしょうが、素直にいい方向に向いていると喜べない私がいます。このモヤモヤする感じはどこからくるのか、整理してみようと思います。今回もどうぞ最後までおつき合いください。

永続的解決（パーマネンシー保障）

9 月 30 日～10 月 1 日にかけて、第 62 回全国里親大会京都大会と平成 29 年度近畿地区里親研修会が開催され、そこでも「新しい社会的養育ビジョン」が話題となりました。

75%以上の里親委託という数値目標が出ていますが、人口 120 万の自治体なら年間 9 組の里親をリクルートする計算となり、それなら可能ではないだろうかという発想が根拠になっているそうです。ここには人口に占める年齢等の計算がなく、里親の質の担保という側面からもどこまで可能な数と考えていいのか疑問が残ります。

質の担保は、子どもの利益に直接影響するこ

とで、我が家は未だに子もとのコミュニケーションの難しさが続いています。一緒に生活するようになって 2 年経った頃から、子どもの言動のパターンをやっとつかみ始めたかなと実感し始めたところで、ここまでに至る道のりは長く、簡単ではなかったです。

この前も、急に寒くなったので、里子に「長袖の上着取ろうか？」と声かけをすると「いらん」と返ってきて、「母ちゃんにしてもらいたくない」と言い、片袖だけ腕を通していることがありました。ムカッときましたが、「人が仲良くしようと思って言っているのに、そんな言い方はないでしょう」と伝えると、何も言わなくなりました。こちらは親切で言っていても、里子は命令されているように感じているようでした。そこから里子が急に親切にしてくれることが続き、笑ってしまいました。本当に面倒くさい、わかりにくさです。

ビジョンの一つの柱に子どものパーマネンシーの保障があります。その考え方は、「まず①家庭復帰に向けた努力を最大限に行い、それが困難な場合、②親族・知人による養育（親族里親、親族・知人による養育里親、里親制度に基づかない親族・知人による養育、親族・知人による養子縁組）が検討され、それが困難な場合、非親族等による③特別養子縁組、④普通養子縁組を検討し、これらが子どもにとって適当でないと判断された場合、⑤長期里親・ファミリーホーム、⑥施設養育が検討されることになる。」とビジョンに書かれています。

家庭養育の次に親族・知人がきます。この順番に異議があるわけではありませんが、『火垂るの墓』を始めとする作品に子どもが肩身の狭い思いをする物語が幾つもあります。

子どもが、児童虐待等で家庭から分離をされてもそれは一時的であるべき、そして家族再統合が難しいと判断されれば、司法の手続きを経て特別養子縁組や普通養子縁組することでパーマネンシー保障をしていく。それは、とても大切な事ですが、家族再統合するための支援が手薄であるのも事実です。

実親が子どもを引き取りたいと口にしても、なかなか生活が安定しないできている、知的障がいや発達障がい、精神障がい等を持ち、親が自分のことだけでも手一杯で余裕がなかったり、助けを求められる人が近くにいなかったりと思うように引き取りに至らない事もあります。10 代で子どもを産み、今は育てられないから子どもを預けるけど将来的に引き取りたいと希望したり、親が服役中の場合もあり、子どもが抱える背景はそれぞれいろいろな事情を抱えています。上手く回っているのかどうかは別にして、今も子どものパーマネンシー保障をないがしろにしようと思っているわけではありません。

施設の長期入所が子どものパーマネンシー保障を侵害するといいますが、家族再統合の方針となった場合、ビジョンの理念でいくと支援をして数年経っても引き取りの目途が立たない場合は養子を検討となります。養子への移行の手続きは実親との関係を含めスムーズに事が運ぶ方が難しく、そうこうしている間に子どもはどんどん大きくなっていきます。今の手薄な親支援の方法では、家族再統合の目標を設定しても

実現が難しいとなるケースは数多く登場すると思います。一人ひとりの子どものパーマネンシー保障の方向性をクリアにしていくことは、子どもの人生を左右する難しさがあると、改めて感じます。

家族再統合の方針に決まり、一時的に代替養育をしているのは今も同じです。この部分については、里親委託にしても、この課題は継続し、いつ実親の元へ帰れるのかどうかわからないまま委託が継続されることは、子どもが落ち着けない状態になります。ここが自分の家なのだと子どもが安心して暮らせるためには、ここをどのように対応していくのかを先に語る方が子どもの利益になるのではないでしょうか。

今後アセスメントを強化し、家族再統合支援も手厚くし、短期間で家庭に戻るシステムが完成するなら、里親に求められる機能は、短期間養育が主流になります。ビジョンの中に「現在の専門里親を見直すとともに、ショートステイ里親・一時保護里親・親子里親などの類型を創設する」と書いてあります。親子里親とは何でしょう。親子を受け入れる里親という意味合いのようですが、一般家庭ではなかなか難しそうです。

里親は代替養育機能であり、子どものパーマネンシー保障を考え、委託は短期間で納め、子どもの実親家庭や養親へ子どもを引き継ぐ役割を果たす必要が出てきます。そうなると、里子は里親宅でどのようなポジションになるのでしょうか。現在、我が家では家族の一員として暮らしているので、里子も家族と同じ姓を名乗っています。自分の家はここと思い、なかなか言う事は聞かなくても私は「母ちゃん」という存在です。しかし、短期間の委託で実親家庭や養親家庭で暮らすとわかっている里子に、自分を「母ちゃん」と呼ばせることはしません。それは、里母を母ちゃんと呼んだら、「親」をイメージしにくくなると思うからです。「母」と「ママ」で区別するのもピンときませんし、里子にとっての家族って何なのだろうと考えこんでしまいます。

子どもにとって、暮らす場所が転々としないことが望まれるので、養子縁組をしていくことを前提とした里親をリクルートするのなら、里親の年齢幅はぐっと狭まれることになります。一般的に子どもが欲しいと願って、それがなかなか叶わない場合、まず不妊治療から始めます。長期の不妊治療後に養子縁組をとなると、養親の年齢が高齢化していきます。特別養子縁組の数も 1000 という目標が出されています。特別養子縁組は、生みの親の戸籍が切れ、養親の子として戸籍が扱われます。今は養親が特別養子縁組の申立をしますが、その時点になって実親が同意を取下げる等が起こり、子どもが施設に入所になることもあり、ここでも、いろいろな課題が山積みです。

長期養育として養育里親に委託することは子どものパーマネンシー保障を侵害するのでしょうか。我が家の里子は、我が家から自立することを望みながら生活を共にしています。この子のパーマネンシー保障と考えると、養子縁組を前提にしていない私達がしていることは、権利侵害に当たるのかもしれないと思うと、ドキッとします。

里親をしてみてわかったことは、里子を迎え入れるに家族一人ひとりの覚悟がしていくことが求められ、迎えいれると家族の形が一度崩壊し、そこから新たな家族を形作っていくという作業だったということです。その新たな家族の形に落ち着くまでに 2 年程かかりました。これから先も何が起こるかわかりません。

職業のようだけどプライベートの生活の中に子どもを迎えるという事は、独特な難しさがあります。長期だと思うから足を踏ん張っていられるところがあります。これが、2 年後に家族の元に帰る方針で委託され、ずるずると委託が長

期化されていっても気持ちの切り替えが上手くできないだろうと感じます。そうなると、子どももここが落ち着く自分の家だと見なせないのではないでしょうか。

フォスタリング機能

この言葉を聞いて、何のことだろうと思いました。「里親への包括的支援体制」の事だそうです。ビジョンの中では、「里親とチームとなり、リクルート、研修、支援などを一貫して担うフォスタリング機関による質の高い里親養育体制の確立を最大のスピードで実現し、平成 32 年度にはすべての都道府県で行う体制とし、里親支援を抜本的に強化する」とあります。平成 32 年と言うと 3 年後になります。すぐですから、既存の施設を使用することも考えられます。

さらに、「『里親』の名称変更も行う」と書かれています。そうなると、「親」という言葉を無くなる可能性は高いでしょう。やはり目指すのは、家族の一員ではなく、家庭で養育されることになるのでしょうか。里親の名称は変えればいいと思っている方ですが、実際に里親をしていると「家族」というキーワードを抜きに語れなくなっている自分を感じます。今の里子との日々を想うと、里子と里親家庭の一人ひとりが、不器用な形であれ、家族を形作っていこうとしているから一緒にやれている感覚があります。2 年間のみ預かるのであれば、家族となろうとはしません。その場合、もっとクールに生活を送っているのでしょうか。里子と暮らしてきたこの 2 年間は、葛藤を繰り返し、新たな私達家族の形ができていく過程に費やした年月です。里子を迎え入れ、安定していた家族の形が割れ、揺れ動き、それぞれに苦しみを味わい、落ち着いていった期間でした。やっとこれから家族としての歴史が始まろうとしています。

一般家庭に子どもを受け入れ、守り育てるためには、里親家庭の意識がどこに向かっているのかが大きく作用すると感じます。子どもを家族ではなくお客さんの位置づけで迎えるのか、家族として迎え入れようとするのでは、大きな違いが生じます。

「家族」として子どもを迎え入れようとするところに「家庭養育を推奨する」意義が生まれるのではないでしょうか。預けられ、肩身の狭い思いをした、お荷物として自分を感じないようにするための土台になると思います。我が家では、長期養育になる前提で委託を受けています。「家族」となっていく努力をし続けています。それでも、家族として一緒にやっていけるのかと不安に陥る時が何回もありますし、いろいろな物語に登場する意地悪な叔母になっていく心境が嫌な程わかります。気を抜くと意地悪な叔母に染まり、里子に嫌味ばかり言ってしまう自信があります。つまり、悪い展開に簡単に転んでしまう危機感が常にあるということです。それは、私が人として未熟だからかも知れません。

里親家庭に支援が要ることは以前から言われていますが、ビジョンでは里親のリクルート、トレーニング、支援などを一括した機関が描かれています。里親家庭を支援するのであれば、生活の場を固めることだと感じます。子どもが通う保育所、幼稚園、学校と話し合いができる関係に持って行くことは必要不可欠です。

我が家の里子は特別支援学級に在籍しています。委託時は男性の担任でしたが、今の担任に変わって 2 年目になります。里子は男性にはいい顔をするのですが、女性に対しては優位に立とうとする傾向があります。コツコツと関係を築いてきたと思っていても、目の前に男性が登場するとそちらに行ってしまいます。それを目の当たりにすると、少々傷つきます。そんな経験を私も今の担任もしていて、自分が落ち込むことではないと確認しあうことがあります。誰

よりもそばにいるから、里子の些細な行動で傷つきやすくなっているのでしょう。

その先生が、里子との出会いは大きな事で、いろいろと考えさせられている。2歳の時、この子はどんな生活を送っていたのだろうと想像してみたり、もっと理解できるようになりたいと特別支援学校教員免許を取得しようと思っていると話してくれました。里子との出会いや存在が、誰かの人生を動かそうとしているって、凄いことだと感じました。里子に話しても、何の事かさっぱりわからないでしょうが、いつか伝えたいと思っています。

この子とこれからも一緒にやっていけるのかなと感じた時、この子を一緒に支えてくれる人が、答えを出すわけでもなく、ただ一緒に考えようとしてくれる、悩んでくれることで、もう少し頑張ろうと思わせてもらっています。その相手は、学校の先生、児童相談所の職員、障がい者地域生活支援センターの職員、放課後等デイサービスの職員や友人・知人の皆さんです。里子のことを知りながら、一緒に守り育ててくれている方々です。日々の生活が安心して過ごせることが里親家庭を護ることになり、里子の最善の利益につながるのだと感じています。

終わりに

「新しい社会的養育ビジョン」が出されてから、ずっとザワザワした気持ちになっていました。何故、そうなるのだろうかといろいろと考えています。気持ちがざわつくのは、里親の意義が何であるのかが見えないからだと思います。家庭で養育されればそれでいいのだろうかという印象を受けたからでしょう。

当たり前のことですが、子どもの背景はそれぞれ違います。実の親のことは、子どもの出自を知る時、欠かすことができません。今の社会的養護では、子どもの引き取りを巡って、いろいろな事情が出てきます。子どもにとって、どうしていくことが最善の利益になるのか明瞭に見えるわけではなく、苦渋の選択を迫られていることが数多くあります。家庭分離になった時に今後の方針を決めていくことは簡単ではありません。家族再統合を無理して行えば、また児童虐待が繰り返されます。また、期間を区切れば、委託される側も子どももその場所を仮の住まいと認識します。そこに家族を形成できるとは考えにくいように思えます。里親家庭で生活するのではあれば、あえていつ頃に家族再統合になるかを明示すべきではないと感じます。

家族再統合を準備していく過程を共有することが大事なのではないでしょうか。一緒に実親との関係を見守りながら、それぞれに家族再統合していく時期を実感していく。ある日突然、家族再統合する日を告げられ、その日までにあまり期間がないのは、乱暴だと感じます。子どもが安心して戻るための配慮は最低限必要なことです。周りの大人も安心して送り出せる環境は子どもの気持ちを落ち着かせます。

本当に短期間で家族再統合が可能だと考えられる場合は、施設養育の方が子どもにとってわかりやすいのではないかと思います。子どもにとって不安になった時に寄り添ってもらえる大人（アタッチメント対象）がいることが大事で、それは里親でも施設でも実現できることです。目標としての期限を設けて、なかなか再統合できない状況は、誰にとっても疲労を感じさせる行為になります。長期養育になっても、子どもの安心と安全が保障される暮らしを保障し、実親との交流を続けること、あるいは里親家庭で長期養育になることは、子どものパーマネンシーを侵害することになるのでしょうか。

子どもの所属を一つの場所に定めることがパーマネンシー保障になると本当に言えるのか、そこが私には腑に落ちません。家族再統合をし

たいと願っても現実的に難しいことはあります。特別養子縁組や普通養子縁組で子どもが護られることもあります。それと同じように実親との関係を保ちながら子どもを護る術があってもいいのではないでしょうか。

周辺からの記憶 17

～2014 年　福島のこと～

村本邦子（立命館大学）

7 年目の福島。今年は、福島市でのプロジェクトに加え、浪江町でもプロジェクトができることになった。浪江町は、浜通り北部、双葉郡にある。原発事故によって、仮役場が二本松市に設置され、2 万人以上の住民が避難した。2017 年 3 月 31 日に全域避難指示は解除されたが、「帰還困難地域」が町内の大半を占めている。10 月末現在で、人口 18,075 人 6,913 世帯のうち、居住人口は 418 人 293 世帯である（浪江町 HP）。すでに移住して人口に入っていない人々もいるだろう。

今年は 8 月にも浪江に行ったが、今回は、その後 9 月 20 日にようやく再開通した浪江町の 114 号線を走った。帰還困難区域となっている津島・室原間の 27 キロで、これまでは通行許可証を持つ町民が昼間のみ出入りできるだけだったところ。二輪は今も通行不可で、出入り口にはガードマンが駐在している。帰還困難区域となっている場所を走るのは奇妙な気分で、途中、幾度となくガイガーカウンターがピーピーと大きな警戒音を鳴らした。毎時 2.5 マイクロシーベルトで鳴るそうだ。しかし、浪江と飯館・葛尾を結ぶ帰還困難区域内の 399 号線は今なお一般車両の通行止めが続いており、道が閉ざされていた。

浪江の方が案内してくださったのだが、原発から 5 キロほどの請戸地区へ行くと、茫漠たる空間が広がるばかりだった。震災後の 1 ～ 2 年、あちこちの沿岸部で見かけた光景だが、最近はあまり目にしなくなった。請戸小学校の時計は、2011 年 3 月 11 日の 3 時 38 分で止まったままだった。学校はまだ再開しておらず、来年 4 月に新設の小中学校が開設するが、入学申し込みは 5～6 人だと言う。長い間、止まっていた人間の時間がゆっくりと動き始める。その間にも、大自然は刻一刻と壮大なドラマを繰り広げていた。

2014年10月7日（火）研究会
県外避難者のこと

＜NPO法人和Nagomi理事長大塚茜さんのお話を聴く＞

昨年の福島でのプロジェクトでは、「福島の支援者たちは、支援されるより、むしろ状況を伝えたいと思っている。福島を支援するというより、福島のことを学び、一緒に考えて欲しい」という提起があり、これを重く受け留めた。2012年、2013年と京都の避難者に向けたプロジェクトをやってきたが、2014年は、きょうとNPOセンターから「一昨年は避難者向け、昨年は支援者向けの交流会をやったが、これらの役割は一定終えたと考えている。今年は、むしろ避難者たちから私たちが学ばせてもらう機会としたい」と提案があり、賛同した。

まずは背景の理解を深めようと、プロジェクト実施に先立ち、10月7日（火）の研究会で、京都の避難者支援をされている大塚茜さん（NPO法人和Nagomi理事長）と皆川由起さん（ほっこり通信）を招き、「県外避難者の3年間」について話してもらった。

大塚さんは、2011年10月、京都に避難する人々の交流支援をする「福興サロン和Nagomi」をスタートさせた。避難者推計10万人、うち福島からの避難者3.5万人とされるが、誰がどこにいるか、国も各都道府県も誰も把握していない。最初は、同じような境遇の人と交流したい、気持ちや情報を共有したいという人が多く、出会えるということだけで喜ばれた。2012年4月になると、新年度ということで避難者が増え、先輩が後輩の面倒を見るという感じのことも起こった。

それからフェーズが変わって、少しずつ、個人の選択の問題、生き方や価値観の問題が前面に出てきた。みな避難生活がこれほど長期化するとは思わず、いつか戻りたいと思っていたが、もはや戻れないとなった時、いつまでも支援を受けて生活していくことが苦しくなってくる。もともと普通に暮らし、仕事や社会貢献をしていたのに、それらをすべてなくして人の世話にならなくてはいけないもどかしさ。それで、2012年9月、「キッチンNagomi」をオープンした。出身地の違う人々の食文化の違いが面白く、子ども達に何を食べさせたらいいのかという大きな命題もあって、皆で働ける場所にしましょうという感じで立ち上げた。

もともと就労支援のつもりだったが、それだけではなかったことがだんだんわかってきた。避難元によって立場や国の支援のあり方も違って、分断があり、支援団体も頭を悩ませているが、キッチン和の中だけで言うと、それがほとんどない。人生には社会的役割や貢献が大きな意味を持つ。のべ15人が働いているが、この店を何とかするために頑張ろうという共通の目標を設定できている。支援を受けるだけでなく、自分たちが能動的に動いて、事を生み出していくというのが良いのだと思っている。

3年半経ち、三極化している。ひとつは、帰ろうと思っている人、帰らないと思っている人、どうしていいかわからない人。もうひとつは、苦しい状況のなかで心がささくれ立ってしまった避難者たちと、そこから何とか建設的に行動していこうという人たち、やはりどうしていいかわからない人たち。それぞれに了解可能な反応であり、ピン

ポイントで支援していかなければならない。自分たちも迷いながら、一緒になって考えるが、最終的には自分で決めて引き受ける、自分の人生がこれで良かったと思えるところまでの力を回復するということだろうと考えている。

＜ほっこり通信・皆川由紀さんのお話を聴く＞

皆川さんは仙台の出身で、震災時、関西で子育てをしていた。同じ境遇、つまり関東や東北の出身で京都に住んでいる女性たちが集まって、何ができるか話し合い、京都での支援を紹介する情報誌「ほっこり通信」を始めた。5千部作って宮城、福島、茨城などに送る。今4号で、メンバーは避難者3人を含む10人。3人のうち一人は、パートナーも移住という形で昨年来て、京都で生活再建している。もう一人は、パートナーに移住する気がなく、子どもも多いので、今は戻って向こうで生活している。もう一人は、パートナーが関東にいて、子どもと避難生活を続けているが、この先どうするか悩んでいる。そんな状況。これから一番必要になってくるのは家をどうするか。今は無料で住んでいるところが1年後、2年後になくなるかもしれず、不安を抱えながら暮らす人々が多い。

鬱になったり、まいったりしている人たちには、臨床心理士に状況についての理解がないと、この3年間の経緯を話しているだけで疲れてしまう、余計にしんどくなるということがある。それで身近にいる支援者に重い相談が持ち込まれるが、支援者側も素人なので、しんどくなって、支援者たちが離れていった時期もあった。同じ志を持った者が集まって、次に何をしようと考えているのが今の状況。少しずつ他の地域と連携して情報交換することができるようになってきたので、全国会議も視野に入れている。とは言え、実際にはなかなか大変。志はあっても、お金も人も力もついてこないというのが現状であるということだった。

お二人には2012年に出会っているが、アイディアに満ちたきめ細かで地道な活動に頭が下がる。

2014年10月 東日本・家族応援プロジェクト 2017 in 京都

10月8日（水）～13日（月）、東山いきいき市民活動センターにて、「東日本・家族応援プロジェクトin 京都 2014」を開催した。11日（土）には、茨城県から避難してこられた川﨑安弥子さんと古部真由美さんを招いて、「災害時に家族に起こること～東日本大震災の経験から」というタイトルでお話し頂いた。災害が多発する昨今、家族に関しても災害への備えをしようという趣旨だった。

＜川﨑安弥子さんのお話を聴く＞

川﨑さんは、2012年1月、夫を故郷に残し、3 人の子どもたちと京都に避難してきた。夫は沿岸部で漁協関係の仕事をしており、津波の衝撃と仲間の生存確認で頭がいっぱいの状態から、復興に向けて動こうと前向きな雰囲気も出てきたが、自分は放射能のことが心配で、ネガティブな思考になっていった。講演会など聞きに行って、放射能への不安はますます強くなったが、どうやって避難したらいいかわからず、あきらめかけていた時に、「ほっこり通信」を手にした。そこには、茨城県から避難した人たちの経験が載っていて、「避難できるんだ、してもいいんだ」という気持ちになった。

夫の理解は得られないまま、避難することにした。2012年5月に夫が京都に会いに来てくれた。子どもたちの嬉しそうな様子を見て、夫が帰った後しばらくは、自分のした決断に迷いがでて、落ち込んだ。3年経てば、放射能の危険性にも理解が進んで、避難したこともわかってもらえるようになると思っていたが、理解はまったく進まず愕然とする。国が判断して指示すべきことも個人の判断に委ねられ、夫婦や家庭に摩擦が起き、決断をした人、とくに母は責められる。そんななかで、2014年4月、高校1年生の長男が自分の意思で帰郷した。

子どもが病気の場合は、その子のために家族が団結できるが、災害の場合は、家族だけで家族を守れない。社会を変えなければと思うようになった。災害が起きるときに家族が一緒にいるとは限らない。それぞれに判断するしかない。何でも自分で何とかしようとした時期もあったが、自分の手に負えそうにないものは流れに任せようと思う気持ちもでてきた。できることとできないことを自覚して、背負い込むのをやめようと思うようになった。以前は、家族が一緒にいることが幸せだと思っていたが、今はそう思わない。

迷い苦しみながらも、自分で選択できることは選択する、選択できないことは流れに任せるというところに到達した川﨑さん。仲間関係が重要になる自立の時期、自分の人生を選択した息子さんと、最終的に息子さんの意思を尊重した母親を称えたいと思うが、その心情を思うとやるせない。

＜古部真由美さんのお話を聴く＞

古部さんはグラフィックデザイナー。大阪出身で、13年間茨城に住んでいた。原発事故後、10日あまりで大阪の実家に避難した。勇気のいる決断だった。周囲から「どうして避難するの」と非難され、明確な理由を証明できず、葛藤が続いた。今も親戚から「いつまでいるの」と言われる。今では私の家族にはこれがベストだと考えているが、自分たち家族が決めた生き方であることを理解してもらえないことは悲しい。人に何を言われても「家族を守る」、それが正しい決断かはそれぞれだが、自分でしなければ

ならない決断である。

県外避難者を孤立させないよう、2011年、情報で支援する「まるっと西日本」を発足させた。支援情報誌を毎月2千部発行し、関西の避難者に自治体を通じて無料配布しているとのことだった。

＜村本からの話題提供＞

私からは、プロジェクトを通じて見聞してきた災害後の家族の問題を紹介した。①災害時・災害後、家族がバラバラになる可能性、②支援者の家族は後回しにされてしまうこと、③災害直後は一時的に家族の絆が強まるが、④時間経過とともに、災害前からあった家族の問題からほころび始め、負荷によって問題が大きくなる、⑤避難所や仮設住宅での女性と子どもの問題、⑥避難者たちの悩み、⑦放射線が家族の食卓にきしみをもたらすこと、⑧時間経過とともに家族の問題は日常のものとなっていくこと、⑨家族が安定していると子どもも安定することなど。

川﨑さんも古部さんも、震災前にチェルノブイリの子どもたちと接点があり、それが決断をひとつ後押ししたとおっしゃったことが強く印象に残っている。事が起こる前に見聞きしたり学んだりしたことがいざという時の備えになるのだろう。今回は、本プロジェクトに新聞社とTV局が入った。決断にあたって、正しい情報が広くゆきわたることは不可欠である。マスコミには是非とも頑張って頂き、今回のセミナーが来るべき災害に対するなにがしかの備えになればいいと願う。

2014年11月 水俣から福島へ

鹿児島大学で平和学会秋季大会が開かれた折、11月6日（木）～7日（金）、合宿形式の水俣フィールドワークに参加した。「グローバルヒバクシャ」分科会の企画で、水俣と福島を繋ぐ視点を提示する。4 人の被害者の話を聴き、夜は相思社に泊まり込んで参加者たちと交流した。水俣とは縁があって、これまでも自分なりに学んできたが、今回はかなりディープな水俣体験となった。お話しくださった方々のスタンスはそれぞれに異なっていたが、共通しているのは、水俣から悪い教訓が福島に持っていかれているのではないかという危惧だった。実際、環境省では、水俣の対応をしてきた人が福島に行っているそうだ。

起こり得るのは、事件の矮小化、隠蔽、被害者の分断であり、「地域復興」「問題の克服」といった語り口で収めてしまうこと。福島の後、水俣病資料館には「水俣は風評被害をどう乗り越えたのか」という展示が掲げられた。水俣病が利用されないようにしなければならないという。「水俣病の最初の失敗は、住民同士傷つけ合ったことだった。福島にはその繰り返しをして欲しくない。住民が悪いわけではない。最初に判断を間違うと、水俣と同じ方向にいってしまう。原因は国と東電にあることをぶらさないよう、行政や東電任せではなく、自ら実行して欲しい。豊かな暮らしを求めることの裏返しであることを受留めて、1日も早く落ち着いた暮らしができるように努力して欲しい。行政任せではダメ。水俣も、行政に任せていてはダメというところから動き出した。少しでも参考にして欲しい」との言葉はパワフルだった。田中正造は、「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」と言ったそうだ。

ここで、福島で活躍中のジャーナリスト藍原寛子さんと知り合いになり、福島の情報をたくさん頂いた。12月のプロジェクトでは、院生3名と1日早く出発し、紹介してもらったところを訪問することにした。ちょうど鹿児島県議会が開かれていて、翌日、再稼働発言が出る予定ということで、藍原さんは翌朝早くに鹿児島へ発っていった。

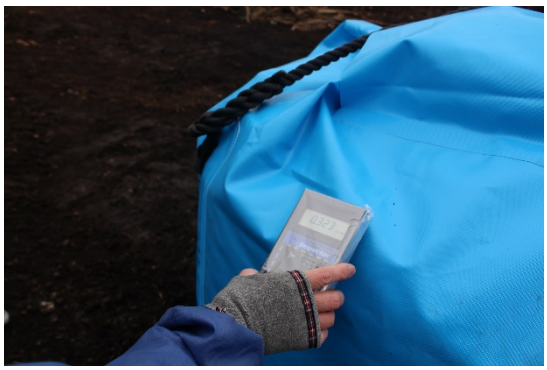
2014年12月4日(木)～5日(金)
フィールドワーク

3年目の福島。今年は、「福島に学ぶ」ということで、フィールドワークの時間を十分にとるため、院生たちと、いつもより1日早く出発した。7時半の新幹線に乗り、東京経由で新白河下車。タクシーで原発災害情報センターへ向かう。原発と言ったからなのか、マスクをした年配の運転手さんは一言も物を言わなかった。

＜アウシュヴッツ平和博物館＞

原発災害情報センターは、アウシュヴッツ平和博物館に隣接している。藍原さんの紹介で事前に連絡してあった小渕真理館長は、アウシュヴュッツ平和博物館で受付をしていた。やはりマスクをしている。日本のどこかにアウシュヴィッツ博物館があることは聞いていたが、「なぜ白河に？」と思う。

1988年より市民有志が、ポーランド国立オシフィエンチム博物館から犠牲者の遺品と記録写真を借り、「心に刻むアウシュヴィッツ展」として全国巡回し、10年で110回、延べ90万人の入場者を数えた。2000年4月、巡回展の有志によって、最初は栃木県塩谷町に博物館を作ったが、2003年4月、本格的な博物館建設のために、交通アクセスと自然環境に恵まれたここに移転・再度オープンしたのだという。2004年にはNPO法人化した。私もホロコーストには関心を持ち、アウシュヴィッツは2度訪れている。20分のビデオと館内展示を見て、隣の原発災害情報センターへ案内してもらう。



＜原発災害情報センター＞

庭はまだ除染中。「11 月に重機が入って作業が始まったら、涙が出ました。自分の活動が剥ぎとられて。大切にしてきた芝生や花壇、全部剥がされて真黒になった」と言う。除染とはそういうことなのだと知る。「好きな土に入れ替えられて喜んでいる人もいれば、庭に愛着があって除染をしないという人もいる。人それぞれ、意見はみんな違うと思う。だから話ができなくなってしまった」。つい最近、「もう我慢はしない、立ち上がる」というタイトルの集会があったが、「みんな 3 年間我慢していたんだね。私たちは毎日話すが、原発のことは学校でも禁句、話せない」。福島県や教育委員会の方針で、「環境創造センター」が三春町にできて、放射線安全教育が始まる。それに対して、「福島アクションプロジェクト」を立ち上げて反対運動やっているということだった。（http://fukushimaaction.com/）

小渕館長が、庭のあちこちで放射線を測って見せてくれる。「測る場所で全然違うのよ。放射線に色がついていたらおもしろいでしょうね。空中を赤やピンクや黄色や青が浮かんでて、景色に色がつくでしょ」とおっしゃる。そう言われると、測った数値に合わせて、色がプカプカ宙に浮かんでいくような錯覚を覚える。東日本大震災の後、「アウシュヴィッツ博物館をどうしよう、子どもたちに来てと言えなくなる」と思った。白河でも、この地域は線量が高く、1 年経って、原発事故についても記録を残していこうと、理事長自ら除染作業をし、まずは建物を建てた。理事長は大工で、ボランティアと少しずつ作っているところ。

情報センターでは、ボランティアの E さ

んがお話をしてくださる。センターはまだ完成途上。資金不足で、ストーブはあっても灯油代がないと、寒いままだが、手作り感にあふれ、暖かい気持ちになる。E さんの住まいは棚倉町なので、避難していないが、実家は富岡町で、すべて津波で流された。先日、富岡駅に行ったが、「大きな国道 6 号線が寸断され、そこから商店街、ゴーストタウン。惨憺たるものだった」と言う。小渕館長も加わる。「線量計を持って入ると、大熊や富岡は高いが、双葉はここより低い。道路新しくしたから。町民だってゆらぐよね。でも、そこだけですよ。道路から脇には入れない。飯館も黒いビニールだらけ。黒は 4 千円、ブルーは 9 千円。黒は 10 年もつと言われたが、実際にはもうもたない。惨憺たるもの。置く場がない。仮置き場やら、仮仮置き場やら」。

センターでは放射能測定もしている。必ず数値は出る。でも、たとえば千葉のお米を測ってみたらゼロだった。そういうことをやっていたら、安心ではなくても、ただただ大丈夫というのとは違って、どの程度のものか自分でわかる。

実感として、関連死の人が多くなっている。「元気だった人が自分の周りだけでも何人も亡くなっている。心筋梗塞とか心臓多い。仮設で亡くなる人もいる。いたたまれない」。「甲状腺は関係ない」と言うが、個人差がある。鼻血も、自分は出なかったが、動物保護で放射線量の高い所に毎日通っていた人たちは鼻血が出ていた。アレルギーもそうだが、放射線に敏感な人、そうでない人がいる。「わからないと言うのが正解、否定してはいけないと思う」。確かにそうだ。

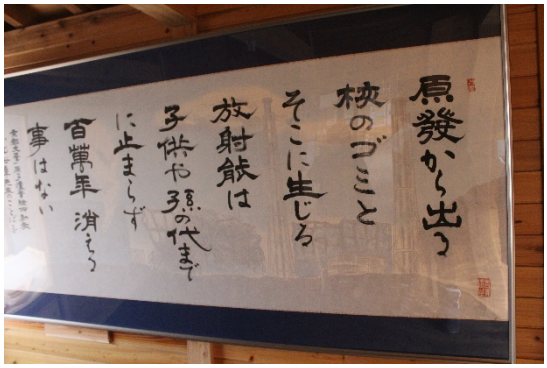
保証金を巡る分断も大きい。たとえば、避難指示で避難していると、一人月十万もらえる。いわきのスーパーに行くと、避難者は一目でわかる。「あんたら金もらってるでしょ」と、同じ県民同士でいがみ合っている。どんどん分断に追い込まれているし、これからもっと厳しくなると思う。基準は不明確。たとえば、富岡から郡山に避難した知人が 2 人亡くなった。90 歳超えていたが、関連死とされ、「240 万出たよ」と新車を買っている。そうすると、「何だ、やつらは」と言われる。でも、別の老人は出ない。あるいは、住めなくなったからと、家の保証金が 1400 万出た人がいる。すべて奪われ、仮設に押し込まれて、仕事もないから、パチンコ屋に並ぶ。大金を持たされ、人生を狂わされている。人生が一変したのは被害者だけではない。それまで反対運動していた人が、「力が及ばなかった」と、休みなく動いている。福島で生まれ育ってきた人と転入者とも違う。自然と一緒に暮してきた人への影響は大きい。それぞれの思いも違うので、足並みも揃わない。

福島は、歴史的には自由民権運動などリーダー的存在だったが、その後、置いていかれて、日本のチベットとまで言われた。そこに原発作りましょうと。双葉は海だが漁業ができず、何もなく、原発ができて、出稼ぎに行かなくてすむようになった。雇用の問題が関わっている。第二原発も再稼働するかもしれない。それを望む人もいる。除染の仕事も安い。求人見ると 1 日 1 万円、女性も多い。福島辺りの夜のお姉ちゃんがいわきに行ったりしている。

避難している人たちを戻したい県の方針がある。来春、広野町に中高一貫校が開校する。有名人を臨時講師として雇って、それを

目玉に人を集めようとしている。広野自体は放射能は高くないが、高校卒業したら東電に勤めましょうとやる。富岡の婦人会も東電がバックアップして、金遣いが荒い、「ずいぶんいい思いしたんでしょ」などと言われる。

そこで、にわかに、「カウンセリングしてもらいたいぐらいだよね。私たち、もう頭が変だから」と言われ、苦笑するしかない。変なのは頭ではなく、現実だろう。



＜NPO 法人ビーンズふくしま訪問＞

新白河から福島へ移動、プロジェクトを共催する NPO 法人ビーンズふくしまの事務所に伺う。ビーンズふくしまは、もともと子ども支援をしていた NPO。初期の子ども支援は「保養」が多かったが、日常のなかの支援をと考えた。福島は避難生活が長引いた。2011 年の 3 月、4 月、福島は放射線の影響もわからず、物流も止まり、仮設設置も遅れた。仮設住宅も建つのに時間がかかるし、ものすごい数が必要だった。8 月頃まで、避難所やホテルなどにいた。そんなところからの支援だった。

故郷を離れて避難せざるを得ない、バラバラに仮設住宅に入って知らない人ばかりという状況も多かった。子どもたちは、避難生活のなかで 5 回も 6 回も転校し、友達とも離れ離れになった。それまで海沿いに三世代で暮らしていたようなスペースから、4 畳半 2 間のプレハブに来て、家族もバラバラ。狭い中で生活しているので、子どもが泣いたり暴れたりしたら丸聞こえのため、我慢しなければならないことが多く、ストレスもたまっていた。

家以外に子どもたちがいれる場所はないのかと考えた。集会所があるが、子どもだけで使うことはできず、大人が見ていられるかと言えば、今後の生活を考えると、そんなゆとりはなかった。福島は全員被災者と言えるが、福島市はインフラが戻ると比較的早く日常ができていたので、仮設住宅での居場所づくり、学習支援から始めた。2011 年の 9 月スタート。イベント的なものはあったが、日常に寄り添う支援がある方がよいのではと考え、福島大学の学生たちと協力して、最初は土曜の学習支援を始めた。

放課後支援で遊びや学習の支援。福島県は全部で仮設は百何カ所あるが、自分たちが関わっているのは比較的大きいところなので、他の仮設から来る子どもたちもいる。大人も含めて子どもたちを見守る力を作っていきたいと考えている。あさって、仮設支援チームは三春町で餅つきをやる。子どもたちの見守りを大事に、場の中で子どもたちを支えていく。学童保育に近いことをやっている。3 年半続けてきたが、まだ 2 年は続ける。福島は、5 年半経っても仮設が残っている見込み。仮設と周囲の交流が少なく、隔離された居留地となっているので、外部からの風を入れることが大事だと思う。

センター職員は 15 名。毎日、県内のあちこちで活動しているが、それでも足りていない。今日は 4 名のスタッフ。小学生は多くて 20 名だったが、今は 5~6 名となっている。中学生数名。小さな子どもがいる家族はみなし仮設（アパート）に暮らす方が多いので、震災後に生まれた子どもは少ない。。17 時から 18 時半は小学生、20 時半までが中学生。県北ではゲーム禁止で、学習をしている。終わった後におしゃべりしたり、おやつ食べたりはする。

子どもたちの状態、1 年目はひどかった。クラスによっては学級崩壊状態。最初の 1 年は、安心・安全、場の約束をして、「一緒に楽しいことをするためにルールを守ろうね」ということをやっていた。子どもたちも表現しようがなくてやっている。見てもらいたい。最近は学年が上がり大きくなってきたのか、それぞれの状況に応じて、「あの子行かないなら私も行かない」など、人数も減ってきた。ボランティアも確実に減っている。大学の時期があるので、マッチングは大変。年間、放課後来れるのはやはり県内の学生。

＜福島子ども支援センター＞

福島子ども支援センターの仕事としては、福島県の委託を受けて、お母さんの心のケアなどやっている。県外避難の問題があって、2014 年 9 月 30 日現在で 46,645 人（3 県の合計 55,021 人）、うち子どもは 13,308 人。ピークは 2012 年 3 月。低放射線被ばくの長期的影響は未知であり、1 年の迷いがあった。県内避難者は 78,577 人（福島県災害対策本部 6 月 26 日）。支援として、県外の交流会を開催している。県外に避難すると情報が入らなくなるため、福島の情報を提供する。県外の支援者にも正しい情報が必要。3 年前の情報のまま、避難者の不安に寄り添っているかもしれない。不安の源が現実には変わっていることもある。たとえば、今年 5 月には、堺市に福島の状況を話しに行った。

福島の避難者も 6 万人から 2 万人に減り、4 万人が帰ってきたが、抜け落ちた 2 年間の不安がある。196 万人のうち県外に出た人は 6 万人なので、避難しなかった人たちに対する罪悪感がある。子育て世代が中心なので、親のケアとしてママカフェをやっている。福島、郡山、白河、南相馬、いわきの 5 箇所。当事者性の高いグループで、子育ての不安、遊ばせ方、食べ物の悩み、学校での指導に対する不満（福島産のものが給食に使われるなど）などが語られる。

福島県内の支援者の研修もやっている。ファシリテーター、虐待支援。スクールカウンセラーや母子保健などの派遣調整もやっているし、お母さん向けのベビーマッサー

ジ、ヨガ、子どもたちへのリトミックや運動遊びなど、年間 900 人くらい派遣している。登録・紹介の講師をつなぐ。情報が集まってくるので、いろいろな団体をつなぐ役割を果たしているということだった。

＜仮設住宅での放課後学習支援＞

その後、二本松市安達仮設へ移動し、私たちも学習支援のボランティアをさせてもらった。16 時半から 19 時の間に、5 名の子どもたちが来た。安達仮設は大きく、浪江町の人々が 244 戸入っている。60 人くらいいる子どものうち約半分が登録しているそうだ。夏休み前までは、たくさん来ていたが、夏休みをはさんで少なくなった。みんな塾に行っているとのこと。岩手の仮設とは違って、ほとんど皆、車を持っているようだ。なるほどと思う。

全体的にどんよりとした空気が漂っているが、個別に話し始めると子どもたちに笑顔も見られる。個人差はあるが、ボランティアがそれぞれの子どもについて教えると、落ち着いて宿題に集中することができる。終了後は、子どもたちもお迎えに来られた親御さんにも、そしてスタッフにもおやつがあって、ほっこりとした時間。

＜仮設住宅宿泊体験＞

この日の夜は、ボランティア宿泊用の仮設住宅に泊まらせてもらうことになっている。院生 3 人、関東から来ているボランティアの男性 S さんとスーパーで鍋の買い出しをしてから、宿泊する福島市佐原仮設へ。こちらは小さな仮設住宅。四畳半二間で、お風呂も三角座りで入らなければならないくらい小さく、台所のガスコンロは 2 つあるものの、片方は、使うと壁が燃えるから使えないという。確かに、壁に焦げかけの跡がある。あんまりではないか。

鍋を囲みながら、S さんの話を聴く。元理科の先生で、2012 年の 1 月、新聞で福島の教育委員会が学習支援のボランティアを募集しているのを見て参加。震災後、夏頃まで混乱状況になったため、勉強が進んでいないばかりか、逆行して忘れていっていた。「これは大変だ」と思い、受験勉強の手伝いをした。自信をつけてもらえればと思った。翌年は来れなかったが、2014 年は 2 月ひと月、今回は 1 週間の滞在で来ている。地元の退職教員にも呼び掛けたが、それぞれ個別事情を抱えていて、みんな無理だった。前はビジネスホテルに宿泊していたが、仮設住宅を使わせてもらえるようになって助かっている。

震災以前、理科の教員で、千葉から福島まで海岸沿いを 3 年にわたって発掘するという企画があり、福島原発のすぐ近くまで行ったことがあった。たまたまガイガーカウンターを持っていた教員が測ってみると、原発周辺でガーっと上がった。自分が大騒動したためかチェックされて、理由は不明のまま、その後、行けなくなった。東電から圧力がかかったのだろうか。あの時、もっと

上手に問題にしていれば、こんな惨事にならなかったかもしれないという。S さんに責任があるとは思えないが、それでも小さな罪悪感を抱えているのだろうか。

地元の食材を買って、みんなで鍋を囲んでおしゃべりするというのは、楽しく暖かいひとときだったものの、いざ寝ようと、院生と 4 人で布団を敷いたらもうスペースはなしという状況で、一夜を過ごすのはなかなか大変だった。たとえば家族 4 人で暮らすとして、プライバシーもなく、子どもが勉強をするスペースもなく、これが毎日では本当にたまらないだろう。都会の小さなマンションに暮す自分と違って、ずっと大きな家に住んでいた人たちだ。実際、福島で見かける家は本当に大きくて、なかにはお城かと見紛うものもある。

翌朝、3 時間に 1 本しかないバスを待って街中へ戻った。

＜椏久里珈琲＞

藍原寛子さんの紹介で、椏久里珈琲店を訪ね、店主である市澤美由紀さんのお話を伺った。椏久里は飯館村にあったが、被災して福島市内で営業を再開していた。

福島県の職員だった美由紀さんは、農業研修でホームステイをした縁で飯館村に嫁いだ。飯館は標高 450 から 600 メートル、何年かに一度は冷害に見舞われ、農業をやっても報われない貧しい村。40 キロ走らな

ければ町もないので、冬は出稼ぎするしかなく、大学進学率も低い。人々は飯館村出身を恥と感じていたが、町おこしの時代になり、前向きに考えたいということで話が盛り上がってきたのが昭和 60 年代から平成にかけて。若者の組織、「若妻の翼」というのもできた。子どもたちには、「飯館って素敵だね、いいところに生まれたね」と言われるようになって欲しいと思った。質素だけど豊かな暮らしとは何ぞやと皆で考えた。

美由紀さんは、子ども時代、ピアノを習い、いつも学校で伴奏をしていた。高校では合唱をやっていたが、高校 3 年生の時、全国 1 位になり、1 ヵ月ヨーロッパに行った。民泊して、男の人が台所に立つのを見てショックを受け、「こういう人でないと結婚したくない」と思った。男女平等で同格。でも、結婚してみて、農家には外仕事がたくさんあり、役割分担があって、自分にはできないことがあり、一緒に台所に立つだけが平等ではないと知った。3 番目の子どもが生まれた時、仕事をやめて、農家を手伝うようになったが、賃金はもらえない。自分の人生を開きたい、カフェをやろうと思い、東京で修行して山の中に店を出した。大阪の辻調理に通って、ドイツ菓子の勉強もした。5 年で 1 千万売り上げることを目標にしたが、1 年で到達。農村の風景のなかにポツンとある珈琲店は、予想以上に都会の人が評価したのだと思う。

そんな経過で店をやって 19 年で震災だった。嫁いで 30 年は飯館に暮し、あの土地で生きていく自分を一生懸命作ってきたのに、そういうものを全部奪われた。単に家を失ったというのでなく、生き方を全部否定されたと感じる。震災の時、最低の国だと思った。今の政治が辛くて仕方ない。

でも、実際に生活していくためには、店を再開して、従業員の生活も保障していかなければいけない。怒りだけでとどまっていると自分の心も体もだめになってしまうから、行動だけはスカッとスタイリッシュに行きたい。震災前と変わらない自分の仕事のリズムを狂わせたくないと思った。4 月 11 日に計画的避難区域になると言われ、閉店して、16 日から移転先を探し始めた。2 台の焙煎機のうち 1 台しか持って来れなかったが、7 月 1 日にオープン。昔からの従業員もいるし、ここで新しく雇った人もいる。みんな店主の思いを受けて頑張ってくれている。やはり、支えてくれたのは仕事。プライドもあるし、負けられない。店を福島市内に再建するため、現在、設計中という。

世間ではコミュニティが崩壊したと言われるが、崩壊してホッとしたところもある。しがらみとは内発的なもので、誰かが縛っているわけでなくても、自分で自分を縛ってしまう。解放された人もいる。今は、必要な時に自分で選んでコミュニケーションを取っている。若妻の会では、最初、ベルリン崩壊の年、19 人でヨーロッパに行き、5 回続けたが、今年の 7 月、19 人中 10 人が集まってまた行ってきた。本も出版し、今、第二弾で「25 年経った女たち」というのを編集している。

「これっておかしいよね」という感覚が大事なのに、今はそれをさせなくしている。机で学ぶだけでなく、生きていることで学ぶことに含蓄がある。自分がやりたいこと、今しかできないことをどんどんやっていかなければと、自分で決定してやってきた。震災のことを知ろうと努力しているが、個人

の人生に位置づけて震災を理解することが大事だと思っている。

若い院生たちは、美由紀さんの話に感銘を受けていた。いつも、震災を逞しく生き抜いている女性たちのストーリーを聞くと、それは単なる被災の話なのではなく、女性の生き方の物語なのだと気づく。世の中には素晴らしい女性たちがたくさんいるものだとあらためて思う。

2014年12月6日(土)～7日(日)「東日本・家族応援プロジェクト2014 in 福島」

今年は初めて駅横の「子どもの夢を育むこむこむ館」でのプロジェクト開催となる。立地条件も良く、駐車場も完備されており、9 時半からの開館だが、早くから子ども連れのお父さんや家族が並んでいる。ドラマワークには 2 家族、クリスマスカレンダー作りには、親子 20 人が参加してくれた。昨年度は 5 人の子どもたちが前年度に続けての参加だったが、今回、過去に来てくれた家族の姿は見えず、場所が変わったこともあって情報が届いたのかなと気になった。遅れての参加者が多く、少しバタバタしたが、楽しいひと時だった。

夜は福島名物「円盤餃子」を囲んでの支援者交流会。福島に暮す現在について語られる。

表面上は日常を取り戻しているように見えるし、普段は目の前の仕事に忙しく忘れているが、ふと職場から窓の外に眼をやると、除染土の入った黒いビニール袋が見え、「ああそうだった」と思う。そんな日常と非日常が同時進行している。そんななかで、支

援者も、いつまでこの状況が続くのかと見通しがつかず疲弊している現状があるということだった。支援者も被災者なのに、目の前には支援を必要とする人々がたくさんいる。「福島のことは忘れられているのではないか、なかったことにされるのではないかと不安になる」「何をするというわけでなくても、福島に関心を持ち続けて、見守ってくれていると思うだけでも嬉しい」「長く来てくれることが力の源になる」とおっしゃっていた。

店を出ると、静かに雪が降っていた。翌朝は、一面、真っ白。最終日は漫画トークだが、雪のためかほとんど人がおらず、関係者中心にスタートするが、途中で何人かが遅れて参加してくれた。漫画展の評判は良いようだ。終了後、反省会をし、片づけをした。来年以降もこむこむ館でやっていくことができそうだ。

つづく

病児保育奮闘記

(16)

子どもサポート H&K
大石　仁美

母子の関わりに学ぶ

ある母子手帳に感動

多くのお母様方は、何かあった時にすぐ対応できるよう、母子手帳、保険証、診察券、お薬手帳等、小さなカバンの中にまとめて整理されている方が多いです。それ用のカバンも市販されていて、丁寧、親切、手厚い支援。なんでも揃う良い時代になったなあと思います。

初めて当施設を利用されるとき、出産は順調だったのか、子どもの発育曲線はどうか等、時々母子手帳を見せていただくことが有ります。

ある方の手帳を開いたとき、医師の記録のすぐ下にびっしり書き込まれた小さな字が目に留まりました。その時どきの、お母様の思いを克明に書いておられ、それは妊娠から出産、さらにその後の子どもの成長に伴って感じた母の思いを記した立派な記録でした。

初めての子どもの場合、なにもかもが新鮮でめずらしさもあって、出産後の子どもの写真や動画を撮りまくつている人は多いです。それが第二子以降になると写真の枚数もガタッと減ってしまうということはよくあることです。この方にとって、二人目のお子さんの母子手帳であったので、それがさらに大きな感動を呼びました。

「今日は胎動がよくわかる。元気そうで嬉しいわと声を掛けてお腹をさすりました。」「もうすぐ出産日。はやく会いたい。どんなにしんどくてもお母さんは大丈夫！あなたに会えると思うと耐えられます。」こんな輝いている言葉が、続いています。

子育て経験があるとか、ないとか、そういうことではなく、どの子であっても母と子の関係は初めて紡いでいくもの。そのことを形で見せてもらえたのがとても嬉しい。

はるか昔、私も同じような気持ちを体験したなあ～と胸が熱くなってきました。でも、こんなふうに丁寧に記録してはいません。

母子手帳は、母子の健康管理だけでなく、将来子どもが結婚等で独立するときに、手渡してあげるべきものなのかもしれない。

自分がどんなふうにして生まれてきたのか、どんなふうに大切に育てられたのか、

それを読み解くとき、とてつもなく大きな「幸せ」のプレゼントをもらったことに気付くに違いありません。

このように考えると、記録はとても重い意味をもってきます。

さらに母にとっても、成長の足跡だけでなく成長へのジャンプであることを思い起こしてくれたのでした。

母子関係で大切なこと

子どもと親の関係は、連れてこられた時とお迎えに来られた時の様子からおよそ伺い知ることが出来ますが、子どもは隠す知恵を持たないので、おしゃべりする中には親が言ってほしくないことも、けっこうあると思います。「ほーぅ」と面白そうに聞いていると、どんどんエスカレートしてきて「そんなことまで・・・・」というような話に発展することもありますが、それでも屈託ない表情でお家のことを話せる子どもは、健康な家庭の子だといえます。

ご両親の仕事や生活のあり様、人間関係や価値観等、様々な事柄が子どもに影響するわけですが、こんなふうにしたからこんなふうに育ったというような単純なものではないところが面白いところです。

観察をしていると、幼い時ほど親の影響を強く受けているということは確かで、「子は親の合わせ鏡」とはよく言ったものです。子を叱る前に、親が自分の心を鏡に映してみると、「なんだぁ～自分とそっくりじゃないか」と笑ってしまう場合もたくさんあると思います。腹が立った時にはワンクッションおくこと。そして親が自分自身を見つめ直すことに尽きます。

よく似ているのはDNA（遺伝子）の成せる業と言ってしまえば簡単ですが、でも実際これはとてつもなく大きな比重を占めていることは実感するところです。

負けず嫌いやへそ曲がりも、恥ずかしがりやお茶目さんも、そうした性格的な所も多くはDNA。特に優秀な頭脳はDNAだと感じます。成長するにしたがって、環境の影響が大きく加わり、変わっていくでしょうが、そういうことを意識して、幼児期は、ああしなさい、こうしなさい、と言うよりも「私に似て、可愛い！愛しい子！」と思いを込めてみつめ、抱きしめる、それが一番のように思います。子どもは親の思ったようにはならない、親のようになるのですから。

当施設を利用されるお母様方の中には、素敵な方がたくさんいらっしゃいます。

専門職の難しいお仕事をされながら、四人の子を逞しく育てていらっしゃるお母様。小学校の保護者会役員としてもご活躍のようで、まさにスーパーウーマン！驚愕のかぎりです。

この方の真似は出来なくても、時間の使い方や、子どもとの距離のとりかた、間の使い方等、学ぶことはいっぱい。

子どもべったりではないけれど、大切なことは見逃さない。これが最も大切で、日ごろの母子の触れ合いの中で、築かれていく関係性なのではないか、そう思われます。

子どもに「今日も楽しく遊んでね！ハイ、タッチ！」「タッチ！バイバイ」とタッチして笑顔で別れる親子、いいですねぇ。

「ママはお仕事頑張ってくるからね。ギュッ！」と抱きしめてお別れをするお母さんもいらっしゃいます。子どもはそれなりに理解するようで、いじらしいです。

たまにしつけの厳しい方もおられて「ちゃんとごあいさつして！」「そんなことしないで！」と子どもを叱る方もおられますが、子どもが親の目線を気にしている様子がなければ、親の教育方針を尊重するようにしています。挨拶がきちんと出来るというのはとても気持ちのいいものです。

でも子どもがおどおどしていたら、「お母さん、ごめんね。ここでは甘やかすのが方針なの」と助け船を出すこともあります。「はい。そうしてください。病気だものね。」きっとシャイな方なのでしょう。自分ではなく子どもに目線が移るよう、無意識が働いているのかもしれません。

子育てに、成功、失敗などという単純な評価はあてはまらないので、親は自分を信じて、自分が良いと思う教育方針をたて、大きくぶれずに、学習しながら、育てていけばいいのではと思います。

大きな問題に直面したとき、あれ？と気づく感性さえあれば、その時にきちんと向き合える力さえあれば、子育ては絶対大丈夫！カリカリしないおおらかな子育ては、周囲の人々を幸せにしてくれます。

私も幸せをいっぱいもらっています。

最後に絶対してはいけないことを一つだけ。「子捨て」です。私とパートナーの教員生活の中で、いくつかの子捨てのケースを見てきました。思春期になって、親の思うとおりにならず、大きく曲がってしまった子を、世間体を気にするあまり、遠方の全寮制の中高へ転学させてしまったり、体のいい留学という形をとったりして世間の目から遠ざけてしまう。また、家出した子をそのまま放置したケースもありました。自分を理解して欲しい、愛して欲しいともがいている子を切り捨てるのですから、なんとも哀れです。そのほとんどが、世間体をはばかる父親主導でした。

母親はこういう時、断じてこれに抗い、子どもを守らなくてはなりません。どんなに辛くても母親にはそれが出来る。

新しい命を授かった時の新鮮な喜び、出産の苦しみに耐えたあとの感動の対面を思い起こせばいいのです。その後の成長の過程の中で、どれほど慰められ、助けられたかを思い起こせばいいのです。

「どんな子でも自分の子ども」その覚悟が子どもを救います。

対人支援点描（12）

「経験を得ることと経験を積むこと」

小林　茂（臨床心理士/牧師）

「ものごとに精通すると、感性が衰え、活力が衰えるものである。それゆえ、芸術家も思索者も、ありふれたものの誕生と、知られているものの発見に没頭する。彼らはともに、ものごとの初期段階をもう一度捉えなおすことによって、生命を保持しているのである。」　（エリック ホッファー『魂の錬金術』作品社より）

はじめに.

筆者も見習ないというべきか、半分スタッフのようになり、毎年参加している体験型の研修会がある。そこでは泊りがけの合宿形式で研修を行っている。参加者もさまざまで、必ずしも対人援助職の人ばかりではなく企業に勤めている方もいればボランティアに携わる人もいる。また研修参加も２０年以上のキャリアの持ち主もいれば、所属先の勧めで研修会に参加することになり、そこで何をするのか予備知識もなく参加したという人もいてさまざまである。

毎年、そういった参加者の顔ぶれの違いが変化を生み出し、自分を振り返りつつ、刺激を受けている。

今回、アメリカの哲学者であるエリックホッファーの書籍を読んでいて、冒頭の一文を目にし、ある年の研修会の出来事を思い出し、振り返ることにした。

１.「今、ここに」という理念

筆者が「今、ここに」という言葉と最初に出会ったのは、筆者が思い立って電話相談員になろうとして民間の電話相談機関のボランティア養成に参加したときのことだった。電話相談ボランティアでは、その時かぎりの１回性の相談の出来事を重視するため、相談員と相談者との間の「一期一会」だとか、相談をかけがいのないものとして「今、ここに」の出来事の大切さが強調されていた。

のちに、「今、ここに」という理念が人間性心理学に関係する理念であり、カウンセリングの創始者（？）の一人であるロジャーズ,R.C.に由来するものであることを知ることになった。

今となっては、この「今、ここに」という理念は、人間性心理学の立場とは関係なく、広く対人援助職に関わる者が持つ基本的な対人援助の姿勢として共有されるも

のであると否定されることはないだろう。

先入観や、支援者側の経験や憶測などを排して、その場、その時に起こった出来事に意識を傾けていく作業である。

２．純粋な「今、ここに」というものはありうるのか？

しかし、私が参加した研修の中で、この「今、ここに」というものは、本当に確保できる意識であるのか、戸惑いと共に疑問を起こさせる出来事を経験することになった。

この出来事と、そこで起こった筆者の疑問は、けっして「今、ここに」という理念や、研修会を批判非難するものではない。むしろ、「今、ここに」という理念への“こだわり”や“深まり”を掘り下げたいという思いを持っている。

先に紹介させていただいた研修の件だが、最初に紹介したように参加者の特性はさまざまである。その回の研修会では、筆者はオブザーバーとなり参加させていただいたのだが、ある場面で、その研修会に初めて参加した方が自分の経歴やこれまでの経験を引き合いに自分の考えを述べたときに、数名の経験者からやや非難的な（否定的な？）勢いで、「今、ここで起こっていることが大事で、あなたのこれまでのことは求められることではない」のだという主旨の流れになった。今では、筆者も他のところでも経験を重ねる中で、こうした研修の場以外でも起こりうる珍しい場面ではないということを思わされている。しかし、その時に、一つの筆者の疑念と、その時の発言から一つの気づきが与えられることになった。

筆者の疑念は、私の考え違いでなければ、発言者の過去の経験やそれに基づく考えが、その場で語られたとしても、それ自体が「今、ここで」起こったことはならないのか、という思いである。

もう一つの気づきとは、その自分の過去を引き合いに出して発言された方が「自分が初めてこの場に参加した者であり、ここで何をするのかまだわかっていないが、この場にいる経験者に共有されている決まりがある感じがして、私にはそのルールがわからないので、どうしたら良いのかわからない。」という主旨の発言をしたことにある。

出来事として、初めて参加した方が自分の経験に基づいて自らの発言をしたときに「今、ここで」起こったことへの発言ではないと否定され、もう反対側では経験者たちが「「今、ここで」ということを語ることは、こういうことだ」という意識されない過去の経験に基づいたルール（常識や共通感覚みたいなものか）を持ち込み、その人の発言を抑えてしまうか、もしくはルールに沿うような修正の力を働かせてしまうのを感じたのである。

その両者に共通するものは、純粋な「今、ここに」というものは、自らの経験から自由になれないという事実である。

人は、何かしらの経験に基づき、自らの発言や振る舞いを行う。それを抜きにして、まるで初めて見聞きする言語、言葉を扱うように「今、ここに」という発言はできない。その場で話された会話への応答であったとしても、意識的な制限として“その場に限ったトピック”に切り取って発言しているのに過ぎない。それ以外のものは、言葉として語られない経験として暗黙の状態に置かれることになる。

研修の場で起こったことは、複数の経験者に、その言葉として語られない共通する経験がメタルールになり、その経験を持ち込んで初めて参加した方の発言に抗する現象になったのではないだろうか。

「今、ここに」を大切にする（尊重する）ことが、「今、ここに」を大切にするメタルールによって否定された出来事であったといえる。

観察者の立場からいえば、初めて参加した方の発言こそが「今、ここに」起こっていることであり、意図せずメタルールを形成してコントロールが働いた発言の方が「今、ここに」の理念に反しているように感じた。両者の違いといえば、経験を思ったまま発言したことと、経験のゆえに経験上、ルールにそぐわないと発言を遮っただけの違いである。どちらも、経験に基づく発言であることには違いはない。“明”か、“暗”の違いくらいであるといえる。

筆者の感じた印象が正しければ、何という矛盾だろうかと思う。

また、得てして、このような場で、このような現象が疑念のないまま受け入れられていくことがあるのはなぜだろうか、考えさせられる。

多くの場合、キャリアを積み、経験を積む人の立場にある人は、経験者という権威を持つことがあるからではないかと思う。つまり、“知らない私”と“知っているあなた”との関係で、初心者、初学者、時には患者や生徒という立場は、そもそも自らの立場の正しさや正当性は尊重されづらい位置にある。このことは、今、話題としている「今、ここに」という理念そのものと直接に関係ないテーマであるが、「今、ここに」という理念を成立する前提となる互いを尊重するような対等性を阻む要素になるのではないか。

３．おわりに
～経験を得て、経験を積むこと.

対人援助に携わる者として、自らの経験を積み、経験を磨き、経験を活かすことが求められることは避けられない。そうしないと、私たちの取り組みが行き詰まるからである。もしくは、本人が行き詰まらなくても、周りが行き詰まる。そのために、学び、訓練するような研修が続けられる。

もちろん、その研修は、ただ義務として受けるばかりではなく、どこかしら私たちにとっての楽しみとして参加するものとなったりする。

この意味で、私たちはそれぞれの過去の経験は尊重されるべきものであるし、経験があること自体、否定もできないものでもある。

そのような中で、「今、ここに」という理念は、私たちが得た経験を問い直すものであるといえる。

時には、「「今、ここに」という理念を大切にすることとは、こういうものだ。」という経験となって、「今、ここに」という理念と矛盾を起こし、対立する。　「今、ここに」という理念には、その過去の経験を絶対化したり、日々起こる出来事は過去の繰り返しではないという強い思いがあってのこともあるだろう。

だが、現実には、経験を積めば積むほど、私たちは経験に束縛もされ、新鮮で新しい経験を積むことが難しくなる。私たちの脳は、認知機能障害や記憶障害が生じなければ、毎日起こることを毎日、それが全く新しい体験として受け止め感動するように

はできていないからである。

それでもなお、「今、ここに」という理念にこだわり続けるのは、どういう意味があるのだろうか。

この問いかけの答えの一つが、冒頭のホッファーの言葉にあるように思う。

もちろん、これはすべてにそうであるということではなくて、少なくとも「今、ここに」という理念を大切にする研修に参加し、筆者にとっての経験を積むことの意味であるといえる。

言葉のレトリックとして、「初心に帰る」という表現に言いかえることができるかもしれない。

「今、ここに」という理念を見つめることで、自分自身の対人援助の感性が硬直化しないように、枯渇しないようにしているといえる。

＊ここで引用した研修参加者の発言は、論旨のためにいくつかの出来事で発言されたものを再構成して発言の主旨を伝えるために筆者が別の言葉に置き換えたものです。

「あ！萌え」の構造

（番外編　その２）

- 宇宙戦争とゴジラを巡って－

総合心理学部　齋藤清二

前回は「番外編」として、最新のヒット映画である「君の膵臓を食べたい」について書いた。このようなヒット作品は、多くの人のこころを捉えたという事実から生じたものであるから、広い意味での「魅惑する/される」という現象である「萌え」と何らかの関連を有しているだろうという、いささか強引な理由が、番外編で取り上げた理由であった。今回は、このような考えを拡張して、日本において、非常に長い間、多くの人々の心を取られてきたと思われる映画作品シリーズについて論じてみたい。近年の概念である「萌え」とは必ずしも直接関係がないという点から、今回も「番外編」とする。実はこの論考はかなり以前の考えを反映したもので、すでにその一部を公開したこともあるものを編集しなおしたものであることをお詫びしておく。

１．侵入する圧倒的なもの

だいぶ以前のことになるが、スピルバーグの「宇宙戦争」の DVD を家族で一緒に見る機会があった。もちろん、この作品は、有名な H.G.ウェルズの原作によるもので、オーソン・ウェルズがラジオドラマ化して放送したところ、本当に火星人が攻めてきたと勘違いした視聴者がパニックに陥って大騒ぎになった、などという歴史的エピソードでも有名である。原作では舞台はイギリスだったはずで、確かロンドン郊外で、火星人（正確には火星人の乗り物：トライポッド）と、英国軍が戦闘して、あっというまに粉砕されたというようなシーンを記憶している。今回のスピルバーグ作品では、舞台を米国に移し、原作には登場しない家族を登場させ、父と息子の葛藤、父と娘の愛といった、思いきり西欧的家族ドラマとして作品を描いている。ミクロの、まさに虫の視点から、このデザースターを描くという構成はある程度成功しているように思われる。

最初の方で、父と娘が二人で会話しているシーンがあり、手にとげを刺してしまった娘に、父が「膿んでしまうぞ、抜いてあげよう」と言うと、娘は、「抜かなくていいわ。からだが自然にとげを押し出すから」と言う。このやりとりは、もちろん本編の内容とは直接関係のないエピソードなのであるが（このとげが後のストーリーの中で再び問題になることはない）、このやりとりは、メタファーレベルでの伏線になっていることは明らかである。

つまり、火星人は外界から日常世界に突き刺さったとげであり、それを無理に抜く（軍隊などが闘って火星人を排除しようとする）のは無益であり、自然（身体）にまかせれば、とげを自然に押し出す（火星人は自然の力＝ウイルスによって、押し出されてしまう）、ということを暗示している。しかし、このエピソードの用い方は、いかにもアレゴリー（寓話）的で、メタファーとしては、それほどスマートであるとは言えない。H.G.ウェルズの原作でも、火星人は全く歯が立たないほど強く、人為的な努力ではどうしようもないが、結局は自然の力によって自滅する、というストーリーが強調されている。そこには、運命に対する諦観と、人為（科学）の過信に対する警鐘が込められている。

２．破壊と再生の象徴としてのゴジラ

異界からの圧倒的な力を持つ侵入者に対して、人間がどのようにして折り合いをつけるのかというテーマは、この手のドラマとしてとしては、一つの普遍的な主題であると思われる。日本で圧倒的な人気を誇った映画「ゴジラ」シリーズは、このような、破壊的で巨大な侵入者の代表として、考察に値するのではないかと私は考えている。以下に、ゴジラのストーリーの変遷を材料に、考察を進めてみたい。ただし、私はゴジラの最新作であり、つい最近

大きな話題になった「シン・ゴジラ」は見ていないので、最近のゴジラシリーズについて考える根拠をもっていない。少し古いシリーズを題材とした論考となることをお許し願いたい。

ユングの晩年の著作,『人間と象徴』には，ゴジラ（初回作 1954 年）の映像が、抑圧された無意識の破壊的な攻撃性を象徴するイメージの例として載せられている（ユングはゴジラを見ていたのだ！）。ゴジラはとてつもなく恐ろしい存在であると同時に，私達を魅惑する側面を持っている。この破壊的な攻撃性は，世界を破壊し，再生へと導くシヴァ神にも比べられるような，生命力そのものの（リビドー）の象徴として理解されるのが適切であると思われる。日本におけるゴジラ作品の流れは，ゴジラによって象徴される「生命力」を、如何にして全体性の中に定位，調和させるかという試みのくりかえしとして理解可能であると思われる。

３．日本におけるゴジラシリーズの変遷

初回作の「ゴジラ」は、1954 年の作品であるが、今、ビデオで見ても圧倒的な印象のある作品である。私は３歳だったので、その初演を見たはずはないのだが、親から、「映画館から泣いて帰ってきた」という話を何度か聞かされ、そう信じていた。しかし、おそらくこれは、第２作の「ゴジラの逆襲」ではなかったかと思う。ゴジラは海から現れ、東京を破壊し尽くし、自衛隊による攻撃は全く無効で（このへんは『宇宙戦争』に似ている）最後はオキシジェンデストロイアという超物質によって、破壊され白骨となって海に戻っていく。この海から来て海へ戻るというのが、ゴジラシリーズの基本パターンである。

ところが第２作以降では、早くもゴジラと闘うライバルが出現する。初代はアンギラスだが、あえなくゴジラによって蹴散らされる。最後にゴジラは氷山の下に埋められる（凍結されたわけだ）。ここでは破壊的な生命力を同化することはできず、再度凍結状態に戻したわけで、いずれまた復活することが運命づけられていると感じられる。その後、キングコングやモスラなどが、ライバルとして導入され、悪役のゴジラと正義の怪獣の戦いが続くが、ゴジラは海に撃退されるだけで、退治されることはない。

次に導入されたのが，永遠に戦うライバルとしての，キングギドラである。ここから、ゴジラの位置づけが変わる。キングギドラという、三つの頭を持つ有翼の龍が、より強力な破壊者として登場することによって、ゴジラは人間の側にたつものとして、意識に取り込まれる。同時に、ゴジラシリーズはどんどんその原始的な魅力を失っていく。要するにおちゃらけていくのだ。同時にゴジラ映画シリーズの観客動員力も低下し、昭和のゴジラシリーズはいったん終結を向かえる。

平成新ゴジラシリーズでは、再び、

凶悪な破壊者としてのゴジラを復活させるが、すぐにまた、キングギドラやモスラをライバルとして再登場させる。モスラとバトラは羽根を持つ巨大な蛾とその影。なんと宇宙にまで飛んでいく力を持つ。ビオランテは、バラと女性とゴジラ細胞の複合体。バラの花と触手を持ち，巨大な口を持つ。明らかに全体性の象徴と思われる。しかし、彼らも、ゴジラを全体性の中に調和させることには完全には成功しない。さらに、メカゴジラ，スペースゴジラ，デストロイアなどが登場するが、これらはゴジラのクローンであるから、次第にライバルがゴジラと同質化してきており、自分自身との闘争という形に変化していく。

イメージ的には、ゴジラは羽根を持たない龍であるが，第２期の平成ゴジラシリーズのライバル達はビオランテを除いて全て羽根を持っている。ビオランテも光の粉となって空中を飛ぶことができる。したがって，ゴジラとこれらのライバル達は，永遠に戦う二匹の怪獣，羽根のある龍と羽根のない蛇，羽根のある鳥と魚，二匹の魚，犬と狼，レバイアタンとベヘモットなどと同じ，深層心理レベルにおける元型的な二項対立の葛藤を表していると考えることが可能である。

日本のゴジラシリーズにおいては、ゴジラを含めてこれらの怪獣の全ては、決して単なる人間の敵ではない。米国のハリウッド版ゴジラにおけるゴジラが、人間の知恵と武力によって退治されるべき、単なる敵としてしか扱われていないのとは対称的である。おそらく、日本人の集合的心性は、ゴジラや怪獣が自分とは無関係の排除すべき敵であるとは感じていない。それらは圧倒的で、破壊的で、恐怖の対象ではあるが、自分自身と深いところでつながっている、切っても切り離せない存在なのである。できればそれを自分と調和するものとして取り込みたい。そのような強い欲求を我々日本人は抱いているように思われる。

４．「本能」と「反本能」の闘争

ゴジラ映画に表出されているような、根元的な二項対立的な闘争のイメージが、人間の心理の中に病的な状態として現れる時，それは「本能」と「反本能的な強迫的行動」の葛藤として現れることがあるように思われる。最も典型的な例が，若い女性に多く見られる心理的問題である摂食障害に見られる「拒食一過食一嘔吐」のサイクルである。過食は食という生物に必須の本能が，何らかの理由で不自然に抑圧されたあとで，まるでその不自然さに対抗するかのように生じてくる「本能的衝動」である。これを，意志の力でコントロールすることは極めて困難である。ところが，このような状況で，その人は、「食欲をコントロールして，やせよ，体重を減らせ」という無意識からの強迫的な要請を同時に受けている。そのために，患者は過食のあとに必ず嘔吐するはめになるのである。

この要求は，おそらく人間の個人のこころを越えた、集合的なレベルの欲求であり，「本能」に対抗する「反本能」とでもいうべきものであろう。これは，肉体を消滅させ，純粋精神へと存在を変容させようとする傾向であり，キリスト教神秘主義などにみられる傾向と関連があるのではないかと想像される。いずれにせよ，この「本能」と「反本能」の争いの状態は，ユング心理学でいうところの元型的状況であり，自我意識に対してはとてつもない苦しみを与えるが，同時に自我意識を魅惑する状況でもある。この状況から，対立するものの統合，第三のものの新生が生ずる可能性がある。しかし、あまりに強い葛藤状況に耐えきれずに破綻してしまう危険性，元型的状況に補足されてしまい，いつまでもこの葛藤が続くといった危険性も高いと思われる。

ゴジラシリーズが、圧倒的なエネルギー同士の永遠の戦いというテーマからの、脱却の道を示すことに成功していないように、このような戦いはおそらく完全に解消することはないのだと思われる。しかしそこからは、新しいものが生まれる可能性がある。自衛隊がこのような戦いにほとんど何も貢献することができないのと同じように、私達の自我意識がこのような根元的なドラマに関与できる部分は非常に少ないのではないかと思われる。私達はゴジラとキングギドラの戦いを、身をひそめながらじっと見守るしかないのだろう。

海の向こうにでて見れば

（9）ラジオ『TEL 人生相談』における知恵の伝授

石田 佳子

変なやつだと思われるかもしれませんが、私はこの数年間、ラジオの『TEL 人生相談』にハマっています。これは電話で持ち込まれる相談に答える一回 15 分程の番組で、相談者は匿名の老若男女、相談内容は人間関係の悩みから法律問題まで多岐に渡ります。（主観的には、相談者は 50-60 代の女性が、内容は家族の問題が多い印象です。）

これほど短い時間内に、声だけのやりとりで、相手の問題や状況を浮き彫にし、的確な答えを出すことの難しさは、言うまでもありません。相談を受ける側（回答者）は、心理学者の加藤諦三氏をはじめとする弁護士、精神科医、文筆家などで、どの回答者も職業上の経験だけではなく人生経験も長い（ベテランで高齢の）方々です。

しかし、中には「それはどうかな？」と首をひねるような回答もないではありません。回答者が相談者の気持ちを無視して自分の意見を押しつけたり、感情的になり過ぎるような場合は、その言葉が相談者の心に響かない上に、視聴者にも受け入れられません。そのような回答は単なる独り善がりであり、暴挙であるとさえ言えるでしょう。

一方、相談者にとっては耳の痛い指摘でも、それが問題の本質を捉えていて伝え方も適切である場合には、相談者の声が明るくなり、気持ちに変化が生じたことが伝わってきます。極端なことを言えば、高説や正論でなくてもその回答が相談者のニーズを満たしていれば、相談者のためになり、役に立つのです。

どのような回答が導き出されるかは、相談者とその相談内容、司会者の質問の仕方、回答者の専門や個性、相談者と回答者の相性など様々な要因によって千差万別です。具体的にイメージしていただくため、以下に私の印象に残った数例を示し、その後で心理療法（治療）と相談の違いと相談を受ける際に必要なことについて考えます。

人生相談の実例 《言葉のキツい夫とやり直すには、どうしたら良いか？》

相談者：既婚女性（35 歳）　夫（33 歳）と別居中。

「10 ヶ月前に見合いした男性と一月前に結婚したが､『すぐ妊娠しないのは子どものできない身体ではないか？』『それを隠して結婚した』『子どもができない女は要らない』などと言われ、ストレスで体調を崩した。『それでも稼いでこい』『一生働き続けろ』と言われたため、2 週間前から実家に帰っている。夫は口論のたびに『離婚だ』と言うが､『やり直しても良い』とも言う。私はできれば離婚したくないが、周りを傷つけているので別れるべきか？彼の性格を直すにはどうしたら良いか？」と感情を切り捨てたような早口で淀みなく話す。

回答者：弁護士（女性）

※（ ）…相談者の返事,【 】…司会者（女性医師）のコメント

彼の言葉が本音だとすると、結婚の意味を考えたことのない幼稚な人。彼が貴女を好きかわからないし、貴女が彼を好きな理由も伝わってこない。『無理をしてでも結婚生活を続けた方が偉い』と思い込んでいるが､『もう無理だ』とわかってもいるのでは？（自信なさそうに「彼が『仕事のストレスで暴言を吐く』と言っていたので､一緒に改善して行けたら…」と述べる。）人を変えることはできない。我慢できるか、できないか。はっきり言うと、貴女は結婚を間違った。いろんな事を考えて決めたのだろうが、一番肝心な点（どういう人か？）を間違った。貴女を愛していたら『子どもができないなら要らない』とは言えない。『一生働け（お前の面倒を見る気はない)』とも言っているが､男性の価値は「家族を守る」という使命感を口にする時。ほとんどの男性が持っている､その性質を持っていない点に警戒すべき。結婚は一人で努力して出来る物ではない。一人で頑張って努力した末に、苦しみながら離婚する人をたくさん見てきた。今すぐ間違いを正せば、傷は浅いと思う。【周りの人はどう言っている？（辛そうに「両親は『終わりにしろ』と､義母は『無理しなくて良い』と言っています」と答える。）実家だけでなく義母までそう言うとは、貴女以外のほとんどの人がダメだと思っている。こういう男性と一緒にいると､早死にする。それでも良ければ､修復を考えて？（泣きながら「はい」と答える。)】

人生相談の実例 《結婚後に芽生えた、実母への恨みと憎しみが、消えない。》

相談者：既婚女性（34 歳）

「夫（39 歳）娘（2 歳半）実母（65 歳）と同居している。反抗期がなく、独身時は父の借金を返すために苦労した。10 年前に父母が離婚し、父と絶縁した。結婚後、夫の両親と接するうちに『親とはこういうものか！』と気づき、実母を『殺してやりたい』と思うようになった。娘が生まれてからその恨みが抑えられなくなり、母に暴力をふるってしまう。自分を変えるには、どうしたら良いか？」と怨念の渦巻くような声で語気強く話す。

回答者：文筆家（男性）

※（ ）…相談者の返事,【 】…司会者（男性俳優）のコメント

一番苦しい時は終えている。優しい夫と巡りあって救われた反面、自分の人生を客観的に眺める余裕ができたので、娘の成長と共に「社会に通用しない自分」も見えて来つつある。その不安が母への憎しみと繋がっている。本当は、実父母にも社会に対する弱さ未熟さがあった。娘に当たることは？（「ある。」）その時、娘は祖母の所へ逃げる？（「はい。」）それを見て、どう感じる？（「不愉快さと嬉しい気持ち、半々。」）『娘は貴女の 2 歳半で、祖母はお母さん』と捉え直して見ると、もう一度やり直していることがわかる。祖母は孫を通して子育ての間違いをやり直している。貴女は子ども時代をやり直したい。 そこから許しの可能性が出て来る。そこに 3 人で住む意味がある。子ども時代の修復を、娘を通してやってみたら？【 許しの中に感謝は出てくる。前向きにね！（ 最初より明るい声で「わかりました」と述べる。）】

人生相談の実例 《不倫相手に操られ、のめり込んでいる娘が、心配でならない。》

相談者：既婚女性（60 歳）

「娘（28 歳,独身）が職場の上司（45 歳,既婚）と恋仲になり、反対したら家を出てしまった。元同僚の娘友人に相談し、『彼に妻子がいて離婚する気はないことを、娘も承知している。職場で彼から虐められていたが、突然優しくされて、夢中になった。行動を管理されたり、遊興費を払わされたりしている。友人が忠告しても聞き入れない』と聞いた。母が別の上司に頼みこみ、娘を説得してもらったところ、娘は別れる気になったが、彼が『バレても別れる必要はない』と開き直り、結局言いくるめられてしまった。夫（62 歳）は『大人だから放っておけ』と言うが、私は娘が心配で堪らない。元は素直で純情な娘だったが、洗脳されたように変わってしまい、皆驚いている。週末にバイトしてまで彼に金品を貢いでいる。もはや会社を辞めさせても別れないかもしれないため、親としてはどうするべきか、わからなくなり困っている」と話す。

回答者：精神科医（男性）

※（ ）…相談者の返事,【 】…司会者（女性医師）のコメント

娘さんはアメとムチで操られ、精神的に支配されてがんじがらめになっている。通常の説得では、自力では、抜け出せない。親が先方の家に乗り込んで、別れさせるしかない。（「彼の奥さんから慰謝料を請求されないか？」）慰謝料といっても 100～200 万位の端金。娘さんの未来には代えられない。親が負担すれば良い。支配/被支配の関係を解体しないと見える物も見えてこない。妻子に知られれば、おそらく彼は娘さんを捨てるから、娘さんは大金を請求された上にボロボロになって家に帰って来るだろう。それでもまだ、やり直せる。このまま引き摺られて、人生を破壊されるよりは良い。とにかく、両親そろって向こうの家に

乗り込みなさい。(「主人はおとなしい人なので、上手く言えるかどうか？」) それなら弁護士に頼んで、一緒に行ってもらったら？ (「その時、娘が『関係ない』と誤魔化そうとしたら？」) そのために、写真だとか証拠を集めておいて？ (「わかりました。」)【娘さんの一生に関わる問題なので、行動してください。 (「わかりました。」)】

心理療法（治療）と相談の違い

見てきたように、人生相談には、回答者の個性や価値観、人生観や人間性が如実に現れます。一方それとは対照的に、医療機関などで行われる心理療法（カウンセリング、セラピィと同義）では、その逆の態度を示す治療者が多いと思います。心理療法家（カウンセラー、セラピストと同義）は、その修行時代に「主役はあくまでクライエントであり、彼らが自ら意思決定できるように支えるのが我々の仕事である」「そのためには極力、中立性を保つべきである」との原則を叩き込まれるため、自分の意見や感情をさらけ出さないよう努めがちだからです。

私の場合（現役時代はカウンセラーを生業としていました。）医療機関で「治療する」際には、協働している精神科医が評価や指示をする役割を担ってくれたので、「中立性を保つ」ことが可能でした。しかし、大学の学生相談室で「相談を受ける」ようになると、そうも行かず、「治療する」行為との違いを痛感しました。相談に訪れる学生たちは、話を聴いてもらう（ことによって気持ちを整理する）ことから、人間関係や生き方（学業，進路）の悩み、治療的、教育的、支持的な関わりまで、実に幅広く多様なニーズを抱えています。また人格形成の途上にあるため、親とは異なる大人との関わりを切望している者も少なくありません。「どうするべきか、具体的なアドバイスが欲しい」「一般論でなく、個人的な意見が知りたい」と求められる場合もあり、私は必要に応じて自身の意見や経験、経歴なども伝えることにしました。

その時考えたのは、「中立性を守るという建前の裏に、迂闊な事を言って責任を取らされたり依存されては困るという保身のズルさもあるのではないか？」「援助職としては、(瑕疵の少ないカウンセラーでいたいという) 自分の欲求より、相手の役に立つことを優先すべきだろう」ということです。また、その時私の役に立ったのは、難解な精神分析の理論よりも一般的な常識や実践的な世間知であり、「若い頃に言ってもらって助かった助言」や「多くの失敗を通して学んだ身の処し方」「年を重ねて少しわかった人生の意味」といった個人的な経験でした。

言うまでもなく、成長促進のために行う教育機関の学生相談と、問題解決のために行う一回限りの人生相談は、目的も方法も違います。しかし、一見簡単そうに思われる「相談を受

ける」という行為に、狭い専門分野の知識やノウハウやルールだけでは歯が立たない難しさがあることは、共通していると思います。

知識を超えた 知恵の獲得と伝授

とりわけ、生き方に関するような（必ずしも正解があるとは限らない）相談を受けるためには、限定的な専門知識だけでなく、より広範囲で人間的な経験や物の見方ー“ものさし”ーが必要です。具体的には、相手の話を聴いて、個としての強みや弱み、起きている問題、取り巻く状況などを理解し、社会の枠組みや人生という長い時間軸に照らし合わせて、現在とり得る最良の方策を見い出して行く…そして（個人的、職業的な）経験やそれよって培われた価値観、人生観などー生き方の知恵ーを伝えて行く…非常に複合的で、創造的な営みであると言えるでしょう。

そう遠くない将来、人間の仕事の少なくない分野が、人工知能(AI）にとって代わられるかもしれないと言われています。対人援助職においても、これからは単なる専門的な知識（心理療法のノウハウや症状に基づいた診断方法といった、データの出入や管理などによって代行できそうな部分）だけではなく、それらを超えた複合的な知恵を学びとり伝授して行くことが、求められるのではないでしょうか。

清武システムズ

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

～シーズン２「清シス・アピール」～

エピソード ４：失敗もメニューです

「働きながらともに仕組み創り」

しすてむ❤きよたけ

はじめに

「清武シス・アピール」と題しているも、何が「アピール」になっているのだろうか？と疑問に思う。前回、「解雇」にまつわる出来事と書いたよう、書いたら、仕事が舞い込みにくくなるのではないだろうか？という内容と書きっぷりをしていた（と思う）。

「アピール」と言えば、何らかプラスに働きかける印象があるのかもしれないので、ネガテヴなことはそれとは言い難い。

例えば、「現状 A です。でも、B を目指しているが、なかなか上手くいかない。」場合。それに対し、「C である僕が働きかけると、B にすることができます！」と「ア＋C＝B」と容易に「利点」を伝えるとしよう。この例は、先に述べた「アピール」のとして、成立つ気がする。

しかし、僕の「アピール」は、「訴え」のようなメッセージになっていた。これも、「アピール」の一つである。

しかし、「清武シス・アピール」は、「訴え」をしたいわけではない。そのできごとが、どのような社会の中で起きているのかをよく考え、自分の実践に向かいたいと思っている（これらすべてが、僕の実践なのだろう）。ともすれば、清武システムズの商売メニューには、当然のように「失敗」もメニューの一つ。

人にとって、「失敗」は、当たり前に起きる。一様ではない人間が集まる社会だからだ。むしろ、全て意気投合する人なんていない。それを分かっていないと、きっと人は、自他共に問題だらけの人間として社会に存在することになるのだろう。だからこそ、「失敗」もメニューに入れて置いたほうが、自由でいられるような気がする。

だからこそ、清武システムズは、「失敗」もメニューに入れておきたいと思っている。社会とここでの暮らしに働き掛けるシステムとして、譲らずにしておきたい一部だ。

しかし、これまで綴ってきた内容から、「清武システムズ」とは何か、イマイチわからないと思う。正直なところ、僕にもわからない。ただ、世の中には、わかりにく

いことが存在していたっていいと思っている。分かりやすさを求め、引き寄せられ易い時代だからこそ、分かりにくさも供えて置いたっていいと思う。偏りに問いをもっていると言えばいいのだろうか？そもそも、社会は、どちらか一方だけ、というような状況はないのだ。わかりにくいことがなければ、わかりやすいことはないともない。

言えることは、先に書いた単純な数式で表せるものではない、ということだ。僕が、常に気に掛けていることは、自分と相手。相手とその人たちが演じている職場がどのような社会の元で動いているのか、動いていないのか、動かなくなったのかを考えている。それにより、もう一度、今、ここで僕ができることはなにか、相手とできることは何かを探し動きはじめている。

演劇でいえば、まずはその場の役者として華麗に演じられるようにするにはどうしたらいいだろうか。観客もそれとして楽しめるにはどうしたらいいだろうか。そういうことを考えている。

その意味で僕は、観客であり、役者でもある。二重の役割に徹しようとしている。二重であることは、違和感であり、時に同化しているように見えるのだろう。きっと、演者の役割は一つであり、そこから役割とはちがう側面も見えるのが、一般的だからではないだろうか？だから、「アピール」も多様になってくる。

とはいえ、意味不明な仕事だ。今回のエピソードは、なにをしているとは綴ってまいないだ、そのヒント、むしろ自分と社会的の経過を自分のためにも残してみたいと思う。

1.『どのようにして仕事が舞い込んでいるのか』2.『交渉』3.『僕が大切にしていること』の３つについて綴ってみようと思う。読んで思うだろう…そんなのあり！？と。

1. どのようにして仕事が舞い込んでいるの？

ひと項目設けることでもない。「口コミ」と「タイミング」の２つ。これで仕事が舞い込んでいる。

「口コミ」パターン。

新しいことをはじめるにあたり、①これから始める分野に染ってない人を探している、②いろいろな視点をもっている人に来てもだいたいと思っている、③面倒見良い人を探している、④現状をなんとかしてほしい、⑤人を混ぜて欲しい。だいたい、こんな感じ。

清武システムズは、「何か変化をお求めでしたら、居させてください」ざっくりと提示しているので、相手の要望は様々であるのは必然。でも、なぜ僕に声をかける？ここに関しては、答えがみつからない。というのも、僕がなにかをする、できるではなく、「この人面白い」「興味深い」と僕に感心をもってくれる人が多く、僕はそれが不思議でしょうがない。明確な提示が当たり前になってきている時代だからこそ、興味が湧く。

僕には、一貫していることがある。常に

フラフラすることを得意とし、熱心にフラついていること。

過去を辿れば、高校の成績はぐだぐだ。多くは、推薦で入試だが、僕だけ成績と出席日数が悪るく、容易に行ける大学はなし。友だちが手にしたパンフレットの開いたページの大学に AO 入試で入学。高校も受かるわけがないと、面倒見てくれることなく、毎晩オヤジと晩飯を食いながら、社会について語る。それで、合格。せっかく入学できたのに、大学もまともに授業に出ず、卒業。そのあとは、ほぼヒモ状態でフリーターでアルバイト生活。大学の授業が教科書のままの説明で面白くなかったから、大学院に行ってみようともっていってみたものの国語力はないは、作法はないはで苦戦。面白いテーマだけ握り締めて、悔しさ残したまま。今は、居ても良いって言ってもらえるなら、まずは居す！

大体、この簡単なストーリーを知っている人やその人の知人から声が掛かり、仕事に。

使ってもらい、最近もらったありがたい声としては「話していると次にすることが見えてきそう。見えてくる。」ということだった。

ただ、「失敗」もメニューなので、僕はくじける。相手も挫けることがある。そこには一つパターンがある。僕、違う意見だろうと思っても、はっきり言う時があるので、「たまにしか居ない」くせに、「しんざ者」が勝手にいいやがってと言った具合だ。でも、「古株」だから言えなかったんじゃないの？と思うと、起きて当然だと思うし、そこからどう動くかが、僕にとっては重要で自問自答をする。「失敗」から見えることは、固定している状況がひそんでいると思うのだ。そして、そこに異物が入ったら当然動き出すことがあるので、つらいところであるが、自問自答を面白がっている。

すくなくとも、僕はこれまでの経過に敬意をはらった上で次ぎへのステップに。そこのはじまりにエールを送ろうとしているには違いない。ただ、自分との血の気が、時に状況を悪るくする。その場合に染まっていると思い熱心になっている時は、割と、相手かみた僕は、よそ者のようだ。

次に「タイミング」。上記をまとめたようになるが、「予想外のことが起きることを望んでいる時」「現場をなんとかしたい時」。大きく、この２つによって声がかかっているような気がする。

いまの世の中、お金を払うのだから、明確な結果を求める人たちは多い。僕の「失敗」現場は、そう言う因果関係を求める場所が多かった。だが、僕は、因果アプローチが苦手だ。相手には積み重ねがあること、また、相手の力を借りなければ変化は起きない。言わば、僕は、相手の力を借りる為に居るのである。僕だけの力で変えられるなら、僕は神様レベルだろう。まだまだ、神のしもべであり、永遠にそうだ。だから、身近に居る人の力がとても重要になってくる。

だからこそ、何が起きるのかわからない。そこには、うまくいかないとことだってあ

る。だけど、それが当然であり、失敗があると言うのも、そこからはじまることがあるので、変化の一つだと思う。どうにかしたいのに、なにもしない。それが、何も始まらず、創造されない社会と個人の関係だとも言えるのではないだろうか。

2. 交渉

「清武システムズ」は、まだまだ青い。登録して２年目くらい（その前から勝手に言ってみていたけど)。食っていこうと思うから、どんな仕事でもするスタンス。ではない！少し前まで、食っていくためにはなんでもしようと思っていた。そういう、アドバイスをもらったこともある。

新規立ち上げにかかわる依頼の場合は、スタンスはお伝えするものの、多くは相手の要望を受け入れてきた。だが、僕の契約の仕方、いわゆる、社会のし組みと同化していた。スタートからの同化は、「失敗」になっていた。「とりあえず社員として」、「コンサルタントとして」などと言われるまま呑み込んでいた僕がいたのだ。また、それに応じようとしていたのかもしれない。やはり、食って行くためには、その選択も必要だと思っていたのだろう。

でも、これでは、「清武システムズとして情けない！」、「システムを扱うモノとして無礼者だ！」と思ったのだった。

以前、とある地域の施設のボランティア受け入れ担当者の学習会の講師依頼があった。その際、「謝礼」に関するやりとりをおこなった。僕は、「その講座は持続されていますか？」、「現場に活かされていますか？」と言う問い掛けをした。そうではなかったようで僕は、「お金、そんなに要らないので、現場に還元できるような回数の設定・予算組のしなおしは可能ですか？」と確認して、いったん依頼を寝かせてもらった。その後、依頼が来、僕はその場で現場にお持ち帰りで切るような企画内容、時間の使い方を思案して実施した。

事前に、その場に来る人たちの日常の業務、どのような広報の中で来る人たちなのかを確認し、集まった人たちの声があがるための題材をひねり出した。

幸いにも、「また同じメンバーでしたい」、「知りたいと思っていた内容ではなかったが、活動のヒントになった」とコメントをいただけた。ちょっと背中を押すファシリテート機能ある企画になったのではないかと思う。

ほかにも、僕は「初月の数日は、観察しかしません」、「観察しながら、自分ができる仕事をその場で考え動きます」そう言う交渉をしたことがある。はじまりは、「問題があるからなんとかしてほしい」だった。もちろん、それはそれとして気に掛けているのだが、僕の勝手な法則を伝達。マイナスにプラスを掛けても、答えはマイナスなので、このようなケースは、「問題と frat. するつもりはない」と伝えている。ただ、相手先がもつ問題にも理由がり、そこがプラスにしようとするが故に生まれている可能性もあるので、じっくりとゆっくりと眺

める。

発酵には、時間がかかるものだが、わずかに異変は起きる。「あの人のピアスってどうなってるんだろう？」「髪の毛テンパかな？」「今日は、どんな服を着てくるのかな？」と話題があがる。これらは、決して問題解決ではない。だが、これまでと違う会話状況が始まったのなら、変化の一つとして、ちょっとした成功に入れてもいいかもしれない。

いずれにせよ、僕が●●にします！と言う交渉や、「金額はこれじゃないとやりません！」なんてことはない。その場での自由度があることが重要なポイントになっている。それは、通常の社会システムと違う循環。新しい仕組みが生まれる可能性があると思うからだ。だから、僕はひとつの業界に特化しないよう、自分でも意識しておくことが重要になって来る。この負荷は、働き手の僕には苦戦であるが、現場に還元するためには必要不可欠だと思っている。

3. 僕が大切にしていること

昔から言っている「身近にいる人」。「血縁上？」と聞かれたことがあるが、そうではない。知り合いだろうが、知り合いじゃなかろうが関係無い。一定の空間において、自分と物理的距離で「身近」に居る人。

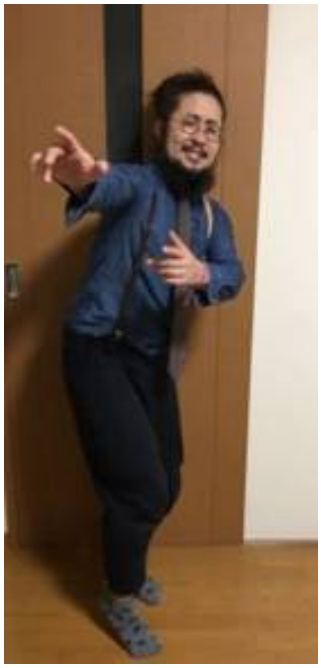
なぜだろうか。近い関係の人は、それはそれで大切な人なのだが、そうでなくても自分と関係ないと断絶できないと思っている。たぶん、相手とことばを交わさずとも視界に入ることも、ひとつのコミュニケーションとして認識しているのだと思う。何らかの影響を与え合っている、と僕の前提にあるのだろう。

もう一つ。先に「一定の空間」と記載した上で「視界に入る人」と記載した。言いかえれば、これは、自分がいる状況そのものを扱っている。

しかし、「身近な人」と言ってはいるものの、それは「個人」を示しているのではない。あらゆる場所に行きながら思うのだが、問題を個人的な課題として指摘する現場に合う。もちろん、僕がターゲットになることもしばしばある。だが、僕が大切にしていることからは、「社会の仕組み」あっての「個人」であるので（社会の仕組みなしでは、どのような個人なのか分かり兼ねる）、個人の能力を問わざるをえない視点は、横に置いている。

僕が大切にしていること。それは、社会の仕組みという舞台設定があってみえる、身近にいる人。その人が、めいっぱい演じられる状況を試行錯誤することだ。あとは、僕自身。特に、見た目でつっこまれることが、おおいので、「ふざけている！」と現場には居ないような身嗜みを心掛けることだ。

綴り人/しすてむ・きよたけ



通りすがりの旅人です。　清武システムズという看板を引っさげ、活動中。（他者協力により HP が肉付けされました♪）めんどくさいことも起きるけど、そっから面白く展開していこうじゃないか！

「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時にぜひ導入を！

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net

【これまでの綴り】

21 号から連載しています。シーズン 1 は、「SM クラブの受付」です。SM 嗜好の方や SM を学術的に研究されている方にはオススメできる内容ではございません。

S・V 羅針盤のない航海

川﨑　二三彦

【7】陥穽

死亡事例検証

京都府を退職し、子どもの虹情報研修センターで勤務を始めてまだ日も浅い頃のことだ。突然、ある県の児童福祉課から電話があった。

「当県で発生した児童虐待死亡事例について検証を行うことにしているが、初めてのことで戸惑うことも多く、この際、県外の方にも協力をお願いしようということになった。ついては委員になってもらえないか」

こんな内容だった。死亡事例と言われてすぐに浮かんだのは、退職直前に京都府内で発生したネグレクト死事件である。京都府にとっても初めての虐待死事件だったこと、全国的にも高い関心を集めたことなどが影響したのか、当該児童相談所職員ではない私もヒアリングを受けることになった。中央機能を持つ児童相談所の課長だったからだろうが、補足的に尋ねたいことがあるといって、ヒアリングには都合 2 回も応じたのであった。

それはさておき、この電話を皮切りに、以後、いくつかの自治体で検証委員や検証委員長を務めることになった。その際、悩ましいのが事例を担当された方へのヒアリングである。自治体によっては、事例担当者のヒアリングは避けてほしいと要望したり、上司の同席を条件とする場合もあるが、ヒアリングの最中、過去の出来事を思い出して涙ぐむ方もある。

だから、ヒアリングに際しては必ず、「あくまでも今後の改善策を検討することを目的としており、担当者を非難したり責任を追及するものではない」と付け加えている。とはいえ、担当された方が自責の念にとらわれたり、ましてや事例を忘れ去ることは決してあるまい。

私自身も、当時を振り返ってみて、ヒアリングの際のやりとりの一部は今でもよく覚えているし、公表された検証報告書は隅から隅まで目を通し、意見の異なる点は、些細なことでもこだわった。

なぜ今こんなことを書くのかというと、今号で取り扱う出来事についても、決して当事者を非難したり責任を云々するつもりはないこと、今後のケースワークに生かしたいと純粋に考えて認(したた)めていることを強調しておきたいからである。

相談体制変更の指示

これから述べることは、日誌を読み返すまで意識の中から抜け落ちていたのだが、目にした途端、まざまざと思い出した。

○月○日
公式の会議が終わってから、（京都府 3 児童相談所）3 人の相談判定課長（U 児相 S 課長、F 児相 K 課長と私）で、E 前福祉司に起こった出来事について少し話し合った。

○月○日
（本件につき）S 課長と 2 人で、U 児童相談所長室に入る。
「当初は業務に混乱を招かないことを第一に考えて対応してきましたが、おおよそ決着もつき、年度も替わって人事異動も終

えているので、あらためてきちんと総括し、今後に生かしていく必要があるのではないかと思っています」

所長にこう伝えた上で、今後の対応について、さらに検討することとした。

ここで話題としているのは、私が U 児童相談所の相談係長の時代、同じ U 児相の児童福祉司であった E さんに起きたことである。つまり相談係長の私にとって、係員である児童福祉司（ただし、職階では 2 人とも係長級で、同等の立場）の身に起こった出来事ということになる。

一体どんなことだったのか。

それは後述するとして、本件は、児童相談所のなかでもごく一部の人しか知らず、当初は係長の私に対しても伏せられていた。夏頃だったと思うが、課長が私を別室に呼び出して、こんなことを言う。

「E 福祉司が、『今は、面接室で来談者と向かい合って相談することがつらく、しばらく相談業務から外してほしい』と要望してきた。ついては、急なことだが地区割りを含む相談体制の変更について、至急検討してもらいたい」

「例の件があってのことですよね」

課長が指示してきた背景を、私はすでに知っていたのでこう返事すると、課長も「それなら事実を話すが……」と述べ、隠すつもりだった事情を説明する。

体制の変更は不可避だったが、年度途中のことでもあり、もっとも簡単に解決できる唯一の方法、すなわち、私が彼の担当地域を引き継ぐことにした。

E福祉司について

どんな出来事かを説明する前に、まずは E さんがどのような福祉司だったのかを記しておきたい。彼は直接処遇職員として利用者と生活をともにする現場経験が長く、おそらくは粘り強く、そしてとことん彼らと付き合ってきたのであろう、児童福祉司となってからも、一つの相談に深く入り込んで解決しようとするタイプであった。

“そこまで親身になれないな”

児童福祉司経験が私より長い彼のケースワークを見る度､私はいつもそう感じたものだ。

だからかもしれないが、年度初めに新しく担当地区を決める際には、どの地域にも担当者泣かせのケースがあって担当替えを希望する者も珍しくない中、彼だけは担当地域の変更を望まなかった。事実、児童福祉司となって以後、一貫して同じ地域を担当し、地域からの信頼も得ていた。昨今、児童福祉施設や市町村から児童相談所に対する苦情としてよく言われることの一つに、「すぐに担当者が変わる」というものがあるが、それを考えると、彼は貴な存在だったとも言えよう。

ただし、そんな彼にも課題がなかったわけではない。私が彼の地域を引き継いでしばらくしてのことだ。子どもの相談で母親がやってきた。

「しばらく前のことですが、E 先生に大変お世話になったんです。すごくいい助言をもらって、本当に助かりました。それで、今回もう一度相談させてもらいたくて寄せてもらったんです」

こんなことを言うので過去の相談履歴を検索してみたのだが、いくら探しても当該児童の名前が見当たらない。E さんに聞いてみると、相談については覚えていたものの、1 回切りの軽微な相談だったこともあって記録も残さず、受理会議にも出されていないのであった。もちろん、すべからくそうだというのではない。当時の記録は、今と違ってすべて手書きだったが、彼から地域を引き継ぎ、受け取った児童記録票は、特徴のある文字で概ねきちんと記載されていた。特に、思い入れの強いケースなどは詳細な記録となっていた。ただし、相談に没頭するあまり、多忙さ

も手伝って、一部で記録が滞ってしまったものと思われる。

続く協議

○月○日
　午後はE氏の件で、総括文書を作成する。夜、彼に電話した。
「これは一人Eさんだけの問題ではない。できればこの件から教訓を引き出して、今後に生かしたいと思うものの、そうするとEさん個人のことが話題になることは避けられない。どうすべきか思案中だが、それも含めて伝えたくて……」
　一度会って話すことにした。

「みんなに教訓を生かしてほしいと一方では思うけれど、他方では一応全て決着したのだから、そっとしてほしいとの思いもある」

彼も私もすでに U 児童相談所から転勤していたのだが、「教訓としてほしい」というのは建前で、「もう触れてほしくない」というのが彼の本音だったことは明らかだ。E さんの苦しい胸の内を聞き、私もつらくなった。

だが、相談援助活動においては類似の事件が起きないとも限らず、それを未然に防ぐためには、最低限、同じ立場の者で情報を共有し、各自が“我がこと”とする必要があるのではないか。その唯一の場となるのは、児童福祉司全員が集まる「京都府児童福祉司会議」をおいてほかにない。では誰が本件を報告するのかと言えば、当時、U 児童相談所で児童福祉司兼務の相談係長を務めていた私が、やはり適任だった。

しかし、本当にこの件を報告してよいのか。E さん自身は、苦渋の決断として本件を取り上げることを了解してくれたのだが、日誌には随所にためらいが登場する。

○月○日
　終日 3 児相課長会議。ぎりぎりまで本件に関するレジメを作り、会議前に U 児相所長に見せた。
「この資料、課長レベルまでは全て公開してもらってよい。ただし課長止まりにしてほしい」
　所長の意見をふまえながら、課長 3 人で議論した。各児童相談所とも今後に生かすべき内容があるという点では一致した。ただし、この問題を児童福祉司全員を対象とした会議で説明した場合、報告する側の意図とは別に、どう受け止められるかがわからないという不安が持ち上がった。
「福祉司を信じるしかない」
「でも、他人事で済まされたら意味がない」
　さまざまな意見が交わされた。また、次のことも議論になった。
「いかに教訓として生かすべきことがあるとはいえ、“そっとしてほしい”という彼の気持ちに反してまで取り上げていいのか」
「もう少し考えてみよう」
　結局この場では決着がつかず、何が問題で何を教訓とすべきか、それをどのように進めるべきか、もう 1 度話し合うことになった。

職場の状況

日誌に「各児童相談所とも今後に生かすべき内容があるという点では一致した」と書いているように、K 児童相談所に赴任して数か月、課長になったばかりの私は、本連載で縷々述べてきたように、職場の現状、特に児童福祉司の活動にさまざまな課題があると感じ、いささか焦ってもいた。そのいくつかを拾っておこう。

○月○日
　午前中、用件があって（某）知的障害児施設に出向き、担当課長と面談した。すると彼、「U 児相に比べて（私が勤務する）K 児相にはあまりいい印象がない」という。理由を尋ねると、次のような返事が返って

きた。

「先だっても、K 児童相談所から依頼のあった短期入所予定のケースが、間違えて１日早くやって来た。こちらも段取りがあるので、その時は一旦引き取ってもらった。幸い親御さんも特に苦情を言うこともなく出直してくれたけれど、こういうことが、以前も時々あった。電話、電話でことを済ませようとする姿勢が感じられていい印象がないんです」

電話で済ませる傾向は、おそらくこの施設への対応に限ったことではないだろう。保護者との関係でも、“ここは電話ではなくて面接”と思っているようなところで省略されていることがいくらでもある。

私自身も、児童福祉司をしていた頃、本来ならば面接したいのになかなか時間がとれず、やむなく電話で用件を済ませることがなかったわけではない。そんなときは自嘲気味に、「テレフォンワーカーだからな」などと仲間内でぼやくこともあった。ただし、ここ K 児童相談所ではその度合いが多過ぎると感じて日誌に記録したのであろう。こんなこともあった。

○月○日

確かに複雑なケースだ。母子密着で不登校、父とは別居中だが監護権者は父。紆余曲折を経て一旦施設入所したが、母が強制引き取りして現在在宅。ただし、引き取った当の母が困ってしまい、再び施設入所を希望してきたため、児童福祉司は、ある施設に打診した。しばらくして「検討の結果、困難」という返事が施設から届いたところで、担当福祉司とミーティング。

「先日、母から入所の可否について問い合わせの電話が入った。ただし自分は不在だったので、まだ返答はしていない」

福祉司の説明を聞いて、私は次のように尋ねた。

「入所困難と聞いたら、お母さんはどう思うやろか」

「母も困っているからなあ」

「だったら、『だめだった』という結論をただ伝えるのでは、お母さんもがっかりするだけだろうから、電話で結果を応えるよりも、直接会って今後のことも話し合ってはどうやろ」

などと協議しているところへ、当の母から再度の電話が入った。

「ともかく、来てもらうように話してみる」

福祉司は、こう告げてミーティングを切り上げ、電話口に出たのはいいとして、傍で福祉司と母のやりとりを聞いているうちに、私の眉がつり上がっていく。児童福祉司は、持っている情報を小出しにしながら、結局全部を伝えているのだ。そして、最後に来所を案内したものの、断られてしまう。

「結局電話で話したんや」

言いにくそうに説明する。これが決定的なマイナスとは思わないけれど、ケースワーク上の失敗はこのようにして徐々に準備されていくのではあるまいか。

ただし、今考えると、私が考えた手法は福祉司のプランになかったのであり、仮にも面接が必要だと思ったのであれば、福祉司が納得するよう丁寧に説明し、それを実現するための具体的な手立てについてきちんと話し合うべきだったろう。つまり、結果について嘆くのではなく、自らの説得力不足を反省すべきなのである。それはさておき、他にも私自身の勇み足となるようなことがあった。

某市の障害担当者から、あるケースのことで A 福祉司宛てに電話があった。彼が不在で私が対応したが、聞いていくと、住居が A 福祉司の担当区域ではない。そこで、念のために担当福祉司について確認したところ、相手から叱られてしまった。

本ケースは 3 月頃、A 福祉司の担当区域から管内の別の地に転居しており、区域外ではあるが、人事異動後も A 福祉司が引き続き担当していたのである。

我ながら、これはひどい。児童相談所が援助している事例の担当者について、進行管理が行き届いていないことはもちろん、それを課長が他機関に尋ねるなどもってのほかというほかない。疑心暗鬼が募っていたのかもしれないが､課員を信じることができなくなて、何の課長だと言えよう。

次のような逡巡もあった｡情けない話だが、恥を忍んで書いてみる。

○月○日
午後は所内で事務整理。B 福祉司の児童記録票の決裁をしていて、ついに「来所者と来所日時を記入してください」と付箋紙に書いたメモを当該ページに貼り付けた。一体どうなることやら……。

考えてみると、赴任して以来この時まで、児童記録票の不備に関して、未だ正面切って当人に指摘したことはなかったのではあるまいか。いきなりのメモを見て本人がどう反応するのか、不安を感じつつも、やはり記録のことは改善してもらわなければならないと強く思ったのであろう。業を煮やしたと言えるかもしれない。だが、日誌を読み進めて、たまげた。

○月○日
朝一番に、次長席に回した B 福祉司の児童記録票から 件(くだん) のメモを抜き取った。「記録をきちんと書いてくれ」と、いきなりメモで伝えるのは、ショックが大きすぎるだろうと思い返したためだ。

私からすればごく当然且つささやかな要望だが、例の祇園祭宵山の日から数えてまだ 1 か月も経っておらず、あの日の援助方針会議のことが脳裏を横切ったのかもしれない。また、私から見れば杜撰で、はっきり言えばお粗末過ぎるケース記録であっても、長くそのようなスタイルを続けてきて特に疑問も持っていないとしたら、一片のメモでそんなに簡単に改められるわけもない。一度手抜きをして楽することを覚えてしまったら、それを改めるためには余程の自覚と苦痛に耐える決意が必要だ。今思えば、「こんなことも伝えられずに悩むのか」とあきれるばかりだが、当時は、そんな簡単なことではなかったのかも知れない。日誌には、それがストレスになっている証拠も記載されていた。

○月○日
夢を見た。転出ケースのために相手先の児童相談所にケース記録の写しを送らねばならないのに、我が児童相談所ではその記録がきちんと書けていないのである。右往左往するのだが、いい解決方法がないという夢。

夢にまで出てくるとは聞き捨てならない。いずれにせよ、こうしたもろもろの状況があったので、E 前福祉司に起こった出来事から学ぶ必要があるという気持ちは、私自身の中で、より強くなっていたものと思われる。

相談から始まった

○月○日
3 課長会議。E さんの問題をどうするか、結論として今回の児童福祉司会議で扱うことに決め、U 児童相談所長の了解を取り付けた。オープン化は彼を追いつめ、さらに傷を深くする可能性があり、閉ざすことは教訓を生かさず闇に隠すことになる。苦しい選択である。

さて、E さんの身に起こった出来事について、経過を述べることにしよう。概ね次ぎのようになる。

小学生の子どもの相談だった。「カッとすると暴力的になり、嘘もつく」といった相談だ。E 福祉司の担当区域であり、母親が来所して相談が始まった｡受理会議にも提出され、当該児童の心理診断を行うこととして母子が来所し、その結果を母に説明して関わり方を

助言した。また、母の了解を得て児童が通う学校にも結果を伝え、対応についての配慮をお願いした。ここまでの取り組みで、相談は終結することとなった。

その後のことである。あまり時間を置かず、母から再び「相談したいことがある」との申し出があった。E さんは何らの疑問も持たず来所を案内したのだが、いざ面接してみると、相談は児童本人のことではなく、「夫婦関係がうまくいかず、夜の生活も……」といった内容だったという。

子どもや家庭の相談となると、往々にしてプライバシーに関わることに踏み込まねばならず、相談に来た側が、子どもの相談に関わって夫婦の問題を話すことも、しばしば見られることだろう。受ける側も、夫婦関係が子どもの養育に大きな影響を与えることは承知しているから、とりあえずは話を聞こうとする。

「私も家庭の問題を抱えて苦労している。相手を信頼して頑張ってほしい」

悩みを聞いて助言し、相談は終わった。我が国初の児童福祉司スーパーバイザーとも言える板橋登美は、いみじくも「ケースワークって、パーソナリティで行なう、これ、私の信念なんです」と述べているが[*1]、援助者個人の人格等が相談に影響を与えることは否めず、時として、援助者が自身の個人的経験も話しながら相手の理解を促すことはよく見られることだ。

それはさておき、E 福祉司は相談を終えたつもりだったものの、女性はさらにアドバイスを求めて来所する。

E さんは、その日も話に耳を傾け、助言もして面接を終えた。そして相談室を出ようとした時のことだ。女性が先回りして出口を塞ぎ、いきなり抱きついてきたというのである。

「わ、わかった。とにかく別の場所で出会うから、やめてくれ」

この状況から逃れるためにできることとして、E さんはこれしか思いつかなかったという。

相談は記録されなければならない

家庭に女性が 1 人だけで在宅しているような場合、男性ケースワーカーが 1 人で家庭訪問するのは好ましくない。いらぬ誤解が生じることもあろうし、だからといって、第三者が介在していなければそれを解く方法もない。だから、児童相談所を含む援助機関の中には、こうした形の訪問を端から禁じているところもある。ただ、私自身は、女性一人だけがいる家庭にやむを得ず一人で訪問した経験が何度もある。もちろん、危険を避けるべく注意は怠らなかったが、振り返ると、リスクと隣り合わせだったことも何度かあった可能性があろう。

とはいえ、まさか児童相談所の相談室でこうした事態が起こることなど、E さんも予想だにしておらず、これは明らかに相談の枠をはみ出た、いわば異常事態、緊急事態と言えよう。もちろん、相談援助活動の特質から、イレギュラーなことが絶対生じないとは限らない。このような場合になすべきことは、何はさておいても、あったことをそのまま上司に報告し、組織としての対応策を検討することだ。しかし、E さんはこの件を一人胸の内にしまい込み、誰にも話さなかった。

> 教訓その 1：業務の上であったこと、したことは、すべて記録されなければならない。また、記録に書けないようなことは、決してしてはならない。

この日 E さんの身に起こったことは、いわば不可抗力だったろう。不意を突かれ、身

*1 そだちと臨床 Vol.10（2011）に掲載の「日本の児童相談をたどる」におけるインタビューでの発言。

をかわす術が見当たらなかったとしても、やむを得ないからだ。ただし、面接終了後、直ちに職場の然るべき人に報告し、あわせて児童記録票に事実をそのまま記載することは可能であり、かつ是非とも必要なことだった。つまり、「突発的な出来事」そのものではなく、それを報告しなかったことが、その後の展開を大きく左右したのである。

ところで、E さんとは無関係だが、これとはまた違った出来事も、私は耳にしている。不登校か何かの中学生女児の相談だったと思う。児童福祉司と男性心理職とがペアを組み、相談を継続していた。

「先日も、心理の先生が来てくださいまして……」

ある時、家庭に電話した児童福祉司に、母がこんなことを言う。寝耳に水だった。急ぎ確認すると、児童福祉司の知らないところで心理職が何度も家庭訪問していたのである。私の勤務する児童相談所のことではなかったが、当の心理職にはこの児童の担当を外れてもらったのではなかっただろうか。

繰り返すが、相談援助活動には想定外のことが起こるのであり、それゆえ、想定外のことが起こることだけは想定しておかねばならない。ただし、想定外の事態であっても、それが児童相談所という公的相談機関を舞台に生じている限りは、記録され、報告されて組織として認識されなければ、単なる私的相談に終わってしまうし、仮にも意図して報告されないならば、それは相談の私物化に当たると言っても過言ではあるまい。

児童福祉司は高い倫理を保持すべきである

「別の場所で出会う」と話してその場を逃れた E さんは、律儀にもその約束を守り、「これは児童相談所とは無関係の個人的な相談だ」と念を押した上で、時間外に相談を続けた。他方、女性は「相談」を口実に出会うことを強く求め、次第に男女関係に進む方向へと巧妙に舵を切っていったのであった。

恋愛の悩みについて、別の第三者に相談していたら、いつの間にかその人物と恋人関係になっていたといった話は別に珍しくもないが、本件では、相手が相談対象児童の母親であること、児童相談所の相談室でのことが出発点だった点で、世間一般の話とは事情が違う。相談の相手と私的な関係を持つことはもちろん、仮に性的と思われる関係があったとしたら、それは児童福祉司として業務を行うに当たっての倫理[*1] に反すると言わざるを得ず、不適切の誹りは免れまい。

教訓その 2：児童福祉司が業務を遂行するに当たっては、高い倫理性を保持する責任があることを自覚し、日々の行動について常に自戒し、振り返らなければならない。

＜児童相談所とは無関係のところで個人的に相談した＞のだとしても、求められるまま関係を深めていけば、それが問題になることは E さんも感じていた。

「こんな形は互いにとっても好ましくない」

こう話すと、女性もうなずいて了解し、以後は双方とも連絡することなく、関係は終了したのであった。

美人局

ところが、こうして関係を絶ったはずの女性から、間を置かず E さんに電話が入る。

*1 児童福祉司に直接言及しているものではないが、本件より後の 2005 年に日本社会福祉士会が定めた「日本社会福祉士会の倫理綱領」に基づく「社会福祉士の行動規範」には、「利用者に対する倫理責任」の中の「利用者との関係」の項目で、「社会福祉士は、利用者と私的な関係になってはならない」「社会福祉士は、いかなる理由があっても利用者およびその関係者との性的接触・行動をしてはならない」旨が定められている。

「こういうことになって、どう責任を取るつもりか。このことは所長にも話す」

円満に関係を終えたと思っていた E さんは、手のひらを返した女性の抗議に、最初は何を言っているのかわからなかったという。ともかく急ぎ所長に経過を報告していたところへ、早くも当の女性が直接所長に電話してきた。

「相談室での出来事だ。公務員の信用失墜行為に当たるはず。所長に会いたい」

その後は、素性不明の男性も登場し、結局は多額の金銭を要求する。要するに、最初から金銭を目的とした美人局、もしくはそれに類する計画的な行為だったのである。

以後の経過は省略するが、E さん側も代理人を立てて話し合いを続け、最終的には双方合意して決着した。

児童福祉司会議

その後、E さんは転勤、U 児童相談所の課長も替わり、私も異動で K 児童相談所の課長となった。実はもう 1 か所の児童相談所でも課長の交代があり、京都府の 3 つの児童相談所の課長は全員が新しくなった。引き続きその職にとどまった U 児童相談所長は、本件が最終的に決着したことをふまえ、これ以上オープンにする必要はないと考えていた。ところが、新しい 3 人の課長は、児童福祉司会議で報告すると決めたのである。悩ましい判断だったと言えよう。

○月○日

2 日間の児童福祉司会議。E さんの問題を報告したが、その価値はあったのか？

まずは、各福祉司が予想以上に本件を知っていた点を記録にとどめておきたい。U 児童相談所では、急遽相談体制を変更した際、E さんから簡単に事情を説明してもらったのだが、他児相の福祉司もいくつかのルートで断片的に聞いていたのであった。その意味では、中途半端な噂話が流れるまま放置されるより、簡潔であっても正確な情報を伝えた本報告は正解だったと思う。

ただ、狙いはどこまで達せられたかというと難しい。事件を知って約 1 年もの間抱えてきた私と比べれば、初めて聞かされてすぐにそれを自分の問題として引き寄せて考えるのは難しいとあらためて思った。やはり、「頑張っていた E さんがなぜ？」というところに多くの関心が向いたのだろう。

報告と討議の後、全員にアンケート形式で意見や感想を求めたが、すでに 20 年も前のこと、残念ながらアンケートそのものは手元にない。記憶している限り感想はさまざまで、狙いがピタッとはまったという実感までは得られなかったと思う。

その後

その後の日誌を読むと、会議の翌日、本件について「報告してもらってよかった」と U 児童相談所のある児童福祉司が話していたとの記載があった。他方、「E さんと距離がある人にとっては単なる不祥事という受け止め方に終わってしまわないか、心配である」といったことも日誌には記載されていた。

なお、この会議から半年以上も経ったある日、私は偶然、E さんと出会って言葉を交わしている。新しい職場で仕事も覚え、頑張っている姿を知って、少しほっとした。

本稿は、「児童虐待防止法」制定、施行の前後、筆者が児童相談所の相談判定課長時代に書き付けていた個人的業務日誌を改めて綴（ひもと）き、現時点で振り返ろうとするものである。表題の似顔絵は団士郎。

＊題名を click すると本文へジャンプします。

これまでの連載

序
(1) 前史
(2) 最初の 1 か月
(3) ソーシャルワークの手順
(4) ケース進行管理
(5) 新任課長が受けた洗礼
(6) 山本さんを追悼する
(7) 陥穽（本号）

精神科医の思うこと⑦

ありがとう

松村　奈奈子

なんだかあたりまえのワード“ありがとう”ちょっぴり前から、子育てにひと段落着いた弟夫婦とたまに食事をするようになりました。

そんなある時、弟から「そういえば、姉ちゃん“ありがとう”をよく言うようになったな」と言われて、自分でもなんとなく自覚していたのですが、いつからかわからなかったので「いつから？」と聞き返しました。「医者になって2～3年たったあたりかな・・・」と返事、そうかその頃からだったのか・・・と振り返って思う事もあったので、今回のテーマは“ありがとう”

仕事を始めて2～3年あたりから“ありがとう”をよく言うようになったと言われて、自分でも思い当たる事がふたつあります。

ちょうどその頃は、“ありがとう”をたくさん口にした時期でした。

その頃の私は研修医。ミスを先輩にカバーしてもらったり、ある時は患者さんにミスを許してもらったり、そんな日々の連続でした。のんきな学生の頃は意識できなかったけれど、社会に出て初めて、本気で人に救われる事の“ありがたさ”を感じ始めた頃でした。当時は必死に仕事しながら“ありがとうございます”を繰り返していました。

そして、“ありがとう”をたくさんもらった時期でもありました。

研修医の私は先輩や患者さんから教えてもらうばかりの毎日でした。

なのに、こんな経験不足でたよりない私に、患者さんは“ありがとう”をたくさん言ってくれます。ミスで凹んでいる時にも、思いもよらず“ありがとう”を言ってもらい救われた事や、奮起した事は数えきれません。

弟からの指摘で、そんな頃に、私は仕事以外の場面でも周囲に“ありがとう”を自然に返せるようになっていたのか・・・と驚きました。自分の変化に気づいていませんでした。

ただ、仕事を通じて自然に言えるようになった“ありがとう”とは別に、自分から“ありがとう”を意識して言いたいと思った体験もまたふたつあります。

ひとつは、患者さんから教えてもらった“ありがとう”です。

医師になって外来診療にも慣れるようになっ

た5年目くらいの頃。治療的意味合いもあるのですが、好奇心旺盛な私は、いろんな職業の患者さんが受診すると、そんな患者さんの仕事について、ちょっと首をつっこんで、いろいろ聞いてみることにしています。

そのつっこみのひとつに、“今の仕事してどんな時に嬉しいと感じるの？”というのがあります。

ある時、コンビニのアルバイトをしている学生の患者さんが来られました。「バイトで1番嬉しいのはどんな時？」と聞いたら「うーん、やっぱりお客さんに“ありがとう”って言われた時っすかね」と話します。「えっ、コンビニでもお客さんは“ありがとう”っていうの？」「言ってくれる人もいるんですよ。先生、言ってないんすか？言った方が僕らは嬉しくなりますよ」と教えてくれました。

アパレル店員の患者さんも、ドラッグストア店員の患者さんにも同じ質問をしてみたら、みんな“ありがとう”を聞くのが嬉しいと答えます。

恥ずかしながら、患者さんから教えてもらう日まで、対面販売のお店で“ありがとうございます”と言ってもらったら、ニコニコと無言でその場を去るだけの私でした。店員さんに“ありがとう”を返したことがほとんどなかったです。

考えれば患者さんのいうとおり、買ったものを丁寧に袋詰めしてもらっているのですから、お互いに“ありがとう”ですよね。
患者さんに教えてもらった後、今ではどこでも“ありがとう”を言う私です。言ってみると、それはそれなりに気持ちよい場面となり、患者さんが言ってたとおりでした。

今は、行きつけのコンビニのあんちゃんとも、いい感じの笑顔でお互いやりとりしています。

もうひとつは、生まれて初めて、憧れの“ありがとう”にであった時です。

それもまた、医師になって5年目頃の、今度は旅先での話です。

仕事も忙しくなって、頑張っている自分にご褒美をあげたくなり、大学時代の先輩と“癒し旅”と称して高級ホテルに泊まってみるか！と、高級リゾートに女子旅に出かけました。

そこは関東にある小さな島にホテルがひとつというロケーション・・・子供の宿泊ができない、静かな大人の隠れ家のようなホテルでした。

ホテルに向かう専用の船を待つ待合室では、50代の夫婦と20代の息子2人と娘さんの5人家族が、楽しそうに会話をしています。

船が着き、スタッフの誘導で船に乗り込みます。そのご家族の和やかな雰囲気に、なんだか魅かれて、つい後を追うようにずっと眺めていました。

船に乗り込む時も、降りるときも、彼らは自然に“ありがとう”とスタッフに声を掛けます。その“ありがとう”がすごく上手で、“ああ、私もこんなありがとうをうまく言える人になりたい”と思わせてくれる“ありがとう”でした。それはなんというか、ちゃんと、周囲に感謝が伝わる“ありがとう”でした。

夕食のレストランでも近くの席になりました。家族からは笑顔が絶えず、周りにいるスタッフをも笑顔にする対応は、こちらもほんわかした気分に。もちろん、スタッフへの感謝の気持ちのこもった“ありがとう”が聞こえてきます。

たった1泊2日の旅でしたが、この旅の後、ちゃんと伝わる“ありがとう”が言いたいと思いました。

人は生まれ育った環境の対人パターンを無意識に繰り返すといいます。子どもの時に、周囲の大人（多くは父母）がしている対人的なふ

るまいをまねて、お手本として成長します。

旅先でであったあの家族は、みんな“ありがとう”が上手でした。

振り返ると、私の両親はそんなに“ありがとう”をうまく使える人ではなかったのかと気づきました。

私も仕事を始めるまでは上手に言えなかった“ありがとう”が、多くの人に教えてもらってちょっと上手になってきているんだと思います。

そんな私、数年前から、周囲から「“ありがとう”が上手ですね」と言われることが重なりました。

マッサージ屋さんや宿泊した旅館の女将さんから言われたので、最初はお世辞かな？と思っていましたが、いろんなとこで言われると、そうなのかなと自分でも納得するようになりました。

あの、高級ホテルで出会った家族のように、私の“ありがとう”が変化出来ていたのなら、それは嬉しいです。

そして私、診察の場面で患者さんに“ありがとう”を伝授する事までできるようになってます。

対人関係の問題の多い患者さんは、“ありがとう”と“ごめんなさい”の使い方がちょっぴり不器用な事が多いです。“ありがとう”を言葉に出して言ってみる場面やタイミングを伝授するだけで、親子や夫婦や周囲との関係が、ちょっぴり上手くいく事はよくあります。

それは、“ありがとう”の言葉とともに、心のどこかに隠れていた感謝の気持ちに気づいてもらう作業でもあり、それが大切なのかもしれません。

でもそれは、私が仕事を始めていろんな人に教えてもらった事を、患者さんにお返ししているだけなんですけどね。

ほんと、“ありがとう”って言葉は、大切なワードだなって思っています。

おくのほそみち

～　在宅医療について　～

7

理学療法士
奥野　景子

「患者さんのために」という言葉が嫌いだ。そもそも‘患者さん’という呼び方もよくわからない。私が日ごろ理学療法士として接しているのは、‘〇〇さん’であって‘患者さん’ではない。
そして、「患者さんのために」という言葉。耳ざわりが良さそうだが、本当にそうなのだろうか？そこにあるのは、そこで起きることは、その根底を支えているのは、本当はそうじゃないことも少なくないように感じている。
極端な言い方をすると、私は「〇〇さんのために」と思って行動することはない。仮に、私の行動が「〇〇さんのために」なっていたとしても、その手前には私が考える、私が行きついた「〇〇さんにとって必要なこと」とか「〇〇さんにとって大切なこと」がある。

最近、理学療法士である自分が大切にしていることが、大切にされていないことを認識する出来事があった。自分が大切にしていることが大切にされていないことに対してではなく、なんで大切だと思っているのかを相手に伝えられず、相手と各々が考える大切だと思うことについて対話することが出来なかったことに対して一人で悶々としていた。

今回のマガジンでは、予定を変更して、私が理学療法士として現在携わっている‘在宅医療’について自分なりの考えを書いてみたいと思う。おそらく、当初予定していたテーマから大きく外れる内容ではない。もしかしたら、その先にあるテーマなのかもしれない。

なぜ今このことについて書くのかと言えば、悶々としている感情を晴らしたいという部分が少なくないように思うが、たぶんそれだけではない。上手く言えないが、理学療法士である自分を、自分が理学療法士であることを、意識させられる機会が最近多いからだと思う。

1. 在宅医療＝ 在宅 ＋ 医療
2. 理学療法士として在宅医療に臨む
3. 生活者として在宅医療に臨む
4. 奥野景子として在宅医療に臨む

1. 在宅医療 ＝ 在宅 ＋ 医療

在宅とは、外出しないで自分の家にいることを意味する。家は、人が住むための建

物であり、安心、安全の確保が重要と考える。‘家’に関する自分の中のもやもやは「第26号‘リハビリテーションが行なわれる場’について考える前に」に書いた。ここでは、‘家’とは表現せずに‘生活の場’と言っておきたいと思う。だから、ここでの在宅は、外出しないで自分の生活の場にいることを意味する、としておきたい。

医療とは、医学という学問の実践を意味し、その実践の場は社会そのものである。社会は、ヒト、モノ、コトによって構成され、それらによって創造されるものだと思う。そのため、医療には医学だけでなく、様々な学問や視点が求められると考えている。

ざっくり言うと‘在宅医療は、生活の場で行なわれる医学の実践’となると思われる。

2. 理学療法士として在宅医療に臨む

前回のマガジンの「終わりに」に「人体としての人を理解する為には、医学は必須であり、人体としての人を理解した上で行なわれるのが理学療法だ」と書いた。だから、私は理学療法士として医学を基盤の一つとして在宅医療に臨んでいる。医学を基盤の一つにしていると言っても、医学そのものは膨大かつ広範な学問であり、私がその全てを理解している訳ではない。その中でも、自身の専門である理学療法学に関わる医学知識、疾患に関する最低限と思われる医学知識については、なるべく理解するように、少しでも習得できるように、努めてきた。でも、十分な知識を習得できているかと言えばそうではない。ただ、十分とは言えないということは、十分が何なのかをわかっていると捉えることもでき、そういう意味では不十分ながら十分と言っても良いのではないか、と思う部分もなくはない。

回りくどくてわかりにくい言い方をしてしまったが‘私は理学療法士として医学の視点を大切にしながら在宅医療に携わっている’ということである。

3. 生活者として在宅医療に臨む

私は、ひとりの生活者であり、生活を営むために理学療法士という仕事をしている。生活が成り立たないなら、理学療法士として働いていないだろう。ボランティアで行なっている訳ではない。仕事として理学療法士をしているという意識は、あまりなくしたくない。だからこそ「患者さんのために」という言葉が好きじゃないのかもしれない。‘自分が生活していくために働いてるんでしょ？’と思ってしまうことがある。

私には「人生、十中八九テキトー」、「大丈夫　どうにかなる　なるようにしかならない」というモットーがある。

「人生、十中八九テキトー」は、それなりに気に入っている。‘自分が大切にしたいことは、一つか二つくらいしかない。それに懸命になったり、それを大切にできたりしたらそれで良い’という意味がある。だから、どうでも良いことはそんなに大切にはしない。でも、どうでも良くないことはそれなりに大切にする。そんな感じ。ちなみに、この‘それなりに大切にする’とい

うところにも自分なりのこだわりがある。一つか二つしかない大切なことに関しても十中八九大切にできたらそれで良いとも考えている。その全てを大切にすることは出来ないように思うし、大切にしたい相手や物事に対しても私の大切にしたい想いを全てぶつけるのもなんだかな～と思う部分もあるからだ。それは、十中八九のどうでも良いことに対しても同じで、そのうちの十中八九はどうでも良くても一つか二つのどうでも良くない部分もあるんじゃないかと思っている。だから‘そんなに大切にしない。けど、少しは大切にすることもある’くらいの感じだったりもする。

「大丈夫　どうにかなる　なるようにしかならない」は、今までの数少ない経験から感じたことだ。どうにもならないんじゃないかと思うことに遭遇したこともあったが、今の私はそれなりにやれている。‘どうこう考えてどうにかなることもあれば、考えたところでどうにもならないこともある。なるようにしかなっていかないし、なっていくものだろう。だから、まぁ一大丈夫でしょ～’みたいなざっくりした意味がある。お気楽主義の象徴みたいな感じ。あまりお気楽主義ではない部分もある私だが、かなりお気楽な部分もあって、ふり幅はそれなりに大きいように感じている。

こんな私がひとりの生活者として在宅医療に臨んでいる。相手がどういう性格で、どういう生活を営み、どういう背景、歴史があって、どうやって人との関係性を築いてきたのか…それは、私とは全く違うはずだ。だから、理解できないこともある。それは、相手が私の全てを理解できないのと同じである。「あぁーそれめっちゃわかります！！」もあれば「そんなことあります！？」もあるし、人と人なんてそんなもんだと思っている。でも、人と人のそんなやり取りが楽しかったり、面白かったりもするから、理学療法士としてだけその場に臨むのはもったいないし、面白くないと考えているのかもしれない。

4.　奥野景子として在宅医療に臨む

理学療法士であり、ひとりの生活者でもある奥野景子が在宅医療に臨んでいる。

理学療法士として物事を判断する時、その基準はそれなりに明確だったりもする。「右肩屈曲角度：100°(疼痛なし)」、「歩行：杖あり、監視レベル。方向転換時に自制内のふらつきあり」とか、数値で伝えたり、段階付けがなされたりしていることが少なくない。色々な職種の人が一定の情報を収集するためには、わかりやすい数値や統一した認識ができる判断基準が便利になる。だから、医療分野の中でも医学に関わる部分では、その基準が明確になっているものも少なくない。ただ、その数値にどんな意味があるのか、その段階付けにどんな意味があるのかは、その人の生活様式や社会的役割などによっても異なってくるため、明確な基準で判断できることばかりでもない。

ひとりの生活者として物事を判断する時、自分だったらこうする、こうはしない、それは好き、嫌い、いやだ、どうでも良い…など、特に困ることはない。迷うことはあっても、迷った結果、困ったことになることはあっても、それ自体に困ることは、本

当は少ないんじゃないかと思う。‘だって、自分のことでしょ？誰かに迷惑をかけることもあるかもしれないけど、それも自分の判断の結果だったとしたら、受け入れるしかない。A→B、x＝y、α≧δ…みたいなわかりやすいことばかりではないから、そんな風に言えることばかりではないけど、それはそれで大丈夫だし、どうにかなるし、なるようにしかならないでしょ？’となる。

理学療法士であり、ひとりの生活者でもある奥野景子が在宅医療に臨み、対象者のことについて考える。その時の判断基準は、様々だ。判断せずに進むこともある。何か起きるのを待っているような時もあるし、他力本願なこともある。理学療法士としてのわかりやすい判断基準の結果と、ひとりの生活者としての判断結果と、対象者の考え、判断結果が異なることもある。「理学療法士として；歩行時の転倒リスクは、杖よりシルバーカー（手押し車）の方が低い」、「ひとりの生活者として；転んで痛いのは嫌」となると、歩行時の自助具としてシルバーカーが選択される。でも、「対象者の考え；カッコ悪いからシルバーカーなんて絶対イヤ。杖でも歩けなくはない」という考えから「対象者の判断結果；杖で歩く」となることもある。でも、理学療法士である私は‘転んで骨折したら歩くこともできなくなる可能性がある。自分で歩くことを大切にしてるんでしょ？歩けなくなったら、どうせしょんぼりするんでしょ？転ぶ可能性と転ばない可能性があるけど、最悪のパターンを想定したら…別に脅したい訳ではないけど、あなたはどちらを選びますか？’となる。どちらを選んだとしても、私のやるべきことは変わらない。理学療法士として必要だと思うことを行ない、対象者が自分で納得した選択ができるように（選択しないということも含めて）話をして、ひとりの生活者でもある自分の振り返りもしつつ、その場に応じた言動を行なう。結果的に、転倒して骨折して歩けなくなった時、「ほら！だから、あかんって言ったでしょ？」なんてことは言いたくない。絶対に勝つ後出しじゃんけんをしているみたいでつまらない。それだったら、各々が出したグーチョキパーについて、その手のかたちについて「え？なんでなんでぇ～？？」と話していたい。そして、その結果については、勝ち負けを決めても良いし、あいこにしても良い。よくわからないルールを創っても良いし、喧嘩別れや握手をしたって良い。お互いが向き合っていることが大切なんだと、そういう場を互いに創ろうとすることが大切なんだと考えているのだと思う。だから、言ってしまえば、結果はそんなに重要ではないのかもしれない。互いが向き合い、そういう場を創ろうとしている時間やこと、その場自体が重要なんだと思う。そこまで出来たらもう大丈夫。だって、どうにかなるし、なるようにしかならないから。うむ、結局お気楽主義な奥野景子が強そうな感じがする(笑)。

～　終わりに　～

当初予定していた内容と違うことについて書き進めたが、たぶん当初予定していたテーマにつながる内容を書けたと思う。でも、前回のマガジンとは違う副題をつけたままにしておきたい。つながっているけど、

分けていたい、離しておきたいと思っているのかもしれない。

「おくのほそみち」を書き始めて今回で七回目になる。毎回、テーマを掲げて書いているものの、繰り返しになっている部分があったり、重なり合っている部分があったり、拮抗している部分があったり、ポコポコと違うところでテーマが生まれている部分があったり、自分の頭の中のまとまらなさが現れているように感じている。でも、そのどれもが本当なのは確かだとも思っている。マガジンを書き進めながら、自分の中の確かなことや本当のことが少しでも見えてくれば良いな～と思っている。

次回のマガジンでは、当初予定していたテーマについて書こうと思います。今回の内容が絡んでくるように思います。また、寄り道をしたり、急に道幅が広くなったりすることもあるかもしれませんが、今の自分に書けることを、書きたいことを書いてみたいと思います。では、また次回もよろしくお願いします。

👣 おくのほそみちのこれまで 👣

第 24 号
新連載決意表明（「執筆者@短信」にて）
第 25 号
リハビリテーションのこと
第 26 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’
について考える前に
第 27 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’に
ついて考える前に
二歩目；〇〇〇と私
第 28 号
‘リハビリテーションが行なわれる場’に
ついて考える前に
三歩目；‘あなたー私’という
関係 によって変わる‘場’
第 29 号
選ぶということ
一歩目；私の内にある‘絶対’
第 30 号
選ぶということ
二歩目；理学療法士として①

年金記録は、人が生きてきた「証」 Ⅲ

馬渡　徳子

同居していた義父が、二年前に交通事故で車に轢かれ亡くなった。即死だった。私の息子の結婚式わずか一ヶ月前の突然の出来事だった。

義父は、阪神大震災のあった年から、毎年誕生日に自筆の遺言書を書き綴り、その在り処を、嫁の私に伝えていた。故に、私たち遺族は、このような事態にあっても、八項目あった遺言事項を粛々と実行することができた。

几帳面な性格で、世間が、あの埋もれた年金・失われた年金事件で騒がしかった時に、義父にも届いた「年金特別便」で、数年間の年金記録漏れに気付いたが、親のしつけで「初任給からの給料明細は全て綴じておくこと。資格証明書はファイルしておくこと。」との約束を守っていたことから、直ぐに埋もれた年金を証明する書類と年金記録を照らし合わせることができ、審査の上で年金額がアップした。その時に、客観的な証拠書類の例を助言した嫁の私を、大層褒めてくれ、いろいろな場所で「わしの嫁が、ソーシャルワーカーやからできたこと。ソーシャルワーカーっちゅう仕事は、すごいんやぞ。」と自慢していたと仕事関係者から聞いている。

そんな『年金』に、事件が起きたのである。

義母に受給権利のある「遺族厚生年金が、第三者行為である損害賠償の示談確定後に、老齢基礎年金部分を除き最大 24 ヶ月全額支給停止となり、以後も数ヶ月減額調整がされることが判明した。

公的社会保障制度の原理原則に照らし合わせると、この社会保険庁の裁定は、何一つ間違ってはいない。

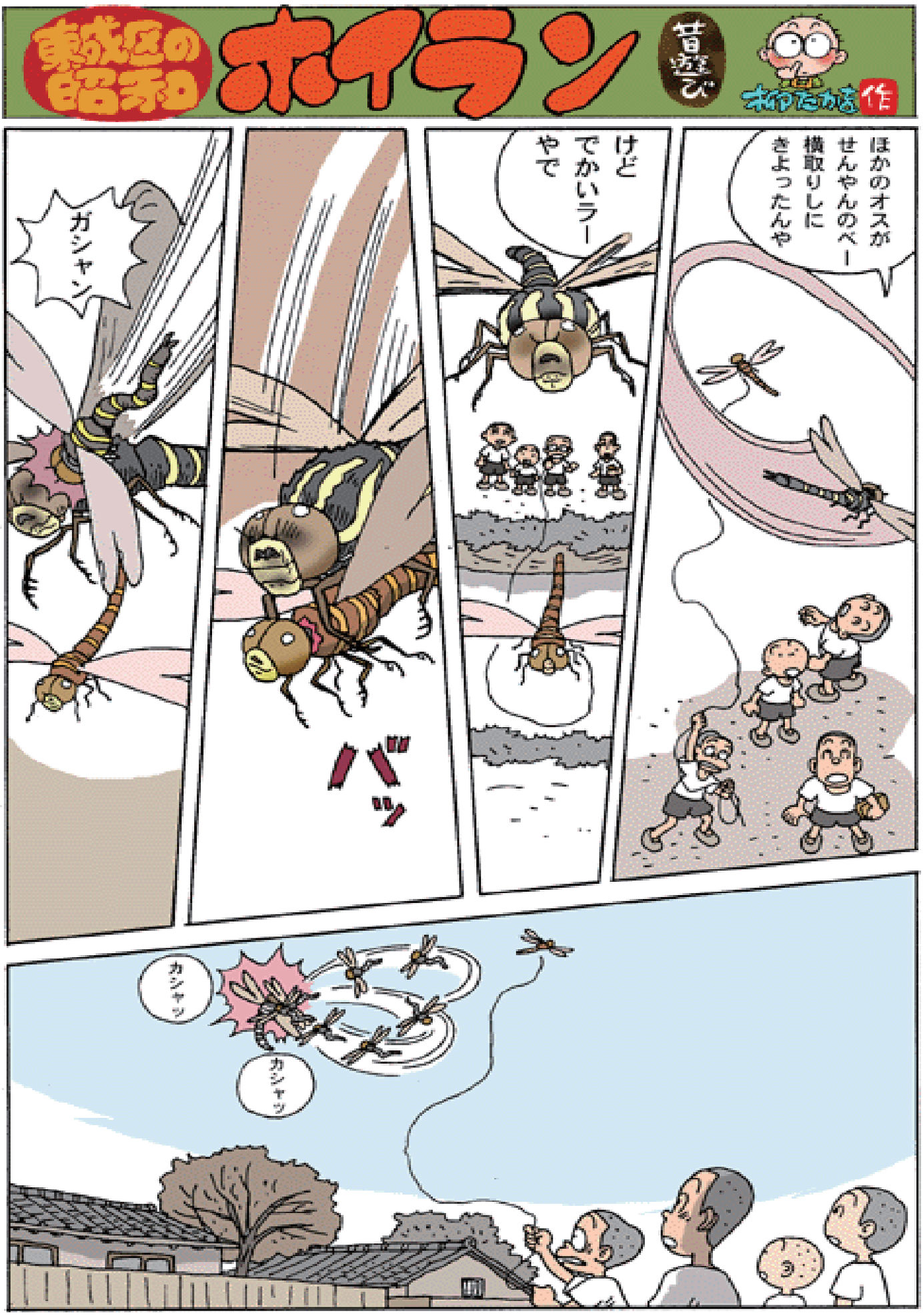
何故ならば、社会保険である年金相当額が、その優先上位である損害賠償から遺失年金として相当額支払われているからだ。しかしながら、義父が以降も生存していたら支払われていたはずの厚生年金基金部分（所謂、企業年金）は、受給権を無くした。

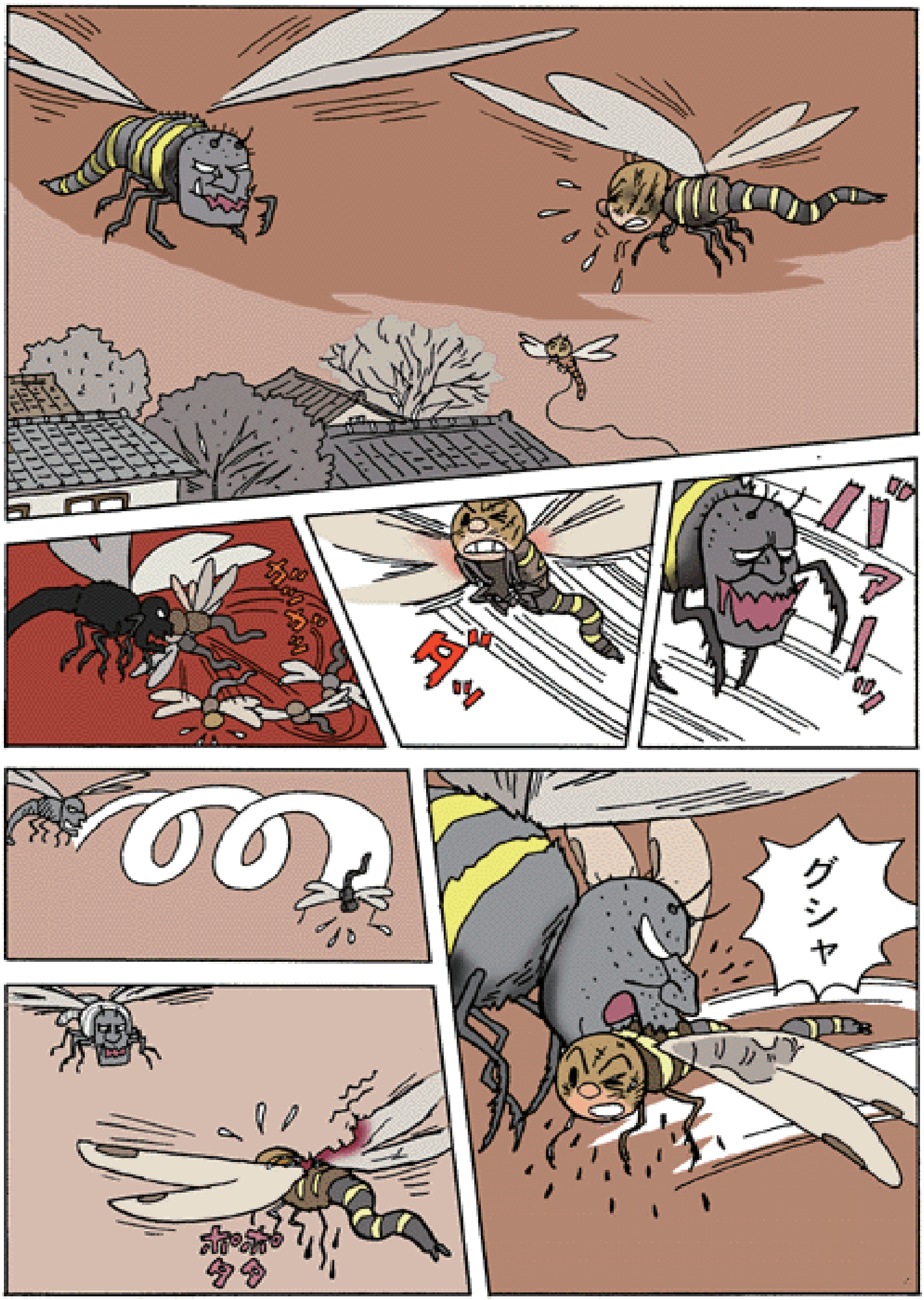
義母は、年金事務所で納得のいく説明が得られないので、私の勤務先の顧問社会保険労務士にも相談したところ、社会保障裁判で闘う方法はあると言われたが、当時は諦めてしまった。

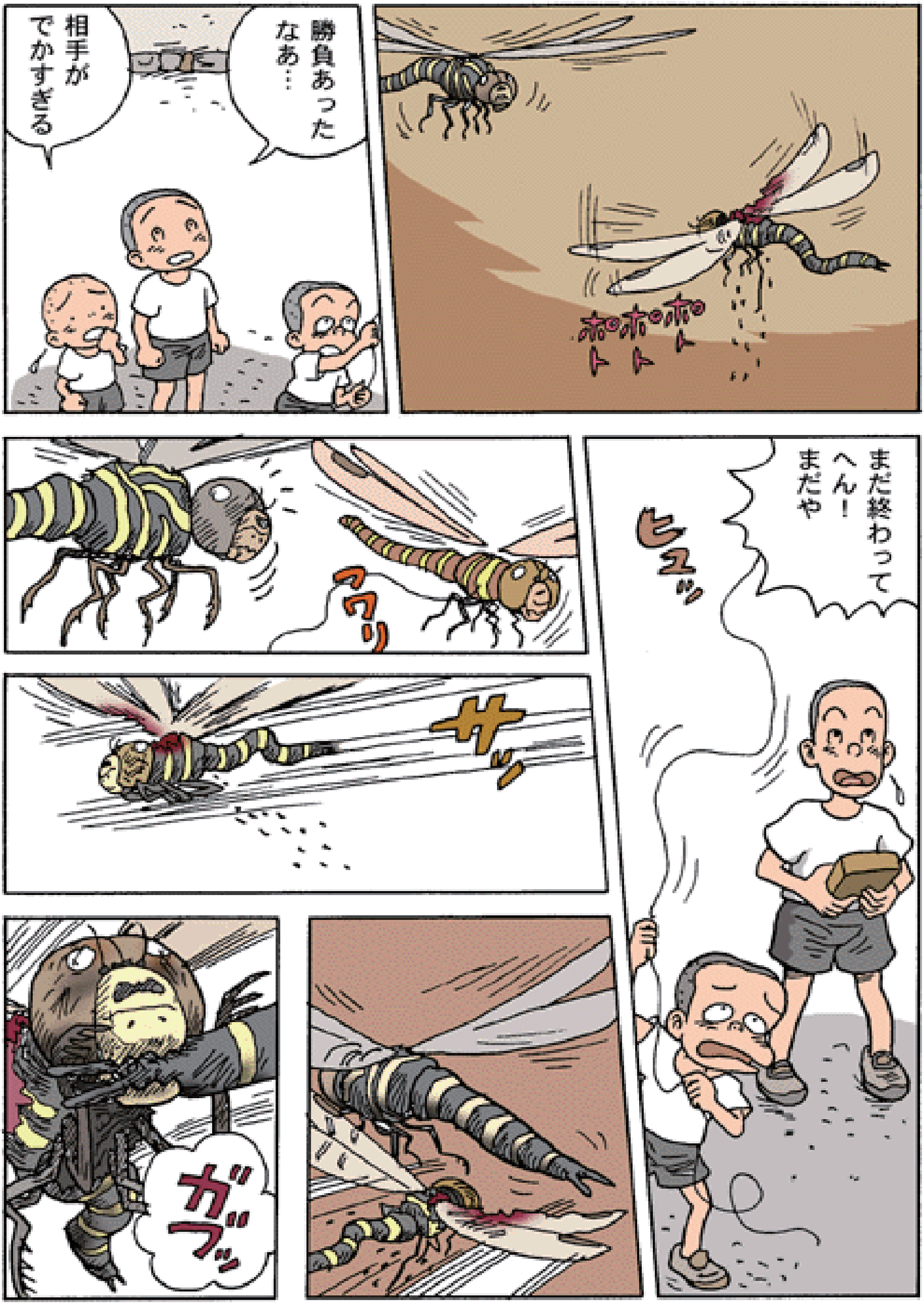
不慮の事故により、未来の人生を奪われた当事者の遺族としては、容易に納得のいくものではない。

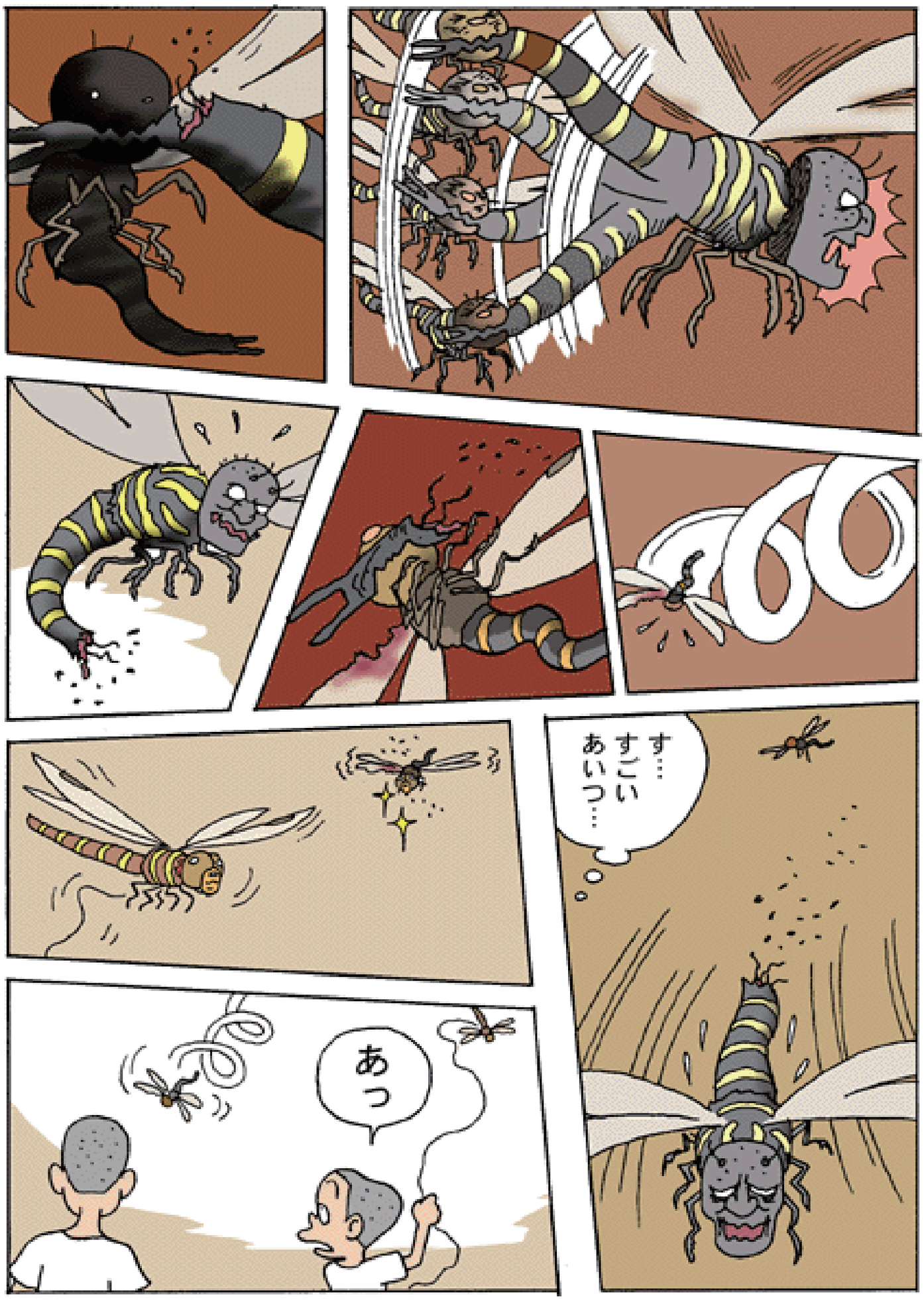
悔しいので、どんなことがあっても、義父の生きてきた証である遺族厚生年金が全額支給として義母に支給される先ずは 20XX 年 X 月まで、更に失ってしまった厚生年金基金部分を取り戻せる 20XY 年 Y 月まで、義母が長生きできるように、気張って生きよう!その時が来たら皆で派手にお祝いしよう!と家族全員で誓った。

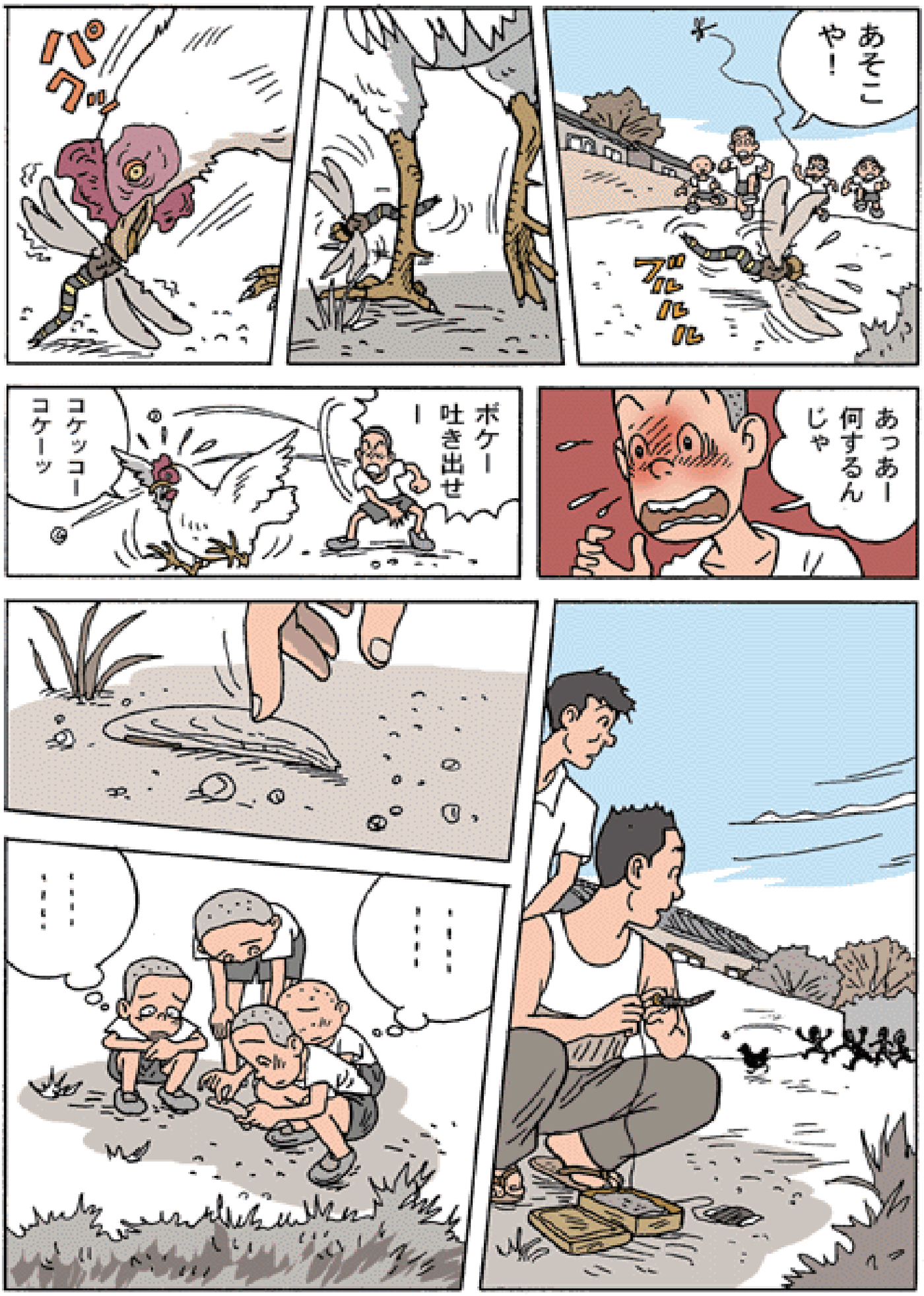
『年金』は、ソーシャルワーカーを生業とする私自身にとっても、質的研究課題として、今後もあり続けていく。


東成区の昭和
ホイラン
昔遊び
オヤたかお作
ほかのオスがせんやんのべー横取りしにきよったんや
けどでかいラーやで
ガシャン
バッ
カシャッ
カシャッ


バァーッ
ダッ
グシャ

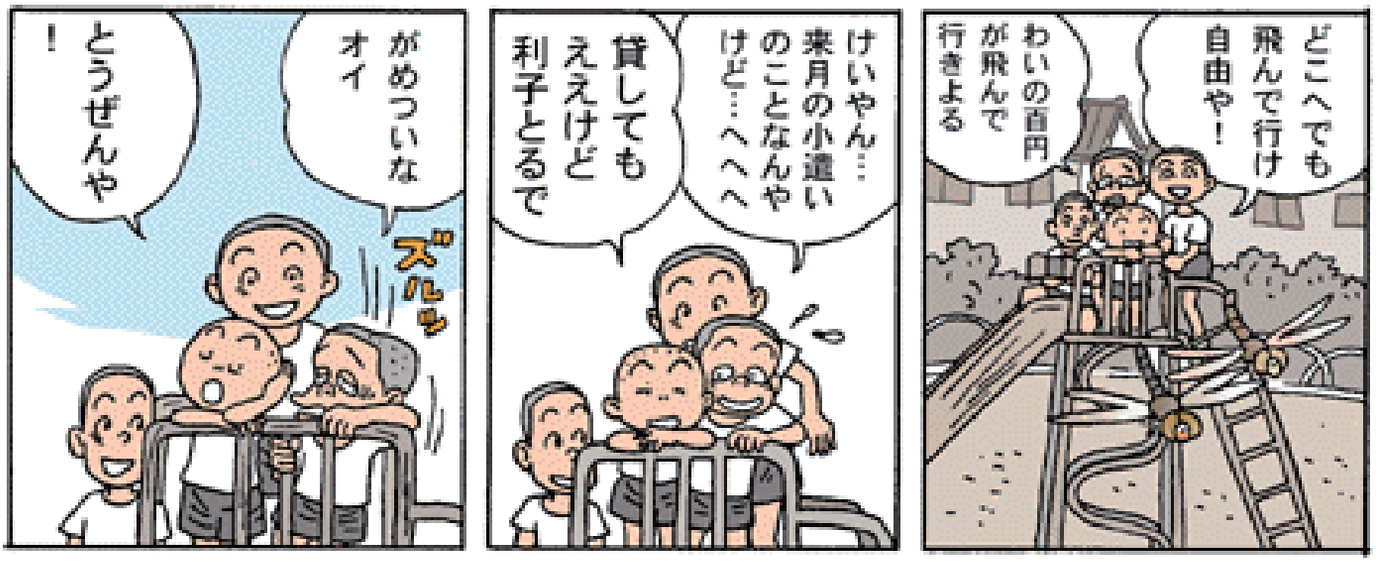

勝負あったなあ…
相手がでかすぎる
ホ゜ホ゜ホ゜ト ト ト
まだ終わってへん！まだや
ヒュッ
ワリ
サッ
ガブッ


す…
すごい
あいつ…
あっ


あそこや！
ブルルル
パッ
あっあー何するんじゃ
ボケー吐き出せー
コケッコーコケーッ
……
……

そっちは5匹か…こっちは6匹や
3匹以上差がついたら倍の二百円にしょう言うたけど
差は一匹やから百円や
ホォー
こっ…この次倍にして返してもらうわ
兄ちゃんのアホ
……こいつら離したろせんやん
えっ？
どこへでも自由に飛んで行かしたろ

そんな
わい百円も
はろたんや
自分が
アホな
賭けした
んやろ
自由に
なったら
このベー
尻曲がり
みたいな
ラーに
また出会う
かもしれん
そや
そしたら
こいつら
卵いっぱい
生むんやろ
なあ
せっしょうな！
きまり
きまり！
あっ
ベー
こっちの
気の
変わらん
うちに
はよ行け


どこへでも飛んで行け自由や！
わいの百円が飛んで行きよる
けいやん…来月の小遣いのことなんやけど…へへへ
貸してもええけど利子とるで
がめついなオイ
ズルッ
とうぜんや！

貧乏だったけれど
子供は大人ほどそれを
苦にしなかった
ザリガニやトンボのいる
自然はまだまだ元気だった
おわり

書簡型連載　6

ケアマネさんとお坊さん

木村　晃子　様

差出人　竹中　尚文

2017 年 11 月 16 日

── 亡き父 ──

もう三ヶ月のご無沙汰になります。木村さんはお元気でしょうか？　天気予報で北海道に降雪が予報される日が出てきました。早いものです、もう冬の訪れです。私は、スポーツも食べ物も楽しめる冬も好きなのですが、ここのところ毎年、ひどい風邪に悩ませられるので、不得意な季節となっています。風邪さえ引かなければと思うのですが、体力の衰えでしょうか、健康管理に意識の足りなさでしょうか、どうも風邪を引いて寝込んでしまって仕事が滞って、周囲の人たちにずいぶんと迷惑をかけています。

先月で、木村さんのお父様が亡くなられて二年になりますね。どんな時間の経過があったのでしょう。私は、この冬で父を送って十三年になります。共に命があった時代、亡くなって直後の時代、死後数年の時代、十年を越した今と、いろんな父親のイメージがあります。

私の場合は、生前の父親とは折り合いのいい関係ではありませんでした。本当によく衝突しました。全く生きる価値観が違った人でした。父親は、衣類にお金を掛ける人でした。自分が他人からどのように見えているかを気にしていました。手厚く遇されるのが好きでしたから、服装にはかなりの費用を使っていたようです。私は、ファッションに費用を掛けないようにしています。何でもいいのではなく、厚遇を受けるのが苦手なのです。特別扱いをされると何か思惑がある

のか疑ってしまう悪い癖があります。

父は寺の住職でありました。私はその寺を継いだのですから同じポジションにあります。父は、お寺の権威を第一にして、その寺の住職の権威を大切にしました。私は、若い頃からそうした権威主義が嫌で、よく父親と衝突しました。今考えると、父はお寺の権威をないがしろにしょうとする私を許せなかったのでしょう。当時の私は、お寺の権威が人々の大切な思いの集約であるとは思えませんでした。父親と私は方向性に対する理解が、逆だったように思います。お寺の力が個々の人に向かっていくこと、すなわちお寺の力から人々への矢印というのかベクトルのようなものでしょう。お寺の力が人々の心を変えていくことかもしれません。一方、人々の心が集約してお寺が成り立っていくこと、すなわち人々からお寺へのベクトルです。時代も違うと思います。理解の仕方も変わってきたのでしょう。

父親の死後数年間は父親のことをよく思い出しました。生前に思いもしなかった父親の思いにもいくつか出会えました。たとえば、私が大学に進学するので実家を離れる時の父親の顔を父の死後に初めて思い出しました。とても心配した目で私を見送ってくれたのを、思い出しました。「心配してくれたんだ･･･」と思いました。死んでから思い出したって無意味じゃないかと思う人もいるでしょう。私はそれでいいと思います。私は死によって関係性が切れるとは思っていないのです。

私にとって家族の歴史で大きな出来事だったのが、私が十四歳の時だったと思います。中学二年生の終わりか三年生の始まり頃だったと思います。原因は何か覚えていませんが、両親が夫婦げんかをして母親が家を出て行きました。その時にはいつもと違う事態になったと思いました。直ぐに母親は東京で暮らす弟の所に行ったことが分かりました。父親は、私に三歳年下の弟と母親を迎えに行くようにいいました。私は、弟と一緒に叔父の家を訪ねました。夫婦げんかの理由も経過も知らない私は、ただ帰ってきてくれというしかありませんでした。母親は、帰らないと答えました。そして、東京駅まで私たち兄弟を見送ってくれました。新幹線が出発するとき、私の隣の席で小学生の弟は泣き出しました。その

時、私は親を頼りにしないで生きていこうと決心しました。少年の決心ではありましたが、あの時が私のターニングポイントでした。

家に帰って、父親に迎えに行きたければ自分で行けばいいと言ったように思います。両親が離婚するなら、それは仕方がないと思えました。叔父のアパートに身を寄せて職探しをしていない母親は、本気で離婚するつもりはないと思いましたし、それを迎えに行くのは私の役割ではないと思いました。数日後に、父は母を連れて帰ってきて、我が家は何事もなかったかのように暮らしました。

この出来事は、私の成長に於いてはとても大きな出来事だったと思っています。今、父親は母親をどのように見ていたのだろかと思います。当時、父親は寺の住職をしながら定時制高校の教員もしていました。その後、もう無理だと言って四十八歳で教員を早期退職しました。母親は、結婚してから一度も外で働くことはありませんでした。また、いくらお寺が忙しくても母親がお参りに行くなんて、あり得ないことでした。父親は、家庭に居る妻を求めたのでしょうし、母親もその役回りを当然のことと受け入れていたのでしょう。私にはそうした夫婦関係を理解しがたいものでした。当時はそうした夫婦関係が珍しくなかったし、父親にも母親にも、受け入れやすい関係であったと思います。

私は、かつて父親が住職であった寺の住職をしています。しかし、私にとって妻はあくまでパートナーです。共にお寺の将来像を描きながら、共に仕事をしていくのです。彼女も日々のお参りに行きますし、彼女なしには今のお寺は成り立ちません。それが私たちの生き方でもあります。

今、私の父親は「時代も変わったなぁ」と言っているでしょうか。今年の初めに父の十三回忌を勤めて、父の人生を客観的に眺めているように思います。また、それは記憶の彼方に押しやることではありません。法事を勤めるのは、そんな機会であるように思います。

竹中　尚文様

こちらは、すっかり冬になりました。まだ、11月だというのに、とても寒い毎日です。外を歩くときには、転ばないように慎重に歩みを進めているつもりでも、ふとした瞬間に、体が地面と仲良くなっていることがあります。
先日も、暗い駐車場で、アイスバーンになっているのがわからず、大転倒してしまいました。骨折したかと思うほどの痛みでしたが、幸いに骨折には至りませんでした。とは言え、これからの季節は用心です。

この１０月１０日で、私の父が亡くなって、まる二年が過ぎました。人の体が亡くなるというのは不思議なものです。父はこの世にはいないのですが、いなくなった今の方が、父をより近くに感じます。

私の父は５０歳の頃に癌を患い、声が徐々に出なくなりました。６０歳を過ぎた頃には、体はすっかり弱り闘病生活です。その頃の私は、３人の子育てに必死でした。父とゆっくりと話をすることもない毎日でした。

父がいない今、父に聞いてみたいことがたくさんあります。竹中さんのお父様が、教員をされていたのと同じく、私の父も高校の教員をしていました。２２歳で大学を卒業してから、赴任した学校は２校しかありませんでした。出世することもなく、一介の教師です。父が亡くなってから、母あてに、父にゆかりのあった人たちから、ずいぶんと励ましの手紙が届きました。大学時代の友人であったり、赴任先の同僚の先生であったり、また、晩年の父と共にした、若い先生らからの手紙でした。そのどれにも書かれていたのは、父がどのように人と関係を作ってきたか、ということでした。

父は、いつも生徒のことを第一に考えていました。教師と生徒の関係が上下ではなく、日々の生活者としての対等な人間関係であることを記していた文章を見たことがあります。対等な人間としての良き理解者であろうとしている教師。それが父の教師としての姿勢だったように感じます。このことは、違う職業ではあるけれど、ケアマネジャーとして私が仕事をしていく上で指針にしている一つであることは間違いありません。

先日、この春出会った一人の高齢者とお別れしました。天涯孤独かのようにふるまっていたその人には、離れたところに子どもがいました。数十年も会っていなかったようです。その所在もわからないということでした。自身の病状から、余命はそう長くないことは医師に説明を受けていました。私は、その方に生きている間にやり残したことはなかったか、尋ねました。すると、子どもに会いたいと言いました。そこから、子どもの所在を探すことにしました。

春から初夏にかけて、何度も何度も戸籍を取り寄せては、親子の糸を手繰り寄せました。おそらく、ここではないか、という宛先に手紙を送りました。返信を待ちました。手紙が到着したと思われる日から数日だった日、子どもさんから電話がきたと喜んで知らせてくれました。声が聴けたらもういい・・・と言っていましたが、その後、数十年ぶりの再会を果たしました。生きているうちにやり残したことは、なくなったかのように思われました。

そして、秋になった頃、今度は最期の支度をしたいと言いました。自分が亡くなったら、ひっそりと誰にも迷惑をかけないで、無縁仏にしてほしいと言いました。死後の諸手続きも含め、一切のことを事務的に済ませたいという意向でした。死後事務委任契約、というものがあります。この手続きに向けて進めることになりました。その途中で心に変化が起きたのでしょう。今まで心を閉ざし、関わりを拒否していた兄弟に、自分の亡き後のことを頼むことができたと話されました。死後事務委任契約の手続きはやめることにしました。長い間会うことのなかった子どもに会うことができ、長い間関係を断っていた兄弟と和解し、「もう、いつ死んでもいい。」と涙ながらに話をされていました。

その数日後、入院となりました。私は、休日にその方の病院へ見舞に行きました。ベッドに横たわったまま、「もう死にたい。痛くて、痛くて、早く死にたい。」と言っていました。生きていくことの大変さを、ベッドのそばで感じました。私が黙っていると、「休みなのに来てくれてありがとう。」と言って、手を伸ばし握手をしました。「また、来ますね。」と言って、病室を後にしましたが、それが最期の別れになりました。

亡くなった後は、その方が託した通り、兄弟が最期の時を送り出してくれまし

た。ご兄弟の方も、すがすがしいお顔をされていました。

春から初冬のこの出会いと別れは、私に様々なことを教えてくれたように思います。何も願ってはいないようで、人の心の憶測には、小さな願いがあるように思います。その小さな願いを叶えるために、大きな力が湧き出てくることが、「生きる」ことそのものなのかもしれません。

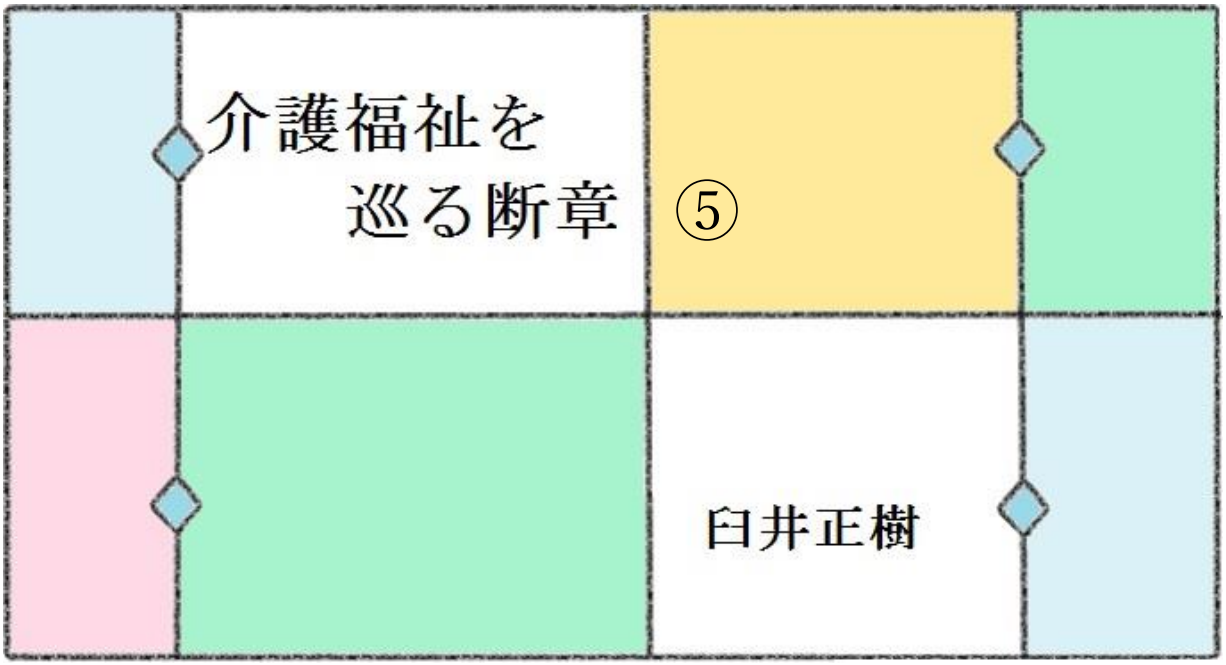
親子の糸を手繰り寄せる作業をする時、その方は私の昼休みをめがけて訪ねてくれました。私が忙しく外に出回っているので、その時間が良いと思ってくれたのでしょう。約束は、だいたい昼休みごろになっていたので、私は、二人分のおにぎりを作って一緒に食べたことがあります。梅干しのおにぎりです。竹中さんが春に送ってくださった、いかなごのくぎ煮を一緒に食べました。「美味しいね。ありがとう。」と言いながら食べてくれた表情が忘れられません。昼におにぎりを食べながら、生きているうちにしておきたいことに関わらせていただいたことは貴重な体験です。

私の父が、生徒のことを、同じ生活者として対等な関係、と言っていたことは、このようなことだったのではないかと感じます。年齢が違っても、背負っているものが違っても、人はお腹が空くと思うのです。お腹が空いたもの同士が、一緒におにぎりを食べる。これが生活であり、生きることであるように思うのです。

体が亡くなっても、心はあり続けるものですね。私も、一生懸命生きていこうと思います。時に空腹を感じながら、お腹を満たしながら・・・

では、また、お元気で・・・

木村　晃子



5　沙津樹のこと

堅い話が続いたので柔らかい話をすることにしたい。しばらくの間、介護福祉とは異なる内容となるがお許しいただきたい。

(1) 小学校から中学

第一回目に少し書いたことだが、私は 42 歳の春に同い年の配偶者を亡くした。その時、二人の子どもがいて、上の男の子は小学校 4 年生、下の女の子は小学校に入学したばかりであった。どのような事情で亡くなったのかはここでは述べないが、二人の子どもにはいろいろと大変な思いをさせることになった。特に下の女の子である沙津樹は、大変だったと思う。沙津樹にとっての愛着形成の時期に母親が亡くなり、父親である私はそうした児童心理についてはまったく疎かった。にもかかわらず、ほぼ奇跡的にまっすぐに育ってくれたことに感謝している。

仕事を続けながら二人の子どもを育てるために、私たちは義父母の家の近くに引越しして、子どもたちは朝、引越しした家から学校へ通い、帰ってきてからは祖父母の家に行って晩ご飯を食べさせてもらう生活が続いた。沙津樹は、絵を描くのが大好きで暇さえあれば近くにある白い紙に何かを書いていた。小学校の高学年当たりから父親である私に対しする若干の反抗期もあったが、中学生になると買っておいた惣菜等を自分で弁当に詰めるようになった。また漫画を描くようになり、絵を描くことへの関心はさらに高まっていった。

中学では、特に勉強していたわけではないがクラスで真ん中より少し上程度の成績だったように思う。中学 2 年の頃、祖父が 1 か月の入院の後に亡くなった。中学 3 年の春、高校進学について考える時期になって沙津樹から出た希望は、県内の公立高校で唯一美術コースのあるところへの進学だった。亡くなった母親が小さい頃、絵を描くことが大好きだったことを祖父母から聞かされていたのかもしれない。少し複雑な思

いがあったが、それもいいかと考え、希望をサポートすることにした。公立高校の入学試験に前期、後期ができて間もない時期であったが、前期の入試で無事に合格した。

(2) 高校で

高校とはいえ、美術コースではデッサンの基礎をしっかり学び、夏休みになると泊まりで写生にも出かけていた。しかし、しばらくすると絵を描くことへの関心が薄れて行くのが分かった。2 年になると美術コース全体でイタリアへの研修旅行があった。「最後の晩餐」などを見るとともに、イタリアの姉妹校との交流が主な目的だったが、研修旅行の前後、沙津樹の醒めていることが気になった。

高校生の間、沙津樹は箏曲部に所属していた。中学まで琴に触ったことはないはずなのだが、高校に入ってすぐに琴を始めた。後になって分かったことは、進学した高校の箏曲部は、県大会の上位常連校で、毎年、高文連の全国大会に参加していた。箏曲の合奏のチームに入れば、全国大会に出場できると考えたようである。実際に、2 年生、3 年生の 2 回、全国大会に出場している。本人いわく、高校生の時は、本当に毎日、琴を弾いていたという。高校の文化祭での演奏を聞きにいったことを覚えている。

高校 2 年の夏ごろからであったろうか、予備校に通いたいというようになった。話を聞いていくと、高校の授業の中で特に倫理が面白く、大学では哲学を勉強したいというのである。漫画から美術、美術から箏曲、そこから哲学という目まぐるしい変化であった。

予備校の現役生向けのコースに通うようになったが、そこでの成績はよく分からない。それまで、真剣に勉強してきたわけではないので、そこそこの成績だったのではないだろうか。その時点では、沙津樹が最終的に目指した大学に合格できる状況にはなかったと思う。しばらくすると志望大学を絞り込み始めた。AO 入試の出願条件を調べ、自分に可能性のあるところを探し出し、英検 2 級と高校の評定平均４．０を条件としている大学の哲学科を目指す目標とした。

3 年生の初夏に受けた英検で何とか 2 級をクリアし、評定平均も４．０を超えることができた。秋には AO 入試を受けこれまた合格することができた。AO 入試では、本人及び高校からの志願理由書や成績等の書類と面接で合否が決まる。当然のことだが、面接する教員の興味を引く面白いキャリアの受験生が有利になる。沙津樹のように、ごく普通の県立高校で美術コースに在籍し、箏曲で全国大会の出場経験があるというのは、本人はそうは考えていなかったようだが、極めて有利なバックグラウンドであった。

(3) 哲学科へ進学して

大学では、哲学科ではあったが正確には臨床哲学といわれる分野のうち、ターミナルケアやグリーフケアに関心があったようである。専門科目が始まるまでの 2 年間、リベラルアーツ系の科目はあまり面白くなかったと思われる。高校時代、英語には少し自信があったようなのだが、英語のクラスを能力別に設定している大学では、成績の良い英語のクラスには入れず、また心理学などはすべて英語での授業で苦労していた。あまりよい成績ではなかったが、4 年生になる頃から大学院への進学を希望するよう

になった。

大学院に入るとともに、「ランパスの会」という病院ボランテイアのグループに入り、週に 1 回、神奈川県立がんセンターに通うようになった。修士論文を書くに当たって、ターミナルケアの現場を自分の目で見ておきたかったようである。

なぜ大学院への進学を希望したのか、想像だが、早くなくなった母親が当時としては珍しく大学院で中国語を学んでいた。母親のことを祖父母からいろいろと聞かされていて、自分も大学院進学を考えたというのが一つめの理由であろう。もう一つは、大学での勉強に納得がいかなかったことらしい。ただし、博士後期課程まで進学して研究者や大学教員を目指す気持ちはまったくなかった。大学院の面接試験では、前期課程修了後は介護福祉施設で働きたいと答えている。

大学院博士前期課程を 2 年で修了し、教員の勧めもあって大学に附置されているグリーフケア研究所でリサーチアシスタントとして 1 年間お手伝いをすることになった。研究所の所長である島薗進先生や、スピリチュアル学会の仕事で日野原重明先生、柏木哲夫先生と関わり、スピリチュアル看護の河正子先生などとも話をする機会があったようである。これまた本人はあまり意識していないのだが、この分野の日本を代表する人たちと 25 歳の時点で繋がっていたあというのは、とても大きな財産であろう。

リサーチアシスタントとしての一年間の後半、自らすすんで介護職員初任者研修を受けに行った。大学、大学院での勉強に比べて使用しているテキスト、練習問題のレベルが違うことにかなり戸惑っていたが、約半年間研修に通いその後、私の母親が晩年を過ごした特別養護老人ホームを訪ね、就職を果たした。施設長をしていた方が、私の母を覚えていて、割とすんなり就職は決まったのだが、法人の皆さんには異邦人に見えたのではないだろうか。大学院を出てそのうえで介護の現場に入ってくる人間に対し、現場の人たちの思いはどのようなものであったろうか。

勤め始めて 3 カ月ほどする頃、沙津樹から相談があった。どうやら先輩職員からあれもできない、これもまかせられないと、有りがちな可愛がられ方をしたようである。法人の方で配慮してくれ、一か月休んだ後、養護老人ホームの担当となった。この後は、養護のお年寄りのケアに早く溶け込み、翌年の 3 月末まで勤めた。

沙津樹には、大学時代から交際していた人がいて、その彼と結婚するため 4 月 2 日に栃木県に引っ越ししていった。本人は結婚式も考えていたようなのだが、相談された私は、結婚するのはいいけれど、お願いだから結婚式はやめてほしいと懇願した。どう考えても花嫁の父として泣き出すに違いない。私の思いを察してか、彼の両親と東京で会食をするだけで二人は結婚した。結婚から一カ月程すると、沙津樹は新居からほど近い社会福祉法人を訪ね、パートで介護の仕事を再開した。本人は、540 日以上勤務した後、介護職員実務者研修を受講して介護福祉士国家試験を受験したいと考えているようだった。

月に一～二回、祖母の顔を見るために帰ってくる生活が一年四か月ほど続いたのち、祖母の 88 回目の誕生日が過ぎてしばらくしたところで、祖母は入院した。一週間の入

院の後、祖母が亡くなった。二人の子どもたちは、病院で臨終に立ち会った。夏の厚い時期でもあったので、そのあとすぐに通夜と告別式を行い、祖母は旅立った。沙津樹が大学、大学院でスピリチュアルケア、グリーフケアについて臨床哲学の立場から勉強し、さらに介護の仕事を選んだのは、祖母を看取るためであったことを、彼女の口から聞くことができた。覚悟は出来ていたようではあるが、それでも沙津樹の目に涙が溢れる場面があった。

(4) 沙津樹たちのために

私は、大学で社会福祉学科の教員をするとともに、10 年前から介護福祉士の国家試験に関わってきている。その中で、介護福祉に関して様々なことを考えてきた。

一般的には、介護は 3 K（きつい、汚い、給料が安い）といわれ続けてきた。そうした中で、志を持った若者が介護福祉の仕事を積極的に選択してくれるようになるには、どうしたらよいのか、これは、私たち社会福祉に関わる者たちに課せられた大きな課題である。しかしながら、いわゆる社会福祉に係る大学教員はあまり関心がなさそうにみえる。あたかも介護福祉は、社会福祉の中に含まれていないかのようである。

一方で、学内の介護福祉の教員と議論をしていて、介護福祉に対する積極的な意味付け、若い人が自ら介護福祉を選ぼうとするためのインセンティブとなるような言説があまり出てこないのも気になるところである。「介護福祉は楽しい」「介護は面白い」というような言葉は聞かれるのだが、どこが楽しいのか、なぜ面白いと思うのかまで言説化しなければ、その思いを伝えることはできないのではないか。

沙津樹だけでなく、私の勤めている大学で介護福祉を学び現場に出て行く学生のように、若者たちが積極的な動機に基き介護福祉の道を自ら進んで選ぶ社会をつくるためには、単に 3 K を否定するのではなく、また「介護福祉は楽しい」「介護は面白い」というレベルでもなく、介護にはどのような意義があるのかを、積極的に言語化、言説化することが求められている。

あえて生意気なことを述べるが、社会福祉の分野、ましてや介護福祉の分野でそれを担える人材は残念ながらほとんどいないと思われる。私は、大学で社会福祉を学んだことはない。ましてや介護福祉の理論を学んだことも、実践を経験したこともない。だが、昭和 63 年 4 月に高齢者福祉の仕事に関わり始めてから約 30 年に渡り、仕事として社会福祉のことを考え続けてきたし、その約半分の期間は介護福祉に関わっていた。大学教員としての私に残された時間は次第に少なくなってきたが、残った時間の中で介護福祉、さらには対人援助に関し、私なりの考え方の整理を試み、若い人に引き継いでいくことが残された大きな宿題である。

次回以降は、こうした課題意識の延長線で考えてきたことについて述べることとしたい。

町家合宿 in 京都 vol.5
～古着交換についてその②～

山下桂永子

☆感想文に見る古着交換

11 年間続いている町家合宿では、どこに行くのか、何をするのかは、基本的には当日参加者の希望を聞きながらすすめていく。その中で、あらかじめ行うことを決めていて、初回から毎回行っているイベントが「古着交換」である。

行き当たりばったりの町家合宿の中で、この古着交換は、唯一何をどうするのかという見通しが持てる（どうなるのかはわからないけれど）ものであり、2 日目の午後にそれがあって、そこにたどりつけばなんとなかなるさという、その見通しが私に大きな安心を与えてくれているし、2 泊 3 日を乗り切る支えになっているように思う。

毎年任意で書いてもらっている町家合宿の感想文には、古着交換のことが書かれていることがとても多い。参加者本人だけでなく、保護者の感想文でも、参加者が帰宅したあとに、古着交換のことを多く語っていたこともよく書かれている。今回はその一部を抜粋して、その時の参加者の様子とともに紹介したい。

A さん 1 回目

「普段スカートはいたこと無いから、すごい緊張した。」

2 回目

「この日は、楽しみなような楽しみじゃないような複雑な気持ちで家から町家に行きました。理由はもちろん古着屋でのイベント。でも楽しみが勝ってた気がします。」

「古着屋さんでは 1 人で不安だったので K さん（筆者のこと）につきまとってました。でもワクワクでした～。楽しかった！」

「今年はスカートじゃなかったので去年のように緊張はしたけどパニックにはならずにすみました(^_^)」

「駅で他の人たちを待って、探してるとき楽しかった！」「去年と同じくこの瞬間の嬉しさというか楽しさというかは忘れられんもんがあります。」

A さん母

「参加するかどうかをギリギリまで迷っていました。古着屋さんでのことが印象深かったようです」

☆A さんの古着交換

A さんは、10 年程前、中学校 3 年生と高校 1 年生のときに参加してくれた女の子である。A さんは不安と緊張で、初回の夜はなかなか眠ることができず、真夜中に「せんせい、おきてるの？ねないの？」と私に聞いてきた。私は「おきてるよ、2 日ぐらい私は寝なくてもだいじょうぶだよ」などと笑って返していた。何とか A さんに安心してもらいたいと思って言葉を返していたのだが、体力の衰えとともに最近では真っ先に寝ようとする今の私には到底言えないセリフである。

古着交換では、普段はスカートをはかない少年のような風貌の A さんが、ワンピースに麦藁帽子という、一気に可憐な少女に大変身したことで、他の参加者やスタッフからも大絶賛であった。A さんはその喝采に恥ずかしながらも笑顔で応え、それまでかたくなに拒否していた写真撮影にも、古着を着たときには自然な笑顔で写ることができていた。

A さんは体調不良もあって、2 回目の参加を当日まで迷っていたようだったが、結果的には、2 回目は、夜は町家には泊まらずに自宅に戻り、翌朝の出発に合わせてまた町家に来るという形で参加してくれた。1 回目に夜に眠れなかったのがかなりつらかったのだと思うし、それでもどんな形であれ、参加しようと思ってくれたことは、私にはとてもうれしいことであった。

今にして思えば、A さんは新しいことや慣れないことに緊張や不安を感じやすい自分が、一体どうすれば少しでも安心し、あるいは楽しむことができるのかをしっかり考えることができる子なのだなあと感心する。古着交換でも、A さんは 1 回目の経験から、私と一緒にいることで、古着選びの不安を乗り切ろうとしたり、1 回目ほど緊張しなかったと冷静に振り返ることができている。そして「この瞬間の嬉しさと楽しさが忘れられん」と書いてくれるほど、自分の選んだ服を着た他の参加者を見ることや、変化した自分を披露するその瞬間を楽しんでいてくれていたようである。

古着屋の様子

Bくん1回目
「服選びは、目的の服をさがすのが大変で、なかなか無くて、服選びで疲れはてていた。」
「集まったときは、自分がけっこう普通の感じの服だったから逆に目だってるんじゃないかと思いました」「不思議な集団だったんだろうな」
2回目
「他人の服を選んでたので、けっこうなやみました。昨年もなやんでたなあ・・・」
「自分で言うのもなんですが、選んだ服を着てみたら『あ、似合うかも』とか思ったりして。でもみんな似合ってましたね。楽しかったです」
Bくん母
「買い物に行って古着屋さんが気に入ったこと、初めて会ったお友達と話が出来たことなど話してくれました。」

☆Bくんの古着交換

Bくんは、Aさんと同じ時期に何度か参加してくれた、Aさんより一つ年上の男の子である。Bくんは1回目の古着交換で、感想文の通り疲れ果てていた。2回目の感想文に「昨年もなやんでたなあ」と書いてあるが、悩んでいたなんてもんじゃない。苦悩、懊悩、疲労困憊で町家に帰ってぐったりしていた。2回目参加時も、古着交換をすることが私から告げられるや、驚愕の表情を浮かべた。言葉には出さないものの明らかに「今年もするのか一困った」という表情だった。それでもBくんはまじめな性格なので、誰かに相談するでもなく、黙々と古着を選んでいたが、1回目の時ほどの苦しさはなく、(まあそれでもそこそこ辛そうだったが)、感想文では「楽しかったです」と言える余裕さえ見せている。

Aさんと Bくんは、普段寡黙な Bくんが、古着交換で変身した Aさんを見て、はっきりと「めっちゃかわいい！」と言っていたことが印象深い。家に帰ってからも Aさんのことを、「かわいかった。あんなサラサラの髪見たことない」と言っていたそうで、その1ヵ月後になんと Bくんがストレートパーマをあてたという話をお母さんからうかがった。古着交換での、辛いけれど、大変だけれど、自分だけではなく、他の誰かの変化を楽しいと感じて喜び合う、その雰囲気が、Bくん自身にも変化をもたらしたのだと思う。

古着をプレゼントされるところ。

C さん 1 回目
「買ってもらった服をきる･･･ふわふわすかーと･･･」
2 回目
「Y 先生（筆者）ゴメン、またサイズ考えないで Mens ものかってしまって･･･。」
「帰ってきて、しましまニーハイはいてみた」
C さん母
「古着の交換は Y 先生だったと服を見せてくれました。去年のはあまりに可愛すぎて思い出に置いてますが、今年のスカートははくのでレギンスを買ってほしいと言われました。B くんはとてもかっこよくて〇〇〇〇〇（男性歌手）みたいだった、などなど言っていました。

☆C さんの古着交換

C さんは、何度か町家合宿に参加してくれていたが、なぜか古着交換ではこのとき 2 年連続私とペアになっている。C さんは小柄で髪はショートカット、普段は黒っぽい服装だったので、明るいかわいらしい服装をしてほしいと思い、選んだところ、1 年目は着てはくれたものの、普段の服装とはかけ離れすぎていたようである。2 年目は少し色見は抑え目に、しかしながらミニスカートとニーハイソックスをプレゼントしたところ、町家合宿後にも身につけようと思ってくれていたと感想文にある。

古着選びは本当にとても難しい。ただ普段のイメージと違う服装であればいいというものではないし､似合うと思ってもサイズが合わないこともある｡C さんとは長いつきあいで、よくよくお互いの普段の服装がわかっているだけに、思い切って方向性を振りきれない難しさもあった。そのときにペアになった 2 人の関係性というのも、かなり古着選びには影響しているように思う。

古着選びは真剣そのもの。

D さん
1 回目
「初銭湯は感動でした。何より楽しかったのはペアを組んで服を選ぶというイベント（？）」
2 回目
「人をおとしめるのって楽しい！（笑）」
D さん母
「ムシ刺されと、古着屋でコーディネート、銭湯でコーヒー牛乳とジャンプ（漫画）の話をしていました。充実した顔で帰ってきました」
E さん母
「すごく楽しかったと言っていました。いままで他人の服を選んだり選んでもらったりしたことがなく、相手の事だけを思って集中できたようです」

☆D さんの古着交換

D さんは高校生の時からの参加で、大学生に進学してからも何度か町家合宿には参加してくれた女の子である。あるときは、「バイトがあるので、二日目の古着から参加します」というぐらい、古着交換を楽しんでくれていた。しかも大学ではコスプレサークルに入っていたとも聞いている。D さんの感想文からは、自分の変化を楽しみ、なおかつ、人を変えるということを楽しめるようになっていることがわかる。誰かが喜んだり驚いたりする顔を、その瞬間を想像して一生懸命選ぶことが、自分の喜びになることを「人をおとしめるのって楽しい」の一言で言いきるその D さんの表現力に脱帽するばかりである。

古着を着て夜景散策へ。

☆古着交換に思うこと

誰かと物をプレゼントし合い、身につけて披露しあう。そういうことが、普段の生活にもないわけではない。誕生日やクリスマスなど、半強制的な相互プレゼントシステムが発

動する場面は世の中にはたくさんある。しかしながら不登校やひきこもりの経験があると、人との関わりの機会が少なくなり、このプレゼントシステム発動の機会は減ることになる。しかも援助される側になりがちな彼らはプレゼントをされても、それを外で披露する機会は少なく（フリースクールの登校日に、古着交換でもらった装いで現れた参加者はいたらしい)、まして誰かにプレゼントをするという経験は本当に少ないのではないだろうか。

そんな中、遊びとはいえ、決められたルールの中で、誰かのために懸命に考えてプレゼントを選び手渡し、誰かが懸命に考えてくれたプレゼントを受け取り身につけるということに、変化は起きる。懸命に考えた自分が起こす相手の変化に期待し、懸命に考えてくれた相手へ自分の変化を贈り返す。そしてその変化は、町家合宿後にも起きているのだと、今回、古着交換に焦点を当てて、感想文を読んでみて改めて感じている。

最後に、スタッフの K さんの感想を紹介する。

「2000 円で洋服をコーディネートする。この時代、むちゃな。皆も高校生で、お財布にお小遣いだって入っている。黙っていれば、インチキして 2000 円以上の洋服を用意することだってできる。誰もインチキしなかった。ルール違反をしなかった。限られた中で、考えて動いて、自分の目的、欲求を達成する。これって、法律が張り巡った日本の社会で、自分のやりたいことを最大限に行うために、どうにか思考錯誤するのと一緒だなぁと。気に入らないからといって、ルールは破れない。破っちゃいけない。欲求が叶わないからといって、怒らない、不貞腐れない、暴力を振るわない、落ちこまない。この力は生きていく上で本当に必要な力なんじゃないか、と思いました。」

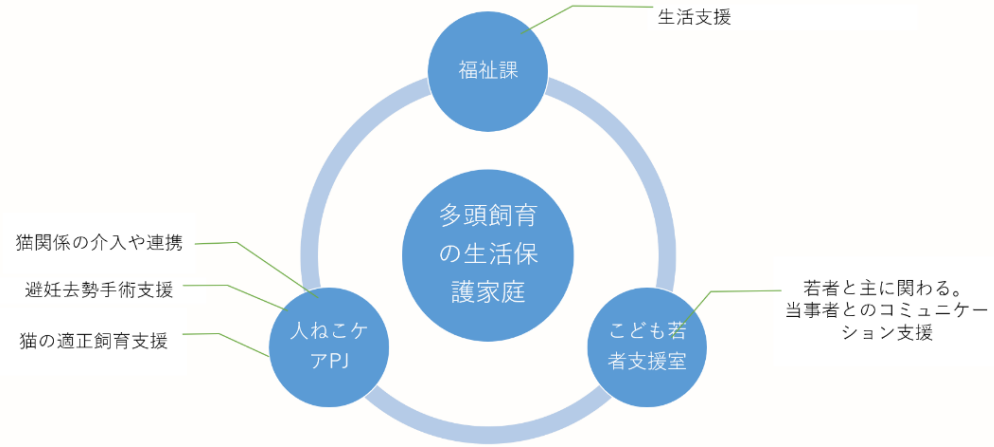
事例紹介

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」を発足する最後のきっかけであり、最初に支援を行ったケースを紹介したい。猫から目線でいえば「猫の多頭飼育」、行政の福祉事務所目線でいえば「生活保護世帯」といえる、ある家族と猫たちの話である。

これはあくまで１ケースの事例紹介であり、すべての多頭飼育問題に通用する解決策を記述しているものではない。多頭飼育問題の「問題」も「介入方法」も多様である。それでも、この取り組みが何かのヒントになればといいと思い紹介することにした。

人ねこケア PJ が係わるに至った経緯

「若者支援機関」のカウンセラー（臨床心理士）が、担当している青年の家庭において、猫が２，３０頭ほどおり、現在も増えている状況であることを危惧し、私に相談をしてくれた。その後、青年の家庭が生活保護を受給していることから、生活支援の主体である福祉事務所のケースワーカーより正式に協力の依頼があった。



家庭と猫の状況

家族３人暮らし（個人情報保護のため、一部改変しています)、約１０年前にロシアンブルーのオス猫を飼育しはじめた。当時は生活保護を受給していなかったが、しばらくして突然の病気などが重なり、生活保護を受給するようになった。数年後、近所でノラ猫が出産し、その子猫２頭（メス）を室内に入れた。そこから室内で繁殖を繰り返していった。多産多死の状態が続き、初回家庭訪問時には７７頭になっていた。初回訪問時の聞き取りによると、ひと月に３頭ほどのペースで亡くなっているが、それを上回るペースの出産がある。

室内の状況としては、襖など猫の爪とぎ跡による損傷が激しい箇所もあるが、床にゴミが散乱している様子もなく、荷物もある程度整頓されていた（猫の多頭飼育の場合、ゴミ屋敷問題がセットになっているケースが多い)。猫の飲み水も清潔な水が２か所に設置してあった。猫は室内ノラ猫状態ではなく、人懐っこく部外者の私にも物おじせず自由行動をしていた。適切な飼育環境とはいいがたいが、ご家族なりの猫への愛情は感じられた。

ねこが絡む問題

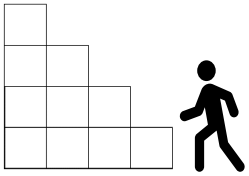
- ペット不可の市営住宅に住んでおり、すでに近隣住民から苦情が出ている。
- 生活保護受給世帯であるが、猫が 77 頭おり、飼育費への出費が多すぎる。
- 避妊去勢手術をしていないため、現在も増え続けている。
- 近親交配が進み、猫の状態が良くない。ネグレクト（動物愛護法）寸前である。

人ねこケアの介入方針

- 全頭に避妊去勢手術を実施し、長期的目線で苦情と飼育ゼロに近づける。
  - 避妊去勢手術をすることで、猫の尿の中でも特に刺激臭のマーキングが無くなる。また室内のメス猫の発情期の声を聞き、ノラ猫が家の外壁にマーキングする行動も抑えられる。また、近親交配により増えているため、体が弱く、平均寿命が３～４歳程度しかないため、５年で１ケタになる可能性が高い。

多頭飼育の場合、飼い主さんでも何頭いるのか把握できていないことが多く、まずは個体把握が必要だ。１頭ずつの猫プロフィールが作ることができればベスト、せめてオスメスのおおよその頭数を把握したい。それをもとに、避妊去勢手術にかかる予算を算出したり、無料避妊去勢手術の支援申請をしたりすることができる。目標を階段式に捉えると以下のように細分化することができる。

・全頭の不妊手術をしたい
・不妊手術ための個体把握をしたい
・個体把握をするための準備をしたい
・お家に介入するため、適度な信頼関係を築きたい



これを、下から一段ずつ登っていく形で介入を行った。
いくつかエピソードを紹介する。

首輪づくり

ケースワーカーさんに同行した初回訪問で、猫たちの状況をご家族から見聞きし、猫たちがとても人懐っこいことが分かった。そこで、猫の個体把握は、赤と黒の簡易首輪を使って実施することにした。首輪は、購入するのではなく知り合いの動物看護士さんが手作りで作っていた簡易首輪を参考に手作りする事にした。ケースワーカーさんとカウンセラーさんと一緒に家庭訪問し、ご家族と一緒に作業をすることで、皆で取り組んでいるという感覚の共有と、雑談をすることで、ご家族の理解や関係性の構築に役立つと考えた。
実際、作業時間は色んな話が出たり、器用な面が分かったりして面白いひと時だった。１時間と決めた作業時間では、予定の半分程度しか作成できなかったが、翌日ご家族だけで残りをすべて作ったと電話をしてくれ、とても嬉しかった。

ねこプロフィールの作成

人ねこケア PJ２名と、ご家族と協力し、ねこプロフィールを作成した。作った首輪を使って、１頭ずつ写真をとっていく。ご家族の１名が猫を抱っこし、もう１名が性別や年齢を言い、人ねこケア PJ メンバーの１人が PC に記入、残りの１人が首輪をつけ、写真を撮影。全頭に首輪がつくまで繰り返した。ご家族の見立てでは３０頭くらいでったが、実際に集計すると、７６頭いることが分かった（のちに７７頭だったことがわかる）。飼い主さんのイメージより猫が倍数近くいることは多頭飼育ケースではよく聞く話である。

オス	メス	去勢済み	避妊済み	計
39	35	2	0	76

子猫	１歳	２歳	３歳	４歳	５歳	６歳	７歳	８歳	９歳	１０歳
6	5	11	18	11	10	11	1	0	0	1

シャム	キジトラ	グレー	白灰	白黒	黒	白	キジ白	サバ白	サバトラ
9	6	21	14	7	14	1	1	2	1

脳性マヒ	尿ケア	腎臓ケア	内蔵疾患	てんかん
4	20	2	1	1

（公財）どうぶつ基金「さくらねこ無料不妊手術事業　多頭飼育崩壊支援」への申請

一般病院で猫の避妊去勢手術を受けさせようと思うと、１頭あたり１万円～３万円ほどかかる。手術前に血液検査やワクチン接種を義務付けている病院であればさらに１頭あたり２万円かかる場合も。１頭２万円と仮定しても 76 頭いれば 152 万円かかることになる。のらねこの不妊手術専門病院や動物愛護団体が経営している病院であれば１頭 5,000 円程度で実施してくれるが、それでも 76 頭いれば 38 万円ほどかかってしまう。そこで、今回は、公益社団法人どうぶつ基金が実施している「さくらねこ無料不妊手術事業　多頭飼育崩壊支援」に申請することにした。諸条件を満たし、審査に通れば、どうぶつ基金の協力病院で全頭分の不妊手術を無料で受けることができる。必要書類を作成し、飼い主さんに説明の上、同意をもらい申請を行った。

ベランダのゴミ掃除

マンションの１階が自宅であることから、ベランダにつまれている段ボールなどの荷物に、ノラ猫がおしっこやマーキングをしており、強い臭いがした。そこで、近隣への臭い被害軽減のためベランダのゴミの撤去・掃除を実施した。作業に取り掛かると段ボールの１つに足長バチが巣をつくっていたことが判明。私はかなりひるんだが、飼い主さんが殺虫剤で撃退してくれた。ハチにビビる私は、書類関係の説明を室内で行い、カウンセラーさんと飼い主さんで撤去作業にあたってくれた。出てきた粗大ごみは、サイズを確認し、作業完了後、ケースワーカーさんに報告に行き、粗大ごみ引き取りシールをもらうための申請手続きを準備してもらった。

支援物資を届ける・Amazon 欲しいものリストを作成

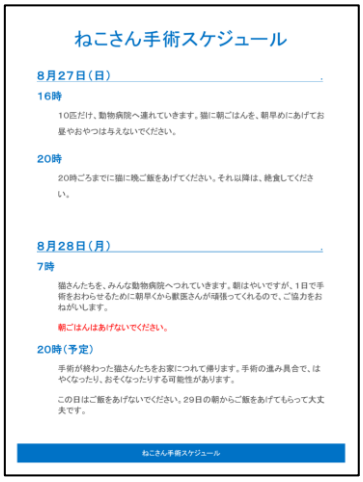
どうぶつ基金への申請が受理され、「京都ぜろの会」という京都市内の動物病院で、一斉避妊去勢手術を約１カ月後に実施してもらえることが決まった。１日病院を今回のケースの猫たちの手術に空けてくださり、１日で全頭の避妊去勢手術を実施する。当日は大変ではあるが、何十回に分けて動物病院に運んでいたら日数がかかりすぎてしまう。また、少しずつ時間を空けて実施すると、全頭の避妊去勢手術をすると決めたはずの飼い主さんの心が揺らいでしまう可能性もある。そうしてゆっくり進めているうちに、また新たな出産が始まり・・・という後退の危険性も出てくる。そこで、今回は一度に全頭の避妊去勢手術を実施することにした。

手術まで１ヵ月と決まり、なるべく手術の負担を軽くするために、痩せている猫たちを太らせ体力をつけることにした。Amazon 欲しいものリストを作成し、人ねこケア PJ の Facebook や HP で支援を呼びかけた。届いた支援物資を３回に分けて合計 70kg ほどのキャットフードを届けた。動物病院へ猫を運ぶ際に必要な洗濯ネットやペットシートなども同様に寄付を募った。ケージはどうぶつ基金と、協力してくださったボランティアさんからお借りし、76 個用意した。

一斉避妊去勢手術

●事前説明

一斉避妊去勢手術の前日にスケジュールと注意事項を渡して説明した。


ねこさん手術スケジュール

8月27日（日）

16時

10匹だけ、動物病院へ連れていきます。猫に朝ごはんを、朝早めにあげてお昼やおやつは与えないでください。

20時

20時ごろまでに猫に晩ご飯をあげてください。それ以降は、絶食してください。

8月28日（月）

7時

猫さんたちを、みんな動物病院へつれていきます。朝はやいですが、1日で手術をおわらせるために朝早くから獣医さんが頑張ってくれるので、ご協力をおねがいします。

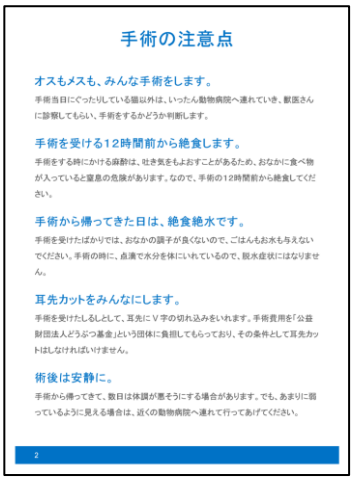
朝ごはんはあげないでください。

20時（予定）

手術が終わった猫さんたちをお家につれて帰ります。手術の進み具合で、はやくなったり、おそくなったりする可能性があります。

この日はご飯をあげないでください。29日の朝からご飯をあげてもらって大丈夫です。

ねこさん手術スケジュール


手術の注意点

オスもメスも、みんな手術をします。

手術当日にぐったりしている猫以外は、いったん動物病院へ連れていき、獣医さんに診察してもらい、手術をするかどうか判断します。

手術を受ける12時間前から絶食します。

手術をする時にかける麻酔は、吐き気をもよおすことがあるため、おなかに食べ物が入っていると窒息の危険があります。なので、手術の12時間前から絶食してください。

手術から帰ってきた日は、絶食絶水です。

手術を受けたばかりでは、おなかの調子が良くないので、ごはんもお水も与えないでください。手術の時に、点滴で水分を体にいれているので、脱水症状にはなりません。

耳先カットをみんなにします。

手術を受けたしるしとして、耳先にＶ字の切れ込みをいれます。手術費用を「公益財団法人どうぶつ基金」という団体に負担してもらっており、その条件として耳先カットはしなければいけません。

術後は安静に。

手術から帰ってきて、数日は体調が悪そうにする場合があります。でも、あまりに弱っているように見える場合は、近くの動物病院へ連れて行ってあげてください。

2

●猫の搬出

１頭ずつ猫の名前を確認し、ケージに入れタグをつけていく。ハイエースで２往復し動物病院に搬入した。ご家族から猫を受け取る直接の対応はカウンセラーさんがメインで担った。

●避妊去勢手術

動物病院に搬入し、手術器具洗いや術後ケアを人ねこケアのボランティアで担った。半数の猫が手術後に麻酔から覚めた時点で、お家にリターンした。
里親に出せそうな子猫４頭と母猫１頭のエイズ・白血病検査を実施した。

子猫４頭を新しい飼い主に譲渡

一斉避妊去勢手術の際に、生後４、５か月の子猫４頭のエイズ白血病検査を実施したところ、３頭がエイズ陽性、白血病は全頭陰性であった。生い立ちや、エイズ陽性であることを説明したうえで、４頭の新しい探しを実施し、譲渡した。

【譲渡の流れ】Web サイト「ペットのお家」に掲載⇒希望者から連絡がある⇒電話とメールで家庭環境、先住猫の有無を確認し飼い主候補者を選出⇒家庭でのマッチング期間として、トライアルを約２週間実施⇒再度訪問し、問題がなければ譲渡証を交わし正式譲渡として所有権を移行。

新しい飼い主さんから送られてきた写真

お金の状況

・HP にて、物品寄付（Amazon 欲しいものリストを作成し紹介）を呼びかけた。

区分	内容	科目	詳細	金額	
費用	事業費	消耗品費	首輪用紐等	¥648	現金
費用	事業費	消耗品費	首輪用紐等	¥1,512	現金
費用	事業費	消耗品費	養生テープ	¥408	現金
費用	事業費	消耗品費	セロテープ等	¥596	現金
費用	事業費	消耗品費	ペットシート等	¥4,706	現金
費用	事業費	獣医療費	エイズ白血病検査費5頭分	¥15,000	現金
収益	その他収益	物資寄付	M様（キャットフード）	¥0	物資支援
収益	その他収益	物資寄付	N様（キャットフード）	¥0	物資支援
収益	その他収益	物資寄付	K様（キャットフード）	¥0	物資支援
収益	その他収益	物資寄付	匿名（'ビニールシート×5）	¥0	物資支援
収益	その他収益	物資寄付	匿名（'洗濯ネット×20）	¥0	物資支援
収益	その他収益	物資寄付	K様（洗濯ネット×54）	¥0	物資支援
収益	受取寄付金	寄付金	D様	¥6,500	現金
収益	受取寄付金	寄付金	O様（里親さん）	¥5,000	現金
				支出	**¥22,870**
				寄付	**¥11,500**

・一番高額な避妊去勢手術費は（公財）どうぶつ基金の事業を利用し無料で済んでいる。
・一斉避妊去勢手術に際して使用したハイエースのレンタル費、ガソリン代は、協力してくださったボランティアさんが負担してくださった。
・交通費はそれぞれ自己負担している。

多くの方がボランティアとして協力してくださったことにより、なんとか乗り切れた。

スケジュール

今回紹介した内容がどのくらいのペース配分で進んだのか、下記にスケジュールをまとめた。

日程	実施内容
6月1日	**ケース会議** ケースワーカー、支援コーディネーター、人ねこケアの３者で実施。情報の共有と方針の話し合い
6月5日	**初回家庭訪問** ケースワーカーさんに同行し、家庭訪問を実施
6月12日	**第２回家庭訪問（首輪づくり）** 個体把握のための首輪を当事者家族とケースワーカーさん、支援コーディネーターさん、人ねこケアで作成
6月25日	**第３回家庭訪問（個体把握）** 作成した首輪をつかって、猫プロフィールを作成。人ねこケア２名と、当事者家族と実施。７６頭見つかる
7月24日	**Amazon欲しいものリスト作成** キャットフード、ビニールシート、洗濯ネットの支援を呼びかける
7月25日	**第４回家庭訪問（ベランダのゴミ撤去・申請書作成）** ノラ猫のマーキング場所になっていたベランダのゴミを足長バチの巣ごと撤去。支援コーディネーターさんと当事者家族が実施。 どうぶつ基金の無料不妊手術支援を受けるために申請書を作成し、内容を説明をしたうえでサインと同意をもらう
7月26日	**どうぶつ基金無料不妊手術支援申請**
	第５～７回家庭訪問（物資支援・猫を太らせる） 7月30日、8月2日、8月20日、支援フードを届ける。猫の体調チェック
8月25日	**第８回家庭訪問（事前説明）** 一斉避妊去勢手術にむけ、当日の猫の搬出搬入の流れや、猫の絶食等の説明
8月27,28日	**一斉避妊去勢手術実施** 27日に10頭、28日に64頭の避妊去勢手術を京都ぜろの会で実施
8月30日	**第１０回家庭訪問（猫の体調チェックと子猫の写真撮影）**
8月31日	**子猫４匹里親募集開始**
9月9日	**子猫４匹トライアル開始**
9月23,24日	**子猫正式譲渡**

ご家族のお話

人もねこも一緒に支援プロジェクトとして始めた関わったケースの経過を紹介した。手探りの状態での支援のため改善の余地は沢山ある。また、避妊去勢手術が終わっただけで、

ご家族と猫の生活は続いている。今回このマガジンを書くことをきっかけに、飼い主さんご家族に今回の取り組みをどう感じたか、これからどうしていきたいかなどぶっちゃけた意見を教えてもらおうと思った。

小池：これまでを振り返って、なんでもいいのでご意見ください。

●いろんな「人に猫を保健所に引き取ってもらえ」とかなりきつく言われて、限界がきていた。もうどうしようもないと思って保健所にも電話したが、引き取り料が 1 匹 6000 円と高額で無理だった。藁にも縋る思いで愛護団体なども調べたがやはり引き取り料があった。自分たちではどうしようもない状態になってしまっていた。つながることができて本当にありがたかった。

●もとはと言えば、猫の交配を防げなかった自分たちの責任だということはよくわかっている。でも、ずっと一緒に生活してきているこの子達は家族。殺せと言うが、自分の子ども兄弟を殺せと言われているような気持ちだった。

●ここで、お産をして、子猫がそだっていく様子をみて、『あぁ自分たちと一緒なんだなぁ』と思った。「この子たち」というと外の人は「ただの猫だろ」というが、自分たちにとってはそうじゃない。

小池：初めてお会いしてから手術完了まで、2 か月とかなり早いペースで進めてしまいましたが、実際困ったり、改善してほしかったことはありますか？

●ペースは問題なかった。自分たちではどうしようもなかったので、いろいろ進めてくれるのはありがたかった。

●全頭に避妊去勢手術をするということで手術したが（体調が深刻だった 2 頭は手術していない）やっぱり、命を縮めてしまったんじゃないかと思う子が何頭かいた。それが辛かった。そんなこといってたらずっと手術できないのは分かるけど、やっぱり手術したから死ん　じゃったんじゃないかという後悔があった。

●子猫 4 匹を里親に出せてよかったと思う反面、ふとさみしくなる。

●今いる子達は最後まで看取ってやりたいと思う。

●同じような状況の人にアドバイスするなら「不妊手術だけは早くしといた方がいい」といってあげたい。

まとめ

避妊去勢手術や子猫の里親探しといった目的は達成されたが、猫とご家族の生活はこれからも続いていく。人もねこも一緒に支援プロジェクトとして、これかの経過も見届けていきたいと思う。

おわり

小池英梨子

NPO 法人 FLC 安心とつながりのコミュニティづくりネットワーク

「人もねこも一緒に支援プロジェクト」　プロジェクト代表

「ねこから目線。」としてフリーでも活動中。

先人の知恵から
18

かうんせりんぐるうむ　かかし

河 岸　由 里 子

最近、子どもたちと話していて、諺が中々通じないと感じている。あまり知らないのである。中学受験をする子は、塾などで諺を学んでいるだろうが、学校でほとんど諺を学んでいない。　新しい諺も出来ているくらいなのに、諺は生活上必要ないということだろうか？古くから言われていることは、時代が変わっても通用すると思う。

ところで、不思議と自閉性スペクトラムの傾向を持つ子ども達には、諺がすんなり入ったりする。この反応がとても興味深い。彼らにとって諺の様に古いものがしっくりくるのかもしれない。

今回は、き行から次の７つを挙げてみた。

- 聞いて極楽見て地獄
- 聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥
- 聞くは気の毒、見るは目の毒
- 雉も鳴かずば撃たれまい
- 疑心暗鬼を生ず
- 木強ければ則ち折る
- 木の長きを求むるものは必ず根本を固くす

＜聞いて極楽見て地獄＞

人から聞いていた話と実際に見たのとでは、全く違うことのたとえ。話に聞いていた所では極楽のようなことが、実際に見てみたら地獄のようだったということから。江戸いろはがるたの一つ。

赤ちゃんを産む前と後では、こんな気分になる母親もいると思う。赤ちゃんがおなかの中にいる時は、身体も重たく不自由だし、周りの人や自分自身も生まれるのを心待ちにしていて、「可愛いだろうなあ」とか「嬉しいだろうなあ」などと思ったりする。子育ては大変だけど楽しいなどと聞いていると、想像の中では、楽しいという方に重点が行きがちだ。責任重大だとか、すごく大変で眠れないなどと聞いている人は少ないし、そう思う人もいないわけではないが、楽しみの方が強いだろう。極楽とは言わないまでも、浮き浮きした気持ちになる。赤ちゃんの物を用意するのも又楽しい。しかし生まれてしばらくは本当に大変である。数時間ごとの授乳では、夜中でも容赦ない。夜中に何回も起きて授乳し、昼間も寝られるわけではない。ゲップをさせないと、戻してしまったりするし、おしめも度々交換しなければならない。これが何日も続くとなると、疲れがどんどんたまってきて、イライラすることだってある。

そんな時、夫の支えは大事である。ねぎらいの言葉の一つもかけてくれれば、日々の疲れも和らぐ。それを子育ては母親の仕事だという態度で、何かお願いするたびに、嫌な顔をされれば、頼みたくもなくなる。

子育てはいつまで経ってもあれこれ悩み事もあり、大変である。特に赤ちゃんの時期は、母親の体力は限界で、精神力だけで過すようなものだ。自分の時間など持ちようもない。

聴いていたのとは違う、思っていたのとは違うと感じる母親のためにも、現実をしっかり伝えた方が良いのではと思う。地獄とまでは言わないが、子育ては大変だと思っていれば、実際の子育てが、思ったより楽だったと思えるかもしれない。少子高齢化の中、子育てを美化しすぎるのはいかがなものかと思うので、この諺をあげてみた。

＜聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥＞

知らないことは恥ずかしがらず積極的に質問した方が良いという教え。知らないことを聴くのは、その時は恥ずかしいが、聞かない居れば、一生そのことを知らないまま恥ずかしい思いをして過ごすことになるということ「聞くは一旦の恥、聞かぬは末代の恥」ともいう。

子どもたちも大人も、人に何かを聞くことに抵抗感がある。子どもたちは幼児期に「何で？」とか「これ何？」としつこく聞いてくる時期がある。その質問攻めには辟易するものだが、興味が増大する時期は当然のことである。思春期ごろになると、自分で調べることもできるようになるが、調べることが面倒だと親に聞いたりする。しかし最近はググってみる子が多く、そうしてもらった方が楽だし正しい知識を得られると思っている親もいる。しかし、人にものを聞くという行為は、相手の人の様子を

みて、今聞いてよいときかどうか、どういう風に切り出さばよいか、なぜ聞くのかなど、色々考える行為を伴う。こうした配慮や、自分自身への問いかけはコミュニケーション能力をあげることに役立つ。自分でググって調べれば、答えを得られるかもしれないが、正しい答えばかりが載っているわけではない。辞書を引いたりという行為を面倒くさがって人に聞くというのがかつての子どもだったが、今はネットで調べる子が圧倒的だ。こういうところも子どもたちのコミュニケーション能力を下げているのではと思う。

一方、母親たちも同様で、子育てで悩むと多くの母親がネットで調べたり、ツイートしたりして答えを得ている。人と話すことが苦手という母親が増えている。保健師さんは母親の子育てを支援してくれる身近な支援者だ。最近は電話でも、メールでも対応するようになった。メールでの対応は生のやり取りとは少し違うが、それでも聞いてくれた方が良い。子育てで迷ったり悩んだりしたら保健師さんに聞いてみようと伝えているが、中々今時は難しい。

大人になるとこんなことも知らないのかと馬鹿にされる気がして、聞きづらいということがあるだろう。しかし、表題のことわざの様に、聞くことは一時の恥ではなるが、聞かないで勝手な行動をとったり、人に迷惑を掛けたり、ずっと知らないで過すことの方が大変なことになる。ググるだけではなく、もっと人と、生で関わって行ってほしいと思うこともありこの諺をあげてみた。

＜聞くは気の毒、見るは目の毒＞

知らずにいれば済むことを、なまじ見たり聞いたりすると、心を悩ませたり欲望が起こったりして、迷いの元になるということ。

世の中では、一つのことについて良いことも悪いことも、真偽を問わず、情報があふれている。子育てにおいても同様である。予防接種の副作用、母乳一筋、アトピーに対する食事療法、ステロイドの副作用、数え上げたらきりがない。病気や発達障がいついても、テレビで色々報道されていると、ついつい観てしまうのも仕方がない。

或いは、裕福な家庭の生活や、これが一般的な家庭の収入ですなどと報道されると、我が家はどうなのかと比較し、現実を再認識して辛くなってしまうことさえある。

新しい車の広告を見れば欲しいと思うし、通販を見ていらぬものを買ってしまうこともしばしばであろう。痩せる薬や健康器具の広告を見れば、買ってみたくなるのもダイエットしたい人にとっては当然である。広告には誇大広告もあるし、見聞きするものの真偽のほどは定かではないが、心理的に影響されるのは仕方がないし、それを見越しての広告である。

情報過多の時代に、正しくない情報や、知らなければ迷わなかったであろう情報に翻弄されている人たちに対し、一度入ってしまった情報を消すこともできず、真偽を伝えても中々修正されない中、我々支援者はとても大変な日々を送っている。筆者自身も、悩んでいる人に昔からのこの諺を伝え、見聞きするということはそういう悩み

や迷いを伴うものだから、ネットやテレビでの情報は程々にしようと伝えている。

＜雉も鳴かずば撃たれまい＞

なまじ無用な発言をしたために、禍を招くことのたとえ。雉も鳴かなければ所在に気づかれず、撃たれることもなかったろうにという意から。

我が家の周りでは野生の雉を時々見かける。散歩をしていると、突然「ケーン」と鳴いて飛び立っていく。そのたびに、この諺を思い出す。歩いていて全くその存在に気づいていないのに、雉はいきなり鳴くから、その存在に気づく。

子どもでも大人でも、思ったことを言いたいが、余計なことを言ったためにひどい目にあうことは多々あるだろう。政治家が問題発言で謝罪することや失職することなどがそのよい例であろう。

言葉というものは一度出てしまったらもう戻すことはできない。それが怖いから最近の人たちは文字情報でやり取りをしようとする。しかし失敗することは人生においてとても大事なことだと思う。特に子どものうちは、どんどん失敗すべきだろう。失敗から学ぶことは成功から学ぶことよりはるかに多いと思う。

わざわざ余計な発言をしてしまったために、嫌な思いをしている子どもや大人に、昔からそういうことがあるのだとこの諺を伝え、次からどのように気を付ければよいか考えること、そしてそれを実践していくことがさらなる成長に結びつくのだと伝えている。

英語では・・・

Quietness is the best, as the fox said when he bit the cock`s head off.（雄鶏の頭をかみ切った狐が言うには、静かにしているのがいちばんよい）

＜疑心暗鬼を生ず＞

心に疑いがあると、なんでもないことまで恐ろしく思えたり、疑わしく思えたりするということ。疑いの心があると、暗闇の中にいるはずもない鬼の姿が見えたりするという意から。「疑心暗鬼を作る」ともいう。出典は列子

疑い始めたらきりがない。そんな経験は誰でもあるだろう。

学校でも家庭でも、子どもをひとたび信じられなくなれば、子どもの行動が更に疑わしく思えてくる。子どもがいくら本当のことを言っても、先ず信じないだろう。その状況になったら、子どもも何も言わなくなるだろう。話さなくなると更に親や教師は不信感を大きくする。こうして親子や先生と生徒の関係が崩れていく。夫婦の関係も同様である。

同じ言葉を聞いても、信じている時と疑っている時とでは受け止め方も変わる。気の持ちようでどうとでもなる。先ずは信じるところから始めてほしいと思う。ゆがんだ関係性があるときにこの諺を伝えている。

＜木強ければ則ち折る＞

強気一本で押し通そうとする人は、柔軟性がなく挫けやすいということのたとえ。しなやかさのない堅い木は折れやすいことから。「木強ければ折れ易し」ともいう。出典は列子・淮南子

固いというか、融通が利かないというか、そういう人が大人にも子どもにも見られる。世の中すべて白か黒かで決め込む人や、一つのことを多角的にみることが苦手な人は何処にでもいる。

そういう人たちに、諺を伝えると意外と伝わることが多い。昔から言われていることというのは、誰にでも伝わりやすいと感じるのは、こういう時である。だから筆者は諺を多用しているのかもしれない。

自説を曲げない時、もう少し広い視野で見てほしいと思う時、違う面から見たらどうなるかなどを考えてほしい時、時と場合があるとわかってほしい時、等々、様々な場面で、この諺が思い浮かぶ。もう一つ「柳に雪折れなし」も使う。一本気なことが悪いことではないのだが、何でもかんでもそれで通そうとすると生きづらいということをわかってもらうための諺である。

＜木の長きを求むるものは
必ず根本を固くす＞

大きな発展を願うものは、基礎をしっかりかためなければならないということのたとえ。木が大きく育つのを望むものは、その根元をしっかり固めるという意から。

人間も木も大きく育つためには土台が大事である。木でいえば、根元をしっかり固めるということだが、人間の場合は、乳幼児期をどう育てるかである。愛着形成不全ということが言われて久しいが、親子関係の最初の部分が乳幼児期であり、その時期を丁寧に育てれば、子どもは心身ともに健やかに育っていく元ができる。

その先ももちろん木と同様に、栄養や剪定と言った養育行動が必要であるが、やはり土台がしっかりしていると子どもはそこそこ順調に育っていく。

動物でもなんでも、育てるということにおいては基本的に同じで、最初が肝心だと思える諺である。一生懸命子育てを頑張っている母親の労をねぎらう時にこの諺を使っている。

出典説明

列子・・・全八巻。中国、道家の思想書。戦国時代の．思想家列禦寇（列子）の撰とされるが、異説も多い。道家思想に基づいた心虚思想（心をむなしくして欲にとらわれないこと）を説く。

淮南子・・・五巻二十四編。中国、戦国時代の兵法書。古来の兵法化のことばなどをもとにして、尉繚の兵法の説を集録したものとされたものとされるが異説もある。

私の出会った人たち

(3)

関谷啓子

先日、秋の日差しに浮かれてぶらぶら歩いていて、素敵な高齢者とすれ違った。
白髪を低く纏め、颯爽と歩いている。一体彼女のどこに惹かれたのかなあ～と思いつつ暫く後をつけた。
着物をリフォームしたらしいチュニックとスカートが素晴らしくカッコよかったからだと気づいてからは、ますます気になって追い越して振り返ったり、後ろ姿を見ながら、、、と離れられなくなった。
彼女もどうやら気づいた様子。
仕方なく声をかけた。
素晴らしい服でさっきから後をつけてきました。
お見受けするに、ご自身で縫われたように思うのですが、型紙があったら分けてくださいませんか、、、と。
気味悪いと誤解されるのも承知だったが、にっこり笑った彼女は
「良いですよ。よく街中でもあなたと同じ事を頼まれるの」と言ってくれた。
早速住所のメモを渡し、我儘な頼み事を詫びつつ別れた。

後日、友人にこの話をすると「それってストーカーだよ。よく逃げられなかったわねえ～」と感心された。
エエッ、そうなの？これってストーカー？？
私はただ、素晴らしい服に惹かれたこと、今声をかけなければ一生後悔すると思ったからだけなのに、、、。
夏に東京で「ひとりぶんをちゃんと生きよう おおよそ７０の女たち これからが面白い！」と言う長いタイトルの集会があって友人四人で参加した。
その中でオオタスセリという歌い手が「ストーカーと呼ばないで」という歌を聞かせてく

れた。
歌詞が心に沁みて思わず涙ぐんだのだったが、言葉って不思議。
ストーカーという言葉ができると、一人ひとりの気持ちやらその時の状況やら考慮せずに何もかも一括りにしてしまう。
言葉が全てを囲い込んで新しい状況を作り出す恐怖を感じた。

型紙が送られてきたかって？？
ハイ、写真やらお手紙やら沢山の資料と一緒にちゃんと送ってくださった。
細やかな心遣いの手紙も添えて。手紙は「あの折の数分間、面白く楽しい時が過ごせうれしいことでした」と結んであり、心に残った。
どんな人とどのように出会うか、、、、と私は思うのだが、その始まりも世間ではストーカーと呼ぶのかなあ〜。

ちなみにその後も手紙のやりとりは続いている。
なるべく早くチュニックを仕上げて、偶然街ですれ違った時、縫い上がったチュニックを着ていると最高なのだが、、、。
そんな偶然はないかなあ〜。

うたとかたりの対人援助学

第４回　『遠野物語』第 99 話と「悲哀の仕事」

鵜野　祐介

大平悦子さんのこと

今年（2017）11 月 5 日、遠野市の大平悦子さんのご自宅にお邪魔し、民話の語りを聞かせていただいた。

大平さんは 1954 年遠野に生まれ、高校卒業後、東京の大学に進学。卒業後、神奈川県内の公立小学校教諭。在職中から、小澤俊夫主宰の「昔ばなし大学」に参加して語り手としての研鑽を積む。定年を待たずに退職し、語り部としての活動を本格的に始める。首都圏と遠野を中心に、全国各地さらには海外でも公演を行っている。『大平悦子の遠野ものがたり』（DVD ブックス、日本民話の会編、悠書館 2014）を刊行。

晩秋の日の午後、移築した萱葺き屋根の古民家の囲炉裏端で、燃える薪のはぜる音や薪から立ち上る煙の中、大平さんの語りを聴いた。

今回、『遠野物語』（1910）第 99 話をプログラムに入れていただくよう事前にお願いしておいた。これは明治 29 年の三陸大津波にちなんだ「実話」で、2011 年東日本大震災の後、一躍注目されることになった話である。

「むがーす、あったずもな……」。大平さんの語りをそのまま掲載したいところだが、紙幅の都合でかなわないため、後藤総一郎監修、佐藤誠輔訳『口語訳　遠野物語』（河出書房新社 1992 年）から引用させていただく。

『遠野物語』第 99 話

土淵村の助役北川清という人の家は字火石にあります。代々山伏で、祖父は正福院といい、学者で著作も多く、村のために尽した人です。

その清の弟で福二という人は、海岸の田の浜へ聟に行きましたが、先年（明治 29 年）の大津波（注1）にあい、妻と子どもとを失いました。その後は生き残った二人の子どもとともに、元の屋敷あとに小屋を作り、一年ばかりそこにおりました。

それは夏のはじめ、月夜の晩のことでした。福二は便所に起きましたが、便所は遠く離れたところにあり、そこまで行く道は、波の打ちよせるなぎさです。霧の一面に広がる夜でしたが、その霧の中から男女の二人連が近づいて来ました。見ると女は、たしかに亡くなった自分の妻です。福二は思わずその跡をつけてはるばる船越村へ行く岬の、洞穴のあたりまで追いました。

そこで妻の名を呼びますと、女はふり返ってにこっと笑いました。男のほうを見ますと、これも同じ里の者で、津波の難にあって死んだ人です。なんでも自分が聟に入る前、互いに深く心を通わせていたと聞いていた男です。「いまは、この人と夫婦になっています」と、女が言うものですから、「子どもは、かわいくないのか」と言いますと、女は少し顔色を変え、泣きだしてし

まいました。

死んだ人と話をしてるようには思えず、現実のようで悲しく、情けなくなりました。うなだれて足元に目を落としているうちに、その男女はふたたび足早にそこから立ちのき、小浦（おうら）へ行く道の山陰をめぐって、見えなくなってしまいました。少し追いかけてもみましたが、（相手は死んだ人なのに）と気づいてやめました。それでも夜明けまで、道に立っていろいろと考え、朝になってからやっと小屋に帰りました。福二はその後もしばらくの間、悩み苦しんだということです。

（注1. 明治 29 年 6 月 15 日（旧暦 5 月 5 日）夜 8 時ごろ、岩手県を中心とする三陸沿岸を襲った大津波のこと。波高は、38.2 メートルを記録し、溺死者は 2 万 2 千人といわれ、最大級の津波だった。特に大槌町では、日清戦争の凱旋記念花火大会が海岸で行なわれていて、一瞬のうちに全滅という惨状だったという。同書 178 頁）

大平さんの解釈

大平さんはこの話を遠野の言葉でしみじみと語られた後、ご自身の取材などによって得た興味深いエピソードをいくつか話された。福二の妻子は実際には行方不明のままであったこと、今回の津波でも福二の子孫の方が奥様を失くされたこと、『遠野物語』の著者柳田国男に語って聞かせた佐々木喜善と、福二は親戚筋にあたること。その上で次のように話された。

「震災から半年ぐらい経ってこの話を語るようになったのですが、最初のうちは、愛する妻が死後の世界で昔の恋人と一緒にいることを知った福二のことを可哀想だと思っていました。

でも、今回の震災の後、行方不明になった家族の死亡届を出せないでいたら何年か経って夢に現れたとか、イタコ（巫女）に死者の霊を降ろす口寄せをしてもらったら『おれは今、海の底にいる。おだやかな気持ちでいるから、もう探さなくていいよ』と言うのを聞いて、ようやく気持ちの区切りがついたとかいった話を聞いているうちに、もしかしたら福二も同じだったんじゃないかと思うようになりました。

忘れがたい妻ではあるけれども、やっぱりどっかで気持ちに区切りをつけて、前に向いて進まなくてはいけない。そういう気持ちがこの幻を見せたんではないか。それから、もしかしたら奥様の方も、『もうあなた、頑張って前を向いて進みなさい』って、励ましの気持で、姿を見せてくれたんじゃないかなあ、なんて思ったりもしました」。

対象喪失と悲哀の仕事

愛着あるいは依存する対象を喪失することや、それによって引き起こされる、病的なものも含むさまざまな心理のことを、精神分析学では「対象喪失（object loss）」と呼び、G.フロイトの「悲哀とメランコリー」（1917）以来、研究が進められてきた。日本でも小此木啓吾『対象喪失』（中公新書 1979）、森省二『子どもの悲しみの世界　対象喪失という病理』（ちくま学芸文庫 1995）、野田正彰『喪の途上にて　大事故遺族の悲哀の研究』（岩波現代文庫 2014）といった優れた研究成果が発表されている。

小此木（1979）によれば、対象を失った場合、われわれは大別して2つの心的な反応方向を辿る。「一つは、対象を失ったことが、一つの心的なストレスとなっておこる急性の情緒危機（emotional crisis）である。もう一つは、対象を失ったことに対する持続的な悲哀（mourning）の心理過程である。（中略）この悲哀の心理過程は、半年から一年ぐらいつづくのが常であるが、そのあいだに人びとは、失った対象に対す

る思慕の情、くやみ、うらみ、自責、仇討ち心理をはじめ、その対象とのかかわりの中で抱いていた、さまざまな愛と憎しみのアンビバレンスを再体験する。そしてこの心の中での悲哀の心理過程を通して、その対象とのかかわりを整理し、心の中でその対象像をやすらかで穏やかな存在として受け入れるようになっていく。(中略)フロイトはこのような悲哀の営みを『悲哀の仕事』(mourning work)と呼んだ」(pp.44-46)。

悲哀の仕事としての「物語ること」

福二が実際に妻のまぼろしを見たのかどうかは分からない。ただ、福二はこの「出来事」を、誰かに語らずにはいられなかったのではないか。そして、物語ることで行方不明の妻に対する気持ちに区切りをつけ、前に進んでいこうとしたのではないだろうか。つまり、福二にとって物語ることは「悲哀の仕事」であったと考えられる。

この時、佐々木喜善は福二の「物語」の大事な聴き手の一人であったに相違ない。喜善は福二の姉チエの孫にあたり、福二よりも26歳年下で、大津波の年には10歳だった。いつ頃この話を聞いたかは不明だが、泉鏡花に憧れる文学青年の喜善は、福二の話にじっくりと耳を傾け、これを脳裏に刻みつけたことだろう。喜善は後に自著「縁女綺聞」(1934)にもこの話を紹介している(そこでは、大津波が起こったその年の7月の新盆の夜の出来事とされ、「この女房の屍は遂に見付からなかった」と記されている)。

2011年の東日本大震災の後、みやぎ民話の会などが中心となって、被災者が震災体験を語る場が積極的に設けられてきた(第七回みやぎ民話の学校実行委員会編『2011・3・11大地震大津波を語り継ぐために』みやぎ民話の会2012、他)。また、被災した子どもや若者の語りの活動も行われてきた(佐藤敏郎監修『16歳の語り部』ポプラ社 2016)。さらに、被災地での不思議な体験の語りを書き留めた記録も出版されている(奥野修司『魂でもいいから、そばにいて 3・11後の霊体験を聞く』新潮社 2017)。

こうした「物語る」という営みが、語り手にとっての「悲哀の仕事」として機能していることは疑いない。と同時に、その物語を聴く者にとっても、被災者への同情や憐みを超えた「悲哀の仕事」の疑似体験、「我が事」として痛みや疼きと共に受けとめるという体験が、「語りの場」においてなされているのではなかろうか。

悲哀の仕事としての「表現すること」

11月下旬、新美南吉の童話「でんでんむしのかなしみ」を絵本化(新樹社 2012)された鈴木靖将(やすまさ)さんの講演を聴く機会があった。

鈴木さんはこの作品の制作を進めていた頃、20代の娘さんを突然亡くされた。鈴木さんご夫妻が亡き骸を前に通夜を過ごしていた時、かまきりがご遺体の上に止まり、こちらをじっと見ているのに気づいたという。まるで娘さんのたましいがかまきりにのり移って、自分を見守っているかのようだったと。「ああ、あのでんでんむしは自分だ。殻いっぱいにつまった悲しみを背負って、それでも生きていかなければ」。

鈴木さんは絵本化にあたって、ほとんどすべての画面にでんでんむしを見守るかまきりの姿を描いた。もちろん新美南吉の原作には、かまきりは登場しない。けれども、かまきりを描き、このかまきりに見守られているでんでんむしを描くことで、鈴木さんの「悲哀の仕事」は行われたのだ。

当日買い求めた絵本に、鈴木さんはこう記して下さった。「かなしみが心を豊かにしてくれますように」。

あぁ、結婚！

―婚活日記―

第4回

黒田長宏

＜再婚活動開始、婚活用写真＞

8月6日は、再婚活動の為の具体的行為へ外出する事になる。茨城県の婚活に入会（私は再入会）の為にまず、Lサイズの写真が要るのだ。相手に面会して貰うために、写真の出来栄えも大事になる。最初の勝負所でもあると言えよう。50歳というとルックス的にも20代、30代よりも衰えていると言えるかも知れないが、年輪を重ねた印象が渋いと言われるような好感も持たれる場合もあるのかも知れない。

すぐ帰宅したいので、婚活のセンターと同じ方向の近くの写真屋をネット検索する。某ショッピングセンター内にある写真屋に行くと、近くの本店らしいほうへ行くよう言われる。行くと、別の出張撮影があるとの事で急いでいたところをぎりぎりセーフで撮影してもらった。婚活センターよりも手っ取り早いので、もし良さそうな人がいたら紹介してくれと、ほとんど無理な注文も加えておいた。言ってみるものというのもあるかも知れない。旅の恥は掻き捨てのような。スタッフのおじさん（と私が言うくらいだから60代だろう）2人が、私どもが一緒に写れば映えるからいいんじゃないかと、撮影のおばさんと私の前で言ったものの、そのジョークに対応できず、撮影に入った。婚活センターに行って再入会する日に、その前に出来上がりを取りに行くことになる。

＜婚活本格的に再開する＞

バレバレの面もあるが、某婚活センターに再入会して来た。私からの条件に合っていた人は500人近くもいたのに、私が条件に合う人は、2人しかいなくて、しかも年齢ルールが相手の希望の2歳差までは受付けると言うので、2人ともサービスルールでぎりぎりセーフの人だった。他にも、居住地や結婚経験の有無や年収や身長などが条件として、それに逸脱している人達は条件からカットされる。ここがマッチング婚活の弱点である。弱点と言っても、それが弱点にならない人にとっては弱点でもなんでもないが、逸脱している人にとってはそれが弱点なのだ。

芸術家などには比較的多いのだろうが、貧乏でも15歳も違う人と恋愛結婚してしまう人もいる。先日のフジテレビのドキュメンタリーのワハハ本舗の劇団員の女性が20代後半で結婚すべきだと私の心情では思ったが、一緒に住んでいる男性は舞台監督の卵とかで、10万円くらいの不定収入らしい。その女性と合わせると生活ぎりぎりの線らしく、その女性の母親が将来どうするんだと心配している話しだった。

離婚トラブルでの3年間は大きかった。50歳という年齢がマッチングの条件をさらに厳しくした。マッチング婚活以外にも挑戦せねばならないだろうと思っている。ぶっちゃけて言えば、告白出来ればマッチングよりも納得いく女性と再婚出来るかも知れないのに、三つ子の魂百までなのか。それがプライドでも無いんだが、抵抗があって出来ない。マッチング婚活にも、どうしてこんなに可愛くてプロフィールも優秀なのに婚活なんだ。恋愛でいくらでも会えるだろうし、告白されているんじゃないのかという人が大勢入っているのだ。わけがわからない。

＜8月20日、愚痴＞

婚活センターに再入会して、かろうじて2人の女性に問い合わせ中だが、それ以外はどうしていいかわからない。職場も女性が多いと言うのに、大体うまく立ち回れる性格というか人格の人間だったなら、こんなに苦労していない。恐らく、他の男性もそうなのだろう。気楽に言い出せないし、告白出来ない男がいるのである。逆

に口説きまわる男は結婚は軽く出来るが不倫がばれ離婚で慰謝料請求されるような目に遭うのだろう。ところがまた口説くのは得意で心労にならないから繰り返してしまう。私自身はそういう男性に生まれなくて良かったとは思う。家系の絶滅の不安と隣り合わせではあるが。そして社会は家という知恵を封建的だとか悪い面ばかり言って崩して来た。

　些細な事だが、昨日職場の内部の配達で、久しぶりに居た女性から、「久しぶり」と言って来たので、「そうですね。はい、はい」と言ったら、通りかかった年輩の女性スタッフが、「そんなはい、はい言ってるんじゃ、嫁さんも来ないよね」と、私に恨みも無いだろうに、適当な事を言って通り過ぎた。

　そこで気付いたが、そうした年輩のおじさん、おばさんが縁結びに協力してくれれば良いのに。ここ3年は離婚トラブルで脳のセンサーがそっち一色だったが、もう少し魂胆を丈夫に冷静にみたら、ちょっとずれていてもチャンスは漂っているような気もしないでもないのだ。こういう空気感を察するのを記録するのも、勘違いかも知れないが、大切かも知れない。

　私だけは無い。50歳から、出産可能な女性に結婚して貰うのは今の時代、私の状態で、とても簡単な事ではないのだ。だとしたら、他の男性も難しいし困っているだろう。自分だけが助かってはいけないだろう。

＜8月23日＞

　婚活センターの2人応募も、1人はダメで1人は休会していたとなり、またゼロに戻る。勤務先から帰宅して、何気なく某サイトの、女性は20歳だと12万個も卵子があるが、40歳だと5千個に減ってしまい、日々30から40個減って行くような話を観てしまい、私より10歳年下でさえ40歳なのにと、少し絶望的になり、母親にどうしてくれるんだと怒鳴ってしまった。

　母親のせいではない。私自身が情なかったのだが。八つ当たりだ。母親も力はない。しかし、思えば加藤貴子という、同世代のアイドルだった人が、46歳で第2子出産というニュースのサイトからの豆知識だった。思えば、振り回された元妻も60歳の男性の子を41歳で出産したのだと思う。可能性ゼロでは無い。だが、高齢出産で女性が辛いのを心配して、一応38歳以下の線で妥協しない方向を決めた。明後日また婚活センターに行くが、該当者がいなかったら相手の年齢を引き上げないで、その日は終えてしまおうと考えているところ。

＜8月25日＞

　午前中漢方薬をもらいに某医院に行く。スーパー銭湯で千円カットをして、県内を1時間半以上かけて大移動して婚活センターに向かう。38歳以下で妥協しないとメモ書きして置いたのに、マッチングして貰える該当者がなく、妥協して40歳まで対象年齢を上げ、2人に応募する。私自身が離婚経験者になってしまったのに（3日で元妻は出ていったのに）、初婚相手のほうが良いという観念が抜けなかったが、該当者がいないので仕方なく（差別というわけでなくて、実際の心理を正直に書くのが誠実であり事実だから）第二希望は再婚の人にした。出産を考えなければ、もっと年齢が上の人でも良いのだが。あと、それでも誰でも良くは無くてルックスの良し悪しはラインを引いてしまう。私の性格上、言っても収穫無しは出来なかった。妥協してでも応募可能ならするほうを選んでしまった。それでも真剣に50歳以上の人でも子供が欲しい場合も県の婚活は考えて欲しいと担当者のNさんに訴えた。Nさんは話しやすい。

＜9月3日見合い型の結婚相談所に連絡する＞

　休日。午前9時半。台風が湿度も飛ばして行ったようで、晴天ながら湿度が少なくなって快適な位である。まだ半袖半ズボンで扇風機を回しているが、早朝は扇風機なしで寒さを感じるほどだった。

　DVDで小津安二郎の『晩春』を観終えてから、3年前に元妻がやってきた頃に、ネット上でお世話になっていた婚活会社の女性社長を思い出し、その頃は女性貞操観を大切にしようと純潔指輪。ピュリティリングについて紹介して、賛同を得ていたのだが、3年振りにメッセージを送った。婚活費用は。50歳からでも大丈夫か。私のような者でも大丈夫かなど。回答を待つ。連絡が送られてきて、「可能性は大いにある」と書いてくださる。

テレビにも出演するようなアクティブな人で、東京だが、茨城からだとしても、先入観を持たないほうが良いと思うし、日時指定を受けたら、伺う。簡単なプロフィールを添えて、9月の都合良い日を3日分、お伝えする。今回は、県の婚活よりも、女性社長のほうが可能性が高いような気がしているところ。

＜9 月13日＞

気になる情報には気が付くもので、茨城新聞からBS日テレでは夜に離婚裁判のドキュメントがあるというので録画。体外受精が15年調査で42万件以上で過去最高だったそうだ。年齢とともに体外受精の成功率は下落し、出産成功が30歳で約20%、35歳で約18%、40歳で約9%、42歳で4．5%。妊娠したが流産が、30歳で約17%、35歳で約20%、40歳で約35%、42歳で約46%。これを読んで、私は未だに実子を諦められず、35歳から40歳と、私より10歳から15歳は年下の人でないと人工授精でも出産は難しいかと不安を覚えた。事実である。

＜9月29日＞

勝負に出た。県の婚活センターであまりにも条件の一致する人がいなくなってしまったため、（主に私の50歳の年齢がハンディキャップ）別の、一般の結婚相談所に行った。私が落ち着くまでは公表できないし、したら宣伝にとられてしまうかも知れないところが難しい所なので控えるが、（結婚出来たら、ぜひ紹介したい気持ちになるだろうし、宣伝であっても意味はあるかも知れないのだが、まだ成功もしていない）片道 3 時間はみないといけない東京都の相談所であるが、ネットで社長を知っていた。かなり多数の縁組に成功してきたり、かなり有名なテレビ番組に出演した事もあり、智恵をいただけるのではないかと思ったのと、該当者を増やさないと、数を打たないと当たらないという思いからである。良心的な価格設定だと思うが、茨城県の婚活から比べると当然高額にはなる。だが相場だと思う。業界のベテランの社長のため、結婚相談業界の状況の週刊誌レベル（あまり固く取りすぎないでいただきたく）のような話まで教えていただいた。これでなんだか強気になれる気もしている。午後からの面談だったので、午前中はオープンしたばかりの新宿区立漱石三房記念館に行った。50歳を超えてから漱石作品は6作品くらい読んだり、朗読を聴いたりしているが、もっと把握したいと思う。漱石自身が性倫理に真面目だった事や作品の意味も考えていくべきであると思う。漱石の肖像の絵葉書を小さな額に入れて部屋に飾った。

＜9月30日＞

昨日帰りが遅くなったり、日頃使わない頭脳を使い、午前中は頭が固まっていた。連休にしておいて良かったとつくづく感じる。外出は連休前半に集中したい。そして、昨日の結婚相談所の入会申し込み作成から投函、入会金の投函などをした。既に30代にして結婚を諦めてしまっているように見える人達も周囲にも幾人もいるようだが、諦めてはいけない。お金はまた出てしまうが、結婚相手は本当はお金で換算出来ない。

＜10月8日＞

ようやく、東京の相談所のネット検索が出来るまで設定した。しかしもう夜になってしまった。連休なので明日本格的に始めよう。ただ、マッチングが厳しいといないが、マッチングが大まかでも断られてしまう確率は高いかも知れないなどと贅沢と言っても良いほどの欲が出る。私の場合はほとんどルックスが申し込みの決め手なんだなと思わせられる。最初から妥協するのも変だろうから、私性質でどうしようもないからルックスを優先して選べるといいのだが。年齢年収その他ハンディキャップだらけの私ではあるが。

＜10月9日　ネット婚活開始する。＞

東京のネット婚活を開始した。ここからは下手に書くと誰かから訴えられたら離婚トラブルに続いて悲劇的にダメージが大きすぎるので、慎重にかかねばならない。契約したところのネットワークの2か所からそれぞれ12名と1名となぜか人数が偏ったが、13名応募する。子供が諦められず、強気で在住県と近隣県の2県から33歳から38歳までの検索を行った。最初から弱気では変

だから、最低でも12歳年下に応募しているという強気だったが悔いを残さないためでもある。

しかし婚活は初めてでは無いのだが、やはり美人で申し分ない人がたくさん婚活に出てきて、どうして婚活をわざわざする必要があるのか不思議である。サクラで出会い料だけ取られるはずもなし。そう書くのもかなり勇気を要するが真面目な冗談である。今までの婚活での選択もそうだったが、美人で申し訳なくても、とても手が届かないと思う人には、断られるのは無料であっても最初から出せない。それを考えたら最初からどんな容姿や性格の人でも29歳には応募していないのだから、どこまで強気なのか弱気なのかというのが私自身の先入観を含めての態度が示される。

50歳でも子供が欲しいという条件が大きく左右しているのかも知れない。それに今までもそうだったが、容姿、ルックスを重要視してしまう。だがかなり年下だと太っているとかちょっと同年代との婚活だと劣ってみられるかなというような人も応募したりと最初からテクニック（のつもり）を使ったりした。これらはふざけて書いているのでは無くて、ある意味、有意味な記述かも知れないと思っている。だいたいが、50歳でこうして挑戦するかしないかで選別が現れてしまっていると思う。対人援助というより自分援助でありながら、こうして悪条件に浸りながらも挑戦する事が、対人援助の資料になると思うのである。また、ある意味贅沢かも知れないが、検索の面白味もあるものの、けっこう人数はある程度出てきたので検索は疲れる。本当は全く一人ずつ仲人さんに選んでもらって行く方法のほうが、欲張りにもならず良いかと思っていたのだが、自ら検索する仕組みで取り組んで欲しいと言われたので、そうしたわけである。応募すれどもすれども進展なしは既に経験済みではあるものの、この現実から何かを感じるのも人生で無駄にしたくはない。だがそれも確率で表せるものではなく、突発的に出会えてしまう場合もあるのが人生の不思議だ。と思えるなら良いなあ。

＜10月12日＞

二度めのネット開き。既に1人から断られていた。あと12人のほうがまだ動きが出ず、システムの影響だろうと思う。きっと何人も断っているはずなのだ。怪しいところではないだろう。だって社長が善いと思っているネットワーク厳選なのだから。婚活の社長は心配して親に言うと癌になってしまうから一人でやれと言っていたのが少しわからないが、母親と仲良くなれそうな人でないといけないし、疲れないと言うし、71歳と19歳しか違わない母親と一緒にネットで観て、3人応募を追加した。

＜10月18日＞

ネット婚活。36人応募追加。前回は13人中11人にお断りされている。合計49人に応募した事になる。一体何人応募すれば気が済むのか神様のみぞ知るか。ただ、子供を諦めていないので、最高齢でも38歳という強気でやっている。それでもいろんな人がいるからやってみないとわからないし、妥協しすぎても嫌になってしまうし。よくわからないし。いいや。

＜10月22日＞

既に天候が荒れ気味だが、夕方から明朝にかけて強い台風がやって来る。その中でネット婚活。

今日も実子を諦めておらず、38歳以下の人を探し続けるが、34歳以上の人からにする。東京の大学卒女子は気が引けるのもあり、さらに12歳も年下から探しているし、応募していなかったのだが、該当者を探し切ってしまったような所から、恥のような気さえするが応募した。応募限度数はまだだいぶ余裕がある。スタートから、93人に応募して33人却下だが、今までのマッチング婚活だと最初から年齢制限が厳しいのでやったら月に2人出れば良いくらいだったから、このネット婚活はやっている意義はあると思う。というより、そう信じてやならなければやっていられない。ある意味、自分が思う常識を超えている人もいると信じてやるしかない。だが、私から相手へは93人でも、相手から私へは一人もいない。

＜10月27日＞

ネット婚活を続行する。現在まで断られたのが60人。合計99人に応募した。実子を諦めていないため、それが固定観念になっていたが、母親の助言を聞いてしまい、妥協な気がしたが、38歳までだったのを42歳まで相手の条件を広げた。けっこう写真写りの良い人もいて、40代以上を20人くらい追加してしまっただろうか。しかもその人が＜子どもが欲しい＞と登録してあるのだから、子供を諦めていないわけだし、高齢出産になると相手の身体が大丈夫なのかとか、確率的に少なくなっていくのではとは思いながらも、12歳年下にこだわっていたら、いつまでたっても誰も応じてくれないかも知れないし、42歳に広げてさえ、誰も来ないかも知れないし、試行錯誤しながら、休日に応募を追加している。数日前に、一人だけ私に応募が来たが、47歳の中国人の再々婚者だった。実子が欲しい年齢と再々婚と言われるとまた離婚になったらという不安もあり、申し訳なかったが断った。しかし一人でも応募が来たのは有難く思った。

＜10月31日＞

今日46人ネット婚活を追加した。返事のない人が今日の人も含めて69人。断られた人が75人。

ここまで露出しておきながら、私自身の固有の条件は50歳なのは出しているが、年収は平均より低いであろうことくらいしか書かないとしても、そういう個別条件はある。私がもっと年収があれば、もっと簡単だったかも知れない。年齢は当然なのだろう。そして、最初の条件を緩和して、34歳から42歳までで、北海道から中部東海までで検索した。

＜11月3日　考察＞

この時点で、薄々考えてはいたが、マッチング婚活形式だと、比較が大勢出来てしまい、負け続けの人が出てしまう。私など100人に応募して断られているのに、有難いことだったが1人来た。中国人で再再婚以上の女性で47歳。子供が欲しいという私の要求とマッチが難しいが、ほかの人は来ない。やはり婚活は、お見合いのように、だれかほどほどの基準だけ満たしていたら、一人と一人を特定して、そこから妥協しながらやる方法が合理的、効率的で可能性が最も高いと想像している。マッチング形式だと下手なナンパ師が撃沈を続けているみたいで、気分が滅入ってくる。お見合い形式が減り、自由な選択が逆に競争を生じさせて、勝ち組ばかりに人が集まってしまい、勝たない人が取り残されるという絶望的な方法なのではないか。と思いながらも、昨夜も応募を増加させた。このように何十人も応募できるほど普遍的に選べるのだから特定の人がほどほどに一人いれば、そのほうが確実なのだ。なぜそうした婚活がないのだろう。さらに考えていけば、婚活を活用しない出会いでも、気楽に声を多くかけられるような人のほうが有利で、その有利な人たちと女性たちが交際している間に、不利な男たちは取り残されてしまうのである。(実は女性もそうなのかも知れない。)だから友人の紹介というのも聞くが、そういったお見合い的な、ほどほどの特定の人と比較せずに交際する方法が、倫理的でもあると実体験しながら思うのである。

＜11月7日　高齢結婚と子供＞

茨城新聞が『婚難の中で』というシリーズを掲載して2回目。65歳の新婦と64歳の新郎が2013年の12月に結婚した。高校の音楽クラブの先輩後輩で新婦は新郎の憧れだった。部員が亡くなったための同窓会がきっかけであった。現在も仲良しで一緒に手をつないで写真に出ている。こうした本人同士が楽しい事例もかなり遅い結婚にもあるのだろうが、私自身の固有の問題として、50歳でも実子が欲しいという面がある。だから全国的な本格的婚活を多額を支払い続けているが、相手の女性の年齢制限があるので、同級生付近は生理的に子供の観点から候補として放棄している。実子が欲しいという観念がなければ、俗に美魔女などと言われてきたが、同級生付近でも素敵に思える独身女性はいる。新聞は多様化した結婚で晩婚も紹介しているが、実子は早期でないとかなり不利な条件となる。

＜11月14日＞

婚活会社への訪問で状況。社長にはっぱをかけてもらう。ほかにも話はあるが、マガジンに出していいか聞かないでしまったので、一つどうでも良いような良くないような事だけ書くと、社長によると女性もイケメン好みで

男性以上かも知れないとの事で、一般論と違うと思った。男性も女性も容姿の好みは大きいということだ。今より100倍応募しなさい。甘い。ぬるま湯です。ときつく言われた。女社長だが、有難い事である。推薦の人も何人か指摘していただいた。恋愛結婚全盛だが、人によっては導入れてくれる人に押されて結婚できる人もいるはずで、その偏りが現在の結婚難の問題を生んでいると思う。だいたい、相当婚活にしても人によってだとはしても、応募しないと振られ続けるのだから、挫折する人が出てきてしまうのは当然だと思う。忍耐力がいるのだ。就職活動と似ているのかも知れない。職場だろうが、すすめられないと思うが、道端でさえ告白というか誘ってしまう事ができる人ならば、最初からこうした記録はなかったかも知れない。しかしどうしてもプライドなのかなんなのか、恋愛できないのである。婚活のほうが心理的負担はない。ただ、成就するかどうか一向にわからない面での不安として結局心理的負担はある。早速推薦の人たちにも帰宅してネット婚活だから応募した。30人くらいかな。

＜11月18日＞

もうネット婚活で250人以上に断られている。これは経済格差と同様に、人によって極端に違うのではないかと予想する。きっと何人も応募に応じられる人もいるはずだ。100人と見合いした男もいたと聞いた。これを書くと私がいかにもひどい男に思えるかも知れないが、それはこのマガジンに写真や年収その他を掲載出来ないので具体的に表せない。経済で比喩すると格差のある人にばかり応募しているんじゃないのというのもあるのかも知れないが、就職と同じで、これではよほど気を長くしないと人間不信になるのが日本の婚活の状況だろう。もちろん、こんな私でも応募しない人もいるのだ。中国人で再再婚希望の47歳の女性だけが応募してくれたが、応じられなかったのもある。ただ応募してくれたのは現在までその人だけである。こちらからは数百人も応募しているのに、誰も応じてくれない。

＜11月23日＞

毎日のように少しずつ新規加入の人に応募する段階になっているが、既に330人に断られて、マガジンのネタとしては面白いかも知れないが、プライドもなにももうガタガタかも知れない。これがネット婚活の怖いところかも知れない。だが、小選挙区制度と同じで、少しの違いで落ちていると思いたいが、女性の側が理想が高すぎるのが原因だろう。としておくしかない。

＜11月24日＞

休日の朝から、3つの婚活グループの中の一つは、今月の応募件数いっぱいまで応募してしまった。月に200人応募したことになる。こうした事もよく考えるとなんか変で、ある程度妥協も含めて、一体一の特定見合いのほうが効率的な気がするのだが、自由なほど実力のある人が有利になるとつくづく思う。しかしどうしてこんなに美人で欠点がないように思える人たちが大勢婚活に登録しているのか落ち込んでしまうほどである。男性も社会的能力のすごい人は大勢いるのだろうが、女性のほうが私より年収から能力まですべてに勝っているような人がうじゃうじゃいて、とても応募さえ躊躇してできない人も大勢いる。社会の中の位置にがっかりきてしまうこともある。それでもなんだかほっとするような人に応募しても、返事が来ないのである。これが人によって大きく違って、何十人も返事が来る人もいるのかも知れないが、私自身の立ち位置の詳細はここには書けない面もあるとしても、あまりに難しい条件の人には婚活さえ難しい。とはいえ、職場その他で告白できない私の勇気の無さなのか、だから婚活に応募したのである。応募できるだけでもありがたく思うしかないのかも知れない。応募する女性さえいないならそれは不可能ということなのだから。

〔PBLの風と土　第3回〕

専門性を高める学びと専門家への学び方

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構准教授／オールボー大学人文学部コミュニケーション・心理学科客員研究員）

【前回までのおさらい】

2017年4月から1年、デンマークのオールボー大学で学外研究に従事する中、全学でPBL（Problem-Based Learning）を展開する教育実践に関心を向けています。第1回ではその歴史的・文化的背景を紹介しました。

連載第2回ではPBLの類型を紹介しました。PBLは医学教育で症例や臨床での実習と接続した学びとして始まりましたが、現在では現実社会の現象を分析し問題解決のための実践知を構築していくPO-PBL（Project-Oriented Problem-Based Learning）が幅広く展開されていることを改めて確認しました。

1. 質保証への事例として

「今年、PBLの環境はどういうものがいいのか、PBLで扱いました。」これは2017年11月15日、「Design of development projects to strengthen quality」と題したセミナーで紹介された事例である。このセミナーは、オールボー大学の全学共同利用機関「Learning Lab」が「PBLアカデミー」と協力して展開している連続セミナーの一つで、「問題解決学習として展開されるプロジェクトをいかに良質なものとして組み立てればいいのか」を深める参加型研修であった。実際にどのようにして授業が進んでいったのかが紹介されたのだが、一瞬、NHKのBSプレミアムの番組『岩合光昭の世界ネコ歩き』で描かれるネコの様子をネコが見ているような気分になった。

デンマークでも日本でも、大学教育における質保証は変わらず話題となっているようである。2010年7月22日には日本学術会議が「大学教育の分野別質保証の在り方について（回答）」を発表し、「社会の公共的課題に対して立場や背景の異なる他者と連帯しつつ取り組む」担い手が輩出されるよう、参加型学習をはじめとした多様な学習環境の創出を訴えている（日本学術会議，2010，p.28）。これを受け、2012年8月28日には文部科学省の中央教育審議会では「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」を取りまとめ、「学生の学修への動機付けを強め、成熟社会における社会的自立や職業生活に必要な能力の育成に大きな効果を持つ」キャンパス外・キャンパス以外での教育が促されている（中央教育審議会, 2012, p.24）。そして、教育実践においてどのような質にあるのかを評価するための研究（例えば、松下，2012、山田，2012、山口と河井，2016など）も盛んとなっている。

デンマークでは2015年1月29に科学教育省が「Nye veje og høje mål（New roads and high goals：新たな道程と高い目標」を発表している。これは、2013年10月に政府が設立した高等教育の質と妥当性委員会（品質委員会）の全体的な報告書であり、全文がPDFで公開されている（ただし、デンマーク語のみ）。[1] そこでは11個の課題と10の挑戦が掲げられているが、日本における大学教育の質保障の議論とは前提が異なる部分がある。それは、図1のとおり、分野別の大学進学率の増減と平均失業率の相関のグラフが紹介されていることからも類推できるように、デンマークにおける大学で

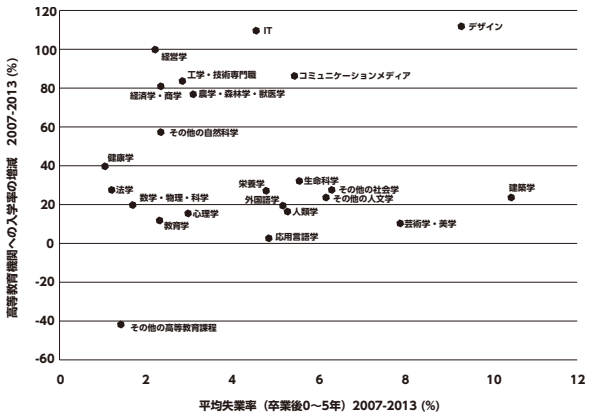


図1：専門分野ごとの入学率増減と平均失業率の相関
(高等教育の質と妥当性委員会, 2015, p.12, 筆者訳)

の教育課程は職能の向上ならびに職業選択と密接に関連づけられている点である。

そこで今回は、改めて、デンマークの大学教育においてPBLをどう展開しているのか、オールボー大学を事例に、PBLのカリキュラム・デザインに焦点を当てていく。その際、筆者が取り組んできた立命館大学におけるサービス・ラーニングにおける実例との比較も行うこととしたい。既に日本でも「教師によるTeaching主体から学生によるLearning主体へと力点を変えていく必要性が指摘されており、そのために、従来の一斉形式の講義による授業だけでなく、様々な参加型学習を実施する工夫が求められている」（日本学術会議，2010，p.38）。オールボー大学でのPBLと立命館大学でのサービスラーニングとの比較を通して、よりよい学びのコミュニティを創出・維持・発展する手がかりを見出していくこととしたい。

2. そもそもPBLはどう設計されるか

既に本連載の1回目から紹介しているとおり、1974年の開学以来、40年にわたるオールボー大学におけるPBLの実践は、いくつかの方法で紐解くことができる。学内向けにはPBLアカデミーが、学外向けにはUNESCO Chairsに採択されているUCPBL（オールボーセンター）が各種の事業を展開している。PBLアカデミーではPBLの学術雑誌も刊行している。そして本連載でも取り上げてきたように、既にオールボー大学のPBLを扱った論文や著書が広く公刊されている。

中でも、UCPBLのチェア・プロフェッサー（講座担当の教員）の一人であるアネット・コルモス（Anette Kolmos）先生の研究は、歴史的背景の理解や実装に向けての制度設計に関して多くの示唆を与えるものである。例えば、Kolmos（2009）では、図2のとおり、PBLの導入にあたって必要な7つの要素が整理されている。後の著作（Kolmos et al., 2014）によると、この整理は、オーストラリアのタスマニア出身で英国・カナダ・香港などで経歴を重ねた教育心理学者のジョン・ビグス（John B. Biggs）先生による「constructive alignment」（構成的一致）をモデルとして示した、とある[2]。そして、次に示す7点、(1)目的・到達目標、(2)問題とプロジェクトの種類、(3)進行過程・規模・期間、(4)学生らの学び、(5)教員の立場と舵取りの円滑化、(6)学びの空間と組織構造、(7)形成的評価と総合評価の観点・方法、これらを授業開始前に設定・調整され、「全体が一つのプロセスとして展開されていくこと」（all elements must be aligned）が求められている（Kolmos et al, 2009, p.15）。

このようにPBLでは具体的な授業デザインの枠組みが整理されているのに対し、筆者らが取り組むサービス・ラーニングでは理念的・哲学的観点から教育法としての特徴が論じられる傾向が強い。例えば、図3に示したレンズモデル（Cone & Harris, 1996）は、学習者の学びと成長のプロセスに対してカメラや眼鏡のレンズをメタファーに用いることにより、実社会に対する物の見方を豊かにしていく上では適切な経験が重要となること（つまり、カメラであれば被写体に対してピントを合わせること、眼鏡であればレンズの屈折率を調整して度が合った状態にすること）を示している。しかし、Furco（1996）が示すとおり、サービス・ラーニングでは社会活動と学習との中道を行くこと、つまりは大学と社会と、学習と実践と、そして何かをする側とされる側との、それぞれのバランスを整えていくことが重要とされている（図4）。そのため、Bringle et al.（2016）でも、「サービス・ラーニングの授業の設計、実装、評価は、実施機関の資

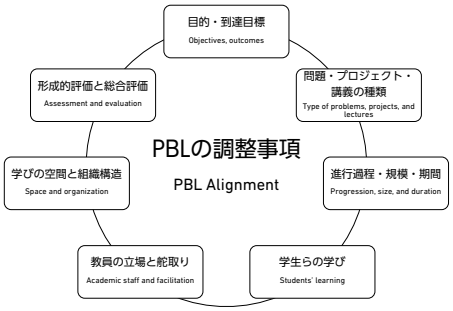


図2：PBLの調整事項
(Kolmos et al., 2009, p.15, 筆者訳)

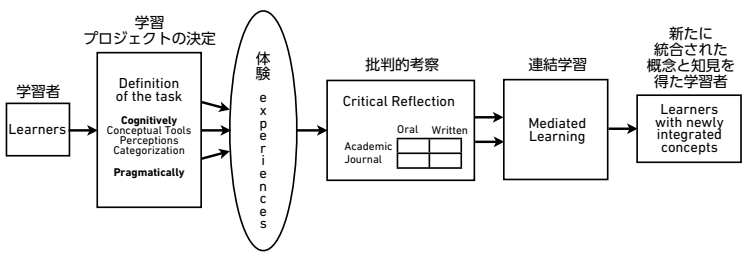


図3：サービス・ラーニングにおけるレンズモデル
(Cone & Harris, 1996, p.33, 訳は佐々木, 2001, p.62による)

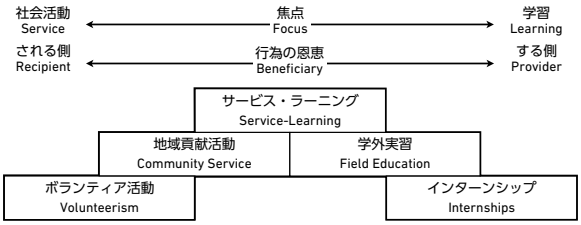
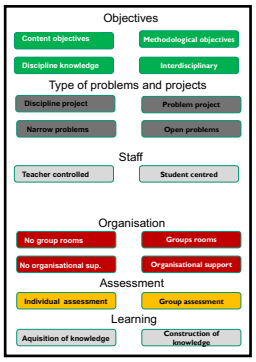


図4：社会での活動を伴う学習プログラムの相互比較
(Furco, 1996, p.3, 筆者訳)

源、具体的な授業目的、受入団体における優先順位と活動の目標によって形作られる常に現在進行形の過程である」(p.59)[3]と述べられており、複数の要素を順に考慮するよう促されるPBLとは異なる。

そのため、本連載の1回目でも紹介したコルモス先生による5月3日の教員を対象としたワークショップでは、前掲の7つの要素について、参加者どうしで各々が思い描く授業のあり方について意見交換がなされた。図5が当日配られたワークシートで、(1)の目的の設定については内容と方法論・専門性と学際性にどんな重みづけをするか、(2)の問題とプロジェクトの形態については専門学習と問題解決のどちらを志向して問題の度合いは特定の問題か広範な問題のどちらか、(5)の教職員との関わりについては専門性に配慮しタスク管理をする教員主導か学習者中心のどちらか、(6)の小集団の組織化のための学習環境としては教室のみ（いわゆるラーニングコモンズでは行わない）のかコモンズやグループ学習室で行うか、また学内外の組織的な支援を受けるか受けないか、(7)の評価方法については個人評価とグループ評価をどう設定するか、そして(4)の学生の学びについては知識の獲得と知識の構築のそれぞれをどう位置づけるか、これらを整理することが求められた。筆者の所属する立命館大学サービスラーニングセンターにおける中核的な科目「シチズンシップ・



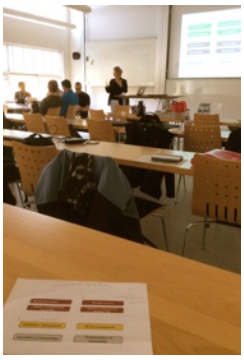


図5：Anette Kolmos教授によるワークショップの内容
（2017年5月3日のセミナーにて、筆者撮影）

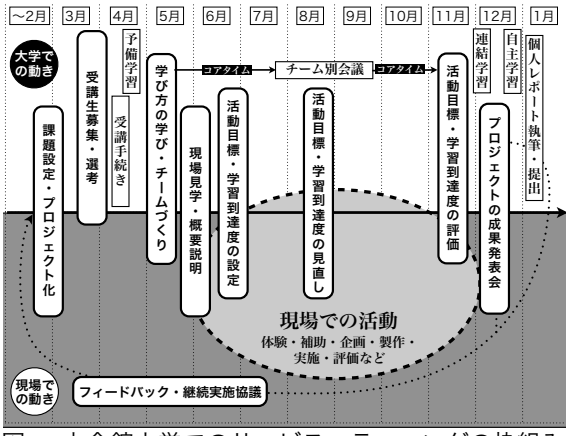


図6：立命館大学でのサービス・ラーニングの枠組み

スタディーズI」では、図6のとおり、大学と大学外とを往復して学ぶことについてのプロセスは整理していたものの、「PBLの調整事項」のような観点は持ち合わせていなかったために、特に大学で過ごす学びの場をどのように位置づけるか、参考になった。ただし、7つの項目のうち、(3)の進行過程・規模・期間について取り上げられなかった点が気になっていたが、その疑問は、冒頭に示した2017年11月15日のセミナーを受講して合点がいった。

3. 初年次PBLでの調整事項の実装

ここで冒頭で紹介したPBLにおけるプロジェクトがどういったものか、整理をしておこう。紹介されたプロジェクトは、人文学部のデジタルメディア・コミュニケーション学科の第1セメスターでの「Problem-Based　Learning」という科目で取り扱われたもので、講義概要によれば、工学分野の基礎学習と同様に問題の定式化やアカデミックライティングや情報検索と処理など大学での学びへの導入と、グループワークにより、問題にもとづく学習とプロジェクトを通した活動の学び方を学ぶ科目とされている。オールボー大学は欧州委員会によるヨーロッパ単位互換制度（ECTS）を導入しており、1セメスターは30ECTSを標準とし、1科目は5で割り切ることができるように設定されている。[4]この科目は5ECTSで、135時間の学習時間が求められている。

本連載の1回目と2回目で繰り返し述べてきたとおり、オールボー大学ではProject-Basedではなく、Problem-Based Learningとしての PBLが展開されており、中でも人文・社会科学

表1：オールボー大学人文学部コミュニケーション・心理学科でのセメスター展開(筆者作成)

課程	学士						修士			
セメスター	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
内容	個人心理学 ＋ 初年次PBL (図書館活用等)	社会心理学 ＋ 量的調査 (質問紙など)	認知心理学 ＋ 生理学的 実験など	質的調査 (観察やインタビューなど)	応用心理学 教育/臨床/産業	卒業研究	現場訪問 ＋ レポート 執筆	インターン	(実践)	(論文執筆)

系の学科ではProject-OrientedなPBLが実施されている。今回、紹介された事例は初年次独特のミニプロジェクトとして位置づけられ、ヤコプ・デーヴィズスン（Jacob Davidsen）先生とエレン・クレスチャンスン（Ellen Christiansen）先生により、前掲の「PBLの調整事項」のもとで授業が展開された。

(1)目的・到達目標は上述のとおり学び方を学ぶために方法論を学際的に迫ることとされ、(2)問題とプロジェクトの種類は「PBLのためのよい学びの場はいかにして生み出されるかを探る」と設定されたため特定の問題の解決が、(4)は学科の特徴である「デジタル環境と物理的環境の両方を活用する」ための経験知が求められた。(3)については規模（1グループ3〜4名、3グループ程度）と期間（1セメスター）は科目の設定の上で予め調整されるが、オールボー大学でのPBLでは、進行過程については受講生の裁量に大きく委ねられる傾向にあるように思われる。このプロジェクトであれば、付箋紙等を用いた学生どうしでのブレーンストーミング、続いて教員も交えたフォーカスグループインタビュー、そして図面への落とし込みとレゴブロックを用いた空間計画の提示、と3つのワークショップが行われたという。

そして、(5)教員は学生らの提案を実現できる場所を用意した上で現実にPBLのための空間を整備するにあたって受講生によるインタビューの提案とポスターセッションを通したフィードバックの機会を設けることにより、批判的な省察を促した。それにより(6)の学びの空間は多様化し、予期せぬ成果として「A PBL BOX」という学生向けの文具セットが出来上がったという。なお、(7)の評価については当初から具体的に提示されており、20分のグループプレゼンテーションによる口頭試問により「P/F評価」がなされるとされ、「積極的な参加が認められる場合にはペーパーテストに置き換えることができる」と示されている。

このように、学生たちに一定の裁量が与えられる背景には、オールボー大学では「セメスターコーディネーター」が任命され、PBLも含めた授業の質保証が行われていることが指摘できる。セメスターコーディネーターは適切なレベルとコンプライアンスが確保のため、プロジェクトのトピックの承認をする役割を担うと共に、プロジェクトの進捗にあたって監督役となる教員、すなわちスーパーバイザーの任命をする責任も負っている。加えて、以前のセメスターで展開したプロジェクトを、別のセメスターで継続展開できるかどうかの調整役ともなるという。

そもそもオールボー大学ではセメスターごとに明確なテーマが設定されており、筆者が身を置くコミュニケーション・心理学科の例で言えば、表1に示すとおり、セメスターの進行と共に学びが深められていくという構図となっている。[5]なお、1学年の人数は150人程度で、1科目あたり20〜25人の履修、そしてPBLでは4〜7人で1つのグループを組むことが標準とされているという第1セメスターでは5ECTSのプロジェクトであったものの、徐々にPBLの占める割合が高くなり、第2セメスターからは20ECTSのプロジェクトが設置され、1セメスター（30ECTSであれば半年で900時間）あたりの履修の2/3がPBLで占められる。こうして、小集団による実社会の問題を取り扱う学習環境が用意されることにより、Kolmos et al.（2009）の整理（表2）に基

表2：PBLの調整事項に対する2つの取り組みパターン
(Kolmos et al., 2009, p.16, 筆者訳)

カリキュラムでのPBLの調整事項	専門分野での教員中心の取り組み	社会変革的で学生中心の取り組み
到達目標	伝統的な 専門分野の到達目標	PBLならではの 学際的な方法論による到達目標
問題・プロジェクト・講義の種類	明瞭な問題 専門分野に即したプロジェクト 講義がプロジェクトの展開を左右する	不明瞭な問題 問題に即したプロジェクト 講義はプロジェクトの展開を支える
進行過程・規模・期間	表だっては物事が進行しない プロジェクトは教育課程で それほど重要ではない	明確かつ確実に物事が進行する プロジェクトは教育課程や授業科目で 重要な位置を占める
学生らの学び	補講や関連科目群はない 知識の獲得 個々人の学びのための協働	補講や関連科目群がある 知識の構築 社会変革のための協働
教員の立場と舵取り	教えない 教員の管理のもと統括する	授業科目を教える 進行役として進捗するよう促す
学びの空間と組織構造	授業科目の運営を支援する 講義室で行われる	PBLの教育課程の運営を支援する グループ学習室でチームワークを促す
形成的評価と総合評価	個人による評価 授業科目の総合評価を重視する	グループによる評価 形成的評価を重視する

づけば、社会変革的で学生中心の取り組みが展開されているのである。それが結果として、3年での学士号、さらにほぼ全員が修士号取得への進学（3年で卒業の学部は1学年150人程度、2年で修了の修士は1学年130人程度）という学修に結びついているのだろう。

4. 知識とスキルとコンピテンシー向上

今回はPBLを科目として展開するための設計概念を紹介し、その概念がどう実装されているか、全学でPBLを展開するオールボー大学の初年次PBLを事例に取り上げた。特に筆者の所属先である人文学部の心理系のカリキュラムでは、セメスターごとに重点テーマが設定され、修士課程の修了を前提として専門家の輩出のためのカリキュラムが構築されている。筆者が携わってきたサービスラーニングの科目と比較するなら、表2のとおりに違いを整理できる。

また、今回は詳しく触れなかったが、オールボー大学では履修要綱の中で、必ず到達目標として知識、スキル、コンピテンシーの3つを示すことになっている。前置詞に着目すれば、知識には「of」、スキルには「in」、コンピテンシーには「for」とあることから、知識とは概念や方法論の理解、スキルとは専門的な技能の習得、コンピテンシーとは専門家としての行動特性の適用、と区別できる。[6]そして成績はプロジェクトペーパー提出後にグループでの口頭試問により最終的に評定される。オールボー大学では交換留学を含めた国際学生を積極的に受け入れている国際文化学や工学系を除いて、学部と修士の講義は多くがデンマーク語のみの開講となっているため、英語の情報に触れるのは難しいが、プロジェクトの展開に対するグループ試験の様子を英語で解説した動画がYouTubeにて公開されている。今回紹介したデジタルメディア・コミュニケーション学科での英語の説明とあわせて、プロジェクトレポートによるペーパーワークとオーラルの相互の組み合わせにより専門家としての力量の向上をどう促しているか、参照されたい。

表3：PBLとサービス・ラーニングの相互比較(筆者作成)

	オールボー大学 (特に心理学科)	立命館大学 サービスラーニングセンター
授業の焦点	実社会の問題	実社会の問題
学びのスタイル	グループワーク	グループワーク
学びの焦点	学際的	学際的
問題の設定	授業開始後	授業開始前
問題の選択	学生	地域
プロジェクトの設計	教員の監督のもとで 学生が担う	学生への動機づけのもとで 教員が担う
プロジェクトの運営	教員の監督のもとで 学生が担う	受講生の自薦・互選により 学生が担う
プロジェクトの構成	小 (通常4～7人・1人でも実施可)	大 (通常は5人以上・最大で20人程度)
配当学年	科目ごとに設定	1回生以上
学習目的	各々の専門性習得への 態度の形成	社会貢献による 市民意識と行動力向上
学習成果	専門性習得への経験を混ぜ合わせて 学術的な知識を自らの言葉で言語化	民主的な社会の一員として携わった 実践的な経験を自らの言葉で言語化

表3：PBLを通じて何を学んだか
(Kolmos, A., & Koretke, 2017, p.40, 筆者訳)

変数	構成因子	クロンバックのα係数
専門分野における理論的知識	因子 1: 専門的知識、方法、問題解決	0.775 (N=907)
専門分野における実践的知識		
専門分野に関連する関連する方法論的スキル		
複合的な問題への対応能力		
新しい知識を身につける能力		
専門分野内で協力する能力		
問題の分析と解決		
プロジェクトのもとで活動する能力	因子 2: プロジェクトの企画運営と自立	0.724 (N=917)
分業のもとで活動する能力		
締切時間内に仕上げる能力		
自立して活動する能力		
専門分野を超えて活動する能力 (他の専門分野からの視点も踏まえて活動する)	因子 3: 学際性と プロジェクトの進捗管理	0.722 (N=914)
良好な人間関係構築とプレゼンテーション		
進捗管理能力		
起業家精神		

また、今回はデンマークの高等教育改革において専門分野別の大学進学率と離職率との関係から、教育改革が求められていることにも触れた。既に連載第1回でもPBL導入のニーズとして労働市場からのニーズがあったことに触れていたが、果たしてPBLが効果的な学習方法なのか、疑問を持つ人もいるだろう。そこで、最後にオールボー大学の学生を対象に行われた調査結果（Kolmos, A., & Koretke, 2017, p.40）を示しておく。表4を見れば、そもそもPBLで期待されている事柄が見出されていると共に、いずれも他者との対話を通して磨かれる素養群である。よってPBLは学生の学びに効果的「である」というより、教員の指導・監督により効果的「にする」ものだと捉えられる。つまり、教員の適切な介入が学生の学びを習慣づけ、職能向上への準備を整える。

そこで次回は、PBLの学びのプロセスを効果的にするためにはどのような科目運営が求められるのか、スーパーバイザーの存在と機能に焦点を当てる。あわせて、PBLで取り扱う問題とは何かについても整理したい。というのも、2017年11月15日、筆者はオールボー大学の文化心理学研究センターによる「キッチンセミナー」にて、受入担当の一人、モーウンス・イェンスン（Mogens　Jensen）先生の協力を得て、サービス・ラーニングとPBLとの比較研究について話題提供をしたためである。その際、学びの成果を扱う際には、取り扱う問題とテーマと目標とを明確に区別した方がよいと

の助言を参加者の一人から得ており、早速次回　　ングとPBLの教授法を探究する。
にその視点のもとで、改めてサービス・ラーニ　　(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

Biggs, J. & Tang, C. (2011). Teaching for Quality Learning at University (4th ed). Buckingham: Open University Press/McGraw-Hill

中央教育審議会. (2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～. Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf (November 29, 2017.)

Cone, D., & Harris, S. (1996). Service-Learning Practice: Developing: Developing a theoretical framework. Michigan Journal of Community Service Learning, 3, 31-43.

福川恭子. (2007). ビジネスエシックス講座のカリキュラム開発と実施：英国マネジメントスクールからの実例と検証. 日本経営倫理学会誌, 14, 21-28.

Furco, A. (1996). Service-learning: a balanced approach to experiential education. in Taylor, B. and Corporation for National Service (Eds.), Expanding Boundaries: Serving and Learning. (pp.2-6). Washington,DC: Corporation for National Service.

加藤恭子. (2011). 日米におけるコンピテンシー概念の生成と混乱. 西脇暢子(編) 組織流動化時代の人的資源開発に関する研究―組織間協力と組織間人材移動をふまえた人材開発・育成・活用の問題を中心として―（産業経営プロジェクト報告書一般研究第34-2号）(pp.1-23). 日本大学経済学部産業経営研究所.

Kolmos, A., de Graaff, E. and Du, X. (2009). Diversity of PBL: PBL Learning Principles and Models. in Du, X., de Graaff, E. and Kolmos, A. (Eds.), Research on PBL Practice in Engineering Education. (pp.9-21). Rotterdam: Sense Publishers.

Kolmos, A., & de Graaff, E. (2014). Problem-Based and Project-Based Learning in Engineering Education: Merging Models. In Johri, A. & Olds, B. M. (Eds.), Cambridge Handbook of Engineering Education Research (Chapter 8, pp. 141-161). Cambridge University Press. DOI: 10.1017/CBO9781139013451.012

Kolmos, A., & Koretke, R. B. (2017). AAU teknisk-naturvidenskabelige studerendes forventning og parathed til det kommende arbejdsliv: Arbejdsrapport nr. 2. UNESCO.

丸山文裕. (2009). 大学の財政と経営. 東信堂.

松下佳代. (2012). パフォーマンス評価による学習の質の評価―学習評価の構図の分析にもとづいて―. 京都大学高等教育研究, 18, 75–114.

みずほ情報総研. (2011). 平成22年度文部科学省委託事業ICTの活用による生涯学習支援事業（国外における実態調査）報告書第Ⅱ章 デンマークにおけるICTの活用による生涯学習支援. Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/07/29/1308856_3.pdf (November 29, 2017.)

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/07/29/1308856_3.pdf

日本学術会議. (2010). 大学教育の分野別質保証の在り方について. Retrieved from http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-21-k100-1.pdf (November 29, 2017.)

佐々木正道. (2001). アメリカ：サービスラーニングへの取り組み. 内外学生センター(編), 大学とボランティア：スタッフのためのガイドブック (pp. 58-67). 内外学生センター.

山田礼子. (2012). 学士課程教育の質保証へむけて―学生調査と初年次教育からみえてきたもの―. 東信堂.

山口洋典・河井亨.（2016） サービス・ラーニングによる集団的な教育実践における学習評価と実践評価のあり方. 京都大学高等教育研究, 22, 43-54.

【注】

[1]デンマークの教育制度（大学以外の成人教育機関との関係、大学運営の交付金が卒業生・修了生数に応じて配分される「タクシーメーター制度」など）については、みずほ情報総研(2011)や丸山(2009)などによる報告を参照されたい。

[2] 英国のブラッドフォード大学のマネジメントスクールでカリキュラム設計に導入した福川(2007)は「構成的一致」と訳出した。一方、原著の最新版（Biggs, J. & Tang, 2011）では「constructive」は事実は社会的に構成されるという社会構成主義に由来し、「alignment」は学習課題は学習者に合わせたものでなく目標基準準拠テストのように学修内容に合わせ設定する観点とある(p.97)。そのため図2では「PBL Alignment」を学習環境をデザインする側の立場から「PBLの調整事項」と訳出した。

[3] 原文は「Designing, implementing, and assessing service learning courses are ongoing processes that are shaped by institutional resources, specific course objectives, and priorities and goals of community partners.」である。

[4] ECTSについては小野(2000)の解説が参考になる。

[5] 2017年6月16日のMogens Jensen先生とのリサーチミーティングの内容に基づいて整理した。

[6] コンピテンシーについて適確な日本語で示しにくい点について、加藤(2011)によるレビューが参考になる。

JR茨木駅近くの接骨院が私の仕事場だ。
そこへ最近、ちょっとうれしいニュースが舞い込んだ。

「完走どころか、自己ベストを5分も更新できました」
大阪マラソンに参加したＡさん、全身筋肉痛といいつつも、笑顔がさわやかだった。

右膝をいためたＡさんが、はじめて当院に来られたのは、レース本番の3週間前だった。
もっとも問題なのは右膝だったが、右膝をかばって無理に走られたせいで、体のあちらこちらがいたんでいた。
左膝や左足首は、内側にねじれていた。
ねじれをなおしても、次の日には元にもどってしまう。
クセがついてしまっていた。
腰椎は不安定だった。
腰の左側が縮みすぎていたのを伸ばすと、次の日は右側が縮みすぎる。
右側の縮みすぎを伸ばすと、次の日は左側が縮みすぎる。
ねじれかたが、コロコロと変わってしまう。
腰の影響を受けて、背中、肩、首、股関節にも痛みが出ていた。
3週間は十分な期間とはいえなかったが、幸いＡさんは毎日のようにリハビリに通うことができた。
クセのついた関節は思い切って強めに矯正し、不安定な腰椎は慎重にひかえめに矯正する----それを繰り返した。
日が経つにつれて、少しずつクセがとれ、腰椎も安定してきた。

ただ、レースに間に合うかどうかは微妙なところだった。

レースの前日、体はほぼまっすぐになり、バランスはとれていた。
痛いところも少なくなっていた。
ただ、入念に施術してみても、右膝の痛みは完全にはとれなかった。
最後の最後に、あとはこれしかないというテーピングをさせていただいた。
それ以前にもテーピングを試していたが、これが有効というテーピングは見つかっていなかった。
最後のテーピングは、本番で効果を確認してもらうしかない。
「合わなかったら、レースの途中ではがしてくださいね」
「わかりました」
「けがをしているんだから、完走できたらもうけものくらいのつもりで」
「そうですね、完走をめざします」
「ちょっとけがをしているくらいが、力がぬけていい成績が出ることがありますよ」
「そうなんですか？」
「野球とか、ゴルフで、けがしてて8分くらいの力でやったほうが、意外とうまく打てたとかね」
「へー」
「成績は気にせず、楽しんでください」
「はい、楽しみます！」

結果は、冒頭のように「完走どころか自己ベストを5分も更新できた」だった。
テーピングも合っていたようで、最後まではがさずにすんだそうだ。

けがをしていたのに、Aさんが自己ベストを更新できたのはなぜだろうか。
私に考えられるのは、次の三つのような理由だ。
一つ目は、けいれん対策。
過去のレースの後半で、Aさんは両脚にけいれんを起こしていた。
私が勧めたマグネシウム以外にも、Aさんはけいれんを防ぐ栄養分をとっていた。
それはAさんのけいれんを防ぐだけでなく、体調も良くしただろう。
縮みすぎた筋肉を伸ばすようにはったテーピングも、けいれんを起こりにくくしたはずだ。
適度に締め付けると、筋肉は疲れにくくなり、収縮スピードが上がる。
対策が功を奏して、けいれんは起こらず、今までより速く走ることができた。

二つ目は、膝の治療と、体のゆがみやバランスの調整。
Aさんは背骨が曲がり、骨盤がねじれていたため、右脚は外側、左脚は内側の筋肉が縮みやすくなっていた。
体がゆがんでいると、関節の可動域は狭くなり、もっている筋力も100%発揮できなくなる。
体のぶれが大きくなり、推進力にロスが生じてくる。
反対に、体のゆがみがとれて、バランスが良くなると、可動域や筋力が改善し、エネルギー効率が良くなり、スピードアップにつながる。

三つ目は、Aさんがレースを楽しんだこと。
私は、心理的なサジェッションをいくつかしている。
例えば、けがで完走できないことを想像していると、そのとおりになりやすい。
明るいイメージを持っていたほうが元気も出る。
けがをしているというハンデを「ちょっとけがをしているほうがいい成績が出ることがある」とリフレーミングしてみた。
また、気負いすぎて力んでしまうと、力みがかえってブレーキになってしまう。
ダイレクトに「力まないように」と言われても、人は力を抜きにくいものだ。
力まないように努力すれば、かえって変な力が入ってしまう。
「楽しんでください」と言われたほうが、リラックスしやすい。
野球やゴルフの例を挙げたのは、間接的なイメージをねらったメタファーだ。
成績を気にしない。気負わない。楽しむ。----そういう姿勢でのぞめたことで、Aさんは力まずに、のびのびと走ることができ、記録が伸びた。

「先生のおっしゃったように楽しんだら、いい走りができました」
「良かったですね。きっと行けると思ってましたよ」
「市長とか森脇健児とか追い越しながら写真を撮ったり、いろんなエイドをいっぱいもらったりしたんです」（エイド＝走りながらつまめるお菓子などのこと）
「ほんとにたのしそうですね」
「そういうのしてなかったら、もっと記録、良かったかなー」

心理学から学んだことが、大なり小なり、施術の効果を高めてくれている。

現代社会を『関係性』という観点から考える

②　更生保護を支える人々

更生保護官署職員（認定社会福祉士・認定精神保健福祉士）

三浦　恵子

１　はじめに

第１回目の連載では『自身の犯した過ちを悔い更生に向けて努力をしている人を受け入れ，立ち直りを見守る社会の存在があってこそ，保護観察対象者の更生は実現するといっても過言ではありません。保護観察処遇は「社会内処遇」とも称されますが，これは「施設内処遇」（少年院や刑事施設での処遇）の単なる対義語，つまり保護観察処遇の対象となる人が少年院や刑事施設ではなく社会にいるということを示しているだけではなく，立ち直りを支える社会のチカラ，すなわち社会の人々の理解と協力により保護観察処遇が円滑に進められ，立ち直りが支援されているという意味が含まれていることに注目していただければと思います。』と書かせていただきました。

犯罪に非行をした人が立ち直るための必要なものとは，まず「本人の更生への意欲と立ち直りに向けた努力」が挙げられます。それには本人の努力だけではなく，本人を支える保護観察官や保護司による指導監督・補導援護のほか，更生保護女性会や BBS 会，協力雇用主といった民間篤志家の方々の支援が必要不可欠となります。

ただ，それだけではなく，「過ちを悔いる人を受け入れ，立ち直りを見守る社会」があってこそ，犯罪に非行をした人の社会復帰は実現します。つまり「更生保護を支える人々」が核となり，地域社会の人々の理解を求め，立ち直りを支える社会をつくっていくということが今般の刑事政策上の重要な課題となっています。

今回は「更生保護を支える人々」というテーマで書かせていただきたいと思います。

２　更生保護の源流

更生保護の源流は民間篤志家の方々の活動にあり，それは明治時代にまで遡ります。

犯罪を繰り返し，静岡刑務所で受刑をすることになった男性がいました。彼はこの静岡刑務所で川村矯一郎副典獄（副所長）の親身な処遇により改心を遂げ，川村副典獄に「もう二度と犯罪はしません。」と更生を誓い出獄（出所）しました。しかし彼が故郷に戻ってみると両親は既に亡く，妻は再婚し新しい家族とともに生活していました。やむなく彼は親族に救いを求めましたが，ここでも「お前のせいで我々も村八分にされた。」と拒否され，彼は帰る場所や生きていくための手段を失ってしまいました。かつての彼であれば，自分が生きるために躊躇なく犯罪に手を染めていたかもしれません。しかしそれを押しとどめたのは川村副典獄との約束でした。困窮してもなお彼は恩義ある川村副典獄との約束を破ることができなかったのです。結果的に彼は「自分は社会で生きていくことはできない。」と書き置きを残し，自死してしまいます。

このエピソードは，いくら本人が更生を誓ってもそれを受け入れる社会がなければ社会復帰が困難であるかということ，そして加害者家族に向けられる眼差しの厳しさをも示しています。彼の自死の知らせは川村副典獄のもとにも届き，これをきっかけに刑務所を出所した人々を受け入れる社会を作ろうという動きが急速に展開していきます。治山・治水事業家等として名高い金原明善（きんぱらめいぜん）も協力を惜しまず，明治２１年，静岡県出獄人保護会社（会社とは現代でいうところの法人のようなイメージです）が設立されました。「静岡県出獄人保護会社」は刑務所出所者に衣食住を提供するなど，現在の更生保護施設の先駆であるとともに，全県下に１，７００名を超える保護委員を委嘱して刑務所出所者の相談に応じる態勢を整備するなど，保護司制度の先駆ともいえる活動を行っています。

また，女性の活躍も看過できません。明治１６年には池上雪枝が日本初の感化院（現：児童自立支援施設）を大阪に設立し，非行少年の保護と教育，職業教育に力を注ぎました。これは現在の更生保護女性会（後述）の先駆的活動といわれています。

大正１４年には浅田ウタが富山県の更生保護施設「富山養得園」婦人部幹事長に就任，婦女子女子釈放者保護に尽力しました。「富山養得園」は現在も男性を対象とする更生保護施設として運営されています。同じく大正１４年には非行に陥った少年たちの保護事業を目的に「少年保護婦人協会」が結成されました。これは少年保護の名を冠した初めての組織であり，翌年には非行少年を直接収容保護するため牛込榎木町に「娘の家」を設立しています。北豊島区新井村に新設された保護施設は，現在では更生保護施設「敬和園」として少年を中心にその保護を行っています。昭和１０年に新設された「娘の家白菊」は，戦後は女子少年を収容する少年院「愛光女子学園」の源流となっていきます。

平成２９年度で第６７回を迎えた“社会を明るくする運動“も，昭和２４年，犯罪者予防更生法の制定により更生保護制度が発足したことを記念して，銀座の商店街の有志の方々が企画・開催し，２，０００人もの市民が参加した「銀座フェアー」にそのルーツがあります。

更生保護制度はこうした民間篤志家の方々の尊い活動を源流としており，現在も保護観察処遇や犯罪予防活動全般にわたって「官民協働態勢」がなされていることが特徴です。

３　更生保護における民間篤志家の人々とその活動

（事例については本人が特定されないよう複数の事例を組み合わせた上で加工しています）

(1) 保護司

犯罪をした人や非行のある少年の立ち直りを地域で支えるボランティアであり，法務大臣の委嘱を受けた非常勤の国家公務員です。保護観察処遇にかかる経費（交通費など）については実費弁償金として支給されますが，給与は支給されず守秘義務があります。主たる職務は，保護観察を受けている人（以下「対象者」と記載します。）と定期的に面接を行い指導・助言をすること，刑務所や少年院に入っている人の帰住先の生活環境を調整すること，犯罪予防活動などであり，全国で約４８，０００人が活動しています。

保護司と同じく非常勤の国家公務員である民生委員（この場合は厚生労働大臣の委嘱）の定員割れが報道されたことは記憶に新しいものですが，保護司もまた例外ではありません。地域社会における人間関係の希薄化など社会情勢の変容は保護司候補者の確保が大きな課題となっています。このため幅広い層から保護司適任者を確保するための「保護司候補者検討協議会」が各地で開催され，地域における更生保護の諸活動の拠点としての「更生保護サポートセンター」の拡充が進められています。

事例　Ａ中学校で中学校３年生の生徒数人による校内暴力事件が発生しました。関与した少年はいずれも保護観察処分となり，それぞれ担当保護司が指名され，保護観察処遇が始まりました。この事件はＡ中学校内で大きな問題となるばかりか，地域社会でも問題視され，登下校時の生徒の服装の乱れなどが「苦情」としてＡ中学校に入るようになっていきました。こうした動きをいち早く察知し，担当の保護観察官（以下「主任官」と記載。）に危惧感を伝えてこられたのは，元Ａ中学校ＰＴＡ会長であり，主犯格の少年を担当しているＢ保護司でした。「このままではＡ中学校全体が萎縮してしまいます。学校は地域の宝。ただ苦情をいうだけではなくみんなで応援していかなければいけないと思います。」。この言葉をきっかけとして，今回の事件に関与した少年を担当する保護司を中心として，校区の保護司，主任官である私，中学校の先生方が一同にＡ中学校に会し，校区の保護司と中学校との協議会が開催されました。中学生が保護観察になった場合，主任官と担当保護司（以下「担当者」と記載。）が中学校の先生方と個別に処遇協議を実施することはありますが，このように「中学生対象者の主たる居場所である中学校を支える」という視点で，校区の保護司が集まり会議を持ったことにより，保護観察の在り方や中学生対象者の処遇の方針を主任官，担当者，中学校の教職員が共有することができ，中学校側のニーズについてもきめ細やかに聞き取ることができました。

その後，個々の対象者に対する個別処遇を充実強化することはもちろんのこと，Ｂ保護司の発案で，登下校時の中学生に対して地域住民が積極的に声かけをしていこうという動きが起き，「地域の中学生を地域で見守る」という雰囲気が地域社会に醸成されていきました。運動会をはじめとする諸行事も，Ｂ保護司をはじめとする多くの地域の人々の見守りのもとで，成功裡に終わることができました。

主犯格の少年については，保護観察開始後も生活が落ち着かず，すっかり遅れてしまった勉強についていけなくなっていたこともあり，登校もしぶりがちでした。母親は中学校から少年に関する連絡が入ると「親である自分が責められている。」と感じ態度を硬化させるばかりで，保護観察開始当初の時点では予後が危惧されていました。しかし少年に対しては担当保護司であるＢ保護司が来訪（対象者が保護司宅を訪問すること。以下同じ。）する度に小さな進歩であってもこれを励ましていくなかで，少しずつ自身の進路について考えることができるようになっていきました。母親についても主任官が面接を重ねるうち「私は私なりに精一杯やっているのに，今回の事件もうちの子が他の子を巻き込んだかのように非難されているように感じる。学校からの電話は，我が子の問題に関することばかり。だから最近はもう電話にも出たくないと感じる。」という苦しい胸の内を少しずつ話すことができるようになりました。こうした母親の心情を踏まえ，何か問題があった時だけ母親に連絡をするのではなく，例えば少年が約束通り来訪ができた時には「きちんと来てくれましたよ。お母さんが協力してくださったおかげです。」というように，母親の努力を積極的にねぎらうようにしていきました。Ａ中学校もこの少年の担任の先生を中心としてこうした姿勢でこの母親と向き合っていくこととなりました。

そして翌年３月，主犯格の少年を含めた全ての少年が高校や専門学校などへの進学などそれぞれの進路を定め，無事卒業式を迎えることができました。担当保護司や校区の保護司が見守るなか，「誰１人欠けることなく無事社会で卒業式を迎えることができるようにしよう。」という当初の目標どおり，全ての少年が笑顔で卒業していきました。主犯格の少年の母親は担任をはじめとする先生方に深々と頭を下げ「本当にありがとうございました。」と述べたといいます。折しも「モンスター・ペアレント」という言葉

が新聞やテレビを賑わせていた時期でしたが，後に主任官は「この母親に安易にモンスター・ペアレントというレッテルを貼って対応していれば，今日のこの日を迎えることができなかったかもしれません。この母親からの『ありがとうございました。』という言葉は，教師を続けていくうえで大きな教訓になりました。」という言葉を聴きました。

本事例は，個別処遇のみならず，中学校との連携や家族支援の重要性など多くの示唆に富むものと考えます。

⑵ 更生保護女性会

犯罪や非行のない明るい地域社会の実現に寄与することを目的として，地域の犯罪予防活動と犯罪をした人や非行のある少年の更生支援活動を行う女性ボランティア団体です。先述「２更生保護の源流」に記載したように，その活動は明治～戦前に遡ります。昭和３４年（更生保護制度１０周年記念）には当時の皇后陛下より御歌「きづつきし，心の子らをいだきよする　母ともなりて　いつくしまなむ」を賜っていますが，まさに「母のような心」をもって，更生保護施設や矯正施設への支援，地域社会において家庭や非行について考える「ミニ集会」の開催，子育て支援活動など多彩な活動を展開しています。

事例　Ｃ君は幼少時から多動傾向や衝動性が教員等から指摘されていましたが，保護者から児童相談所等への相談はなされないまま近隣での窃盗や万引きなどの問題行動に発展し，中学校１年生の夏休み直前に児童自立支援施設入所となりました。この時に施設の医師によりＣ君の発達障害が指摘され治療が開始され，少しずつＣ君の生活は落ち着いていきました。無事高校進学も決まり，中学校卒業と同時にＣ君は両親方に戻りましたが，半年あまりで窃盗事件により保護観察処分，直後の再非行で少年院送致決定となり，知的障害や発達障害の少年を処遇する少年院に送致されました。

窃盗事件は暗数も多く，いずれも近隣で行われていたため，地域社会の人々の感情は非常に厳しいものがあり，両親もＣ君の養育に自信を失い引受けを決断できない状態になっていました。そこでＣ君本人及び保護者である両親の同意を得たうえで，保護観察所が中心となって関係機関と連携し，少年院在院中から障害者福祉サービスの利用手続を進め，帰住予定地としてグループホーム及び日中活動の場を確保することができました。少年の処遇に関わる機関のスタッフは定期的なケア会議において情報を共有しそれぞれの処遇場面で活用し，Ｃ君も当事者としてその場で自身の意見を述べる機会を重ね，自分の意思による契約で障害福祉サービスを利用し生活していくことに対する自覚を深めていきました。日中活動の場でも気真面目さを発揮して精勤し，職員や他の利用者の信頼も篤く安定した生活を送り，良好措置（退院）により保護観察が終了しました。保護観察官や福祉関係者の専門性を活かした手厚いケアは無論，常に少年に寄り添い更生を支援した担当保護司等多くの更生保護ボランティアの尽力がなければこの少年の処遇は奏功しなかったといっても過言ではありません。

特にグループホーム入所時は厳寒期直前であり，暖かな寝具や衣類などを揃えなければいけませんでしたが，保護観察所による支援だけでは対応しきれない状態でした。この時Ｃ君を助けて下さったのは地元の更生保護女性会の方々でした。会員相互に声をかけあい，自宅にあった寝具類やこたつ，暖かな衣類などを集め，Ｃ君のためにグループホームに届けてくださいました。「男の子は整理整頓が苦手だから，これを使うといいよ。」と，衣類一式は衣装ケースに収められて届けてくださるというきめ細やかさで，まさに「母ともなりて」という思いで心をこめて用意してくださったことがわかる品々でした。後刻このことを知った両親は「顔も知らない我が子のためにここまでしてくれる方々が

いる。親として逃げていてはいけない。」と決意するに至り，親子関係の改善の端緒ともなりました。

また，Ｃ君のグループホーム入所に際し，保護観察所，グループホームを運営する社会福祉法人，自治体の福祉関係部局が緊密に連携したことによって相互の信頼関係がより強固になり，またＣ君自身が日々の生活の中で自立に向けて頑張っている姿が評価され，当該グループホームはその対象者などの受入れに協力いただける力強い存在となりました。

(3) ＢＢＳ会（Big Brothers and Sisters movement）

「兄」や「姉」のような身近な存在として，少年たちと一緒に悩み，学び，楽しむことを目的とした青年ボランティア団体です。非行を行った少年などの「ともだち」となってその成長や自立を支援する「ともだち活動」のほか，地域に根ざした非行防止活動やグループワーク，保護観察対象者の社会貢献活動・社会参加活動などへの協力を行っており，全国で約４，７００人の会員が活動しています。

その歴史は古く，街に溢れる戦災孤児のために何かできないか，と考えた大学生の発案により，昭和２４年に発足した京都保護学生連盟にまで遡り，平成２９年度に発足７０周年を迎えました。

事例　ある地域で，“社会を明るくする運動”の行事の一環としてスポーツ大会を実施することになり，保護観察所のほか保護司会や更生保護女性会，ＢＢＳ会をはじめとする更生保護ボランティア，地域の各種団体が集って準備委員会を立ち上げ，企画・立案を開始しました。準備委員会には，更生保護に協力してくださる団体の系列のある児童養護施設の施設長も参加されていました。協議の合間，この施設長から，難しい生育環境を経て入所に至った児童・生徒のなかには基礎学力の遅れが目立つこと，特に中学校３年生については，何とか公立高校に進学させ施設で十分な自立へのケアをしてから社会に送り出してあげたいというお話がありました。これを聴いた地区のＢＢＳ会長から「うちの地区のＢＢＳ会員の中には学生も多いので，何とか力になりたい。」という申し出があり，それ以後当該児童養護施設をＢＢＳ会員が定期的に訪問して学習支援を行うほか，施設の諸行事の運営にもボランティアとして参加することになりました。スポーツ大会という１つのイベントの企画・立案・運営をきっかけにして，新たな支援が展開していった事例です。

(4) 協力雇用主

犯罪・非行の前歴のために定職に就くことが容易でない対象者や更生緊急保護対象者を，その事情を理解した上で雇用し，改善更生に協力する民間の事業主です。平成２９年４月１日現在，全国で約１６，０００人の事業主が協力しています。

事例　Ｄ君は軽度知的障害を有する男子少年でした。児童養護施設等で生育し，義務教育終了後は障害者福祉施設に入所し，自立を目指していました。障害者枠ではなく一般就労で頑張りたいという希望が強く，フリーペーパーなどで見つけてきた飲食店に就労するのですが，注文の取り違えなどが重なり短期間で解雇されることが続き，Ｄ君も自信を失って自暴自棄の生活に陥り，漫画本の窃盗を繰り返し保護観察処分となりました。

当時Ｄ君が入所する障害者福祉施設がある地域の社会福祉協議会では，制度の隙間に落ちてしまいがちな人を金銭的な支援とコミュニティソーシャルワークでフォローする取組を展開していました。

そこで保護観察所ではまずＤ君自身とＤ君が入所する障害者福祉施設の施設長の意向を確認したうえで，社会福祉協議会と連携し，厚生労働省と法務省が連携して実施している就労支援制度も活用し，保護観察官や保護司に加え施設職員や社会福祉協議会職員やハローワークの就労

支援スタッフ，コミュニティソーシャルワーカーがチームを組んで自立を図ることになりました。

その過程で，長年非行少年の雇用を続けてくださっている協力雇用主（飲食店店長）の方から「出前や接客は計算などが不得手なD君にとって負担が大きいかもしれない。けれども調理場でなら頑張れるのではないか。」とD君を雇用してくださることになりました。兄貴分的な職人さんがD君の特性を踏まえて根気強く指導をしてくださり，D君は少しずつ技術を身につけることができるようになりました。D君はこの新しい職場に馴染み，保護観察官や保護司との面接のたびごとに仕事のやりがいを語るようになりました。面接時「どうや，格好いいやろう。」と店のユニホーム姿を披露するD君の表情には，仕事ができるようになった誇りが溢れていました。店長さんからも「地味な作業でも決して手を抜かず黙々と頑張っています。」という評価をいただきました。

D君が不得手な金銭管理などは福祉関係者がサポートし，就労半年後にはアパートへの自立が成功し，保護観察解除に至りました。数年後，社会福祉士会での研修を終え，偶然その店で食事をした時，カウンターから身を乗り出すようにして私に笑いかけてきた青年がいました。立派に成長したD君でした。

(5) 更生保護施設等

刑務所出所者等のうち，帰る場所や頼るべき人がいない人に対し，一定期間宿泊場所や食事を提供する民間の施設です。住まいや食事の提供だけに留まらず，職業指導や社会適応のために必要な生活指導を受けた生活指導を行うなどして，円滑な社会復帰を手助けしています。平成２９年４月１日現在全国で１０３施設があり，法務大臣の認可を受けた民間の更生保護法人等によって運営されています。

対人関係を円滑するための「ＳＳＴ（Social Skills Training：社会生活技能訓練）」を行ったり，飲酒・薬物使用の問題を改善するための処遇を行うなど，施設ごとに処遇内容に工夫が凝らされています。指定を受けた施設においては，施設のバリアフリー化を進め、高齢・障害等により特に自立が困難な人たちを受け入れ，円滑に福祉等に移行できるよう支援する取組や，依存性薬物等に対する依存からの回復に重点を置いた取組も実施しています。

いずれの施設においても地域の住民の方々との交流を大切にしていることも特徴であり，地域の清掃活動などに積極的に協力したり，自治体等の会議の際に会議室などを無償で提供するなどして，地域社会との融和を図っています。

また，平成２３年度から，保護観察所長があらかじめ登録された社会福祉法人やＮＰＯ法人等に対し，刑務所出所者等への宿泊場所の提供等を実施する事業を行っています。この宿泊場所は「自立準備ホーム」と呼ばれており，委託を受けた法人職員が毎日自立に向けた支援を行っています。

事例　Ｅさん（５０代）は中卒後土木作業員として長年各地の飯場を転々としてきました。しかし腰痛で働けなくなり失職，たちまち野宿生活となってしまいました。空腹に耐えかねて窃盗（万引き）や詐欺（無銭飲食）を繰り返すうち５度目の受刑に至りました。両親は既に亡く同胞とも音信不通であったため，帰るべき場所がないまま刑務所を満期釈放となり，刑務所内での刑務作業で得たわずかな作業賞与金を使い果たしては刑務所に戻るといったパターンが10年近く続いていました。

刑事施設入所時の知能検査の結果はＩＱ相当値５０台であり，軽度知的障害が疑われる状態でしたので，Ｅさんの同意を得て「特別調整」を開始し，療育手帳を取得する手続等を進めた結果，Ｅさんは軽度知的障害と認定され，療育手帳が給付されました。帰住先については保護観察所と地域生活定着支援センター，自治体が協議を重ね，犯罪を行った知的障害者の更生に

理解のあるグループホームがＥさんの受入れを了解してくださり帰住予定地を確保できました。しかしこの時点ではグループホームは定員一杯であり，空きが出るまでの間地元の指定更生保護施設がＥさんの一時的な受入れを行うことになりました。仮釈放となったＥさんはこの指定更生保護施設に帰住しました。指定更生保護施設Ｆでは福祉職員（社会福祉士）が中心となって，本人の知的障害に配慮した処遇を行う一方で，高血圧や糖尿病といった慢性疾患の治療のため生活保護（医療扶助単給）の申請等も行いました。また，将来Ｄさんが暮らすグループホームの見学なども行いながら，Ｅさんの円滑な社会復帰に向けて関係機関が定期的に会議を開きました。仮釈放後２月が経過した時点でグループホームに空きができ，Ｅさんは保護観察所長の許可を経て転居，初めてのグループホームでの生活にもなじみ，無事に保護観察期間（３月弱）を終了しました。

コラム　高齢・障害等で自立困難な矯正施設出所者等の地域生活定着支援の取組み

２００９（平成２１）年から，高齢・障害を抱え自立が困難な矯正施設出所者等の地域生活定着支援の取組が，法務省と厚生労働省，福祉等実施機関の連携によりなされるようになりました。刑事施設では社会福祉士を配置し福祉的支援に係るニーズを把握し福祉サービス申請のための手続等の助言が行われるようになり，保護観察所の特別調整担当官も関係機関との連携に努めているところです。

コラム　保護司の方の地域力・人間力について

更生保護官署に奉職して２０年を過ぎ，多くの保護司の方々と一緒に処遇活動を重ねて参りました。

異動を重ねていく保護観察官が到底及ばない「地域性」はもちろん，一種の「人間力」ともいえる人としての器の大きさに感銘を受ける場面が多々ありました。

私が初めて保護観察官として第一歩を踏み出したその年，阪神・淡路大震災が発生，私が担当していた地区は甚大な被害を受けました。交通機関は遮断され，携帯電話も十分に普及していないこの時期，対象者や保護司などの更生保護関係者の安否確認は歩いて１つ１つ避難所などを訪ねて回るほか手段がありませんでした。ただ，１人の保護司の方の安否が確認できると，その保護司の方から「この近くなら○○保護司が自治会長をなさっていて，避難所の世話をしているはず。」「○○保護司さんならＰＴＡ会長をなさっている○○中学校の体育館に詰めておられるのではないか。」という情報が次々に寄せられ，実際にそこを尋ねていくと，まさに避難所のリーダーとして采配をふるい，あるいは自治会長として地域の被災状況のとりまとめに奔走なさっている保護司の方と再会を果たすことができました。同時に御自身も被災されたなかで地域のために奮闘なさっているお姿を見て，「保護司の地域性」ということの重みをこの時改めて実感しました。対象者の安否もできうる限り把握されており，「担当中の対象者やかつて担当した対象者が御世話になった保護司の安否を気遣って訪ねてきてくれた。」というエピソードもあちこちで耳にしました。ある対象者からは「夜間の仕事なので避難所で生活するのも難儀になり，余震が続くなか半壊状態の自宅アパートで暮らさざるを得ませんでした。そのことを報告した時，すかさず保護司さんが『危ないからすぐにうちに泊りにおいで。』と言ってくれました。自分の犯罪のことを知っているのに，こんな言葉をかけてもらえるなんて・・・。」という言葉を聞きました。

その後異動を重ねながらもこの地区の保護司の方とは手紙のやりとりが続いています。東日本大震災発生時には暖かいお励ましの言葉もいただきました。私は東日本大震災翌年に東北に異動し，震災復興関連業務を担うことになりましたが，この時の経験の１つ１つを思い出しな

がら業務に取り組んだことはいうまでもありません。

また，ある保護司さんは４０歳の若さで保護司を委嘱され，家業の写真店を切り回しながら自治会活動なども活発に行ってこられました。個別処遇は無論のこと，常に地区保護司会の運営や新しく保護司になった方が不安なく保護司活動ができるように常に心を配られていました。新しく保護観察官が着任すると，早い段階で地域の関係機関を訪問したりキーパーソンとなる方と顔会わせをする機会を準備してくださり，そのことがどれだけ処遇活動に役立ったかわかりません。

個別処遇では是々非々をはっきりと指導する厳しさもある一方で，様々な事情で結婚式が挙げられなかった対象者には，さりげなく声をかけて一生の節目となるような写真を手ずから撮影してくださるような優しさも兼ね備えた方でした。更生を果たした対象者が折々にお店を訪れ，節目節目で家族写真を撮りに来てくれることが保護司冥利に尽きるというお話からは，保護司との出会いを契機に対象者が地域社会に溶け込んでいくということ，保護観察期間が終了した対象者とは基本的に接触がなくなる保護観察官とは異なり，保護観察の枠組みのなかでの指導監督・補導援護は終わっても，地域住民相互としての交流は続くという保護司の地域性が強く感じられます。

４　非行や犯罪を防止し，立ち直りを支える地域のチカラ

ここまで更生保護を支える人々の役割について述べてきました。しかしこれらの人々の尽力だけでは，非行のある少年や犯罪を行った人の立ち直りを実現することは困難です。非行や犯罪が発生するのも地域社会であり，そこからの立ち直りが図られるのもまた地域社会です。

第１回目の連載で『更生保護は「社会内処遇」であり，個々の保護観察対象者への処遇だけに留まらず，広く社会の人々に「更生保護制度」や「再犯防止」に関する理解を求めていく必要があります。そのための広報活動として，毎年７月を強調月間とする“社会を明るくする運動”，平成２８年１２月に成立・施行された「再犯の防止等の推進に関する法律」の制定に伴い平成２９年度からスタートした「再犯防止強調月間」を中心とする広報活動が各地で展開されています。』と述べさせていただきましたが，広く地域社会の人々に「更生保護制度」や「再犯防止」について理解を求めていく必要があります。更生保護制度は，法務省（保護局）やその地方支分部局である地方更生保護委員会や保護観察所といった更生保護官署やそこに勤務する保護観察官だけではなく，先に記載したような多くの民間篤志家の方によって支えられている制度ではありますが，保護観察が「社会内処遇」と称されていることが示しているとおり，自身が行った犯罪や非行を悔い社会復帰を誓っている人を受け入れようとする社会がなければ，彼らの社会復帰は非常に困難となります。

事例　Ｆ君のお父さんは裸一貫で事業を立ち上げ軌道に乗せてきた気骨のある方でした。しかし将来に期待をかけた一人息子のＦ君は厳格な躾に反発し，成長するに従って問題行動を頻発するようになっていきました。お父さんのもとには学校や近隣から連日苦情が入る状態となり，学校や近隣住民の方との間で板挟みになりながら必死でＦ君を指導しようとするお父さんとＦ君との関係は悪化するばかりで，Ｆ君が少年院送致となった時点では，お父さんは万策尽きた状態ですっかり疲弊されていました。「親である自分が何とかしないでどうする。」という気持ちと，「これ以上Ｆ君が近隣に迷惑をかけてしまうようなことがあれば，もうこの土地には住んでいられない。」という気持ちがせめぎ合っているような状態で，面接場面でも「親である以上人の手を借りずになんとかする。」ことと「いっそ親子の縁を切り，Ｆが少年院から出る際も，出

迎えも受入れもしない。」という二者択一しかないと思い詰めておられる状態でした。こうしたある意味極端な二者択一（白黒思考）ではなく，「困ったら保護観察官や保護司に相談しながら何とかしよう。」と思うことができないその背景には，「信じられるのは自分の力だけ。」という信念のようなものが感じられました。

少年院に収容されている少年の社会復帰にとって，少年院に収容されている段階から行われる「生活環境の調整」における帰住先（仮退院後生活する場所）の調整や家族調整は特に重要となってきます。お父さんは「あれだけのことをしたのだから我が子とはいえ許せない。」と少年院にＦ君を訪ねていくことはしませんでしたが，主任官と会うことは拒まれませんでした。ただ，そこで語られるのは，これまでＦ君に関わってきた教員や援助専門職に対する不満でした。「親である自分ですら出来なかったのに，他人であるあんたにＦのことは分からないし何もできないと思う。」と語るお父さんの態度は，非常にかたくなな一方，「そこまで抱え込まなくても。」という痛々しさも感じさせられるものでした。それが確信に変わったのは，面接後にお父さんからかかってきた電話でした。「せっかく苦しい思いで話をしているのに，主任官は１度腕時計を見た。時間を気にしているようで，とても残念だった。」という内容のものでした。確かに主任官は次に控えている面接のことを気に掛けてしまい時計に１度だけ目を落としていました。ただ「他人にはＦのことを分からない。」と繰り返すお父さんが，実は相談したいという思いを持っていることがその時に胸に落ちる気持ちがしました。

以後，主任官は先輩職員のスーパーバイズも受け，お父さんの苦衷を受け止めつつ，更生保護施設を含めた「親元以外で想定される帰住先」も提示して話し合いを進めていきました。Ｆ君のような少年を受け入れてくれる更生保護施設は決して多くはありません。特に少年の特性上，更生保護施設になじめるかどうかも不安がありました。ただ，「選択肢がない（と感じられる）中での仕方がない引受け」では，仮退院後の保護観察過程において少年の不就労などの「揺れ」が起きた時に家族が持ちこたえられなくなる場合が往々にしてあります。「選べない」と思い込んでいるお父さんに，選択肢を示し，実際に父子が共に住まない方向も念頭においた上での調整にシフトしていきました。この頃からお父さんの表情が少しずつ和らいでいくように感じられました。

そうした折にお父さんが住まわれている地域を大規模な自然災害が襲いました。お父さんの自宅兼会社も大きな被害を受け，引受けも困難視されるほどの状況でした。電話も通じず街の様子も一変してしまったなか，お父さんの自宅兼会社に安否確認に伺った私にお父さんは「ああ，良く来てくれはった。」と声をかけられました。初めてのことでした。そこでお父さんは「Ｆのことで自分ら一家は地域で孤立していると思っていた。」「だけど今回の災害の時に，水や毛布は足りているかと声をかけてくれはったのは，Ｆが散々迷惑をかけてきた近隣の人々やった。」「Ｆが御世話になりながらも散々裏切ってきた保護司さんも駆けつけてきてくれはった。保護司さんとこも大きな被害を受け張ったのに，自分らの家のことを心配してくれはった。」「Ｆ君が帰ってくるんやろ。お父さんも諦めたらあかんでとも言ってくれた。」「正直，ありがたかった。人に弱みを見せたらあかん，人に頼ったらあかんと思って今まで生きてきた。だけど，今回は近所の人たちの心遣いが心に染みた。おおきに，と自然に御礼の言葉が出ていた。」

この時私は，「地域に帰っても保護観察官や保護司が支えていきますよ。」といった類の言葉を援助専門職がたとえ百編言うよりも，同じ地域の方々からの声かけの方がずっとお父さんの支えになるということを実感しました。

この事例を経験して以降私は「非行や犯罪を

行った人を受け入れてくれる地域社会とは何か。」という点を常に意識するようになりました。更生保護官署に奉職後，一番長く配属されてきたのはいわゆる処遇部門ですが，実は更生保護の広報を担当する部署にいた時期も少なくありません。その際に常に意識しているのは，更生保護における広報は単なるＰＲ（Ｐｕｂｌｉｃ Ｒｅｌａｔｉｏｎｓ）ではなく，活動を通じてのＣＲ（Ｃｏｍｍｕｎｉｔｙ Ｒｅｌａｔｉｏｎｓ コミュニティー・リレーションズ 地域で活動を円滑に行うためにその地域のコミュニティーの特性に対応して行うコミュニケーション活動～広告用語Ｗｅｂｌｉｏ辞書より）の確立ということです。

昨今，更生保護に限らず，例えば介護保険における新しい総合事業のように，様々な分野で「地域社会のチカラ」が求められています。しかし「地域社会のチカラ」は単なるかけ声だけで魔法のように生まれるものではありません。個別処遇にしろ，ＣＲの確立を視野に入れた広報活動にしろ，地域社会における関係性といった観点を視野に入れておくことが非常に重要になってくると考えています。

社会福祉分野に限らず施策や制度といったものは，運用に携わる現場の職員がその意義や理念を正しく理解し，確実に運用することで初めてその機能を発揮すると考えます。一方で，「無縁社会」とも現代社会において，弱い立場の人々が地域で孤立し支援を求めるＳＯＳが届かない，それすら発することすらできない現状があります。本当に支援をしている人が必要な支援につながっていくことが難しいのです。東日本大震災以後「絆」といったかけ声を多く耳にします。しかし地域社会での関係性の再生を敢えて「仕掛けていく」場や人を育てるといった視点での取組が必要だと痛感しています。

参考文献

・「保護観察の現状と課題～地域で支える少年の更生」（資生堂社会福祉事業財団「世界の児童と母性」VOL.81　2017 年）
・更生保護制度パンフレット「更生保護～地域社会とともに歩む」（法務省保護局　2017）
・「５０周年記念誌　支えあい，共に輝きその先へ」（日本更生保護女性連盟　2015）

学校における自殺予防（2）
―教師側の受け入れのために必要な議論とは―

立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構　川本　静香

1. 子どもの自殺予防のために社会が学校・教師に期待するもの

拙稿（学校における自殺予防（1））では、日本における若年層を対象とした自殺予防対策の必要性と、自殺予防教育のあり方について述べた。本稿で改めて若年層の自殺予防対策を推進する必要性を詳細に説くことは避けるが、ここ 10 年間における当該年齢の自殺死亡率の減少幅の少なさが物語るように、これまでの自殺予防対策は、若年層に対してあまり実効的でなかったと考えられる。

このことを踏まえ、平成 28 年に改正された改正自殺対策基本法では、若年層に対する自殺予防対策として、学校における自殺予防教育の導入に関する内容が組み込まれた（自殺対策基本法，2016）。これは、小学校・中学校の時に自殺予防教育を実施することで、困った事やつらいことが起きた際に、他者に SOS を適切に出すことができるようにすることを目指したものである。

法律に組み込まれていることからみても、若年層の自殺予防対策の担い手として、社会が学校に一定の期待を寄せていることは間違いない。また、海外で実施された研究では、学校の中で自殺予防教育を行うことについて、一定の効果があることが示されていることから、日本でも同様の取り組みを行うことで、効果が得られる可能性が期待される（Aseltine, 2003）。

このように、社会あるいは学術的な観点からも、若年層における自殺予防における学校への期待は高まるばかりであるが、実際のところ、この状況について教師はどのように感じているのだろうか。前回にも触れたが、日本の学校で「自殺」という言葉を出すことに対しては、一定数の教師が「寝た子を起こす」といった不安感を感じているとされる。こうしたことを考えれば、教師が学校で自殺予防教育を生徒指導や保健体育、学校相談といった中で扱うことに対する率直な考えや感じ方について触れることは重要であると思われる。

そこで本稿では、自殺予防教育について受け入れ、あるいは実践を期待される教師側の状況について検討してみたい。なお本稿は、学校や教師にとって、自殺予防、あるいは自殺予防教育がどのように受け入れられるのかに関し、将来的に学術的な議論を展開するためのひとつの手がかりとして位置づけるものである。

2. 教師の受け入れの実際

学校における自殺予防について、教師がどのように感じ、考えているのかを知るためには、やはり実際の学校の教師に話を聞いてみることが肝要であろう。そこで筆者の知り合いの公立中学校の教師（A さん）に、荒削りではあるが、率直に話を聞いてみた。

「自分の学校で自殺予防教育を導入すること（する可能性）についてどう思うか」と「学校で「自殺」という言葉がタブー視されることがあることについて、どう思うか」について、尋ねてみた。以下は、その内容について一部抜粋したものである。なお、読みやすさと匿名性を担保することを目的に、内容を変更しない程度に一部修正を加えている。

〈Q1. 自殺予防教育を導入すること（する可能性）について〉

筆　者：自分の中学校で自殺予防教育を実施することについてどう思いますか？

A さん：（しばらく考えた後）これまで考えたことがなかった。そもそも、自殺予防ということを中学校でやるなんて考えたこともないし、今、あらためて言われても・・・。（無言）。子どもの自殺については、ニュースなんかでもやられているから、問題になっているとは思うし、それが必要だということも分かるけど、自分の学校でやるとか、そういう次元の話だと思ったことがなかった。

〈Q2. 学校で「自殺」という言葉がタブー視されていることについて〉

筆　者：学校で「自殺」という言葉を使うことについて、「寝た子を起こす」という意見もあるけれども、それについてはどう思う？

A さん：そういうことについても、本当に考えたことがない。「自殺」という言葉をどう使うとか、どう予防するか、ということよりも、目の前のことことをどうするかの方に気が向いている。

筆　者：目の前の事？

A さん：授業の事とか、部活のこと、会議とか。あとは不登校気味の子がクラスにいて、その事とか、その日に起こるいろんなトラブルとか、保護者対応とか、やることが本当にいっぱいあって、そういった目の前のことをいっこいっこやっていくので精一杯。

この話をしてくれた方について少し補足すると、A さんは公立中学校で担任と部活動の顧問をもっている、若手から中堅の狭間に差し掛かっている教師である。A さんの意見は、量的研究で言うならば、「N=1」と表され、普遍的でない、一般的でもないものとして片付けられてしまうの

かもしれない。しかし、この意見は、学校現場で働いている実際の教師の生きた声でもある。

たった1人の声ではあるが、Aさんの話を貴重な現場の声の1つと捉えると、ここから見えてくる課題は2点あるように思われる。つまり、学校内で教師同士、あるいは管理職等も含めての議論を行う機会や土壌が未だ十分にできていない可能性（1点目）と、教師側にそうした議論や環境づくりをするための時間的、精神的な余裕が十分にない（2点目）、という点である。

国としては、学校現場で自殺予防教育を導入するにあたり、「子供に伝えたい自殺予防―学校における自殺予防教育導入の手引」を作成し、その中で「第1段階：校内の環境づくり」、「第2段階：下地づくりの教育（生命尊重・心身の健康教育・人間関係づくり）」を経て、「第3段階：自殺予防教育」といった学校での展開例を示してきた（文部科学省・児童生徒の自殺予防に関する調査協力者会議，2014）。A先生は、学校での自殺予防教育の導入等について「これまで考えたことがなかった」と語っているが、これはおそらく、第1段階である「校内の環境づくり」が現状では十分でないために、「自殺予防教育」や「自殺」というキーワードを校内でどのように進めていくかについての議論の機会がほとんど無かったためであると考えられる。では、その環境づくりのためには、何が必要なのだろうか。おそらくだが、課題の2つ目に挙げた、教師側にそれを扱うだけの時間的、精神的余裕が十分にないという事が関係していると思われる。

教師の時間のなさについては、過労や時間外労働、部活による休日のなさといった問題が取り沙汰されるようになってきた。文部科学省が平成28年度に行った「教員勤務実態調査」によれば、平日で1日あたりの勤務時間は、小学校教諭で11時間15分、中学校教諭では11時間32分と報告されている（なお、ここには家での持ち帰り仕事に掛かった時間は入っていない）。1日あたりの正規の勤務時間は7時間45分とされていることを踏まえれば、小学校、中学校の教師は正規の勤務時間から毎日4時間程度は残業をしていることが分かる。また、同調査では、部活動の顧問をしている教師ほど、勤務時間が長時間に渡る傾向にあることを明らかにしており、そうした教師は、土日であっても勤務を余儀なくされたり、部活の試合等で出張があったりするなど、教師自身が休む時間を確保することもままならないのが現状である（文部科学省初等中等教育局，2017）。

時間的余裕のなさは、精神的な余裕を奪う可能性もあるだろう。これだけの忙しさを抱えながら、これまで学校で扱うことが少なかった（あるいはタブー視されてきた）自殺予防や自殺予防教育について、教師が議論したり、受け入れのための環境づくりを行ったりすることは、教師側からすれば、想像以上に困難なことであると考えられる。学校や教師の日常を考慮すれば、学校に自殺予防教育を導入するためには、

社会の要請や法律以外の「何か」が必要なのではないだろうか。

3. 「何か」となるものは

本稿では、自殺予防教育の受け手と期待される、学校、とりわけ教師の受け入れに関する課題ついて、荒削りながら、今後の議論の展開の一助となるべく検討を進めてきた。具体的には、公立中学校の教師であるＡさんの語りから、学校で自殺予防教育を導入するための環境づくりが未だ十分にできていないところがある事に触れ、その環境づくりに必要な「時間」の確保の重要性が浮かび上がってきたところである。教師の多忙さを改善するための議論は各方面ですでに進められており、実際に業務時間改善のための動きもあると聞くが、それが現場の教師に届くようになるのは今しばらく時間が必要だろう。であれば、今、その環境づくりのために出来ることは何か。

将来展望のようなものではあるが、現状で出来ることとして、学校に関わる他職種が環境づくりのために連携を始めることが考えられる。たとえば、教頭や校長といった管理職が声掛け人となり、スクールソーシャルワーカーや、スクールカウンセラー、地域の保健師や、地域の教育相談センター、保護者会などが参集し、議論をするための準備を少しずつ整えることができれば、学校を中心として地域を巻き込みながらの環境づくりが出来るだろう。そうしてできたコミュニティを中心に、教師を巻き込みながら、学校での自殺予防教育をどのようにするべきか、議論を進めることができるかもしれない。

「自殺予防はみんなの仕事」という言葉がある。これは、自殺予防に携わる者の中では有名な言葉であり、国際自殺予防学会が自殺予防を広めていくにあたり、標語として全世界に発信しているものである。この標語を見て、ふと思う。学校での導入を検討する時に、学校だけが、教師だけが、それを抱える必要はおそらく無い。「自殺予防はみんなの仕事」という標語の通り、学校や教師の受け入れ体制をつくることを、学校に関わる人みんなの仕事として扱ってよいはずである。そしてそのようなコミュニティが、学校で自殺予防教育を実践することを下支えするものになるかもしれない。

引用文献

電子政府（2016）．自殺対策基本法 (Retrieved from http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H18/H18HO085.html)（閲覧日：2017 年 11 月 20 日）

文部科学省・児童生徒の自殺予防に関する調査協力者会議（2014）．子供に伝えたい自殺予防―学校における自殺予防教育導入の手引　(Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2014

/09/10/1351886_02.pdf）（閲覧日：2017年 11 月 29 日）

文部科学省初等中等教育局（2017）．教員勤務実態調査（平成 28 年度）の 集計（速報値）について （Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/04/__icsFiles/afieldfile/2017/04/28/1385174_002.pdf）（閲覧日：2017 年 11 月 29 日）

Aseltine, R., H (2003). An Evaluation of a School Based Suicide Prevention Program. Adolescent & Family Health, 3, 81-88

「対人援助通訳の実践から」

第 2 回

飯田奈美子

１．はじめに

前回は、私の自己紹介と私がなぜコミュニティ通訳研究をはじめるようになったかについて述べていきました。今回は、もう少しコミュニティ通訳についての説明を皆さんにしていきたいと思っております。そして、対人援助通訳としての通訳者の役割について考えさせられたエピソードをご紹介したいと思います。まずは、コミュニティ通訳の歴史を通訳システムについて医療通訳の例をあげてご紹介します。

２．コミュニティ通訳の歴史と通訳システム

日本における対人援助場面のコミュニティ通訳の歴史と通訳システムについて、音声言語通訳の医療通訳を例に挙げて説明していきます。医療通訳は、コミュニティ通訳の中でも通訳資格化の活動が活発に行われ、研究が比較的進んでおり、それにより対人援助のコミュニティ通訳に共通する課題が明らかにされています。

日本の医療通訳の始まりは、在住外国人に対する通訳として発展してきました。1990 年の出入国管理及び難民認定法の改正以降、日本で生活する外国人が急増し、在住外国人が直面する医療問題が表面化しました。当初は通訳の必要性ではなく、在住外国人の健康保険の未加入や経済的困窮、医療費の未支払いなどの医療受診の問題と捉えられていました。その問題を外国人支援団体等が支援していく中で、次第に医療場面における言語の問題が注目されるようになり、外国人支援団体等は医療通訳サービスを提供し始めるようになりました。そのため、現在の在住外国人に対する医療通訳システムの多くは、多くが外国人支援の一環として始められたものであり、通訳者はボランティアとして位置づけられるようになったのです。外国人支援としての医療通訳の開始は、外国語もしくは日本語のできる支援者たちが支援を行いながら通訳を行うというものでした。しかし、外国人集住地区から多くの通訳ニーズが出てくるようになると、外国人集住地区にボランティア通訳者を派遣する活動が始まりました。活動を通じて、単に通訳ができればよいという認識から、医療の専門知識や用語を正確に訳せる語学能力や通訳技術、通訳倫理の習得も必要だと変化していき、研修の実施が求められるようになりました。

そして、医療通訳は有償のボランティア活動と位置付けられ、報酬が出るようになった。しかし、多くは 1 回 3 時間で交通費込 3000 円程度であり、交通費や昼食代などを考えると割が合わないものであります。

現在の在住外国人に対する医療通訳システムは、多くが外国人支援の一環として作られ、支援者たちが草の根活動で築きあげていったものであり、その活動の意義を理解した自治体や病院などで継続して行われるようになっていったのでした。

次に、医療通訳システムについて紹介していきます。

医療通訳の労働形態として、ボランティア型と雇用型があります。ボランティア型は、NPO 団体や自治体などに登録して無償もしくは有償（少額）で医療通訳を行うものです。雇用型は病院スタッフとして雇用され、職業として医療通訳を行うものです。東海地方の日系南米人の集住地区では雇用型で医療通訳を配置している病院がある。病院によって常勤や非常勤と様々な形態で雇用されていますが、外国語が出来る職員が医療事務や看護師として雇用され、必要に応じて医療通訳を行う兼任型もあります。

通訳形態としては、派遣式、駐在式、遠隔（電話）式の 3 種類の仕組みが構築されています。自治体や NPO 団体によるボランティア型の医療通訳は派遣式が多いです。例えば、神奈川県や京都市の医療通訳システムでは、協定を締結した病院に医療通訳を派遣しています。このシステムでは、誤訳などが起こった際に医師が加入する損害保険を適用できるようにしたり、医療通訳の担当者を病院内に配置して通訳利用ルールの院内の認識を徹底することができます。しかし、協定病院に限定されているので、外国人が行きたい病院に医療通訳を派遣することができないなどの制約があります。派遣式では、病院からの依頼だけでなく、外国人からの依頼にも対応する団体もある。外国人が通訳依頼を行い、自分が行きたい病院に通訳者が同行するというものです。この形式の長所は、外国人が行きたい病院を選べることです。しかし、初診の病院では、医療通訳を介するコミュニケーションに不慣れで通訳者の役割を理解せずに、通訳者を家族や友人と同様の存在として、様々なことを通訳者に押し付けられる場合があり、通訳者がソーシャルワーカーの役割をせざるを得ないこともあります。

駐在式は、病院に通訳者が駐在して通訳を行うものである。病院が独自に通訳者を登録して通訳サービスを提供したり、NPO 団体が病院と提携して通訳者を常駐させている場合もあります。病院駐在式のメリットは、病院内に通訳がいることで、通訳者も病院の機能や医療専門職の役割を知ることができ、他の医療者と連携が取りやすいという点があります。また、医療者に通訳の存在を知ってもらい、通訳の利用方法や通訳を介してコミュニケーションを行う際の注意点も喚起しやすい利点もあります。しかし、医療機関の理解を得ることが難しく、集住地区など外国人の利用が多い地域のみに限定されてしまいます。

遠隔式は、電話やタブレットを利用して通訳を行う仕組みであす。通訳者が現地に

行かないことで、遠隔地や感染症の受診にも対応できるのですが、その反面、インフォームドコンセントや複雑な内容、深刻な状況の通訳には適しません。遠隔式は、訪日外国人の増加から通訳会社が参入をして通訳サービスを開始していっています。

以上のように、在住外国人支援から始まった医療通訳は、労働形態がボランティア型と雇用型に分かれているだけでなく、通訳形態も派遣や駐在、電話など様々な形態が混在しています。それぞれの通訳形態は、各地域の状況、集住する外国人の国籍、人数、地域の特色などに対応して形成され、各地域によって通訳形態は異なっています。

医療通訳を例に挙げましたが、他の領域（福祉や教育）においても比較的同じような経緯や通訳システムで成り立っています。

３．通訳者の役割「傾聴」

上記のように、通訳者は、所属している団体によって、さまざまな通訳形態で通訳を行っています。基本的に通訳をしている人はボランティアが多く、通訳者一人が病院などの派遣先に派遣されて通訳を行います。最初の数回はトレーニングとして先輩通訳者やコーディネーターが付き添ってくれるところもありますが、ほとんどの場合、そのようなトレーニングなしで本番を迎えます。そこで通訳者を悩ますのは、どのように訳出の問題ではなく（それもありますが)、待ち時間で聞かされるクライエントの話にどのように対応したらいいかということも問題になってくるのです。

たとえば、NPO 団体に所属している通訳者が派遣型で病院に派遣されて通訳を行う場合、先ほど述べたように、基本的に 1 人で派遣されます。病院の入り口や受付などで患者や患者家族と待ち合わせをして、受付から診察、検査、会計、薬局など患者の受診行動の最初から最後まで付き添います。大病院になるほど、待ち時間が長くなり、半日以上かかることも珍しくありません。その間、通訳者は患者や患者の家族とさまざまな話をします。病気のこと、家族のこと、仕事のこと、日本での生活のこと、母国の家族や生活のことなどなどです。母語で話をすることができるので、患者や家族の方は喜んで話をされます。中には、深刻な内容の話もあります。深刻な内容の話を聞くことにより、通訳者が助けてあげたいと思い、通訳者一人で支援を行ってしまうなど、通訳者の役割を超えてしまう場合があります。このようなことがあるため、海外の医療通訳では、待合の時は一緒に待たないとしているところもあります。でも、私は、通訳者が通訳セッション以外の時間にクライエントの話をきくということはとても大事だと思っています。私はある経験をして、対人援助通訳者の役割として「傾聴」が必要とされているのだと知りました。

私は、支援相談員の仕事をしていた時、通訳セッションが終わったあとに、よく中国帰国者の方と二人で話をしていました。たわいもない世間話の中に、家族のこと、日本の生活のこと、中国での生活のことが話されました。ある残留邦人の C さん（女性）は、私によくこのように言いました。「子供たちは変わってしまった。」C さんのお子さんたちは近所に住んでいて、週末

はC さんの家にみんなで集まり、C さんのお世話をしているとても親孝行のお子さんたちでした。C さんがなぜそのようなことを「通訳者」の私に言うのか、その時は全然わかりませんでした。

そして、最近になってようやくC さんがそのように言った訳がわかったのでした。C さんは、「通訳者である私」に話を聞いてもらいたかったのです。C さんにとっては、日本での生活のつらさや子供たちに対する心配は、親孝行の子供たちには直接話ができるものではありません。なぜなら、お母さんのそんな気持ちを知ったなら、親孝行の子供たちはとても心配するからです。また、近所にはたくさんの中国帰国者がいますが、家族についての話は、狭いコミュニティの中では、同じ中国語が通じる人がいても多くは話すことができません。そして、漠然とした不安は、援助の専門家に話すほどのものではないと思い、忙しいケースワーカーの邪魔をしないようにしていたのです。

C さんは、誰かに話をきいてもらい「共感」してもらいたいと思っているだけでした。そして、それは「通訳者としての私」に求めたのでした。「通訳者としての私」は、言葉が通じるだけではなく、他の要因もあるのでした。それは、家族やコミュニティの人ではなく、自分の問題にかかわるステークホルダーではないこと。そして、守秘義務があり話した内容を外に漏らさない存在だということです。それらを理解して、C さんは私に対して「子供たちは変わってしまった」と発言することで、「通訳者としての私」に話を聞いてほしいという合図を送っていたのだと気付いたのでした。

ことばの通じる通訳者の存在は、異国でくらす外国人などにとっては大きな存在になるといえます。通訳の事例検討会をしていたときに、ある通訳者が病院の待合で待っている間に、患者さんから「死にたい」と書かれたメモを渡され、自分ではどうすることもできず、ただ話をきくだけだったと話をされました。その話を聞いた別の通訳者はこう言いました「かかりつけの医者がいるように、かかりつけの通訳者がいていいじゃない。ただ話を聞くことも立派な通訳者の仕事よ」と。

私たち通訳者は、通訳を行うことが主な仕事になります。しかし、対人援助場面においては、通訳者も対人援助者としてさまざまな対応をしていかなければならないことに遭遇し、それを通訳者が個々人で考えながら行っていっています。そのような通訳の現状についての理解は進んでおらず、通訳セッションだけの費用しか支払われなかったり、通訳者の役割ではないと認めてもらえなかったりすることがあります。対人援助チームの一員として通訳者を認めてもらうためには、まずは通訳者がおこなっているさまざまな役割を知ってもらうことが必要だと感じています。

マイクロ・アグレッションと私たち

～分断から動き出す交流～

朴　希沙（Kisa Paku)

マイクロ・アグレッションという言葉を聞いたことがあるでしょうか。微細な攻撃とも訳せるこの言葉は、旧来とは異なる新しい差別のあり方として、1970 年代に米国で提唱されました。その歴史や内容の詳細はまた次号以降に譲るとして、今号では私がこの言葉にまつわる物語を連載させてもらうことになった経緯、そして副題の意味について書きたいと思います。

・自分と社会の接合点――ライフワーク

私は 2015 年度に立命館大学大学院の応用人間科学研究科を修了し、現在は臨床心理士として女性や子どもを対象とした心理臨床の仕事をしています。ところが、この仕事以外にも、読書会やバンド、翻訳会や姉の子どもたちのベビーシッター等様々な活動を一生懸命しているので、時々自分の本業は一体なんだったか分からなくなる時すらあります。結構、多忙な毎日です。ただ、お金にはならなくても、自分の人生における仕事（ライフワーク）は何かと聞かれたら、それは結局「分断から動き出す交流」だと言えます。

大学院に入学した当時、私は在住地域で友人らと、在日コリアン（以下、在日）のための活動を行っていました。非常にひっそりと、しかし濃密な活動を行って、すでに数年がたっていました。会の名前は「それが一人のためだとしても（してもの会)」。「それがたった一人のマイノリティのためだとしても」社会や自分自身が変化していくことを求めて始まった会でした。ところで、大学院に入学したばかりの私は、自分のやっている活動なんてめちゃくちゃ「しょぼい」ことだし、別に社会から認められるようなことはなんにもないだろうとたかをくくっていました。そもそも当時は、日

本社会に対する疑問や不信ばかりで、自分がどのように社会とかかわっていけるのかも見当がつきませんでした。

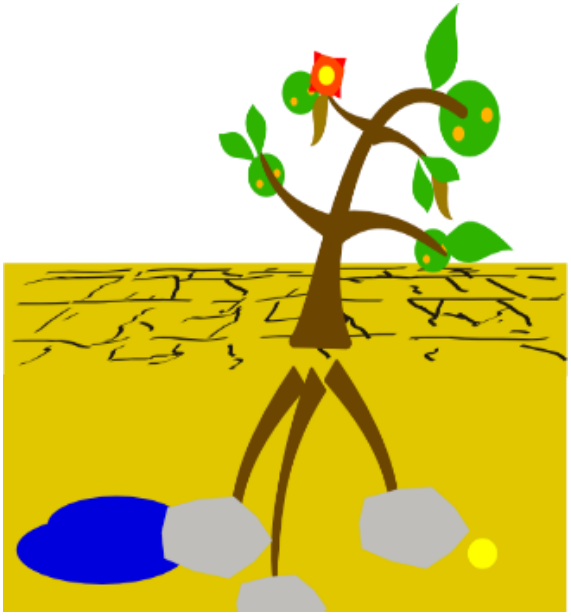
だから今自分がこうやって臨床心理士になったり、実際仕事をしたり、対人援助学マガジンに書きものをしたりしていることを考えると、不思議な気持ちになります。その契機になったのは、してもの会の活動を修士論文でまとめたことでした。これをきっかけに、私は自分がやっていることを社会の中に位置づけ始めます。また、在日や社会的マイノリティに対する心理社会的支援の必要性を言語化したり、研究したりすることの重要性を初めて認識しました。その言語化のひとつが、これから対人援助学マガジンに連載すること、というわけです。

・「カラカラなら泥水でもすする」 ～1 本の木の物語～

ここで少し、先から触れているしてもの会について紹介したいと思います。

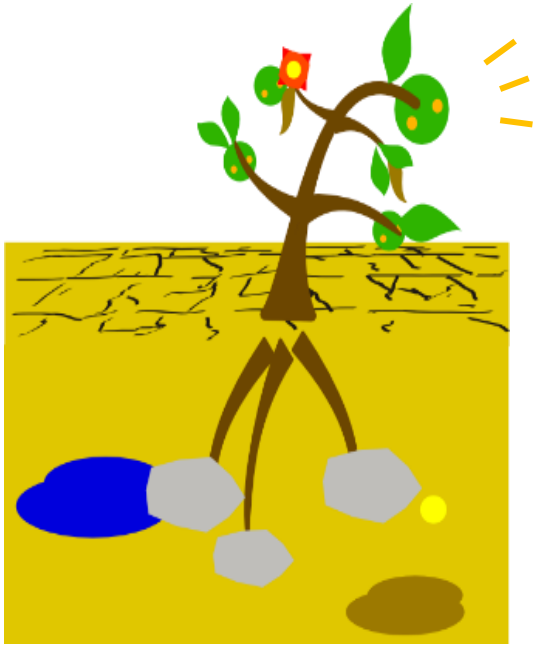
この会では、べてるの家の「当事者研究」の手法を用いて、それぞれの悩みや困りごとについてシェアすることを中心に、勉強会や音楽活動等を行っていました。しかし最もよくやっていた活動といえば、とにかく話をすること、盛んに交流することでした（会の詳細については、『質的心理学研究』18 号に「『してもの会』における Respectful Racial Dialogue の実践」という論文を投稿しましたので、興味のある方はそちらも参照してもらえればと思います）。話の内容は、参加者の当事者研究や最近はまっていることなど様々でしたが、最もホットなトピックは、まさに今、ここで私たちの間に生じている違いや分断、対立、そして共通の願いに関することでした。

そのしてもの会の当事者研究の過程で生まれたメタファーに、「泥水すする」木の物語があります。



この絵を見て、皆さんはどんなことを思われますか？「なんだか曲がった木だなあ」とか、「花がついている」、「地面がカラカラだ！」といったことに気づかれるかもしれません。これは、してもの会の在日参加者たちの当事者研究から生まれた、自分たちを表現する木です。一見、「もっとまっすぐ立てよ」とか言われそうです。ところが根っこをみると、いくつもの岩が養分や水分を吸収することを阻んでいることが分かります。ここで、養分や水分は周りからの理解やサポートを、岩は辛い家庭環境や周りに理解してもらえない自らのルーツ等を表しています。

実際、水も養分も吸えなければ、この木



はまもなくカラカラにひからびて枯れてしまうでしょう。

しかし、木は自分の足元に、「泥水」を発見します。それは、きれいな水に比べれば汚くてドロドロしているものかもしれませんが、木にとっては「すすれる」「吸い上げられる」ものです。現実では、泥水とは例えば気まぐれに自分を認めてくれる人だったり、たくさんの量のお酒だったりするかもしれません。それは人それぞれでしょう。ただ、きれいな水のようには栄養がなく、飲んだらおなかを壊したり、周りから汚いと思われるけれどもサポート資源ではあります。

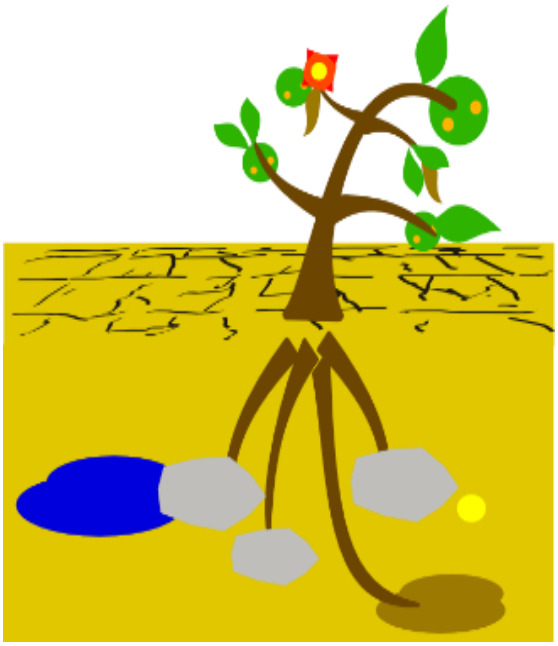
そんな泥水を「吸い上げる」時、一番葛藤するのは本人です。岩が見えない周りからは、「何やってるの」「あんな変なものを養分にしている！」と思われます。泥水すするしかない自分のことを、みじめに感じることだってあるでしょう。それでも、木は根を伸ばします。それは、自分が今の環境で少しでも養分を得るためです。

ちょっと抽象的な表現になってしまいましたが、してもの会の当事者研究では例えばこんな悩みが持ち込まれていました。それは自らの環境の中で、自分がいやでも切れない人間関係や依存の問題に苦しむ一人ひとりの姿でした。それは「泥水すすって」生きながら絶えず葛藤し、環境や自分自身とまさに「苦闘」している姿だったといえます。

・「自分も“岩”のひとつなのかもしれない」～言葉に出来ない圧をめぐって～

してもの会の参加者は、在日だけではありませんでした。そこには、在日と親しい関係にあって、もっとこれから関係をよくしていきたいと思っている日本人も参加していました。他にも、ただ当事者研究やしてもの会の集まりが面白そうで来ている人たちもいました。

先に、木の根を阻む「岩」のひとつとし



て、「周りに理解してもらえない自らのルーツ」について触れましたが、これは具体的には、在日が日本社会で日々直面している差別やあいまいな攻撃のことを指しています。これについても、また号を改めて詳しく書きたいと思いますが、在日の悩みについて扱っていくにつれて、その悩みには個人的なものだけでなく、日本社会や日本人との間に生じている葛藤が複雑に関係していることが分かってきたのです。

しかしそれは、非常に言葉にしづらいものでした。ネットで書かれているようなあからさまな攻撃を直接あびせられることは、ほとんどの人はありませんでした。むしろ日々の生活の中で、小さな埃のように降り積もって自らの中に固く染み付いている体験こそ、言葉にすることが難しく、また深刻なものだったのです。

そして、その小さな攻撃、些細な対立はもちろんしてもの会でも起こっていました。在日といい関係を結びたいと思っている日本人、その「自分も、在日にとっては“岩”のひとつになのかもしれない」。この認識をめぐって、してもの会では様々な対立・そして交流が展開されていきます。

このような過程の中で、私は次第に旧来のあからさまな差別とは異なる新しい形態の差別、「マイクロアグレッション」という概念に近づいていきました。そして、それを乗り越える実践として、「Respectful Racial Dialogue」を考えるようになるのです。

・・・続く

編集後記

編集長（ダン　シロウ）

ご覧頂けましたか？ 第 30 号発刊を記念して、執筆者個人別編集版がアップされています。どうぞ関心のある著者のを。

また今号も新しい執筆者が一人。朴　希沙（Kisa Paku)さん、大切な観点からの丁寧な取り組みの省察だ。

第 31 号を数えるにあたって、五十余名の多彩な連載陣に大いなる感謝を表しておきたい。もっともこれだけの大人数になると、それぞれの事情があって、今回は珍しく五名の方が休載。そんな事情も起きてくるが、全体の総ページ数が決まっているわけではないweb 雑誌ゆえ、そのあたりは自在。毎号、増えたり減ったりして、このボリュームで、こんなコンテンツでフリーマガジンというのも自慢だ。

季刊定例発行はほぼ遅れることなく八年。創刊二年目の2011年 3 月には、東日本大震災直後の発行になったが、編集後記でそのことに触れながら定期発行した。そしてその時書いたことに引っ張られるように、被災地との細く長いおつきあいが継続中だ。

何も起きない世界を生きることは誰もできない。まさかこんな事にの連続が人生である。そんな中で、31号をお届けできているのはちょっと自慢だ。各連載のような継続される営みの記録が、どこかの誰かの今を支えることがあれば幸いである。

こんなことが可能なのは社会のインフラ整備との相互作用ゆえだ。読者である皆さんも、各自の受信システムを駆使して、その一翼を担っている事になる。

誰もが簡単に使えるようになった社会の仕組みは、フェイクニュースの流布や、地位ある者の節度ない思い込み放言をも垂れ流しにさせてしまってもいる。そんなものとは一線を画しながら，発信の自由を確保し続ける、これが大切なことだろう。

今後もできる限りフリーにと思って編集している。どうぞ、読者として、執筆者として、いっそうのご声援をお願いする。

編集員（チバ　アキオ）

対人援助職の職能団体は自分たちの資格の価値を守ることを倫理綱領で定めている。その中には資格の既得権も含まれることが多い。それが生産的に回っていれば問題はないが、いざ自分たちの資格ムラが崩されそうになると、その動きにはどう反応するのか。臨床心理士・公認心理師の動きをみてもなかなかつらいものを感じる。超高齢社会、人口減少、人材不足、サービスの合理化の課題は急務で既にその兆しは顕著である。今後、資格ムラも維持できなくなることはある。対人援助領域における資格制度は、そもそも提供するサービスの質を向上、あるレベルを保つために成立をしてきた。その資格制度による質の確保が限界を迎えているように思えてならない。現状ではお金がないと、そして時間がないと資格を得ることができない。学歴差別、経済的差別の温床にもなりかねない要件もある中で、人材不足となり、ワーキングプアも指摘されて久しい。資格制度に何もかもを求めるのも酷である。その職に就いたものが向上できる機会をどう設けていくかがポイントになる。その基礎となるところでは置かれた労働環境において学ぶ時間をどう確保できるのか？経済的な余裕をどう確保できるのか？にかかっている。

こんな現状を見た場合、やはりこのマガジンの意義深さが際立つ。資格による排除もない、経済的負担が無料、対人援助学会自体も会費も財布にやさしく、研究会も参加費無料である。研究者や実践者が社会に対してできることは、これまでの社会にあるような「学会」「研修会」だけではない！と、この対人援助学会では宣言してきた。知っているものが相互にできることがある。経済的選別、時間的余裕の有無による選別とは距離を持つという姿勢を示してきた。つまりマガジンも学会もいわば社会事業的側面があるといえる。そのことが 30 号を迎え、時代的により明確になった。それもまた複雑な心境である。私たちのような発信は内容もやり方も非常に挑戦的であり、挑む価値があるものに向かっているとあらためて感じている。この挑み方は非常に私の好みである。

編集員（オオタニ　タカシ）

12 月 1 日に、対人援助学マガジン 30 号発刊記念号が発刊されました。20 号以上連載されている方の原稿をまとめた著者別編集版が、なんと 34 本も掲載されています。私もちゃっかりぎりぎり 20 回の連載でまとめて頂きましたが、30 回連載の方も少なくなく、その原稿の厚みは圧倒的です。

20 回、30 回というのは、そのまま 5 年、7 年半という執筆してきた年月に換算されます。30 回続けて読んでいる連載はいくつかありますが、初期のころの原稿を見返すような機会はあまりなく、今回の著者別編集版は、そんな珍しい機会を与えてくれました。

7 年半前と今と、ほとんど変わるところがないという人の方が少ないでしょう。執筆者が取り上げているテーマや切り口、語り方には、やはり違いを感じます。しかし一方で、話題やテー

マはさまざまであっても、そこに通底する軸のようなものも感じます。だからこそ、長期連載が成し遂げられていると言えるのかもしれません。

新刊の 31 号とともに、ぜひご一読ください（一読という量ではありませんが…！）。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk. 3web. ne. jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町４３８

ランブラス二条御幸町４０２　仕事場 D・A・N

対人援助学マガジン

通巻31号

第8巻　第三号

２０１７年１２月１５日発行

http://humanservices.jp/

第32号は2018年3月15日
発刊の予定です。
原稿締切2018年2月25日！

常に新規執筆者を求めていますし、お誘いすることもありますが、執筆依頼はしていません。自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分の専門分野の今日記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

連載誌ですが必ず何回以上と決めているわけではありません。必要な回数（ずっと・・・というのもありです。多くの方達が連載8年目を迎えています）を、書いていただけるよう設定します。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。したがって書いていただく方には、対人援助学会への入会をお願いします。まだ登場していない、対人援助領域からの積極的参加を求めます。

対人援助学会事務局

〒603-5877　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学大学院応用人間科学研究科内
TEL:075-465-8375 FAX:075-465-8364

対人援助学会事務担当

入会・退会・変更届

〒540-0021　大阪市中央区大手通 2-4-1
リファレンス内
TEL/FAX 学会専用:06-6910-0103

表紙の言葉

青い空、海に大型貨客船。だが昨今のクルーズ船ブームのつもりでも、タイタニック号でもない。このイラストは、映画「オレンジと太陽」の原作「からのゆりかご」を読んだインパクトから描いた「木陰の物語」からのものだ。

たくさんの子ども達が、英国の施設からオーストラリアに児童移民させられ続けていた歴史。実は同じ時期、似たようなことは世界中で行われていた。

事情は様々だが、政治がそれぞれの現実を形成した。そして該当しない者はそんな事実を知らず、関わった者も、知っていた者もやがて忘れた。

当事者が声をあげなければ、なかったことにされてしまう歴史の山を、人類はそこここで積み上げてきた。今も同じである事はいうまでもない。

誰かを責めるためにではなく、私達がそういう生き物であることを自覚しておかないと、無知で残酷な者達が、同じ事を繰り返す。

庶民は忘れたふりをして目をそらすが、それこそが再来の予兆になっていることに気がつかないのか、分かっていて目を背けているのか・・・

（２０１７／１２／５）